明治三十八年十月十五日発行　毎月一回五日発行
明治三十三年十二月二十五日　第三種郵便物認可

女學世界
定期增刊

當世交際社會



第五卷
十四號

當る十月十五日より

一第十回新柄陳列會

一懸賞圖案元祿模樣陳列

一元祿時代參考品陳列

一寄せ裂れ見切り反物大賣出し

右何れも弊店内に於て特別盛大に相催し候間御誘ひ合され賑々敷御來觀被成下候樣伏て奉願上候

東京日本橋區駿河町

三越呉服店

明治三十八年十月

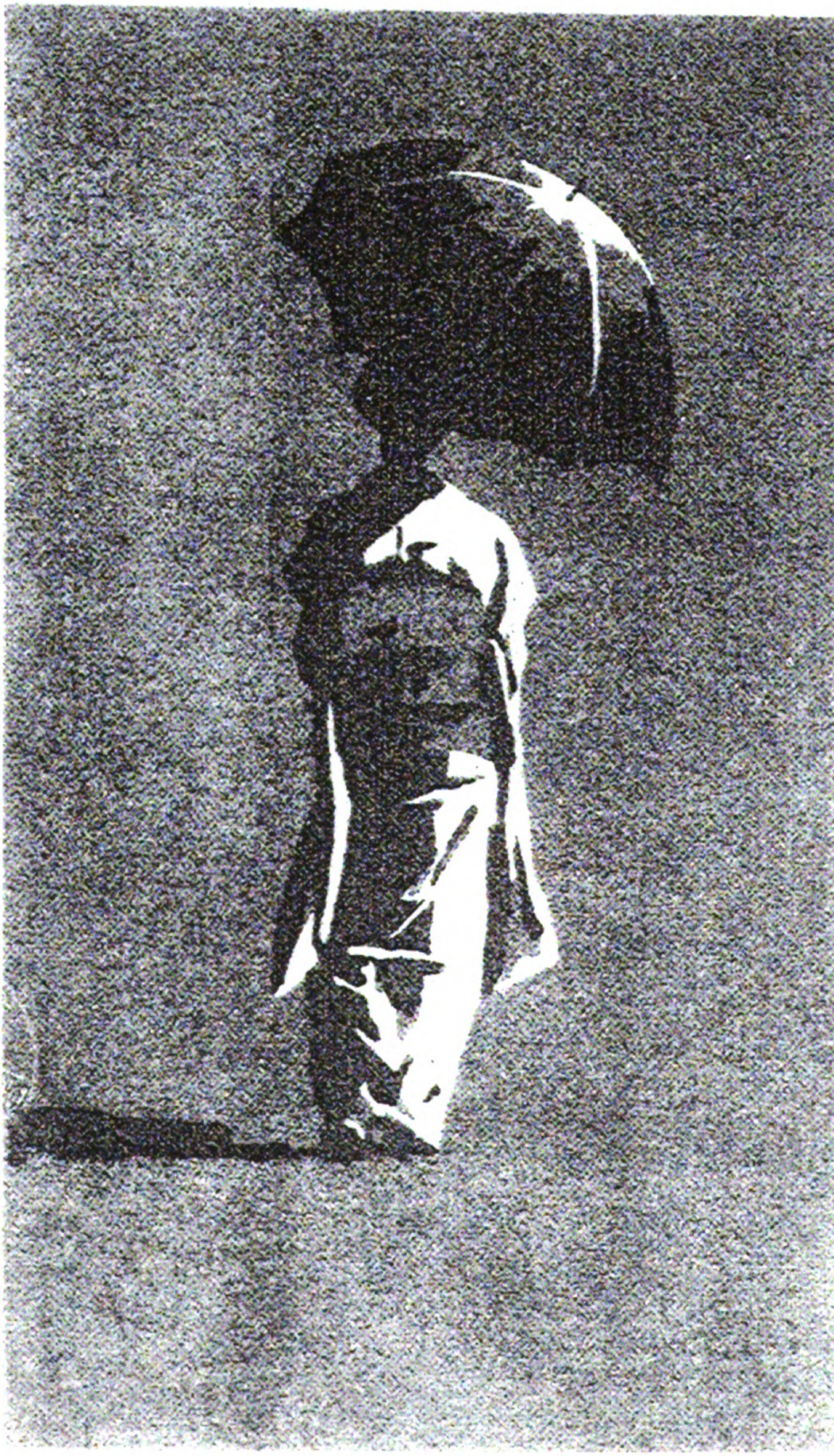
文學世界定期增刊

當世交際社會目次



尾竹國觀筆

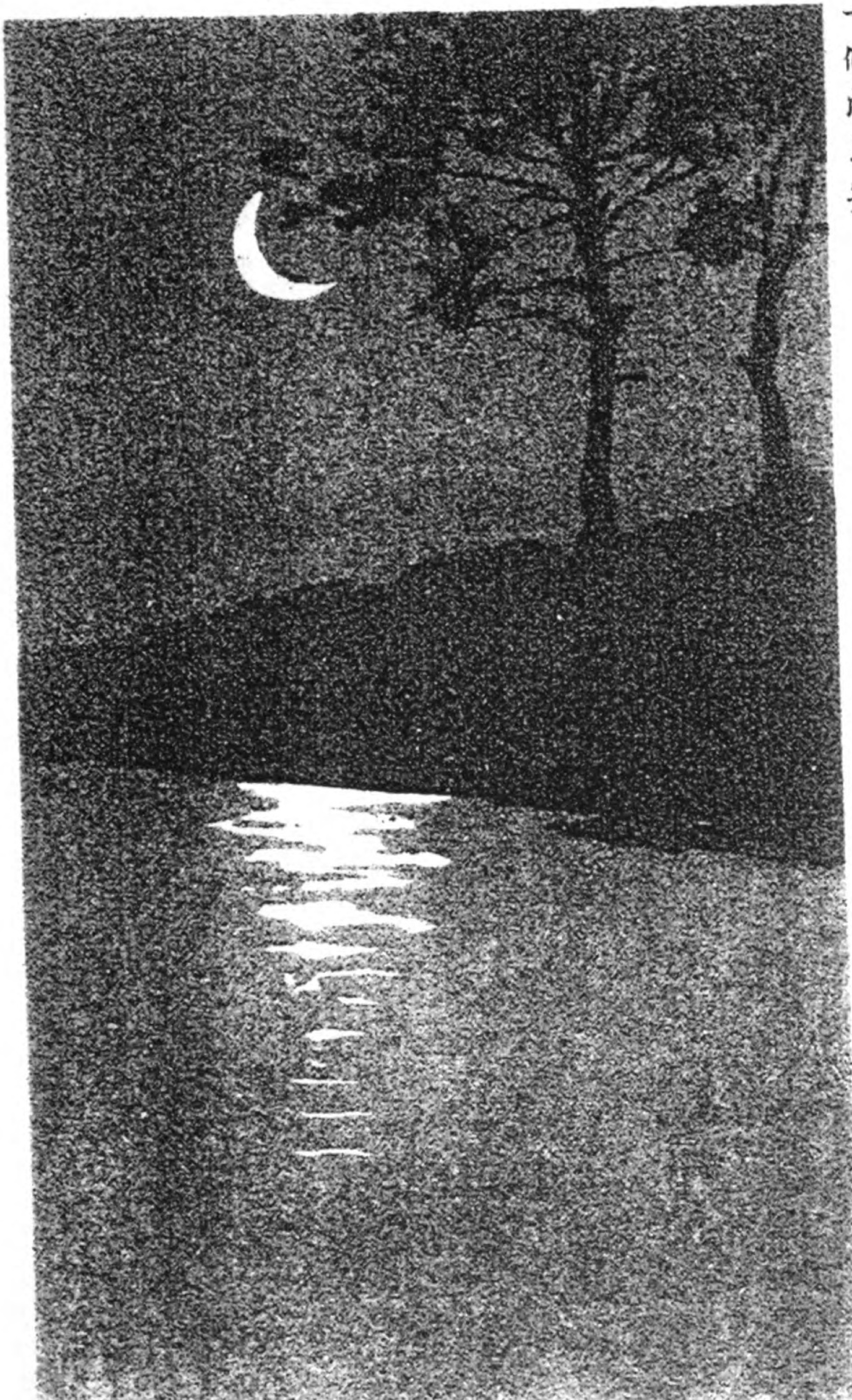
秋日和



一條成美筆

湖上の月

一條成美筆




美術造花材料
各女學校御用
附屬品並ニ造花器械類
一式
營業目錄御入用ナレバ往復端書ニテ御申越被下度候
東京市日本橋區横山町壹丁目拾六番地
天野卯兵衛
電話(特)浪花一六四三番

女(甲の一)



ゼムは氣分を爽快ならしめ口中を潤し音聲を能くす、又氣候の變りめと風土異なる他鄕或は惡臭の場所に携帶し常に少量を用ひなば時候あたり、水傷、流行惡疫を豫防なす良劑なり

ゼムは二三粒を含めば口中より優雅なる佳香を放ち人をして坐ろに爽快を感ぜしめ又偉大なる効能と愛すべき美味とを有すれば何人を問はず必ず談話喫煙飲酒の際および食前食後に賞用すべき貴重の要劑なり

ゼムは貴顯紳士、貴婦人、軍人、學生、及旅行家の必携劑にして交際場裡、演劇場、集合場、宴席、汽車、汽船中に於て欠くべからざる良劑なり

定價

優美高尚包 七十五粒入	拾錢	同 百六十粒入	貳拾錢
同 四百卅粒入	五拾錢	同 九百粒入	壹圓
新意匠容器ゼム入	貳拾錢		

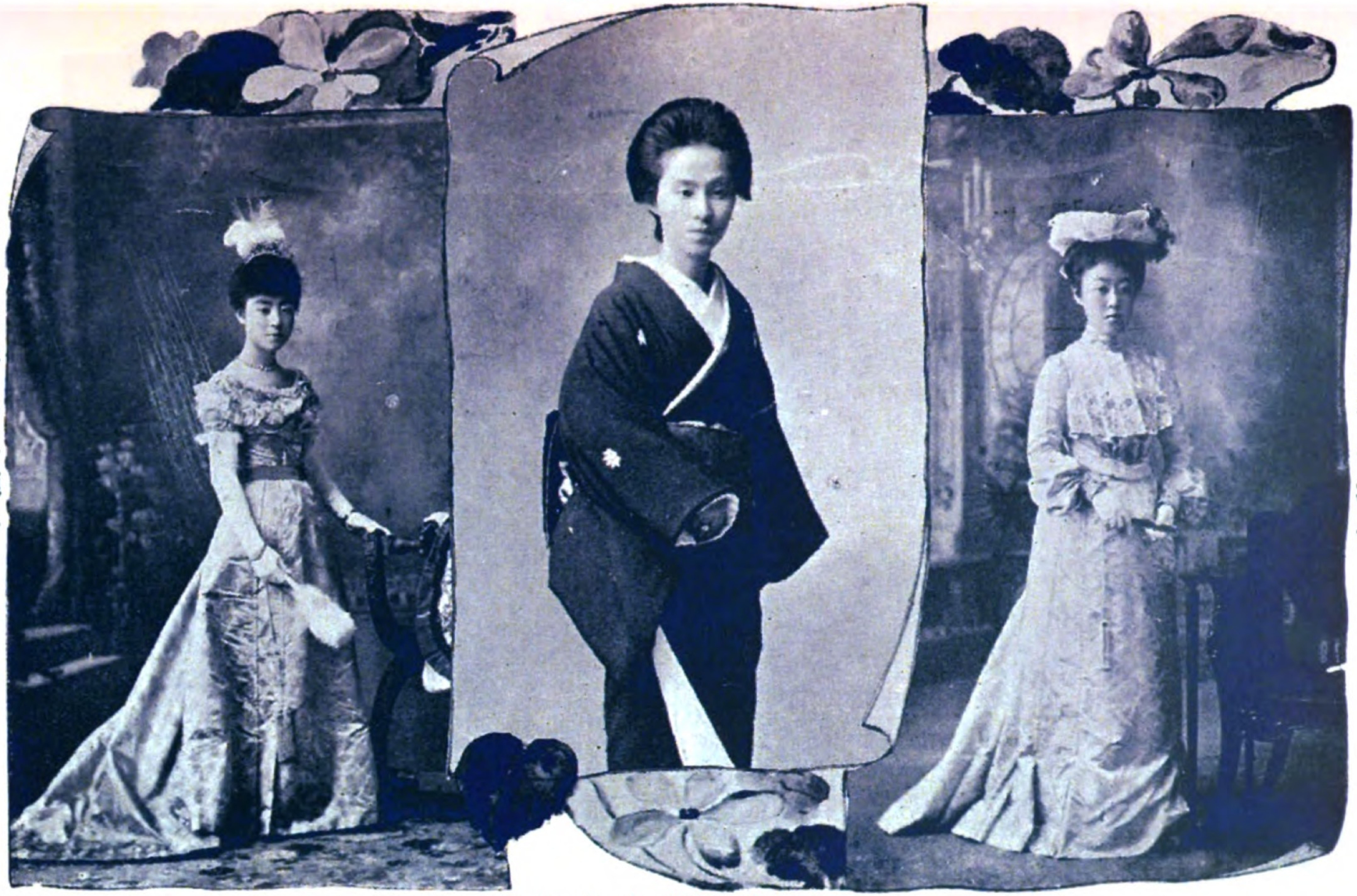
東京日本橋區馬喰町二丁目
發賣元 愛國堂 山崎榮三郎

大坂東區高麗橋二丁目
支舖 山崎兄弟商會

●販賣所——全國到る所の藥店雜貨店にて販賣す

女（甲の四）

社交界の貴婦人



黒田侯爵夫人清子

岩倉公爵夫人久子

山内侯爵夫人禎子

社交界の貴婦人



九條公爵世嗣夫人惠子

田村子爵夫人貞子

社交界の貴婦人



板垣伯爵夫人絹子



伊東子爵夫人美津子

社交界の貴婦人



鄭夫人滋子

山脇夫人房子

釀造に最も古き經驗を有する本印の品質他品に超絶せるは更に贅するの要なく夙に世間の定評あるあり尙此上とも御愛用奉願上候敬白

天下一品
最上醬油

千葉縣野田町
釀造元 **茂木佐平治**

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

尤も高評ある繪葉書

●漫畫はがき	六枚廿五錢
●四季の花	上下各六枚 各三十錢
●水彩十二ヶ月	上下各六枚 各廿五錢
●やまとなでしこ	臺紙付六枚 三十錢
●俳諧繪葉書	春七枚廿錢 夏秋六枚三十錢
●今樣大津繪	六枚十五錢
●繪はがき 愛	六枚廿五錢
●名所十二ヶ月	上下各六枚 各拾三錢
●風俗十二ヶ月	上下各六枚 各廿錢
●日本美人	函入六枚 廿五錢
●家庭繪葉書	上下各六枚 各十八錢
●歴史繪葉書	六枚廿五錢
●滑稽葉書	三枚卅錢
●花と人	六枚拾五錢
●元祿風姿 薄化粧	六枝 特九十錢 並二十錢
●花と美人	六枚十五錢
●花?人?	六枚三十五錢
●歌箋葉書	六枚函入 拾五錢
●水彩寫生葉書	六枚拾八錢
●水彩繪葉書	六枚拾八錢
●秋草と美音	六枚拾五錢

(東京小石川)**日本葉書會**(電話番町九三二)

女(乙の一)



文藝俱樂部 第拾四卷第十壹號 定期增刊

◎表紙＝橋本邦助君筆
◎木版口繪＝鏑木清方君筆

落語改良の聲を聞くや久し、されど只徒らに改良を呼號するも何の効かあらん。**文藝俱樂部**こゝに慨するところあり、來る**十五日發兌の定期增刊**を「**新撰落語大全**」と題し、現時の落語界に**牛耳**を取る左記の**名家に依嘱**し各々其の得意とする落語を口演せしめ、是れを一書の中に網羅し、大いに我落語界の**改善**を圖らんとす。世の眞の**滑稽を愛好**するものは素より長夜の伴侶として此の書に如くものなからん。賣切れざる內續々愛看を祈る

（一）おせつ德三郎　圓喬
（二）櫻風呂　圓遊
（三）駱駝　小さん
（四）三人兄弟　圓馬
（五）火事息子　圓右
（六）今戶の狐　燕枝
（七）樟腦玉　圓左
（八）浮世根問　文左衛門
（九）はで彥　圓藏

（一〇）煙草好き　ブラック
（一一）神道茶碗　柳枝
（一二）士族の商法　遊三
（一三）朝友　圓橋
（一四）廿四孝　馬樂
（一五）村正　新左衛門
（一六）佃祭り　小圓朝
（一七）清正公酒屋　文治

▲洋裝大判美本　正價貳拾五錢　郵稅貳錢五厘
▲發行……十月十五日

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

女(乙の二)

実驗問答 日本家庭節用

女子高等師範學校教授　槇山榮次君
明治女學校學監　吳久美子君
高田商會技師工學士　關藤國助君
東京府職工學校長　今景彥君
學習院教授　馬上孝太郎君
東京工業學校助教授　瀨谷準造君
日本女子大學教授　片岡哲子君
補助

報知新聞家庭記者　中村千代松君編

（十月中發行）

▲全一冊洋裝總クロース三六版約八百頁　家庭行事寫眞版數葉入

報知新聞の家庭顧問は非常に讀者の歡迎を博したものにて其質問の端書のみが三萬枚以上に達した本書は其中に就て極めて必要なる種類のみを撰擇したので其答は全然各專門の學識と實驗を有する諸大家に依て得たものである。本書は二樣の目的を持つて居る一は「其れなり直ぐと實用たらしめ得ること」一つは「普通の人には實用なり難いが其れを知て居ると萬事に理解の便利あること」是なり斯くして得たる經驗でなければ到底確實とは云はれぬ、本書元來博士大家の實驗と學理から出て居るから讀者にして十分の注意を怠らざれば一事一物必ず其希望を達するのである本書は實に明治家庭の寶典たるに背かざるなり其內容綱目を左に記す

▲第壹編　衣服問答　(一)裁縫(二)洗濯

▲第貳編　食物問答　(一)日本料理(二)西洋料理(三)漬物

▲第參編　作法問答

▲第四編　家事問答

▲第五編　衛生問答

▲第六編　病氣問答

(一)藥物看護(二)傳染病(三)強壯肥滿(四)體質(五)滋養食物(六)腦神經(七)小兒科(八)產科(九)婦人科(一〇)消化器(一一)呼吸器(一二)外科救急(一三)皮膚科(一四)中毒(一五)驅蟲(一六)花柳病(一七)生殖器病(一八)眼科(一九)雜病(二〇)病院

▲第七編　理科問答　(一)家庭理科(二)工藝理科

▲第八編　戸籍問答

▲第九編　諸稅問答

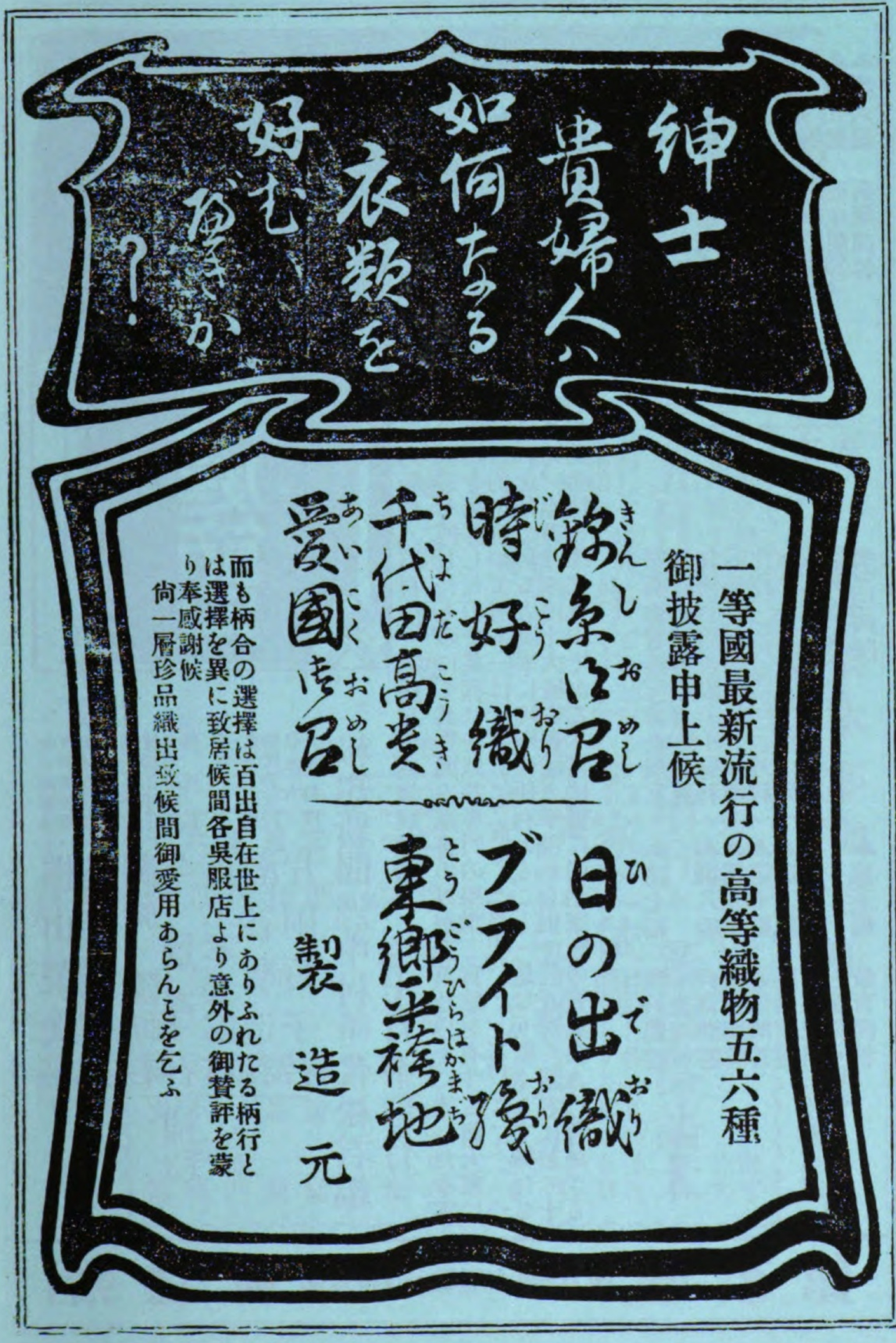
▲第十編　通信問答

▲第十一編　農事問答　(一)野菜肥料(二)牧畜(三)家禽(四)養魚(五)果實

▲第十二編　敎育問答

（乙の三）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館


紳士
貴婦人ハ
如何なる
衣類を
好まるゝか
?!
一等國最新流行の高等織物五六種
御披露申上候
錦糸お召
時好織
千代田高貴
愛國お召
日の出織
ブライト織
東郷平袴地
製造元
而も柄合の選擇は百出自在世上にありふれたる柄行とは選擇を異に致居候間各呉服店より意外の御賛評を蒙り奉感謝候
尚一層珍品織出致候間御愛用あらんことを乞ふ

十(乙の四)

婦人教育會役員



前列右方より(1)三輪田眞佐子刀自(2)千家男夫人(3)鍋島侯夫人(4)閑院宮妃(5)毛利公夫人(6)山脇房子(7)濱尾夫人後列(5)鳩山春子

韓國上流婦人と岡部夫人の一行



前列右方より二番目岡部子爵夫人

産科婦人科楠田病院長 楠田謙藏先生校閲
産科婦人科專門醫 稻生鑑次郎君纂著

實習産婆學

全二册
上巻 通常産
下巻 異常産

洋装菊判美本
上巻紙數三百頁
十月中發行

本書は斯道の專門醫にして、多年産婆養成の經驗ある著者が、其平素講述の稿本を基礎とし、之に佛國ペナール、アブラン兩氏の著書を始め、多くの佛獨兩國の學者の著述を參考として記述したるものにして、其說從來我國に行はるゝ産婆書に比して異彩を放てるもの多く、挿圖甚だ多くして、文章將た初學者をして了解し易からしめんことを務めたれば、産婆生徒の講習用としても、開業産婆の參考用としても、實に間然する所なき良書なり。今や上巻の出版に着手し、下巻續いて刊行せられんとするを以て、斯道諸姉の座右の書として購讀あらんことを乞ふ。

華族女學校學監下田歌子女史著
母親の心得 全一册 和並綴 正價參拾五錢 郵稅八錢

醫學博士三島通良君著
はゝのつとめ 全一册 洋布上綴 正價七拾五錢 郵稅拾錢

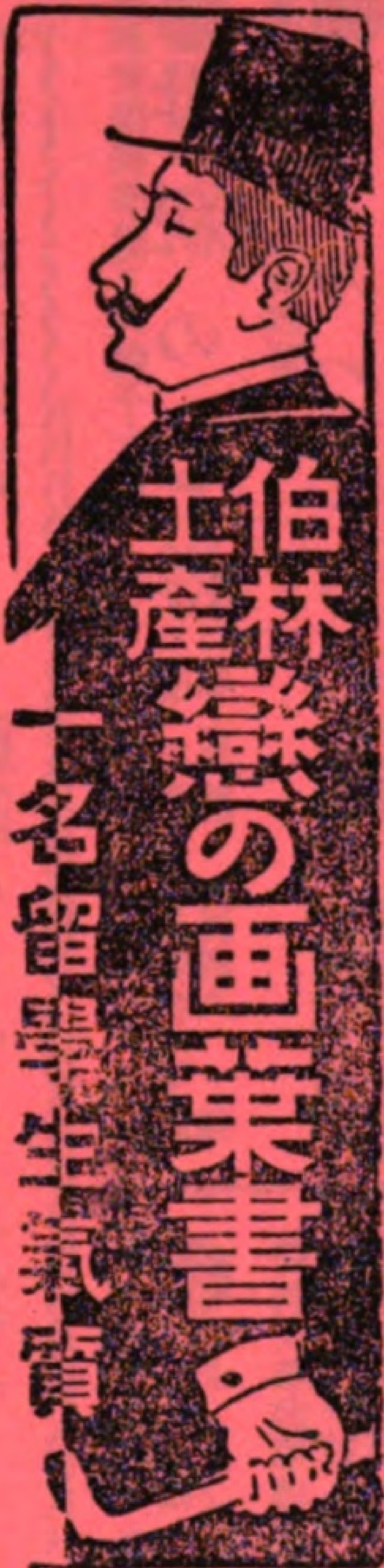
西田敬止君著 木版刷錦輪及寫眞版挿入
育兒と衛生 全一册 洋並綴 正價貳拾五錢 郵稅六錢

醫科大學藥學得業士金澤巖君著
通俗治療救急法 全一册 紙皮上綴 正價貳拾五錢 郵稅四錢

女(丙の一)

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

巖谷小波君著
和田英作君畫



全一冊

洋装總クロース
金字入繪表紙
中判上製頗美本
紙數四百七十頁

伯林四季風俗（彩色木版摺）四葉
寫眞銅版口繪十葉挿入＝正價金壹圓 郵税八錢

先に**洋行土産**二巻を著して、洛陽の紙價を高からしめ、將た**天覽、上覽**の榮を得たる著者は、今又拾遺として玆に本書を公にせんとす。**小說**か、否、**談話**か、否、畢竟實地の見聞を基として、例の妙想を構へ、快筆を揮へるもの、加ふるに和田氏が**挿畫**の**錦上花**を添るあり。氏も亦當年著者と共に彼地に遊べるの人机上一たび之を繙かんか、寫す所眞に迫らざる無く、所謂**文明國**の**暗面**は、忽ち淨玻璃の鏡に照らされ、例の**留學生**の**眞相**は、宛ら紙上に**躍**々たらん。

巖谷小波君著 寫眞銅版數葉挿入
●小波**洋行土産** 全二冊洋布上綴 中判新形八四〇頁 正價一冊壹圓貳拾錢 郵税一冊拾貳錢

大橋乙羽君著 彩色美麗寫眞版及木版密畫挿入
●**歐山米水** 全一冊特別上綴 大判一七〇頁 正價壹圓五拾錢 郵税八錢

大橋乙羽君著 寫眞版挿入
●**歐米小觀** 全一冊洋布上綴 小判二六二頁 正價四拾錢 郵税四錢

鎌田榮吉君著 寫眞版挿入
●**歐米漫遊雜記** 全一冊紙皮上綴 小判四二四頁 正價四拾錢 郵税六錢

女（西の二）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 **博文館**

醫學博士　井上通泰先生監修

家庭衛生叢書

本叢書講話承諾諸先生

醫學博士　入澤達吉先生
醫學士　石原久先生
醫學博士　土肥慶藏先生
醫學博士　緒方正規先生
醫學博士　岡田和一郎先生
醫學博士　金杉英五郎先生
醫學博士　片山國嘉先生
醫學士　賀古鶴所先生
醫學博士　賀古桃次先生
醫學博士　田代義德先生
醫學博士　長與稱吉先生
醫學博士　中濱東一郎先生
醫學博士　井上通泰先生
醫學博士　井上善次郎先生
醫學博士　吳秀三先生
ドクトル　富士川游先生
醫學博士　近藤次繁先生
醫學博士　淺川範彥先生
醫學博士　青山胤通先生
醫學博士　朝倉文三先生
醫學博士　佐々木政吉先生
醫學博士　木下正中先生
醫學博士　桐淵鏡次先生
醫學博士　北島太一先生
醫學博士　北里柴三郎先生
醫學博士　三浦守治先生
醫學博士　三輪信太郎先生
醫學士　宮本叔先生
醫學博士　弘田長先生
醫學博士　森林太郎先生

第六編

口繪　大澤博士、三島博士

第一、ペストの話　宮本博士
第二、身心の養生　大澤博士
第三、家庭ニ於テ注意スベキ二三ノ學校衛生　三島博士
第四、產時の創傷傳染　木下博士
雜錄　肺結核初期の症候、肺勞以外の結核の症候……外十三項

近日發行

全部十二冊
洋裝大版
正價一冊貳拾錢
全部十二冊貳圓拾錢
郵税一冊各六錢宛
第七編十一月上旬發行

第壹編　既刊

口繪　北里、長與、金杉、土肥の四博士（肖像）

傳染病の話……北里博士
胃の攝生法……長與博士
眼科衛生談（第一）……井上博士
血族結婚と聾啞との關係……金杉博士
淋疾と家庭……土肥博士
患者を生じたる時の注意（第一次）……

第貳編　既刊

口繪　宮本學士、木下博士、（肖像）

腸窒扶斯に就て……宮本學士
婦人の衛生一般……木下博士
婦人及小兒の眼の衛生……桐淵博士
眼科衛生談……井上博士
雜錄……七項

第參編　既刊

口繪　三輪井上緒方富士川四博士

室內空氣に就て……緒方博士
眼科衛生談……井上博士

第四編　既刊

口繪　朝倉博士、井上博士（肖像）

小兒科一斑……三輪博士
小兒の衛生に就て……弘田博士
遺尿症に就て……朝倉博士
雜錄……六項

腸胃の話……井上博士
耳の攝生……岡田博士
乳兒の衛生に就て……緒方博士
狐憑とヒステリーとの關係……吳博士
眼鏡の話……井上博士
雜錄……六項

第五編　既刊

口繪　三輪博士、岡村博士（肖像）

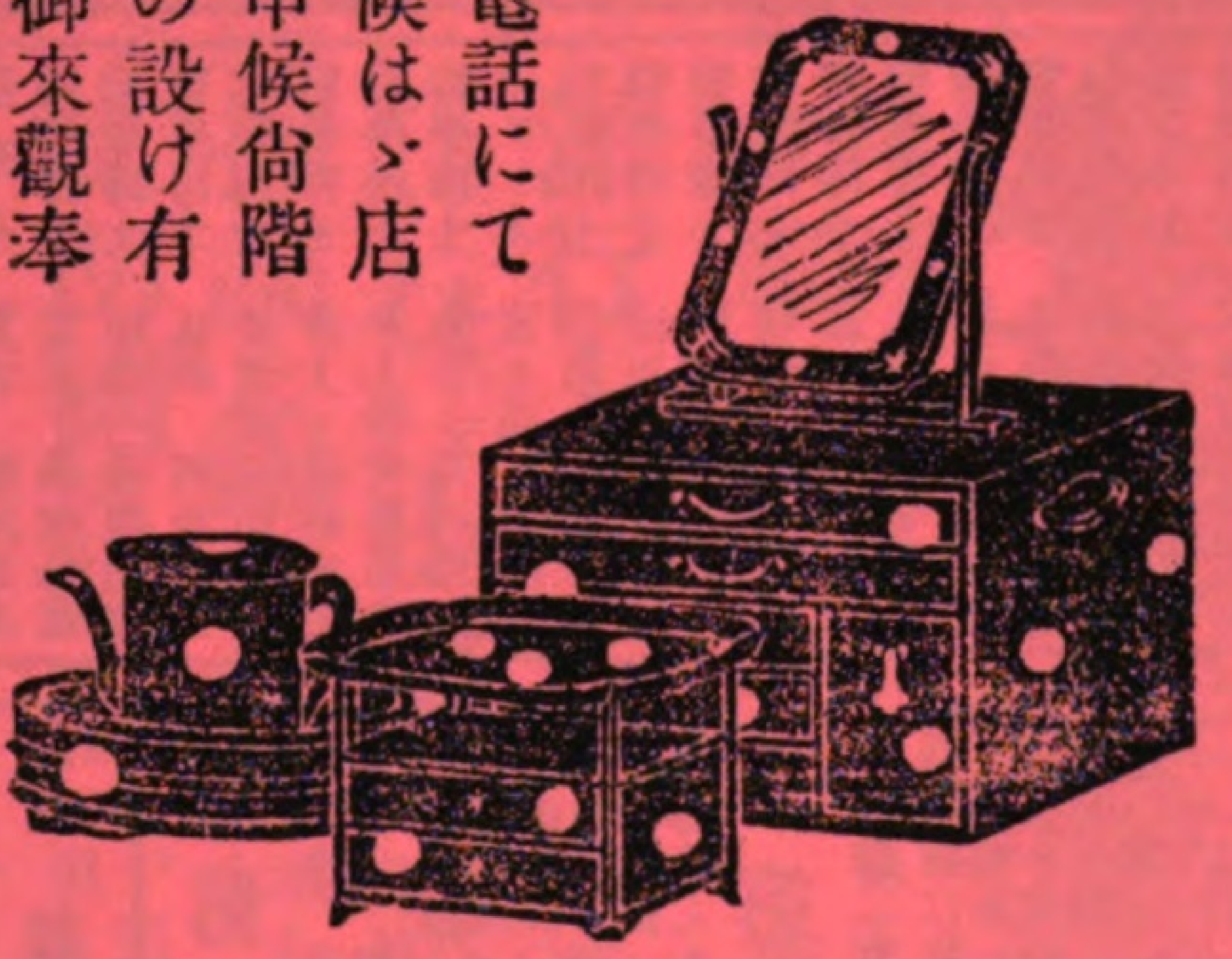
創傷の話……三輪博士
神經の攝生に就て……吳博士
「ヂフテリヤ」の話……宮本博士
皮膚の衛生……岡村博士
雜錄、肺結核の豫防法　自第一章至第十二章

發兌元　東京日本橋區本町　博文館

（丙の三）

各種美術漆器類

御婚禮道具蒔繪美術品各種重箱膳椀家具一式其他各種共特別に注意調進可仕候
御用の節は電話にて御申越被下候はゞ店員相伺せ可申候尚階上に陳列場の設け有之候間時々御來觀奉希上候



柏

東京市日本橋區通壹丁目
黑江屋漆器店
電話本局八百拾四番

於内外博覽會名譽大賞及金銀牌受領

元和二年創業

ヒゲタ印醬油

ヒゲタ印醬油

HIGETA SHOYU
THE CELEBRATED JAPANESE SAUCE
TRADE MARK

Patronised by the Imperial Household. Awarded First Class and Gold Medals and Grand Prize at the various International Exhibitions held at home and abroad

The Oldest Establishment of its kind in Japan. Founded in 1616 by the ancestors of the present proprietor G. TANAKA Choshi, Chiba-ken, JAPAN

宮內省御用達

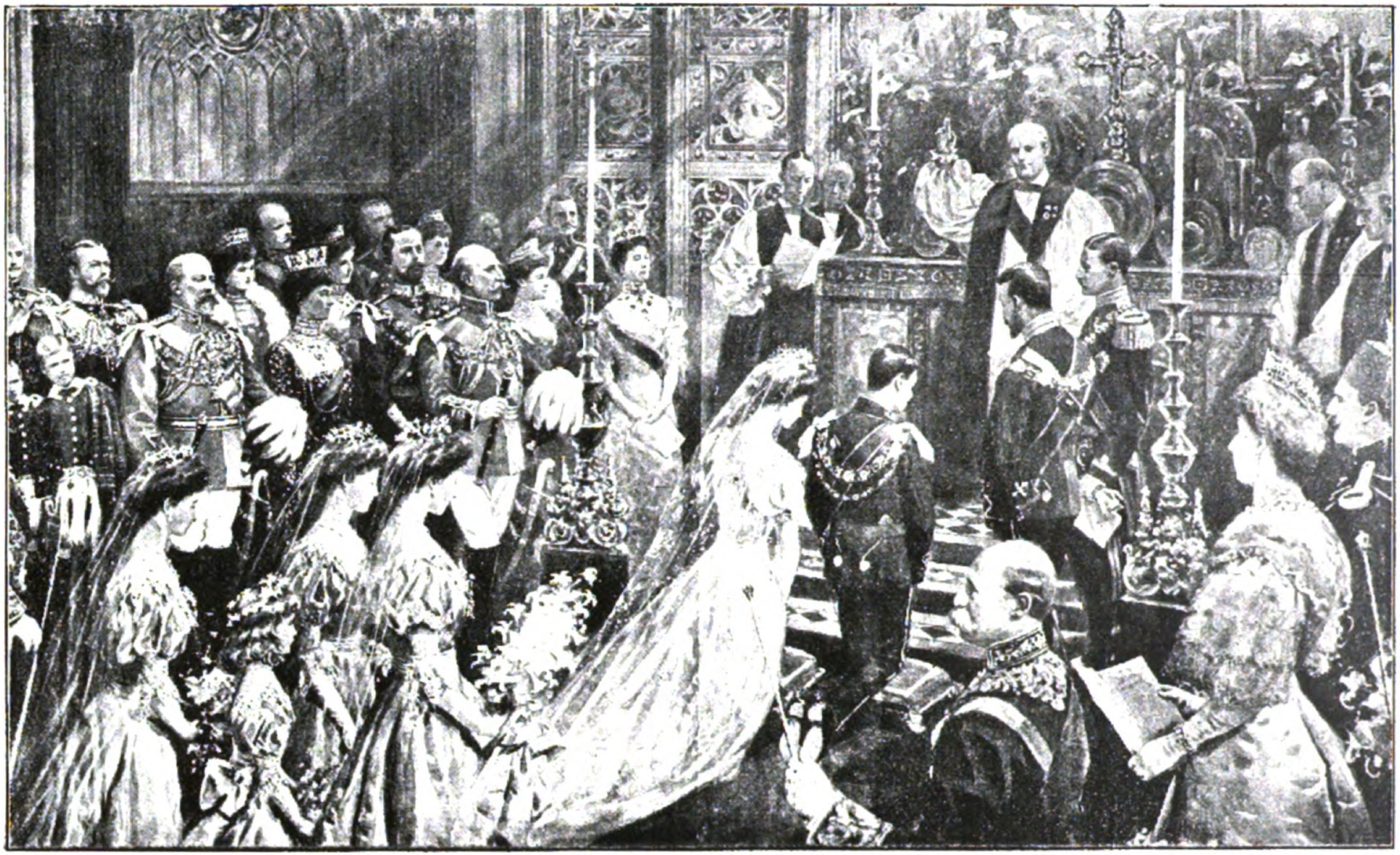
千葉縣 銚子港 **田中玄蕃釀造**

女（丙の四）

伯林公使館內天長節夜會



歐洲王室の結婚式



（瑞典王孫と其の新妃の結婚式）

最も高評なる
最も正確なる
最も便利なる
最も進歩せる

卅九年
博文館當用日記・懷中日記
出版廣告

明治三十九年 當用日記

◉紙數　大形中形共五百四拾餘頁　小形五百卅餘頁

大形（菊判）**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）●正價金五拾錢　郵税拾四錢

中形（四六判）**特製**（舶來洋紙脊皮美製金文字入）●正價金五拾錢　郵税拾貳錢

中形（四六判）**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）●正價金三拾五錢　郵税拾錢

小形（菊判半截）**上製**（舶來洋紙總クロース金字入）●正價金三拾錢　郵税八錢

特色

用紙　何レモ海外製紙會社へ特ニ注文漉製セシ特別上等紙ヲ用ユ

印刷　新規鑄造セシ活字ヲ以テ注意印刷ス頗ル鮮明ナリ

製本　弊館ガ特ニ歐洲ヨリ輸入セシ新機械ヲ以テ堅牢美麗ニ製本ス

趣　（當用日記）日々欄ニハ過去同月日ノ重要歷史、日露戰役重要紀念、七曜、干支等ヲ錄シ天氣、寒暖、發信欄ノ外往訪及起床時就蓐、時ノ記入欄ヲ新設ス、尚其各月ノ初メニハ、其月中ニ行フベキ事項ヲ豫記スベキ欄ヲ新作シ、普通記入部ニハ細罫ヲ附シ秩序アル記錄タ



明治三十九年 懷中日記

新形（船來洋紙頗美本總クロース金文字入細長形携帶至便）●正價金貳拾錢 郵税貳錢

上製（船來洋紙頗美本總クロース金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾八錢 郵税貳錢

並製（船來洋紙總クロース表紙金文字入紙數三百餘頁）●正價金拾貳錢 郵税貳錢

向體裁

ラシムルニ適セリ附錄トシテハ紙數十二頁ノ補遺金錢出納表、收支一覽表、友人住所錄、最新重要統計及日常必須ノ諸規則ヲ網羅セリ

（懷中日記）毎月ノ初ニ當月ノ行事、食品月令、遊覽案内、陰曆氣節等ヲ掲ゲ日々欄ニ過去同月日ノ歷史、七曜、干支、天氣、寒暖起床就寢時欄等當用日記ノ如ク卷末ニハ金錢出納錄アリ又日常有用ノ事項諸稅則及最新重要ノ統計表ヲ附セリ

弊館出版の懷中當用兩日記の正確堅牢にして實用に適するは茲に喋々するの要なし今回用紙印刷體裁製本に至るまで尚一層の改善を加へ殊に本年調製の新形懷中日記はポケット挿入に至極便利にて附錄には重要規則類あり又名刺代用の切取線付の白紙あり、又當用日記は舊に倍して一層優美に裝釘し尚趣向の改良を加へて記入の便を計り小形外の三種には農學博士横井時敬君の農家年中行事及幸田露伴先生の旅行の心得某醫學士の衛生の心得等を掲け尚ほ伊東祐穀氏の嚴格なる調査に係る最新の統計及座右必需の重要諸規則は漏らさず收めて網羅せり之を舊年の日記に比すれば材料愈よ豐富記事愈よ正確にして江湖坊間の日記と同視すべからざるや論なし請ふ續々御愛購あらんことを

◉賣捌所は全國各地（書籍雜誌店及紙類文具店等）到る處にあり

◉取次望みの方は種類部數等御申込次第精々御便利に御相談可仕候

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　**博文館**

（丁の三）

女（下の四）



女學世界定期增刊

當世

交際社會

——(十月十五日發行)——

交際に拙なるは、小にして一身を誤り、一家を誤り、大にしては國家を過ち、悔を千載に遺すに至るとぞ、今や秋風蕭殺、ポートマスの平和條約を聞くに及んで、また此の嘆なくんばあらず、此の時に當り、『交際社會』を編むの意、婦人を交際場裏に誘導して、其の養ひ得たる智識により、後の國民を完全に仕立てられんことを希へばなり、本編收むる所、世故に長けし貴婦人の經驗談を初めとして、交際の要道、つきあひの秘訣に至るまで、事苟くも社交に關する諸般の智識は擧げて洩さず、以て社交界の燈臺といふもあながち過言にあらざるべしと信ず。

交際の要訣

人の世に在る、獨立獨行にして又交際、情誼の道を厚ふすべし、獨立獨行は其の身の覺悟を定むるものにして交際情誼は世に處するの方便なり、其の覺悟を定めて、而して其の方便を取る、處世の法に誤ることなかるべし。

抑も人の此の世に在る、決して單獨に生活するものにあらず、いづれか、相依り、相助けて以て、其の用を濟さゞるなし、即ち交際情誼の由つて來る處にして、又愛情、信實、仁惠、恩義、其他あらゆる人情の美の顯はるゝ處なるべし。

爰に人あれば、爰に、父母、妻子、兄弟あり、いづれの人か、夫なからん、妻なからん、親戚、朋友、近隣、同僚を持たざるものなからん、既に妻子あり、既に知友あり、既に親戚あり、既に近隣あり。是等相互の間に人情の美を成し、相互の間に生活の利便を圖るもの職として人間交際の道に依らざるものなし。交際の道は實に、人間處世の樞要にして何人にも必要なる學問といふべし。

言語

交際の道は多端なりと雖も、之を要するに、言語、應對、贈答の三者に歸着す、而して何よりもまづ言語を大切とす、俗に言葉遣ひ丁寧にして、人の氣を反さゞるを附合上手といふがごとし、言語を圓滑にして、當り障りなく、而して何人にも心快く思はしむるものは交際上手の人なり、されば交際上に最も要用として如何なる時にも缺ぐべからざるものは言語なり、言語は人の情の聲となりて外部に顯はるゝものなれば言語ほど人の

心を感動せしむるものはあらざるなり、元より凡てのよき贈り物は人を喜ばすものなりと雖も、贈り物は唯其時に止まるもの、言語を以て人を感ぜしめたる時は永久に其人を追想愛慕せしめて、自から戀々の情を起さしむるものなり、又言語は單に愛憐、慕懐の念を起さしむるのみならず、又よく利害を忘れ、道理をも捨てゝ己れに歸せしむるものなり、戰國の昔時、縱横の策士が、其妻に舌を見せて、曰く我れにして此の舌のある間は我が財產、名爵此の上にありと云ひしも人生の大事業は皆此の言語の用法如何にして、得らるゝといふ事を示したるものなり。以て言語の大切なるを知るに足るべし。

言語の雅びやかなるは人に愛せられ、言語の粗忽なるは人に疎んぜらる、言語に節ある人は其の身を立て、言語に不謹愼なる人は人に見捨らる、一言を謹んで身の危きを免るゝ事あり一言を立てゝ立身出世をする事あり、されば一言の遣ひ様によりて隨分人の幸、不幸の基となる、言語ほど人生に大切なるものはなし、百萬の敵を防ぎ、國家の危急を救ふも時に此の言語の力に依る事多し、實に言語は人生の眞價を現世に代表する生命の標目たりと知るべし、西洋の哲人、言語の遣ひ方を示したるもの數則あり、以て鑑むべし。

○一度び口を開かんと欲せばまづ三度び心に問へよ。
○饒舌は易し、緘默は難し。
○緘默を守るは愚人も亦是れをよくす、然れども緘默を破るは大智の人にあらざれば能はじ。
○口を開いて心を知られんよりは、默するに若かじ。
○雄辯も沈默に若かざる場合あり。
○言語は己れの知らざる内に人を意想外に感ぜしむるものなれば、人と交はるに先ちて能く其志を淸くすべし。

○志悪しければ如何に言語を立派に飾らんとするも己れの知らざる内に不快を與ふるものなれば、心を高尚にするを以て秘事とす。

○言語より不幸を招くは第一人を悪し様にいふ事、第二長話をする事、第三相手の者に調子違ひの事を言ふ事、第四忠告を度々する事、第五諂諛を屢々する事、第六人の知りたる事を諄くいふ事、第七人の秘密を語る事、第八大言を吐く事等によりて來るものなり。

○交友の席にありて言語に中絶したる時は社會一般に係りたる問題を出して之に和し、なるべく談緒の絶へざる様にすべし。

○集會の席にありては多言するべからず、されどあまり無言なるも又悪しきものなり、凡て集會にありては一度語りたることを再びすべからず。

○言語は促急なるべからず、又野鄙なるべからず。

○相手の談話餘りに卑劣にして悪しき時は之を反駁することなく、なるべく沈默によりて自然に中絶せしむべし。

○滑稽は場合を見ていふべし、然らざれば往々其人の品位を墜すものなり。

○人の缺點のみをいふべからず、若し之をいふの必要あらば必らずまづ、其反面の美點を見出したる後にすべし。

應對

應對は我より人を訪問し、又人より我を訪問されし時に接する禮義作法にして、交際上の要義なり、まづ來

客の時より說かん。

來客のありし時は第一にまづ其客人は何用ありて來りしかを知るにあり、來客には用談ありて來るものあり、快樂を共に盡さんが爲めに來るものあり、只禮義一遍、所謂おつきあひに來るものあり、心に願ひ用ありて來るものあり、或は事柄を探ぐるの目的にて來るものあり、是等の客人の各々異りたる處を知りて待遇せざれば客をして滿足を與ふる事むづかしきものなり。

來客に對する第一の心得は眞實なる心なり、是の心さへある時は言語擧動は自然に客人の滿足する樣になるべし、或人の如く心にもなき世辭を多く流して得たり顏を多くするものあり、是等の取扱方もよろしけれども只多辯のお世辭愛嬌のみにては反て眞心なき事を表はす不得の待遇なれば要は唯々眞心を以て客を滿足せしむる樣に心懸くべし。

來客の心を喜ばす第一のものは談話なり、談話は情を瀉らし、交りを温かならしむるに尤も勢力あるものなり、世には饗應のみを以て來客を喜ばすものありと雖も是も人によりては宜しけれど、悉く饗應のみにて滿足を與ふるものにはあらじ、のみならず、人によりては餘り饗應せられては反て迷惑になるものあり、殊に急用ありたる人には其迷惑も一層なるべし、是等の人には其用を便ずるを以て第一の饗應となり、又單に交を結ばんと欲して來りたる人には談話すること、山海の珍膳にも勝りて喜ばしきものなり。

饗應は己れの親切を食物に移すものなれば、必らずしも他の料理店より取寄するに及ばじ、否むしろ、家内にて手づから拵らへたるを以て來客の意を喜ばすものなり、殊に來客を家族の如く心安く取扱ふときは客人は多くの禮儀正しき待遇よりも嬉しく思ふて、深く情誼に感ずるものなり、又時節柄と人の位置とによりて氣を配り待遇をなすこと肝要なり、例令ば空腹の人に飯を出すは香の物にても最良の馳走にして日々肴を極めたる

人には茶を出すだけにて反て料理にまさるべし、されば、客あしらひは必らずしも金錢を多く用ひず、只心をつくして交りを密にすべし。

贈答

凡そ人情の美を表はし、信義の交はりを表するは贈答に如くなし、贈答は交際上の禮式をして折に觸れ、時に臨み、殊更吉凶事のありたる時は其情誼を物品にうつして表するは缺くべからざる事なり、抑も贈り物は受納者をして其厚意を感せしむるを以て大切の事となすが故によく其の時機と場合と人の境遇と老若男女の區別を見はからひ、風俗習慣等も能く心得て成さゞれば折角に贈りたる己れの本意を空ふし、人をして己れの厚意を感せしむること能はざることあり、世には身分不相應のものを他より贈られて反て迷惑する事あり、又人に物を贈りて反つて受納者をして心に不快を感せしむる事あり、是等は皆其時と場合と境遇とに適せざるの贈物より來る失なり、注意せざるべからず。

○平生知りたる家に物を贈らんとするには、先方の貧富、貴賤、嗜好等をもよく〳〵考へて贈るべし、タトエば物足らずして居る人には日用の品を贈り、裕福にして何不足なき家には、珍らしき物を贈るべし。

○世間には金錢を贈るを不敬の事と信じて用にも立たざる品物を送るものあれども、吉凶事には可成金錢を贈りて人々の便利を圖るべし、これ贈り物の眞意に叶ふものなり。

○贈物は成可く外形の虚飾に流れて其實を失はざる様の心懸あるべきなり、世間には箱の底を高くして派手々しきものとなし、其中の物は僅かに一皿に盛るに過ぎざる少量のものを贈るの風あれども是等の仕方は贈物の眞意に適はざるのみならず反て人を辱かしむる極賤しき仕方なり、駄菓子の如き粗菓を折に詰めて送るよりもカステラを紙に包みて贈る方反つて人を喜ばすものなり。



内外社交談

大山侯爵夫人

▲青年男女の交際

私なぞは別に意見も何も御座いませんが、一つ御話し致したいのは、若い男女の交際の事で、これは少し申し過ぎるかも存じませんし、且一般と申す次第でも御座いませんが、音樂會とか園遊會とかへ令孃ばかり出されるのが過失の源で、之を西洋風だと思はれるのが大層な間違であらうと存じます。西洋で令孃を交際社會に出すには、必ず母親とか兄とか或は親戚の者とか、確乎とした監督者が附き添ふことになつて居り、決して朋友同志で男女交際の席に臨むことは御座いません。日本では兎角母子揃ふて出席致すことが少く、昔風の親御ですと、西洋音樂などを聽いても判らないなどゝ云ふ所から、娘方ばかり出される傾向もありませう。それから談話に就ても、西洋の男女は自由のやうに見えますが、實際は女子の方に制限が確定してあつて、男子の方で如何ほど話し掛けても、其制限以外の談話を謝絶致します。又公けの席では交際致しても、自宅へ訪問することは容易に許しませぬので、殊に女子の方から男子の宅へ訪問することは決して致しません。それで男子が

女子の家へ尋ねやうとするには、女子監督者の承諾を得なければなりませぬので、監督者は公けの席で屢々交際して信用すべき男子と見定めた上で、自宅へ來ることを承諾するのです。ハイ自由に手紙や品物の贈答を致すことは嚴に禁じて御座いますが、懇意になると男子から夜會の際に女子へ花ぐらゐは贈ります、併し女子から男子へ贈り物致すことは無いので御座います。

▲交際社會へ出る年頃

國により處によつて異ひませうが、近頃米國では、女子が大抵大學へ入りますから、漸々交際に出る年齡が遲くなりました。中には卒業前でも出る方もありますが、一晩に二三個所ぐらゐの會へ出ることがありますから迚も學生のうちに出る次第に參りません。左樣で御座いますナ、先づ十七八歲からで御座いませう。イエ別に稽古と云ふとはさせませんが、大概モウ交際上の規律は定まつて居りますから、自然慣れて居るので御座います。我國では斯樣な規律が無いのですから、私共に向つて外國人が『貴家の御孃さんは最早交際に御出しになりますか』と問はれた時、私は返事に困るのです。ハイ子供は客の前へ出しません、食事に客を招く時でも、子供は食物が違ひますから其仲間へ入れません。食物の規則は實に嚴重で、子供が食べて惡い物は、大人が食べるのを子供が側で見て居ても遣りません。何國でも頻繁なる交際社會へ出ると云ふのは、先づ中流以上でなければ出來ませぬので、子供は家庭敎師に托して出します。英國邊では娘を拜謁に連れて出るのが交際社會へ出す初ですが、米國にはこれがありませんから、大きな園遊會などの際初めて連れて出ます。交際の巧拙は平生の素養の如何に在りますから、此點は親々が善く注意致しますので……。

▲交際の素養

交際の席で話を上手に致すには、平生から趣味を養成して居らねばなりません。特に若い男女が談話を致す

には、高尙で面白味のある話柄を澤山持つて居ると、自然愉快で健全な交際が出來る次第です。それですから展覽會などへは缺かさず娘達を連れて參つて美術思想を養はせ、音樂園藝其他何に寄らず趣味を汎く渉らせて置き、談話に困るとの無いやうに導いて居ります。それから又男女交際が健全に出來るのは一つは宗教の力に在るだらうと存じます。此素養が男女間に確かであれば、過失は自然少いので御座います。併し宗教を奉じると申しても、餘り頑固にばかり致しませんので、表面は何處までも快濶滑脫にして居ります。我國で耶蘇教を信ずる婦人は、唯だ一心に凝り固まつて社會に遠ざかり、交際が圓く出來ないやうな傾向に見えますが、却つて過失が出來易いやうですよ。左樣で御座いますよ、唯今のところでは、未だ若い男女の交際など餘り致さぬ方が宜しいかと存じます。而して我國では、其樣に交際を致さずとも、主婦となつてから別に大した不都合は無いだらうと存じます。兎に角男女交際の規律と、青年男女相互の精神が確乎せぬ間は、先づ見合せて頂きたいので、唯だ表面の自由らしい交際振だけを以て、西洋風とするのは大間違の起る源です。實際は却て西洋の方が嚴重で窮屈な所があるので御座います。併し旅行だけは若い娘が獨りで致しますが、丁度日本でも令孃方が御茶屋へ入らないと同じ事で、娘がホテルへ泊り込むとは滅多に御座いません。親が急病であるとか云ふやうな非常の場合は例外でホテルへ泊らなければならぬ事もありませうが、大抵食堂附寢臺附の夜行列車もありますし、不都合なく旅行が出來るので御座います。若い婦人が單獨で旅行して危險の無いのも公德が進んで居るのと、婦人自身の精神が確乎して居る爲めでありませう。

▲運動散步の交際

女學生の遊びは樣々ありますが、海水浴場には一疊敷ばかりの小屋が幾つもあつて、着物を脫ぎ更へたり後で淡水で身體を拭ふたりするに都合好く出來て居ります。此小屋は一人か二人組合で一棟を借り切り、海水浴

を終ると着物を着更へて、小屋の戸口に錠を卸し、鍵は各自に持つて歸るのです。大きな海水浴場には立派なホテルがありまして、遠方の者はこれへ泊り、夜分は音樂や踊の催しがあつて、却々賑かで御座います。海水浴着も我國ではキヤラコなぞで作つたのもあり、濡れると膚が透いて見えますが、西洋では大抵フラネルか羅紗で拵へてあり、襪まで穿いて入る者がありまして、膚はホンの腕の先だけが露はれて居るばかりで御座います。海水浴の外には川へ舟を浮べて漕ぎ歩いたり釣魚を致したり、馬に騎つて山に遊んだり、苺を取つたり、種々樣々の遊びを致して御辨當を開くと云ふやうな趣向で御座います。さて此海や山で男女學生が共に遊びます時も、雙方の親とか兄とかが監督して交際させるので男女二人限で遊ぶと云ふやうな事は御座いません。

△米國晩餐の案内狀と席順

客を招く案内狀は、盛な催しであれば二週間も前から發し、普通ので一週間前、極手輕ので四五日前に發しますが、此案内狀を受けて速かに返事を出さないのが、交際の極下手な人と云ふ次第です。客を招く方では毎時同じ知己ばかりにせぬやう新しい知人を雜へて、互に新しい交際を結ばせるやうに考へ、又此人と彼の人とは一つの席で會つて都合好きや否と云ふやうな具合まで細かに考へて席順を定めた上、案内狀を配るので、早く返事を受けねば種々主人の都合も惡し、第一料理の都合なぞもありますから、返事をグズ〳〵にして置くのは極失禮な次第です。席順と申すものは實に難かしいもので、これによつて客の感情を惡くしたり、客同志の交際上に不滿足を與へたりする心配があります。我國でも客の席順に就ては、隨分面倒な事が御座いますから是れは充分注意して定めなければなりますまい。

▲待客に於ける主婦

食事に客を招いた時は、主婦の働き一つで客を樂ませるのですから、それは〳〵骨が折れるので御座います。

食事の時間が餘り長く掛るのは主婦の不行屆と致してあり、大きな饗應は例外として、普通の際は成るべく早く切り上げるやうにするのです。近づきの無い客同志を巧く親しませたり、話相手が無くなつて默つて居る客があればこれに話し掛けたり致すなぞは、最も主婦の注意すべき役です。食事が濟めば、男子は喫煙室で煙草を吸つて參り、それから談話を始めます。時として餘興を催すこともありますが、斯樣いふ時は主婦がズット氣樂なので御座います。我國でも洋風の饗應は談話に便利ですが、日本風の御料理ですと互に遠く離れて居りまして、彼の方と御話し致したいと存じても、人樣の前を通つて往かなければならず、如何も億劫になります。それで我國の御座敷には、是非音樂とか手品とかの餘興がなければ工合が惡いやうで御座います、併し靜かで上品なもので御座いますネ。

▲ルーズベルト孃の交際上手

ルーズベルト孃が御入京の際は、度々御相伴を致しましたが、實に御發明の御方で、御交際上手で居らつしやいますこと……。未だ御若いから左程に口數をお利きにならず、老練と申す次第ではありませんが、如何にも令孃の品位を備へて、それで萬事に如才なくて居らつしやるのが、本當に感心で御座います。先達て紅葉館で歡迎の際は、私が直ぐ御側に居りましたが、孃は始終座つて御居でゝ窮屈な容子がありませんでした。尤も彼の方は、平生よく座ることがあると聞きましたが、長く座られては嘸御大儀でせうと申しましても「イヽエ私は座るのが大好です。座るのは本當に面白いものです」と言はれて喜んで居られました。而して日本料理を何でも彼でも召し上つたので、鯨の酢味噌を「これは何か」と私に御尋ねですから、「これは鯨の酢味噌ですが、上り附けぬ方は、如何か致すと中る事があり、特に夏分は如何か判りませんから、召し上るのは御止し遊ばせ」と申したところ、「ナアニ構ひません、珍らしい物ですから食べて見ませうと仰しやつて、ズン／＼上り

ました。何でも出ただけの物を食べるのが洋食の風ですから、御魚軒の山葵を先づイキナリ口へ御入れに成り如何も辛い〳〵とお言ひでしたので、私は斯うして召し上るのですと御教へ申しました。斯樣な風で、食べ付けぬ物でも、少しも氣味の惡い御容子なく上るのを私は側で心配致した位ですが、孃は唯だモウ日本人の歡迎を喜ばれ、折角の饗應だから悉皆食べると云ふ御心で、一向虛飾もなく食べらるゝ所は、如何にも眞率で純白で、實に感心なものだと存じました。

▲篤志看護婦人會の外國婦人

赤十字社に來られる外國婦人方は、始終よく御話しをなされて居りますが、別に何と言ふて取纏りの無い事ばかりで、私は今日途中で斯樣な事を見て來たが面白かつたとか可笑しかつたとか、過日何を食べて見たが旨かつたとか粗かつたとか、私の家の犬が今度子を何匹產んで、それが何樣な子であるとか、鄕國から草花の種を取り寄せて植ゑたとか、或は日本の着物を拵へて見たが似合つたとか似合はぬとか、本當に下らない談話のやうでは御座いますけれども、何樣な詰らぬ事にも、それ〳〵趣味を有つて話すのが上手ですから、一日聽いて居ても飽きること無く、又他人の差障りにもならず、快く笑ひながら話し合ふ間に互に新らしい智識を交換されます。智識を交換して、今日聞いた事を明日他の人に話し、又其人から聞いた事を明日他の人に話すと云ふ風に致しますと、談話の種に困ることはありません。談話を澤山に致さうと思へば、是非この交換が必要で御座いませう。

▲滑稽

滑稽と申すことは却々必要で、其上手下手で交際上に大層影響を及ぼします。席上何となく沈んだ調子になつた際、主婦がチヨツト巧く滑稽を申すと、俄に賑かになると云ふ鹽梅で、客を滿足させるのです。併し此

滑稽は、平生百方面に耳目を注いで趣味を養つて置きませんければ、品位を堕さずに多勢を笑はせるやうな滑稽を吐くことは出來ないので御座いませう。

▲米國婦人の多數決

日本の方は大人しくて、遠慮深いから、因循のやうに思はれるかも知れませんけれど、忠實で熱心なことは日本婦人の特性ですから、今度のやうな時局に於ける會などの勢力は、却々盛んで、御意見を述べられる方も大層多くなりました。唯だ多數決といふことが未だそれ程で無いやうに見えます。米國では何樣な事でも多數決の風が盛んで御座いますね。而して自分の意見を述べることに無遠慮で、斯う言ふたら先方で何と思ふか知らんなぞと云ふ差控は毫もありませんから、奥底が無くつて、誠に附き合ひ好いので御座います。

（中村鈴子記）

社交に於ける實驗談

山脇房子夫人

社交界にあまり出ませぬ私には、これぞと申してお談することもございませんが、是非にとのこと故時々會などに出て見て感じましたことをお話し致しましやう

今日までの婦人は社交に關はらなくても、談話が下手であつても、濟ましたけれども、これからの婦人は交際も上手にならなければならぬ、談話も上手にならなければなりませんが、只今の處では兎角兩極端の婦人が多うございまして、誠に恥かしいと思ふことが毎々あります、一二の例を擧げて申すと、或婦人は大勢人々の集つて居る席ですと他から何を話かけても、只ハイ左樣でございますとにや〳〵笑てばかり居て、話した事が會得つたか會得らぬか、同意したのか、不同意なのか、一向に要領を得ぬ、俗に云ふ黒暗から牛を引出す樣

な陰氣な、不快活な人で此種の人は私語にはなか〳〵巧みで、二三人心安い友達とでも寄りますと、隨分やかましいほどお談話があるのですが、公會の席では少しも高尚な談話が出來ぬのでございます、またこれに反對の或婦人は我こそは交際家なり、人と交際せむにはかくあるべしと云はぬばかりの擧動にて、無暗につまらぬことをべら〳〵話しかけ、加ふるに無作法に起て見、居て見、きよろ〳〵して要ざることにまで差出がましき擧動をする人がございますが、前の人は沈默陰氣で、人にいやがられ、後の人は多辯輕薄で人にいやがられるので、兩方とも未だ交際界に出る資格はない人で、かゝる人は交際界に出た爲めに却て人々の笑の種、談話の種になるのみで少しも益することはないのでございます。

　さればこれから社會に出て交際せんと志すものは、右の如く兩極端にならない樣に、社交上の禮儀作法も一通りは心得て居て、十人十種の人々を相手にして差支なく、怜悧快活な談話の出來る樣に平常萬事に注意し、廣い頭腦を以て十分談話の種を貯へ置く樣に心掛けなければなりませぬが、これがなか〳〵六ケ敷いことで、古人の句にも「口開いて腸を出す石榴かな」とございます通り、それだけの素養なくしてうつかり口を開きますと奥の奥まで見透かされますし、さりとて恥をかくまいと沈默て居りますれば人に欝陶しがられるのみで交際は出來ませぬし、何うしても敎育を根本として充分に常識を備へた後交際界に出て、交際法を學ばなければなりますまいと存じます。

女子の社交に就て

子爵　秋元興朝

日本人は社交と云ふ事を殆んど知りません、從て社交上より生ずべき趣味や實益は是まで捨てられて居りま

した、女子には特に此必要がある事は勿論である、是迄の女子が交際社會へ出なかつた事、今日でも引込み勝な事は我々が甚だ遺憾に思ふ、女子に社交が開けないから、學校以外の新智識が注入されないのである、新智識に欠けたものが母として在るから、家庭教育には感服出來ない物が多いので有る。

夫婦相對座して談話の時なども、良人の方は學校も大方やつて居れば、各種の社會にも出入して居るから善いが、細君の方は何事につけても見聞が狹く、新聞紙さへ善くは見て居ない樣な始末であるから、話に興が乘らず、チツトも面白くない、それでは餘り、東洋式で家庭に善美なる趣味の豐富を欠ぐ、甚だ遺憾な事ではあるまいか、之等は今日の婦人に少しく社交と云ふ考へを持たすれば譯もなく補缺も改良も出來る事であります。

社交は間接に女子教育の上に利益あるのみならず、秩序的に其教育の或不足を補ひ、或る特色を發揮させる物である、今日社交の如き眼前必要なる物に目も吳ないで、單に理想ばかりを高く持て居るから、物事が多く思ふ通りに行かないで、不平が起るのである、それが嵩じると一旦嫁いだ者でも破鏡と云ふ樣な悲しむべき境遇に陷るのである、之は其理想とする所が、今日の社會を放れる事の餘り遠いにも原因するが、又一つは女子に教育と云ふ事が不足なからでもある。

此樣な理由からして、私は女子の高等教育を贊成する者であるけれども世間では之をいらぬ事だと云ふ人も少からず有る樣です、成程實地に就て今日の新教育を受けた女學校出の婦人を見ると、中には女として怪しからん考を抱いて居る者も有ります、私共は此上貰ふ事も有りませんから差支はない樣な物の、實に嫁即ち一家の主婦としては到底物の役に立ち相も無い者さへ見受けられる事は私も非認しないが、之等は、生中中途で止めるからで、高等教育迄やり通したらそんな事もなからうと思ふ、それも一方に於て是非社交の力を借りる必要があるのであります、或は現在に於ては女子にそんな高等教育は不要ではないかと切り込む人も有らうけ

れど、總て教育と云ふ物は今直ぐ役に立つ譯の物で無い、少くとも十年二十年の先を考へて敎へるのである、今日は我々の社會で有るけれ共、二十年後を我々が今の考へで處理しやうと思つたら間違ひで有る。

それで女子に高等教育が結構であるとしても今日の樣に社交を少しも知らない婦人は『婦人』として不完全な者で有る、女子が學校を卒業して徐々交際社會へ這入ると云ふ事は可愛がられた一人息子が旅へ出る樣で、其女に取つては直接に世間を見るのである、世間に出て見れば我儘も出來無くなれば、勝手な議論も出無くなる我儘勝手が無くなると云ふ事は結局禮儀に習ふのである、昔の支那人が禮と樂とを以て國を治めると云つた樣に禮儀は人間に最も必要な物であつて特に女子に於て尤も必要である。

又今日の日本で高尚なる音樂の無いのを、甚く批難して、如何にもして之を作り上げねばならぬと云ふ議論を此頃所々で聞くが歐米に於ける今日の音樂は、一朝一夕で出來た物ではない、それを風土の異る我國へ移し植えて直ぐ用を爲す物では無い、由來音樂の樣な物は、彼の色彩が國々に依て違ふと云ふ樣に極めて微細な點にまで渡て根底を持つて居るので有るから、或一定の樂理とか和聲樂とか云ふ物は之を學ぶ事が出來樣けれども、其他は到底之を移し取る事が出來ないので有る、若し夫れが差支無い物とすれば金さへ有れば今日直ぐでも歐米の樣な高尚な音樂を持つて來るわけであるが事實そんな譯には行かないのである、音樂は斯く六づかしいものであつても今日の女子に社交を知らしめると云ふ事は、そんなに面倒なものでは無い、各自が少しづゝ努めれば自然と盛んに成つて參るべき事である。（竹內生手記）

女子の交際

棚橋絢子女史

▲女子の交際は仲々六ケ敷ものです、何うしたら圓滿に人様と付合て行けるかと云ふに、一番の要訣は自己を沒却す事、即ち自分といふものを顯さない事なのです、無暗に自分の意見を提出したり、自家の利益を主張したり、或は又た權式振たりするやうでは、交際はうまく行きません、可成く他人を先に立てゝ、自分は二歩も三歩も讓つてるといふ様でなければ不可ません、多勢會合する様な團隊交際に於ては殊に此の心掛が必要で御在ます、故に此の主義から行くと、人の饒舌のを聽いて自分は沈默を守ることもあらうし又た場合に寄ては他人の發言に對して雷同と申しては奇怪しいが贊成を表する事も御在ませう、恁様風にして居れば、多くの人にも容れられて、至極圓滿に交際が續けられます、けれども全然自分を沒却して了つても不可ません、彼の人は何でも他人の言ひなり次第になる、お人好だと言はれるやうに成ても困ります、故に時々は自分の主張を發言せねばなりませんが、併し其も極く穩かに角立たぬ所に留めるが宜しいので、是等の呼吸は餘程六ケ敷もので御座ます。

▲婦人の交際には兎角虚榮心といふものが附纏て不可ません、一二の例を申上ると、交際の廣きを自慢したい心から、私は彼の方とは御懇意に致して居りますとか、あの人は元と私の教へた人ですなぞと、自分が知名の人に關係あるをこよなき名譽として、仰山らしく吹聽する者がありますが、是等は皆な管らぬ虚榮心から起ることです、ソレカラ又た婦人には外觀を飾る弊が御在ます、其は第一に衣服の上に行はれて、人中へ出るに此の着物では不可ないとか、此の帶では見ッともないとか申して、衣裳の美を競ふ風があります、是では何の事はない衣服の交際で心の交際とは云へません、婦人には敢て衣服に限らず萬事に此の弊風があるので、其が爲

め却つて交際を妨げる事が多いので御在ます。

▲世には隨分虛榮を買ふ爲めに會員に成て見たり、寄附金をして名前を連ねて見たり、吾から種々の手段を盡して只管交際場裡に時めかんと努むる者もありますが、私の望むのは斯かる虛榮の爲めの交際ではなく、人を濟ふ底の交際を希ふのであります、即ち女の持前の慈善心に基いて人の面倒を見るといふ風の交際が尤も望ましいと思ひます、要するに女子が社會に出でゝ人と接觸する場合には、飽までも女らしく振舞ふて、性來の優しい美德を傷つけぬやうにするのが、肝要だと思ひます。

▲又た人と交はるには先方の感情を害してはなりません、所謂人を外らさぬといふ待遇振が必要で御在ます、同じ訪問するにしても、其の家の奥樣が如才なく應接して與れて御愛相が宜いと、大層客の居心を快くして、自然其の方の器量も上がる譯ですから、人と接する場合には此の人を外らさぬと云ふ心構が大事で御在ます併し是も一つは其の人の性質によつて容易に出來るもあり、又た努めて出來ぬのもありますから萬人に向つて一樣に如才なくあれ、お上手なれと勸める譯には參りませんが、兎も角客を滿足させる丈の待遇がなくてはなりません、其には何は無くとも、機嫌よく客の語る所を聞き、又た此方からも談話を御馳走するやうに致すのです、談話が途切れると客の方でも居惡くゝなりますから、可成く此方から談話を續けるといふやうに致さねばなりません、けれども是は餘程困難の事で、殊に世馴れぬ若い方などには談話の種も少なく、何かと心には思へど、遂に何も思ひ浮ばず、會話の緒を見出すに苦しむやうな場合が少くは御在ません、其故私なぞは談話を續ける稽古をしたものです、其のお蔭で今ではどなたに向つてもお談話に窮するやうなことはありませんが、其の代り餘りシヤベり過ぎて、客に立場を失はしめ、却つて迷惑させる樣な弊を生じました。

▲ソレカラ婦人何々會とか申す團隊は、一面女子の社交機關と成つて居りますから、交際を廣める上には大層

都合が宜しう御在ます、たとへ會其の物の目的は別にあるにしても、多くの婦人方が集ることですから、自然交際に向つて恰好の機會を與へますので、出席致してゐる内には、上流の方に御心易く成つたり、ときめき玉ふ方の御説を拜聽したり、いろ〳〵の利益が御在ますもので、此の趣味は到底家にばかり引込んで書中に友を求むる御隱居方の思ひも及ばぬ事で御在ます、よく何處の會にも一人位は「私は斯うして參會つた所が御話相手があるではなし、唯だポッチンと手持無沙汰で居る許で、誠に詰りません」と仰有る方がありますが、私は斯う云ふ方に向つては、何時も然う申すので御在ます「其は貴女が默つて入らッしやるからです、貴女の方から隣席の方に口を利いて、好いお天氣で御在ますとか何とか挨拶なされば、其の方だからとて必ず愛相よく御返辭なさるに違ひありません、而して一言が二言となり、段々言葉を取替はす内には、心易く成つて、住所や名前を互に聞くやうになり、どうぞ彼の邊を御通り遊ばしましたら、是非御立寄下さいましと言ふやうに成つて、交際は幾らでも廣まつて參ります」と言つて、出席をお勸めするので御在ます、所詮友を得んと欲せば、吾より求むるやうにせねばなりません、論語に所謂朋あり遠方より來る亦た樂しからずやと云ふ樣なのは聖賢なら知らぬこと、普通人には六ケ敷いことですから、何うしても此方から進んで交際を求めねばなりません、ソレニ人といふものは自分より身分上の者にはつとめて交際を求めんとしますが、下の者に向つては付合も疎かである、訪問の如きも上の方へは度々足を運ぶが、下の者を訪問するといふことは先づ少いのですから、身分上に向つて交際を結ぶには是非共吾から腰を屈して辭を低うして其の門を叩かねばならぬものだ相です。

▲けれども、以上申上たのは一般の意味に於ける交際で此の内には隨分處世上の必要に迫られて餘儀なくする所謂「おつきあひ」なるものもありませうから、之を以て直ちに眞の交際とはいへません、眞の交際になると利害に關せず、貧富を問はず、休戚相慰め吉凶相訪ふといふ類の交際で、所謂肝膽相照らす間柄の交友を云

ふのです、此の類の交際なら敢て多きを望ます、一生に一人あれば澤山です、弟子を仕込むにしてもその通りで、數千人の弟子を得て、先生、先生と敬はれるは、其は成程名譽の事でも御座ませうが、卒業して校門を出ると、道で逢ふても彼は昔の先生、今は不關焉といふ様になるのでは、少しも嬉しくありません、故に私は恁様風の當座丈の弟子を千人造るよりも、師の道を永く傳へるといふ底の眞の弟子を、假令一人でも可いから、望むのであります、交際も亦た此の通りで、當座の交友千人あるよりも、永久の交友一人あることを望みます、故に私は云ふ、交際は廣きを欲するも親友は多きを望まずと。（舟人手記）

支那婦人の社交

下田歌子女史

支那婦人と社交とに就いて話しませう。私が支那の若い婦人の教育を始めたのは、三十四年頃で、其取扱つた婦人の郷里は南に多く北に少いのです、南も湘南湖北が特に多く、其數は、略五六十人に達します、其ゆかりで年の行つた支那婦人とも懇意になりましたが、親しく交際して見て特に感じた事が澤山にあるので御座ます、又た兼ての想像とは反したことも多いので御座ます。

支那では男女七歳にして席を同じうせず等申しまして、今日と雖も極少數の人の外、上流の婦人は外出せぬのみか、男子と直接談笑する様な事は有りません。そんな風俗ですから、私の始めの内の觀察は、極臆病な、ひかへ目勝ちな、氣の弱い、いくぢの無い、從つて貞淑で、謙遜で、つゝましい等の美徳を備へた物と、想像して居たのです。

然るに事實は之れに反して、年齢の老若土地の南北を問はず、一般の支那婦人は、存外意志が强固で、天性

社交的に出來て居ます。と云つても、文明的に左樣なのでは無いから、歐米人の耳目には適切では有るまいけれど、何事につけても其態度の、社交的にして又大陸的なる事は、到底日本婦人の及ばない所だと思ひます。第一人に臆しません、第二に敎はつた事はどし〳〵實地にやつて見ます、第三に手先も中々器用です、ですから進步も中々早いのです。

されど天は決して長所のみを人に許しません、一つ間違へば行き過ぎるかと思はれる弊があります、其は我儘と、耐忍力の强からぬ事です。

成程、昔支那の先輩が、女子の專橫を恐れて、萬事に嚴びしい壓迫を加へたのは、謂はれ有る所と、深く感じました。

中には隨分有望な人も有りますから、敎育のしやうによつては、立派な婦人が出來やうかと思ひます。

故に若し支那婦人にして、充分に文明的の敎育を受け、社交的に日本婦人と並び立つた曉には、日本婦人は確に一步を讓らねばならぬと思ひます。彼等は中々華やかな才氣が有つて、又人の心を惹き附ける力が有りますから。

ソレニ日本の維新前後の事を考へて見ますと、今日の支那婦人の方が、當時の日本婦人よりは餘程の奮發かと思ひます、日本で明治四年に始めて、女の留學生を米國へやつた時は、政府の方でも餘程骨の折れた事だ相です、然るに現今日本留學の支那婦人は、皆悉く私費で來て居るのです。中には四十八歲で子も孫も有る婦人も居ます。一つは日本が近いから、費用の多からぬ點等も有りませうけれど、斷然自ら決して遊學するなどゝいふのは、意志が强くなければ出來ぬことです。

日本婦人が若し蟄々して居た日には、後の雁が先に成る樣な事も有りはすまいかと思はれます。

如何して私が支那の女子留學生を教育する樣に成つたかとお尋ねですか、私は支那公使館の向ひに居るものですから、勢ひ多少の關係も生ずる樣に成り、北淸事變少し前の頃から、支那の男の留學生が漸々來ましたから、之れは遠からず女子の留學生も來る事に成るだらうと考へまして、夫れに就いては男子の口からは女子に物を云はれぬ、支那の風習と聞いて居ます故、三十二年中私の實踐女學校の女教師の內、漢學の素養有る者二三人に、支那語を稽古させまして、三十四年に始めて一人の支那婦人の教育を依賴されました、それから追々に今の數にまで增加しましたが、只今の生徒の多くは支那の風俗として元來が早婚なものですから生徒であつて又奥樣です、それ故永く日本に滯在する事を許しません、それで只今は速成科にして一年で業を卒る事にしてあります。

お轉婆の意義

昔は女子は只おとなしく萬事ひかへめに愼み深きを最上と爲たれど今は然らず、勿論斯くいへばとて爲まじき事に出嘴張言ふ間敷き事にまでぐちは宜しからねども、いふべき事はハキ〳〵といひ爲べき事は敏捷に埒をあけて物にはにかます逡巡爲ざるをよしとす、それには從順に過ぐるより寧ろお轉婆なるを增れりとす、但しお轉婆といへば豈と野鄙ありて至當ならざる嫌ひも有らん、されど斯く申すは强情、氣隨、人の言を聽かぬお轉婆に非らず、心は正しくして世間の道德を克く辨まへて唯物事に怯めず憶せず、活潑なるお轉婆たれといふにあり。

婦人の社交倶樂部

英國に在つてはヴヰクトリヤ女皇の時代より婦人倶樂部の組織成り僅々此五六十年間に著しく發達を爲すに至りたり、男子側にては種々婦人倶樂部の組織に關して反對の說を爲し、左らでも家庭的義務を放棄して遊びにのみ身を入れんとする婦女を驅つて滔々皆倶樂部員たるに至らしめ、遊惰の上に放逸を重ねしむべしとの說をなしたるに拘らず、又ヴヰクトリヤ女皇も餘り之れを好ませ給はざりしにも拘らず、必要は婦人倶樂部の一大發達を來し、倶樂部は啻に閑暇多き富貴なる婦人の集合所となり、且繁忙なる業務に服する人の保養所たるのみならず、其結果は頗る良好なるもの丶如し、會員には皇族あり、學校の講師、批評家、著作家、雜誌新聞記者、裁縫師、化粧品商等種々雜多の階級を含み特に寡婦、處女等閑暇多くして其日を暮すに苦しむ人々には最も然るべき娛樂場たるべし。

勿論婦人倶樂部に伴ふ弊害も無きには在らねど、處女の如きは玆に我儘の氣風を一洗して社交的修練を經るを以て、他日良人を助けて世に立つ場合には少からざる便宜を得、又容易に人と懇意を結ぶの機會を得て、處世上に益する處も多大ならん。特に一週一回若しくは二回、日を期して、博士學者其他知名の士を聘して婦道に關する講義を請ひ、時に音樂演奏會、歌會、挿花會、茶會等を催すも亦可ならずや。

勿論倶樂部の品位を損ひ、害惡を釀すが如きことは努めて之れを排除するに務めつ丶あり。

日本の首都たる東京に一の婦人倶樂部だも無きはいさ丶か物足らぬ心地す。歐米諸國より渡來せる婦人の日本婦人と交際を結ぶ機關のなきは彼等婦人に取りてもさぞや失望の事なるべし。

交際節用（1）

△服裝　服裝は質素にして清潔なるを第一とす、随つて華美、粧飾を凝らし、身分不相應なるものを着くるは深く戒しむべき事なり、禮服なども普通は羽織、袴にてよき様なれども、最早今日は會食、夜會などの席に出づるには西洋風に燕尾服を用ふる様に一致せり、それ故夜會の席には何人も高帽をつけ、燕尾服に白襟飾、黑護謨靴にて出掛くる様になりたり、されど葬儀の服裝は今も猶十人十色にして、甚だしきは自己の親戚に當りながら、高帽（シルクハット）をつけざる者あり、儀式は大切なるものの故、西洋風ならば西洋風、日本風ならば日本風にて矛盾せざる様注意せざるべからず。

△引合　人を紹介するにはまづ先方の承諾を得たる後にする方よろし、されど、他人の家又は散步の際など偶然出逢ひし折などには其間に立ちて紹介するとせざるとは適宜に計らひて行へばよし、殊更書面にて人を紹介してやる場合は概して身分の低きものを貴き方に又は男子を婦人にするが普通にして、斯る時には輕卒ならざる様に注意せざるべからず、近頃世間に往々ある例なるが、一面識のなき人を心易く他の人に紹介するなど先方へ失禮なるのみならず、時としては間違を生じて人に迷惑を掛くる事なしとせず、其結果紹介する人の品位を損する事あるに至る故に紹介は熟識の間柄に限る、呉れ／＼も謹むべきは紹介の濫用なり。

△談話　人に面會して談話する時に心得置かざるべからざる事數ヶ條あり、第一は野鄙なる言語を用ひざる様に氣をつくる事、第二は他人の談話を聞く時には靜かに謹聽すべき事、第三は衆人の集りたる中にて耳語せざる事、第四は自身の好きな事のみを持ち出して獨り多言せざる事、第五は失敬のなき爲めに客の身上に注意すべき事、第六は他人の言語が氣に障りたりとてなるべく反抗せざる事、第七は會話の間は常に温良恭謙の態度を失はざる事、第八は外國人には出來得べくば其國語で話す事なり。

△迎接　來客を迎接するは氣分のすぐれざる時も勉めて温和を主とし丁寧に過せざるべからず、若し都合により暫らく待たせたる時には鄭重に其次第をつけ又一時に多くの客を接待する場合などには迎接の取扱に等差のなき様すべし、主人は客に對してあまり馴れ／＼しきはよろしからざれど、又あまり窮屈な風を仕掛くるはよろしからず、交際の要は常に程よくするを上手とするなり。

近世社交の上進

其一　社交の進歩と生活の膨脹

日本人の社交的生活は維新以來歐米諸國と直接に交際を開くに至つて俄然として進歩したのである。元より日本人と雖も人類界自然の約束に依ッて、個人的の交際は太古開闢の始めよりして、否、未だ日本國民が社會的の組織を爲さぬ以前よりして勿論の事、開かれて居たのに相違はない。併しながら今玆にいふ社交的生活即ち歐米國人が近世專ら唱ふる所ろのソサイチイ人類相互の同情を基礎として組み立てたところの協同、懇親を意味せる處ろの交際は、殘念ながら維新以前にはあまり振はなかつたのである。然るに西洋諸國と交際を開いた影響として社會の交際は漸次其の面目を開き、最近二三十年の間に一大進歩をなし、就中婦人の活動を見るに至つたのは頗る刮目すべき現象である。

勿論交際は人文進歩の媒介者である。隨て社交の發達は其國文明程度の上進を示すものである。故に國家經濟力の豐富と、國民智識の普及進歩に由らなければ社交は發達せぬ、一口にいへば社會的交際の繁榮は國力の膨脹を具體的に示すものと言ッてよいのである。

何をか具體的といふ、見よ日本の中等社會が維新以來三四十年の間に如何に其の生活の有樣を改良せしか、まづ彼等の衣服は粗末なる木綿物より一躍して美麗なる絹物となッたではないか、まづ彼等の食物は粗末なる總菜より一躍して、滋養多き肉類となつたではないか、彼等の頭はチョンマゲより一轉して流行の帽子を冠るやうになつたではないか、彼等の口は豆腐、蒟蒻より一轉して西洋料理を味ふの嗜好が出來たではないか、彼等

の足は一足十五錢の下駄から五圓以上のナメシの靴に代ッたではないか、彼等の雨衣は一本二十錢の傘から三圓以上の絹張の蝙蝠となつたではないか。是れを證するに一々事物の品目を擧げて說明するまでもなく、東京大阪を始め凡そ都會といへる都會に簇生する唐物商店に就て仔細に吟味すれば最近二十年の間に國民的生活の進步の驚ろくべき事實を發見するであらう、豈只東京に於ける三越白木屋呉服店、白牡丹、玉寶堂、天賞堂などの美術品小間物店の繁榮を見て田舍者が魂消るのみならんや。

是等生活の進步は即ち社會交際の進步である。人類が美衣美食するのは必らずしも身體を養ふの爲めのみではない。又單に口腹の慾に驅らるゝのみではない、畢竟は人間相互の生存的關係よりして各自の競爭より來たッた社會交際的の影響に依るものと言はねばならぬ。女學生が蝦茶のカスメルとなり、カスメルが一轉して緞子となるのも又是れ社交上の關係と言はねばならぬ。

其二　上等社會生活の膨脹

乍併其社交の上進なるものは社會の各階級を通じて一般に生活費の膨脹を來たすものである、彼の下等社會の人が直接に衣食の窮乏を感ずると同じく上等中等の社會に於ても又等しく衣服、食物以外に大なる生活費の膨脹に困難を感ずる樣になッて來たのである。抑も上等社會の生活費の膨脹とは何であるか、まづ其れを說く前に上等社會といふものゝ階級を言はねばならぬ、今日上等社會とは、華族、紳商、大官吏、地方の大農、權門家、幷に固定資本に生活する人々であッて、一ケ年の收入五千圓以上に上る階級である。是等の社會の人は交際社會に於ても極めて巾の利く方であッて、不斷の生活上よりは寧ろ外觀體面といふ方に重きを置き、衣服修飾に流行を逐ひ、滋味を需め、平素金錢を以て精神上肉體上の快樂を要求する處ろの階級であ

る。然るに是等の社會に於て生活費の膨脹を來すといふは何故であるかといふに要するに廣き意味にていふ社交の發達した結果に外ならぬのである。元より社交の發達は、文明の進歩と正比例をなすもので、族制進化の上から免かるべからざる約束である。勿論社交の多端は必らずしも虛榮、贅澤、奢靡を意味するのではない、其の中には子孫繁殖の勢を以て直接に衣、食、住費の膨脹もあらう。又交際費、外觀費の膨脹もあらう。家族の遊樂、娛樂に費す處ろの膨脹もあらう、又流行を逐ふの費用、滋養品の購求、醫藥の費、子女の教育、納稅費、樣々であるが、併しこれ等は表面上理解さるべき生活膨脹費で必らずしも奇とすべきではないが、玆に容易に人々の心づかぬ點がある。殊に是れは智識の進んだ、閑の多い人種に尤も必要である、それは何かといふのに、文明の進歩に伴ふて自然に來る處ろの時間の價、人間壽命の延長である。西洋の或學者の說に文明の進歩は人間の壽命を十倍にしたといふてある、其意味は汽車汽船を以て空間の幅員を縮め、電信電話を以て時間の幅員を縮め、古人が十年かゝつて成した事を今人は數ヶ月の短日月を以て成就せしめるほど人生に時間の必要なる事を知らしめたのである。それ故古人が一代の間に見聞した事柄を今代の人は三四年の間に見聞して仕舞ふ。そこでむかしの一ヶ年は今の一と月よりも事が閑であつた、こんな工合ですべての事柄が頻繁になり隨て時間に非常な價を生ずるのである、そして其價は、文明の空氣を吸ふ力の乏しい下等社會にあまり關係なくして社交界に頭角を顯はした上等社會の人に極めて大關係がある、即ち下等社會の人は時間を空費しても左程の痛癢は感じないけれども、上等社會の人が時間を空費すると非常な損失を免かれないのである。

この如く上等社會に於ては時間が貴重なものとなツたと同時にその貴重な時間を活用せしめんとするに就て自然に費用が嵩む事となツた。即ち時間の擴張に伴ふ費用である、人間一日の壽命を十日に延ばしたゞけ十日間の費用を一日に要するやうになつた、今是れを具體的に言ひ顯はすと、朝の二時間は公私の訪問を受け、

晝の二時間は公共的慰問を爲し、又公共的の祭弔の場所に臨み、夜の二時間は私の茶話會に赴き音樂の演奏を聞き、それより舞踏會に赴くのが或る社交界の婦人の役目とした處ろで、この婦人が右の時間の以外に讀書をなし、小兒に教訓を施こし、公私の手紙を書き、美術品の展覽會に赴き、又た友人の危急に赴き、親戚間の不時の出來事に就て苦勞を分ち、遠き外國移住の知人よりの贈り物に對する返禮の指圖などするに至ッては頗る多端と言はなければならぬ、タトエば彼の商家の丁稚が藪入の日の一日を利用して様々に活用するが如く早朝親戚を訪ひ、日中演劇を見、次で貸し自轉車に乘り、それより飲食店に上り、夜に入りて人寄せ席に入るが如く短かき一日に數々の事柄を爲し遂ぐるは恰も文明、社交的の生活の多端、繁忙に比すべきものである、即ち交際の繁多なるは義務の觀念の厚きを意味し、義務の念の厚きと嗜好の增進とは人間處世上の費用を倍加するの原因となるもので、主として上等社會の生活の膨脹を來したものである。

其三　中等社會生活の膨脹

社交的上等社會の生活費の膨脹を來す原因は以上の如しとして然らば、中等一般の社會に於ては如何であるかといふのに、是れも又大に上流社會の影響を蒙つて生活は年々に進歩し來つたのである。元より此の社會に於ては上流社會の如く、華麗なる交際上の儀式に巨額の失費をなすなどの事はない、けれども、この社會は富なくして智識ある社會であるから、文明日新の空氣を呼吸するの感念は極めて鋭敏である、故に教育の進歩に伴ひ智育の普及せるこの社會に於ては一般生活上に新事物を適用した結果、其人々の耳目の聰明ならん限り、生活の奢侈多端に赴くのは免かれない。タトエば昔しの、漢學書生や、醫者の書生は澤庵大根を嚼つて勉強をしたけれども今日の學生は、肉食をせねば勉強がつゞかない、これはむかしの書生が強くて今日の學

生が弱く成たのではなくて、昔時の學問が簡單で、今の學問が複雜して居る證據である。複雜した學問をするのに、淳庵に茶漬飯では到底耐へられない。複雜なる文明流の學問をするものが時々洋食を食ふたからとて決して贅澤とは言へないのである。

そこで中等社會が近年衣食住の上に多少の贅澤風が吹いて來たやうであるけれども其の贅澤といふのはつまり一歩後れた時代的の眼から見た議論で、現社會の風潮が既に斯うなつた以上は其贅澤も決して贅澤ではない居家處世の必要條件として見做さなければならぬ。

して見れば、其の社會に於ける交際、義務、體面、外觀、旅行、遊樂、見聞(新聞雜誌の如き、又音樂、繪畫、美術の如き)音信(郵便交通)教育、衛生、其他あらゆる處世上の必要件は皆日々に進歩し、年々に改良する社會一般の風潮から割り出されて社會は恰も其の不文の組合規則に束縛されて居るやうなものである。タトエば彼のカスメル袴の樣なものである、女學生といふ體面を保つ爲めには是非これが必要である。何もカスメルと限つた事はない、縞の袴を穿かうが木綿の袴を穿かうがこれを咎める者はない譯であるのに、態々カスメル袴でなければならぬといふ風潮になつて我も人も皆それを用ふるといふのは、つまり、社會の不文律ではあるまいか、されば今日生活上膨脹の爲めに困難の事情ある中等社會の人々が一歩後れた時勢(假りに明治十五六年頃)に立歸つて、其の時代に適用された生活をしたならば、生活費は正しく今日の三分の一で十分であらう、必らずしも二十年前は物價が廉かつたばかりではない、生活、即ち社交の方法が極めて簡單であつたからである。

して見れば今日自然の勢で上進した生活程度を、今更世の風潮に逆らつて引下げるのは頗る困難である、若し强ひて是れを實行しやうとすれば、恰も聰明なる耳目を蔽ふて、物を見聞させないのと同じ樣なもので、其

の苦痛は想像の外である。而して其の結果は時勢と伴ふ事が出來なくなつて、結局生存の價値を無くする事になる、それ故生活費の膨脹は、生活實體の成長を意味するものであるから生存競爭の上から是非歡迎しなければならない、人間が時勢に伴ふ事が出來ないのは畢竟生存競爭に敗れたものである。

猶一層具體的に是れを解釋すれば昔時の中等社會では不斷に樺皮緒の下駄を穿いても通つたのである、今日では天鵞絨でなくては通用しない、昔時の中等社會では煎豆、鹽煎餅カキ餅などの茶菓子で御客會釋は務まつたのであるが、今日では、カステーラ、にあらざれば、ワッブル、乃至ドロップでなければ御愛想にならなくなつたのである。昔時の中等社會では木綿の座布團で通用したのであるが、今日では郡内織でなくては御客に對して失禮のやうになつたのである。隨つて、不斷の器物も樫の机が紫檀となり、塗箸が銀の袴の象牙となり銀の指環が黃金となり、ガラス玉が水晶となり、身の廻より、床の間より、座敷の上より庖厨の隅に至るまで生活上進の影響は歷々として掌紋を見るが如しである。

此の如く社會各階級を通ずる生活の膨脹は、一と口にいへば奢侈であるが、奢侈の半面には社交の上進を意味して居るのである、社交の上進は是れ文明の徵か。

會話

學問を勉強する人は澤山にあり、身體健康の要途に心がくる人は澤山にあり、遊藝を修業する人は亦澤山にあれども、會話の上手にならんことを心掛くる人は眞に稀れなり、されども會話の上手なる人は、その人の一生を社會に愛せられ、社會に善を爲すを得る一の道具なり、人の智識の中の十中八九は會話によりて得し所なりと、古賢の云ひけるは如何に會話の大切なるかを示せる名言なるぞ、我等が知らざる人に始めて對面せんに、未だその人の性質も知らず、人物も知らずと雖も何とも云へざる一種の引力を以て人を引着くるが如き感じありて其人の傍らを去るに忍びざるが如き感を起さしむるは會話の力なり、人を敎育し、若しくは人より敎育を受くる唯一の手段は會話なり、實に會話の巧拙によりては益すべき問題を以て人を害し、また己れをも害するに至ることあるべし。



交際節用

△訪問――始めて人を訪問したる時は二三十分を程度として辭し去るべし、若し主人側より強いて引止る時は其言に從ふを禮とす、是れ通常の人に交際するの例なり、されど多忙の人を訪ふ時は極めて單簡に要事を述べ了りて辭し去るべし、若し長時間の談話を要する事あれば豫め先方の都合を問合たる上に於てすべし、食時と夜間の訪問はなるべく避くるをよしとす。

△應接――他に差支なき限りは訪客に對して成るべく寛悠なる態を取るべし、決して噪急なるべからず、外出若しくは止むを得ざる用務ある時は豫め其日を一寸斷りて置くべし、或は斯く／＼の次第なれば何分間位は差支なしとて時間を限るもよし、然らずして客に接し居る間頻りに時計を見、家人を叱り飛ばし、若しくは無愛想なる面地をなすはよろしからず、茶菓の饗膳は客の好むに任せて強ゆべからず。

△座禮――訪問の際主人より坐布團を敷かれよと請はるゝに猶辭退して布團の外に座するは失禮なり、又談話の際他客の入り來るを見てお邪魔とおもひ、匆々にして辭し去るものあれども、これも又失禮なり、斯る心づかひは却て他客に對して快き感情を抱かすものにあらず、されど合客のあるにも拘はらず、己れのみ喋々と談じて他客をして口を開くの餘地なからしむるはよろしからず。

△紹介――人を紹介するは先方の時間を潰し、其の他種々なる新らしき義務を負ふに至るものなれば、多年の交際ありて能く其の身分性質を知り居るものゝ外は紹介の勞を取るべからず、此場合に於ても紹介狀には唯紹介の用向、當人の人物等は唯信ずる丈を有の儘に記して決して無責任なるの仲人口を用ふべからず。

△手紙――手紙の用紙は必らず卷紙を用ふべし、半紙又は用箋は男子には輕便にして都合よけれど婦人には相應はしからず、墨は濃くすりて文字は柔らかに優美なるべし、決して猥りに塗抹すべからず、一旦書きたらば誤字脫字のなき樣讀み返して吟味すべし、決して曖昧なる文句を置きて人をして推察に苦しますべからず、且つ手紙には月日を明らかに認むべし。

△饗應――人を饗應するは此の方の實意を食物に移して表はすものなれば成るべく心を籠めて馳走すべし、されどあまり奇に走りたる饗膳は客を迷惑せしむるものなれば、懇意の間柄なれば兎も角、普通は謹むべきものなり、又分量は皿の數よりも內容に注意して客の好みによりてはお代りを出すもよし、されど殘物を折詰にして持ち歸らしむるは失禮なり。

△馳走――他家を訪ふて馳走になりたる時は膳部に出でし大凡を靜かに食ひ盡すを禮とす、彼の遠慮深き客の箸を多くつけざるを奥床しと思ふは間違なり、又膳を運ばれたる時、陪客へ遜すは主人へ對して失禮なり、陪客へは唯先に受くるを謝すれば足れり。



經驗談

韓國貴婦人の交際

岡部子爵夫人談

中村鈴子手記

岡部子爵夫婦は、本年五月渡韓せられ、夫人は七月一日一先づ歸朝されたので、頃日夫人に願つて韓國貴婦人の交際振を伺ひました。其大要を紹介致しませう

▲上品な交際振

京城在留中交際致したのは、各大臣其他大官の夫人達で御坐いました。彼地の婦人は人に接しないで、奥深く籠つて居りますけれども、此頃交際を始むる傾向になつて參りました、それ〲に逢つて見ますと、如才なく話し上手で何時までも人を倦きさせませず、却々交際は巧いもので御坐います。而して新しい知己にも包み藏さずに眞情を呈露す所は、西洋婦人の様であり、優美で如何にも女らしく品の好い所が御坐います。追追交際の道を開いたならば、社交界の婦人としての資格は充分でありませう。彼地の貴婦人達は、私を非常に歡迎して呉れまして、日本の貴婦人に御目に懸るのは實に嬉しい、何卒是れから力になつて下さいなぞと申して、隔意なく話しを致しました。窮屈な風習に壓迫されて居ながら、一面識の私に胸襟を開く所は、却却洒落で、日本婦人の遠慮勝なる習慣とは大分異つて居ります。

▲多子の賞讃

貴婦人に初めて面會しました時、先づ私の年齢を尋ねました、それから子供の有無を聞きました、是は彼邦での交際の禮で御坐います。それで私が九人も子供を有つて居ることを聞いて、御仕合だ〳〵と頻りに褒め上げ、自分達は大抵一人位宛しか無いと歎息して居りましたが、一人の婦人から多兒頌と題した漢文を私に寄越しました。御承知の通り妾を置くことは彼地一般の風習で、貴人の家でも妾が夫人と同居すること多く、随て種々の家庭話なぞも聞きましたが、之は詳しく申兼ねる點もありますから、先づ此話は致しますまい。

▲一見故舊の如し

私が訪問しますと、廊下へ出て來て私の手を把り、抱へる如にして座敷へ連れて參り、丁度親か姉妹が來たやうに喜んで、何から何まで打明けて話され、長い時間を私に少しも退屈を與へず、又悪い感情を與へぬのは外出もせず見聞も狭いのに似合はない感心な事で御坐いました、我國の方で見ると、夫人が妾なぞの事に就ては餘程親しい友人にも默して居る風ですから彼國夫人の話をチヨツト聞くと卑しいやうではありますが、初對面の私を信用して、少しも隠し立てを致さぬ所などは、風習とは云ひながら餘程面白く感心いたしました又將來の社交上の事に就ても種々相談を受けたことも御坐います。斯様な有様で何處までも私に親しみまして今度出立の折には『何故貴女は御歸りなさる、御用が濟んだら直ぐに又入らしつて下さい』と繰返し〳〵、名殘を惜んで呉れました。

▲御馳走

私は加藤顧問の邸に宿泊して居りましたが、御晝飯は大抵一時過になります。それから訪問に出掛けますと先方で直ぐに御馳走を出し、様々の物を澤山並べて、サア召し上れ〳〵と勧められましたが、御晝飯を食べ立てゝ却々食べ切れません。スルト『何故上つて下さいませんか』と手づから肴を小皿にうつし、頻りに勧めて止みません、料理は主に牛鳥肉を用ゐますが、日

本人の口に合ふやうにと心配して、さしみなぞも出しました朝鮮料理には生魚も用ゐます。彼國ではお八に皆麵類を食べますので、お八つ時分になると、素麵や饂飩の汁の中へ松の實（松子の心で芳香あるもの）なぞを入れて出します。御茶は大抵紅茶なので、何處を訪問しても之を出さぬ家は御坐いませんでした。（これは西洋風）煙草は極上等が備へてありますので、多分西洋から取り寄せるものと見へ、紙卷の却々贅澤な品であります。而して直ぐ煙草を附けて出し、未だ吸ひ切らぬのに後から〳〵寸燐を擦つては附けて勸めますから、私が如何に煙草好でも目が廻るほどで御坐います。

▲內外房の別



一の家庭に於ても、表と奥の區別は實に嚴重なもので御坐います。其頃の法部大臣で韓皇帝の三寸（三寸とは三等親の事）なる李址鎔氏の夫人を訪問致しましたが、參ると直ぐ內房へ車を附けて夫人に逢ひました御主人はチョット表座敷から出て來られて挨拶を終り直ぐに又表座敷へ歸られました。表座敷と內房は廣い庭を以て限劃して、夫人侍女等は一切此境を越えません。ソコで內房の用事は家來が此境の外で承り、御主人へ取次ぎ致しますから、丁度我國封建時代の奥御殿の錠口のやうで御坐います。私の參つた時は、尤も例外の饗應振でございました、それは夫人と姑御が御一緒で主人の表座敷で御馳走になりました事であり

ます。李氏の母堂が「貴女の御來臨になつた御陰で私は生れてから初めて表座敷の食卓を見ました」とて大層喜ばれました李址鎔氏は母堂の一人息子で極睦しい親子でありながら、初めて一家の内の食卓を見たと云ふ話は、實に滑稽のやうでありますが。我國の舊大名の習慣を思へば、少しも不思議は御坐いません。私は此區別の厳しい中に育つた身分でありますから、別に滑稽とも存じません。

▲座　敷

一般に餘り座敷の飾り付を致さず、稀に掛額を見る位であります。室の一隅には長い蒲團を布き、その端に方形の長枕の様なる臂掛を置いてあります。椅子を置いてある家もありますが、大抵牀の間へ座蒲團を備へて客を坐らします。我國では客が主人と遠く相對して坐し、又は卓子を隔てゝ對話する風習でありますが、彼地では主人が客を自分の直ぐ隣りへ坐らせ、極近接して談話する具合は、チヨツト西洋風にも見えます。李氏の夫人は、私が初めて訪問した時、内房の部屋部屋何處から何處までも見せて呉れました。寢室は片隅の床を少し高くして、戸棚のやうに戸を立てゝあります、彼國では「オンドル」と申して室内の暖氣を作るため床下にて火を焚きます。

▲貴婦人の外出

私共が貴婦人を招待致した時、貴婦人は矢張り輿へ乘つて從者が澤山に附き添つて參りました。輿舁が四人提灯持が二人、侍女が四五人隨伴致しましたが、此侍女は輿の側へ隨いてセツ／＼と呼吸を切つて駈けて行くので實に氣の毒のやうに思はれます、又此提灯持は丁度盆燈籠のやうな物をブラ／＼と提げて先きに立つて參ります。彼國では下等婦人の外は被衣様の物を被つて歩きますが、總て男子の前へ出るのを耻かしがりまして一夕加藤顧問の邸で活動寫眞の催しのありました時も、男の方々が多勢御出になりますから明るい内は厭だと申して、日暮後に參りました、招待した夫人の中で、自身は喜んで來る準備を致したのを良人に止められた方もあつたそうです。而して我國の男子が

話しを仕掛けますと、私の後ろに小さくなつて、左も恥しそうに返事をする様子が、如何にもしほらしう見えました。活動寫眞を見まして、初めて斯樣な面白いものを見たと申して、大層喜んで居りました。



▲手紙と名刺

手紙を書くのは忠實なもので、自分の招待された後の禮狀なぞ直ぐに寄越します。中には漢詩を見事に書いて寄越すもあり、片假名で言文一致に書いて寄越したのもあります、李氏夫人は日本語や日本文字を學ぶのが熱心で、家庭教師も聘して居り、片假名を立派に

書かれます。私が參つた時、いろはを書いて見せましてなほ直して呉れと申されました又其處に在る漢書なぞ讀んで聽かせますと大層喜んで何でも日本の學問を修めたい精神だと申して居りました、彼地では夫人は自分の名を有たないさうで御座いますが唯だ何々夫人で濟で居ります。李氏夫人は私が名刺を持つて參つたのを見て俄に名刺を拵へました。

▲髮、化粧

彼國に居る日本婦人は大抵束髮にして居りますので、私も彼國に居るうち始終束髮で居りましたが、試に朝鮮の服裝を着けて見ましたとき、通辯の婦人に髮を結んでもらひました。前髮を割つて兩方へ撫で付けるのに、梳油を綿へ付けてベツタリと髮へ押し付けますから、テカ〳〵光ります。襟脚の髮は固く釣り上げ、オバコの樣に結んで簪を挿すので、髷の前部へ載せる切チヨツト飾りを付けますが、其飾りによつて身分の高下が判るのださうで御座います。化粧は實に上手に美しく致し、老人でも眞白で人形のやうで御座います。

▲衣服と步行

韓國の婦人服は、體裁が却々優美で、而して着た心持が洋服よりも日本服よりも宜しう御座います。唯だ胸の處を強く締め付けるのが苦しくつて、健康によろしからぬと考へます、其處を何とか改良したら宜しからうと思ひます。彼地の貴婦人は足が細くて小さく、滅多に步行も致しませぬのに、步き方は速く活潑で御座いますから、私は日本服を着けた時は、始終袴を穿き靴で通しました。着流しに駒下駄なぞでは迚も彼の人達と一緒に步けませんから……。

▲謁見

國喪中で御座いますから、參內は出來ないと思ふて居りました所が、謁見が叶うと云ふ事になりました。私共夫婦を御座近く召され、先づ點頭なされて握手させ給ひ、「昨年は岡部子來遊されて喜ばしう存じた、今度一緒に來韓せられたのは、誠に喜ばしい事である」といろ〳〵優渥なる御言葉を賜はりました。

▲官妓

妓は妓生と稱しまして、官妓に採用されるものは宮中へ出入致します。官妓は醫藥と衣裝と音樂との三種に別れてあるそうであります。此妓生の舞曲は見事だそうで、『國喪中でなければ御目にかける事が出來るのに殘念の事だ』と貴婦人達が申して居られました。

▲語學敎師に就て

貴婦人で日本語研究の望みのある人は、日本の婦人を語學敎師に聘して居りますが、素より上品な言葉を習ひたい目的でありますから、敎師は充分此點に注意して欲しいと存じます。通譯をする婦人の中にも、極上品な言葉になるとチヨツト解り兼ねる樣子の見える向がありますから、語學敎師も或は斯樣な傾向がありはせぬかと心配いたします。彼國へ渡航する婦人は、日本の品位を示すために、言語風儀に注意ありたいものと存じます

夫人の活力は、家政整理と子女薫育のみに滿足せられず、軍國に際會しては、愛國婦人會の擴張に盡瘁して各府縣を遊說せられ、今又令息令孃を內地に留めて、其所天と共に韓國に渡り、交を韓國貴婦人と訂結して彼等の智德を啓發せられつゝあり、深窓の裏に人と成給ひし姫君には、眞に匹儔少きを感ずる次第で御座います

歐米の社交界

鳩山春子夫人談

紅蓮子記

漫遊紀談

交際社會の事に就てと仰しやいますか、ハイ、私は種々の會に關係はして居ますが、只今突然では、一寸こまります、ですが、先年歐米漫遊を致した時、樂しかつた事は、今も忘れませんから、何ならそれを申し上げませう。

▲米國のエール大學に、創立二百年祭が有るといふので、其式に、良人和夫が名譽博士の學位を受くる事に

なり、且つ其式の擧行以前、和夫が同大學に於て科外講義を囑托されましたから、三十四年の九月四日、横濱を出帆して米國に向ひ、序に英、佛、獨の諸國をも見物する事になりました。

▲初めの内は見るもの聞くもの、皆珍しいので、一々手帳に書き取つて居りましたが、其内に段々馴れて、それが當り前の樣に思はれて參りましたから、間もなく、所感を書留むる事を止しましたが、私共は到る所で、身に過ぎた優遇を受けましたので、今でも深く感謝して居ります。それは和夫がコロンビヤ大學なり又エール大學なりに以前の學友が澤山ありましたのと、又一ツは日本の帝國大學にも久しく奉職し、現今尚ほ早稻田大學校長の職に居るといふことが、餘程好都合で有つたと思ひます。

▲市俄古にはフエビアンと云ふ、富豪の知人が有りまして、四日ばかり其所に滯在致しましたが、少しも窮屈な思ひ致さず深く主人の接待振に感心しました。

▲參りまする前に、私共の這入ります室は、ちやんと準備がしてあッて、到着すると直ちにその室へ導かれました。さて、其室は日本流とは全く異ッて戸を締切たもので、外から叩かねば開ける事の出來ない樣になッて居ました。

▲室で身裝を直してから、フエビアン夫人に挨拶をしました。尤も良人フエビアン大佐は、馬車で停車場まで迎ひに來て、私共を御宅へ案内されました。

▲夫人の居間はデンと申して、立派に裝飾がして有りました、そして私共は何時でも此室に行き得る事となつて居ました。午後の茶の時は此室で、銘々好みの品を、遠慮無しに注文して頂きました。

▲晩餐の時には、有益で愉快な話をする樣にとの、主人の心附けから、毎晩いろ〳〵の客を招いて下さいましたが、今日はどんな種類の人にお會になりますかとの御注意に應じて、政治家に會はせて頂きたいとか、又文學者に紹介して欲しいとか、此方の希望を申すと、早速その希望に應じた樣な方々を招待して呉れます、そして晩餐には皆禮服で出ますので、私も夜會服を着

ました。到着の晩には、食後馬車で、廣い公園を回りあるき、其所の休息所や、彼所の倶樂部やに立寄て、いろ〳〵の珍らしい果實や、シャンパン酒など頂きました。

▲日本では、他の家に滯在する時、失禮や不自由の無い樣にと、始終家人の一人や二人が客の傍を放れませんから、客は家人に對して氣の毒に堪えざるのみか、幾分窮屈にも感じますが、歐米では決してそんな事はありませんから大層氣樂でございます。私共の室へは、毎朝未だ寢て居る内に下女が參ッて、戶を叩いて案內し、見事な果實を置いて行きますのが例です、一體此家には、客室となるべき座敷が、澤山に在ッて、食前食後の休憩や又は應接の間



米國大統領ルーズベルト氏

など其場合に依つて適宜に用ゐられて居ました。

▲御馳走は、日本の西洋料理の樣に、數を澤山出さず、只材料を精選した上料理が上手に出來て居ますから專ろ其方が嬉しいのでした、酒はシャンパンが每晚出ました、中々贅澤ですよ。

▲抑も當家の父君といふのは紐育のブリス、フエビアン、カンパニーと云ふ大會社の持主で歷毅とした富豪ですが、其子息たる當家の主人は陸軍大佐の格を持つて居る人で、セントルイ及び市俄古の兩支店長で、財產は百萬以上、それが皆殆んど獨力で造り上げた物だそうです、自分は『百萬の財產が出來たら、少し漫遊にでも出たいと思つて居ましたが、さて今に成つて見ると此上もう百萬弗も作り

たい、漫遊はそれからに致そう』と和夫に申されました。

▲斯る次第で本宅の方は可なり贅澤ですが、店の方は中々嚴格です、それは一厘一錢の差ひが末は大きな違ひとなるからでせう。主人は又いくら贅澤しても、本宅で使ふ位は高の知れた物で有る、僅かの錢で、自己も樂み、友達とも樂みを分つ事が出來れば、こんな結構な事は無いと云つて居られました。

▲私の姪にまさ子といふのがありましてそれが此所の御夫婦に、三年餘り御世話に成つたのでございます。

▲夫婦共きつい日本贔負の人で、毎年華盛頓へ行かれるそうですが、大統領の招待會で、日本の公使とも懇意に成り、其の節日本の良い家庭の娘を、一人世話して見たいと云ふ事を、申して居られました。

▲丁度其時まさ子は十五歲で、翌年はお茶の水の高等女學校を、卒業するのでございましたが、私から此事を話しましたから、夫れでは行つて見たいと申しますから、善い次手は無いかと考慮中、丁度、前の米國公使バック氏が懇意でしたから、公使に此事を話すと、至極好都合公使の姉に當る方が、來遊して居られて、此の御夫婦でしたから、一緒に横濱を出帆させ遂にこゝの御夫婦の世話になる事になりました。私共が漫遊の途次、會見したのは、まさ子が彼地に行つてから、一年と少し經つた時でございましたがフエビアン夫婦の、親切な敎育のお蔭で、毎晩々餐前に入浴して、髮を梳り、夜會服を着けるに三十分足らずで濟まして、何時でも私より先に仕度をして、御手傳を致しませうと申してゐりました、私は晩餐前に、以上の身だしなみを成るべく敏捷に濟ませねばならぬと心掛けまして渡航の間は船の中でも、毎日二三回宛着變へ、怠らず其稽古をして居ました故、餘程早い心算でしたが、到底政子には勝つ事が出來ませんでした。

▲米人の家庭に這入てからまさ子は從來の、無口な溫順の女とは、まるッきり變りました、敎師を自宅へ呼んで、種々の學藝を、敎へて貰つて居りましたが、英語は中々上手に成りまして、俗語もすら〳〵と、私よ

りも能く解しました。

▲唯だ餘り大事がられて、出入共に馬車で、何時も夫人と同伴する故に、萬事貴族的になつた樣に見受けましたから、私は米國を去る時、も少しユースフルに爲る樣にと夫人に願つて置きましたら、夫人は早速タイプライターを買ひ入れて、まさ子に稽古をさせ、其後はまさ子のタイプライターで通信されました。又家の内に電信を造らへて、電信技手のお稽古をさせられたのださうです。

▲平生交際上に必要なる行儀作法は能く敎へられ、尙ほ精神敎育は餘程能くせられたと見え、歸朝後、私は隨分嚴しく、女中の仕事までも言ひ付けましたが、少しも厭な顏せずに、臺所の雜巾掛けでも何でもしました、實に善く育つたものでございます。他の姪に、そんな事を命じますと、叱られたのだと思つて、涙ぐむのが有ります、比べて見ると大きな違ひです。

▲悲しい顏をすると男の嫌ふ事や、無駄な買物をせぬ事や、どんなにむづかしい人でも方法に依つて喜ばせる事が出來る事など、色々と人情の秘訣を敎へられた樣子ですが、さう云ふ敎へは、日本には缺けて居る樣です。又如何なる人にも少しも臆せんのです、是等の美點は遺憾無く發揮されますけれども、家に居る時は、左程分かりませんが、少し立派な交際會に出ますと、餘程効驗が見えるのです。

▲フエビアン夫婦は、まさ子の將來をも委かせて呉ぬかと、鳩山に申されましたが、鳩山は好意だけを了して、始めの約束通り、三ケ年有餘で歸らせる事に致しましたから、彼方では大層失望し又殘念がりましたが、併し生活の程度が違ひますから、永く米國に滯任するのはいけないといふ事に同意して、快く歸して下さいました。今日も折々の手紙は勿論、數種の雜誌及び種種の物を、斷えず贈つて下さいますし、又屢々日本品の買物などを依賴してまゐります。

▲日本では私共の外伊藤侯も、松方伯も、澁澤男も、此フエビアン夫婦の優待を受けられましたが「日本にもフエビアンの奥樣のようなのが三人程欲しい」と、

伊藤侯が後で私に申されましたが。親切で、交際が上手で、貴賓に善い方でございます。

▲市俄古を辭しましてから、ナイヤガラの瀑布を見物しバッフローの博覽會に臨み、新約克に參り、何日より何日までウヲルドルフアストリヤ旅館に滯在の旨を書き添へて、諸種の紹介狀を郵送して、華盛頓に到り、大統領及び同夫人に面會し、諸所を見物しフヒラデルヒヤに赴き、此所をも見廻りて、プリモア女子大學に參り校長ミス、トーマスにも面會し、其他ヲスタイア氏からも招待を受け、再びニウヨークに到り、有名なる旅館ウヲルドルフアストリヤに七日間滯在しました其間諸方からの招待狀が澤山到着して居りましたのを或物は電報で斷はり、或物は受けて、極めて多忙に過しました。

▲ニウヘブンのラッド博士宅では、鳩山は講義の間及び二百年祭の式終るまで、總て十六日間滯在しました。此所は學者の事ですから、萬事が甚だ質素でございます、途中なれば夜會服で歩きました、之れは一ッは、場所も自から狹いからで、妾やラッド夫人ばかりで無く、エール大學總長ハッドレー夫人でも、やはり禮服のまゝ馬車に乘らず、御歩行でした。皆樣は腕輪、首飾り、諸種のピン等いづれも、大層高價な物を着けて居られるのですから、夜道などは危險な位に思はれました。

▲ラッド博士の宅では、總て華麗な着物を餘り用ゐません、從つて着替へる事も少いのです。

▲臺所に入用な物品は、夫人自身で買ひに出られました、出る前に、何品何程と一々手帳に控へて置くのです、フエビヤン氏と買物に出たのは、帽子とピン等を求める時だけでございましたが、此所では食物材料の買物に二三度御供を致しました。偖て靑物屋なり、肉屋なりへ行つて、品物を能く見て、之れを何斤屆けて吳よと云へば、車で配達して吳ます。此所で一寸私の注意を引きましたのは、夫人が商人に對して、言葉の丁寧な事です、何所の夫人でも皆其通りですが、歸途洗濯屋にお會ひに成つても、やはり丁寧な挨拶をなさ

るのです、如何してこんなですかと聞けば、米國の風俗として、總てが獨立せる一個の國民なる故、富豪にも、學者にも、曾て其人の世話にならぬ物が、特に貴ばねばならぬ理由が無いから、同等と考へて居るのみならず、人は衣食足りて禮節を知ると申す通り、下等の人程禮義を知らねば、此方より丁寧にして見せるのだと申されました。

▲ラッド氏は料理番と仲働きの二人の下婢ぎりで、外に雇人は有りません、伊藤侯や私共及び夫人の母君等がまゐりましたので、始めて近所の人一人を手傳ひに頼まれましたが、當時夫人は、或時私に、今日は六日間の獻立を仕たと云つて居られました。



ルーズベルト夫人

▲曾つて紐育で、町の方角を尋ねやうと思ひましたが皆急がしく往來して居る人ばかりなので、それを呼び止めて問ふ譯には行きませんから、そこらに居た新聞賣の小僧に尋ねてから禮に銀貨一ッを與へました、米國では必ず左樣せねばならぬのです、それは米國人の急がしい事、從つて賑やかな事は、田舍と聞いたシャトルでも、私共の目には市街は祭禮程に見えます、そんな繁劇な所ですから、一寸物を尋ねられても、それだけの時間を費した報酬として、相當の謝金を受けるのが當然の事と成つて居て、禮金を遣れば巡査でも受けます、其點は日本の巡査の方が正しいです、それから英や佛や獨では未だ銅貨が用ゐられますが、米國

では殆んど用ひられません。次手に申して置きますが米國は國民の權利が尊重されて、凡そ何んでも、大統領に面會し得らるゝ事と見え私の參りました時に、面會を乞ふ人民が澤山ホワイトハウス(大統領の官舍)に見えました。

▲エールの二百年祭は、五日間有りまして、その前から、芝居やベースボールや音樂會等、各種の催しが澤山に有りました。二百年祭には歐洲各國は勿論、印度支那等よりも招請客が參りました、又米國各州に於ける、五百有餘の各大學の校長は、大概招請されたそうです。

▲式の時は學者を最も重んじましたから、私共婦人等は二階でして、學位服を着けた博士だけ、式場に並んで居ました、其中に女も二三人有りました、津田梅子氏の居られたブリモア大學長、ミス、トーマスも、此少數婦人の内の一人でした。房の下つた帽子を頂いて博士服を着けた姿は中々立派な物で、どんな貴婦人でも、其席へ行く事は許されませんから、學問の力と云ふものを、此時深く感じました。式場では大統領が演說され、大學總長は、マッキンレー氏の橫死に遠慮して、式後の夜會を晝の會に直されましたから、ラッド夫人其他の御夫人が、折角新調された夜會服は、着られなく成りました。午後の立食の會には招待狀を出さず、紳士淑女の來客は、皆出席を許されました、ラッド夫人の母君も、此會に列する爲め紐育から來て居られました。

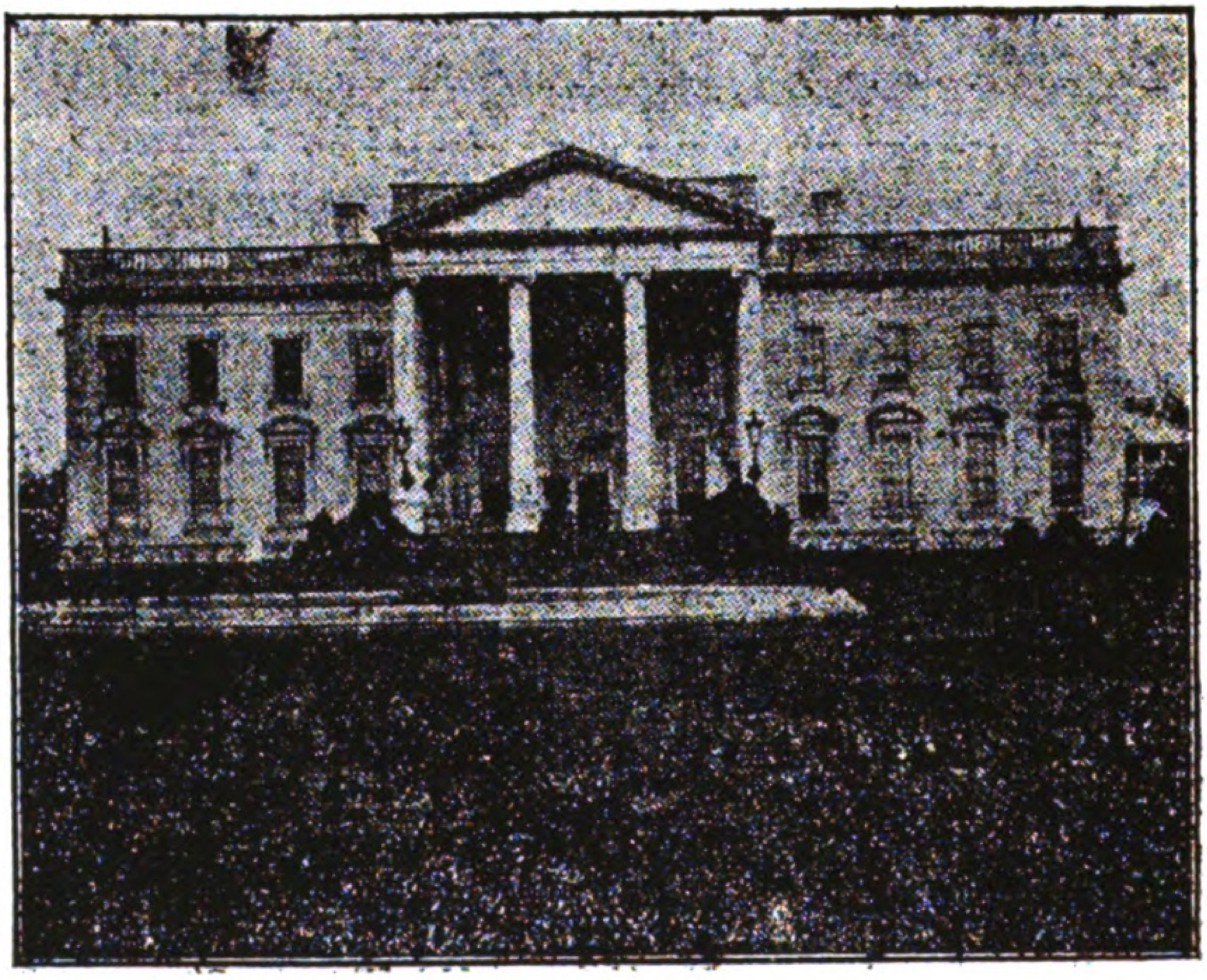
▲當日は大統領及びエール大學總長御夫婦で受けられ食堂は態々新築された、非常に廣大なもので、世界第一の大食堂だと申しました、マッキンレーの事變の爲めに、當日は大統領の握手だけはお斷りに成りました。

▲是より前に私共は華盛頓で大統領にお目にかゝりました故、此立食會に大統領は、能く私を覺えて居られました、そして特に種々言葉をかけられました。後で日本の留學生に、總長夫人が大層私を賞められた相ですが、それは大統領が言葉を特に私にかけられたからでしたらうと存じます。總て、米國の紳士淑女は皆親

切です、ボールドウヰンと申す法科大學長などは實に善い方で、此方の身の上を聞いたら、如何なる人でも淚を零して感せぬ者は有りません。

▲私は東京を出發する前、洗禮を受けて行つたら善からうと勸告を受けましたけれども、諸所に招請されても、話は決して宗敎の事に及びませんでした、それは紳士淑女たるものは、禮として對手が返答に困る樣な事は決して話さんからです、從つて何所へ行ても、十二分の愉快を得て、歸るのでございました。

▲總て米國人は、中以下の者は比較的物事にぞんざいですが、上流社會は甚だ穩かで、談話の上に深い注意をなします、伊藤侯が『英國の中等社會と米國の上等社會とは能く似て居て、眞に善良なる紳士淑女が多い』と云はれましたが、英の上流社會は、放逸に流れて贅澤に失する者が多く、米國の上流は、一代で造つた財産家までにも、此美德が有るのは敬服の至りです。



米國大統領官邸ホワイトハウス

▲晝は餘り華麗な物を着ません午過ぎのテー(茶の會)の集りに一寸着替へるばかりです。

▲ラッド氏の宅に、十六日間滯在しましたが、此間は少しも窮屈、又は不愉快な思ひは致しませんし、手持無沙汰を感じた事も有りませんでした。ラッド夫人は私の爲めに茶の會を催し七十人ばかりの婦人を集められました。ラッド夫人は中々行届いた方で別れる時にはお互に泣きました。

▲プルークンで鳩山が演說を致した時は、辯護士ブットマンと申す富豪の家に、一泊致しましたが、此家は泊り客に宛つる寢室が三つも有つて、甚だ立派でした未だ其時は獨身でしたが、澤山の書籍や、各國の新聞雜誌が、順序正しく整頓して居るには、感心しました器具の飾り附け其他にも秩序が有つて、彼樣な規則正しく揃つた家も珍もしいと思ひました。其後御結婚の披露が手紙で參りましたが、昨今も矢張彼の樣に規則正しくされて居るかと、時々思ひ出します。

▲紐育では世界第一と評判される、ウヲルドルフアストリヤ旅館に泊りましたが、此所は遊步塲、音樂堂又は劇塲其他萬事萬端揃つて居ます、善い室に成りますと、食事の外に、一日三百弗もかゝるとの事です、又此家だけで使ふ電燈の分量は、東京市中の消費高よりも多い相です此所の食堂には、各國の紳士淑女が集つて居て、晩餐後音樂が有つたりするのですから、毎晩天長節の夜會よりも賑やかです、故に此所で知り合つて結婚する人は少く無いさうです、全體が非常に立派な物で、見物する價値は充分です。

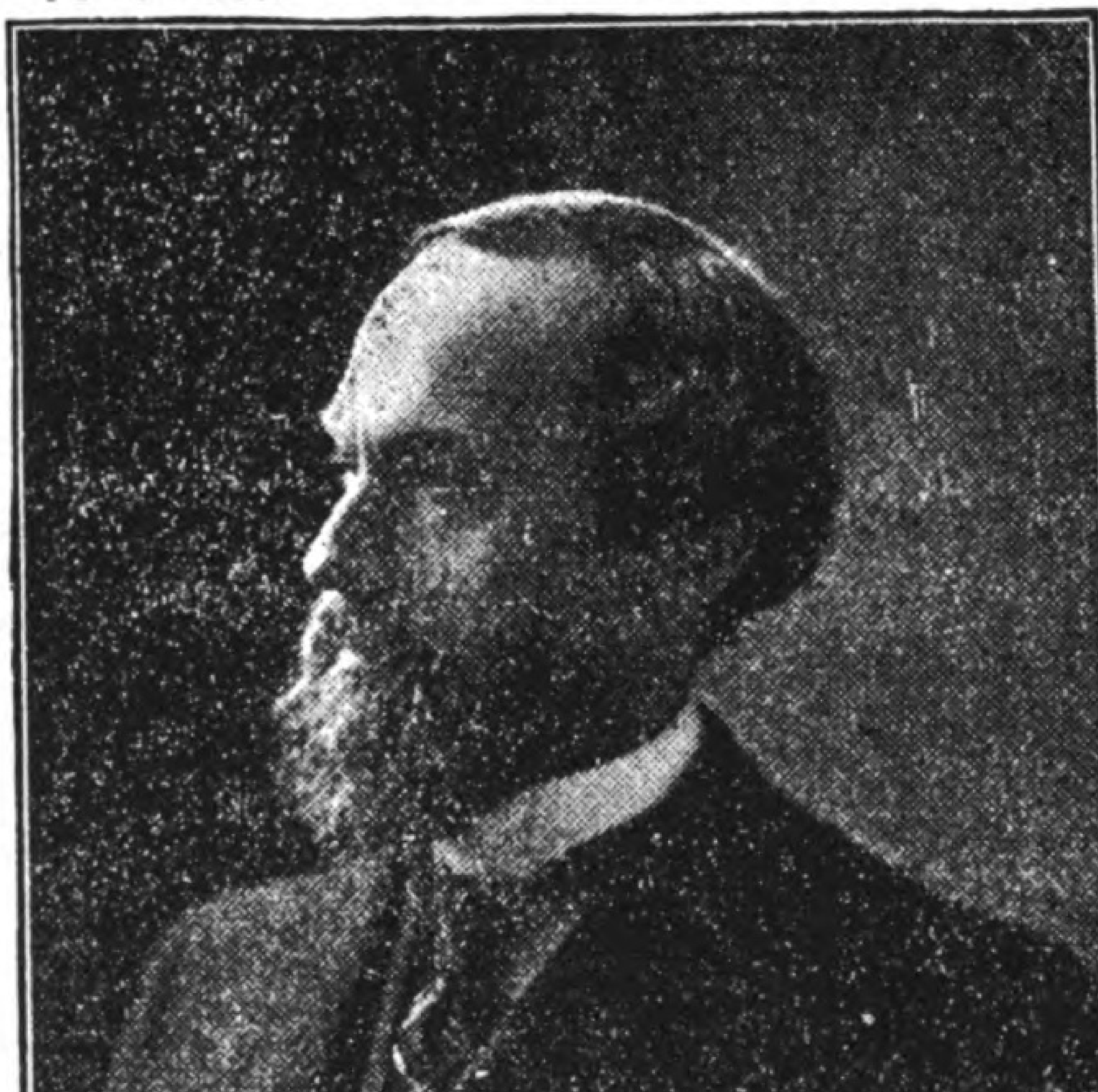
▲華盛頓の書籍館はヤングレスライブラリーと申して非常に立派な建築物で、國民は誰でも行かれます、其壯麗な事は、大統領の家屋などはとても及びません。國會議員には上院下院とも、更に美しい特別室が出來て居て、其邊に飾つて有る彫刻物は、實に見事な物ばかりで、是程立派な圖書館は世界に二つとは無いさうです、獨逸の書籍館などは比べ物にはなりません。

▲現今韓國外交顧問のスケープンス氏の紹介で、大藏省其他を參觀し、金塊が山の如く積まれた室も見ました、此所も隨分立派な建築物ですけれども到底圖書館には及びません。

▲特に立派だと思ひましたのは、種類は異りますが、之れと佛國のベルサイユの宮殿です、ベルサイユは昔の建築ですが、結構其極に達し、見る物として驚嘆せぬは有りません、歷代の帝王、皇后の居室から、總て歷史的の美術品を以つて滿されて居ます、殊に繪畫の精を集めて有る事は、世界に無類だそうです、天井が

唯だ一枚の油繪で出來てるのも有り、あらゆる名畫大作を網羅してあります、ルーブルの宮殿も立派ですが其廣大な事は遙にそれに優つて居ります、私の行つた時美術家がそれを摸寫して居りましたが、日本からも少し人を派つて、寫さして貰つたら善からうと、噂しました、其他庭の噴水に至るまで、實に漠大なる入費を以つて保存されて居ます日本では日光見ずに結構云ふなと申しますが、世界第一と呼ばれる此宮殿の百分一にも當りませうか、如何ですか。

▲米國の風俗は『國民』を貴びます故、書籍館の如き公共的の建物を立派に作つてあります、其に引代へ、佛國往事の有様は民の膏血を絞りて、斯様に朝廷が奢りを極めたから、自然と革命が起つたのでせう、米國では大統領より其他閣員等の俸料は大會社員等の物と比すれば、殆んど名譽職の如き觀が有ります、今日の米國と昨日の佛國とを對照して見ると、餘程興味が有ると思ひます。



エール大學總長ハツドレー氏

▲私共はニウヨークのメーデアザリンスキーと申す、親切な紳士より、紹介狀を貰ふて英國に渡りましたがキユナード會社のエトルリアと言つて、非常に大きな立派な船に乗りました、一體太西洋は浪が荒いので、一船の内でも、割合に醉はぬ室は、室賃が甚だ高いのでしたが、船に行つて先づ應接間に居ますと、此内に鳩山が居られますかと、事務員が呼んで來まして、此室を會社から差上げますと

案内されたのは、船の中央の一番善い、四百弗位な室です、何故呉たのか、今に不思議に思つて居ますが、多分鳩山がエール大學で名譽の學位を貰ふたからと解釋しました。此時一緒だつた都筑さんは、此室を見て驚かれましたが、其筈です、都筑さんのは餘程奮發されたのが、私共の半分の大さも有りませんでした。

▲船中へは、何時の間にか、エール大學やコロンビヤ大學の學友の方々から、見事な果物の籠や、花や、キヤンデーが澤山屆いて居りましたには驚きました。

▲船中でも毎朝寢室に上等の果物を持つて來ますから友人より贈られた物は、船中の氷室に預け置いて、ロンドンのホテルへ持て行きましたが、獨佛等の各國を見物して、歸つて來ても、未だ有りましたから、それを友人等に御馳走し、尚ほ殘たのを、晩餐に招請された家の小供に上げました。米國の果物とキヤンデーは有名な物で、ロンドンでは大層珍重しますから、皆大喜びでした。

▲倫敦では、メーヂヤザヲンスキーの紹介して呉たアツクランド一家に於て厚遇を受けました、四人のお兄弟の内、辯護士の方には特に御世話に成りました、此方の父君は朝廷に出入した名士で、相當の舊家です、そして四人共財産家でした。私共は末の弟の方に紹介されたのでしたが、皆樣と懇意に成り、中にも、總領の辯護士の方とはしば〳〵往復しました、これは末の方は旅行の約束が有つた故、他の兄君に私共を依賴されたからで有ります。

▲アツクランド夫人は、或時有力なる婦人會の會長に紹介せんとて、同會の倶樂部に茶に御招き下さいましたが、(此會は丁度倶樂部の樣に成つて居て會員は何時でも行つて食事が出來る樣に便利に成つて居るそうです)私共は生憎他に招かれて居ましたから、出席する事が出來ませんでした。

▲アツクランド氏に、日本へ御來遊になりませんかと云ひましたら、私は參られませんが、友達を紹介しましたら、何分賴むと申されました。私共が歸朝して一年ばかり立ちました時分、ラムシーと云ふ若い紳士を

紹介してよこされました。此方は大學卒業後、世界漫遊に出掛た途中なので、將來國會議員に成るお積りだと申されました。此方の話にアックランド夫人は田舎に立派な田園を有ち其所で動物を馴すのが大層お上手だといふことです。

▲加藤高明さんから、國會議長と今一人マダムプンセンと申す日本贔負の方に紹介して貰ひました國會議長は旅行中で其弟の君から招待を受けましたが、暇が無くて御斷りをしました、マダムプンセンの所には晝食に招かれました。



ハッドレー夫人

▲倫敦の劇場ドルリレインで(玉座有り)ミリヨ子ヤと云ふ、大層面白い芝居を見ました、夜の興行ですから着物は勿論禮服でした、近來は帽子を被らんのが流行です、ミリヨ子ヤは結局『世の中は金ばかりでは不可能』即ちオールマイチイダラーの間違なる事を示した物です、誠に興味深く覺えました。今一つはプリンス、ウエールスの午後興行の劇場に招かれました、サカレーのベキシャープを致しましたが、軍人や貴族帝王までが、美女には馬鹿にされる加減を巧みに寫しました物で、何れも至極面白う御座いました。幕間にはオーケストラが有りますから、是又甚だ愉快で、休む間が有りませんから、短い時間でも永く樂まれます。

▲米國でも兩度、市俄古と紐育で芝居を見ましたが歌が澤山で舞つたり歌つたり、賑やかに派手で有りましたが、倫敦の方が興味多く感じました。

音樂會



▲獨佛の兩國では言葉が分らないものですから多く諸々所を見物し夜分には色々目を樂ませる場所へ連れて行つて貰ひました、特に巴里では、絹商の井上と申す人に大變世話に成りました。伯林では井上公使御夫婦及び鍋島桂次郎さん御夫婦が親切に色々の物を見せて下さいました、ポッダムの宮殿へも參りましたが、ヴェルサイユとは其規摸の小なる事餘程の差で有ります。

ベルリンよりブラッセルを經て、再び倫敦へ歸へり、郵船會社の備後丸で英國を辭して、地中海蘇士、印度洋を過ぎ、其間ポートセッド、コロンボ、新嘉坡に立ち寄り、新嘉坡で久水領事の御馳走になり、香港では三井支店に歡待されましたが、此船の事務長は、講談が上手でして、ホンコンでは備後丸が着港すると會を催し、毎度同氏を招いて講談を聞きますそうです、私共の參りし時も、此會の催しが有つて、晩餐後此席に臨みました。

▲大阪の博覽會の時も、漫遊中世話になつた方々から澤山に、各國の紳士淑女を紹介され、小石川の後樂園を拜借して、接待しました。

▲エールの總長ハッドレー氏より四人と、メージャザリンスキー氏より三人と、七人一緒に有つた時は都合が宜うございましたが、一人一人に來られるのは、其度毎に中々の手數で、西洋の方の樣に手輕く上手に參りません、日常生活の習慣が違ひますから據所有りません。

▲フェビアンからも、三度紹介してよこしました。何れも一方ならず世話に成つた方です、紹介されて來た人に盡す親切は、紹介した人同樣にせねばならぬのが禮です、日本人はよく紹介して呉れと、無造作に申されますが、接客の容易ならぬ事を思へば、輕々しく紹介するものでは有りません。

▲最早大方返禮も濟んだ樣ですが、それにつけても私共漫遊中は、至る所で過分な優遇を受け、非常に愉快で有つた事は、永く忘れられません(文責記者に有り)

桑港交際社會記臆談

柳谷千代子夫人談

白萩女史手記

千代子夫人は明治十四五年頃、良人と共に米國桑港に在つて、彼地交際社會に信用を得、歸朝後我國婦人社會に貢獻する所多く、近來赤十字社篤志看護婦の幹事、愛國婦人會の評議員として盡力され、米客の歸着するところ、自ら缺く可らざる世話人と認められて居られます。

▲婦人會の衣服

京都の愛國婦人會員は、全然黑木綿の紋付に揃へて居りますが、東京では未だ其樣いふ次第に參りません。晴着の古いのを順々に下して着て居る者は、わざ〳〵綿服を拵へるのも億劫なものです。黑木綿の紋付でも馬鹿になりませんもので、三枚重ね（尤も裏は絹に致さなければゴワ〳〵して着られませんから）ますと十一二圓掛ります。袷には裾の綿を拔いて間に合せますが、單衣は是非別に要りますし、チヨイト厄介で御座います。帶だけ漸く揃ひましたが、これは木綿地へ日の丸聯隊旗と愛國婦人會の徽章なぞを紋散らしに致したもので、代價は一圓八十錢ほどで御座います。赤十字の看護服は、地質を上下に分けて、適宜に作ることに致してあり、上の方で一揃が三十圓程、下の方で二十圓程だつたと存じます。此服も働きには至極便利ですが、人力車へでも乘らなければ、何ですか可笑しくつて、多勢で步く時は宜しう御座いますが、獨りで步くと氣耻しいやうで可けません。此度は皆樣が心を揃へて、善く御出席になりまして、御途中も大抵步行でしたから、『私は裾直しをして三日着ますと最早切れました』なんて仰しやる方がある位です。私なぞ此烈しく切れる裾を一々取更へては手數だから、切れた處だけ短かい布をクッ付けて置きますと、一番便利で御座います。衣服と申す物も面倒なもので、一頃衣服改良說が盛であつた折、皆さんと袴を拵へて見ましたが、私なぞが着けますと、何ですか教育のない學校の先生とでも云ふ風だと存じて、拵へて置きながら、一度も穿いた事はありません。

▲米國の交際服

私が米國へ參つて居たのは、舊い御話しで御役にはたちません。イエもう學問は無し、言葉は出來ませんし、渡米の當時は實に困り切りまして、言葉を知らずに外國へ行くものでは無いと、若い方に申し送つた位でありました。それですから、成るべく交際社會には出ぬ積りで居りましたが、無理に引張り出されますので、據ろ無く少しづゝ出るやうに爲つたのです。交際

に就て一番氣の揉めるものは衣服で御坐いませう。日本のやうに昔物を拵へ直して間に合せて置く譯に參りませんで、廢つた物を着て出ることは、何樣しても我慢出來ませんし、同じ着物を方々の家へ着て行くのも間が惡いので御坐います。ソコで私共ぐらゐな身分の者は、衣服費に追はれて耐りませんから、成るべく米國の布地を用はずに日本の物で間に合せました。尤も大きい夜會の際なぞの衣服は米國の物でなければ可けませんが、晩餐なぞに招かれる際には、却て日本の布地の方が珍らしいと言つて褒められました。丁度明治十四年頃でしたが、私は葡萄色の地へ模樣のある綿繻珍を日本から取り寄せて作りましたが、丸帶一本だけが六圓で、これが二本振とアトの不足の布は米國の物を少し加へたのです。ヌルト皆んなが大層權衡が可いと申して褒めました。それから私は絽の總模樣の布を持つて居りましたので、裾掛に作りました處、これも大當りでしたが、佛蘭西人の知己が餘り褒めますから、出立の折、上げて參つたのです。黑服は光澤なしと光澤のあるのと二種ありまして、光澤なしは喪服に用ゐますが、未亡人は始終こればかり着て居ります。私は彼地へ參つた當坐日本服を着て見ましたが、絨氈で裾がいたんで堪りませんでした。洋服を着慣れますと、いたむ心配が少く、却て日本服より世話なしで、朝ちやんと身拵へさへ致して居れば、何時外出致さうと其儘で出來ますし、且彼地では午前に不意の來客があると云ふ樣な氣遣ひが無いので、至極暢氣で御坐います。

▲髮

米國の髮結賃は非常に高う御坐いますから、富豪の令孃なぞの他は大抵自身で結びます。但だ大きな夜會の折には、髮結の手に掛けませんと、流行形に出來ませんから……。ハイ其頃一度が三弗でしたが、一晩の會で直ぐ毀れて了ひますので、實に勿體ない樣でした。前髮の縮らし工合なぞ種々な流行がありまして、髱も始終流行り廢りがあるので御坐います。

▲遊　戲

米國の婦人は、老人でも善く踊りますので、私にも

踊れ〳〵と勸めましたが、慣れぬ間はキマリが惡くて出來ませんでした。チヨット婦人同志寄り合ひますと、直ぐ何かして遊び、其遊び方が又上手ですから面白う御座います。今日は午後から私の家へ來てお暮しなさいと招かれる事があるので、編物とか繕ひ物とか持つて出掛ける、先方でも亦斯樣な仕事を致しながら、談話をつゞけるのです。婦人同志の談話は何國も同じやうですが、只だ奧底なく打ち明けて何でも話し合ふので心易う御座います。私は僅か四年ほど交際したばかりですが、出立の際は、皆んなに泣き立てられて名殘りが惜しまれました。併し米國婦人の惡いのになると、日本婦人の惡いのどころぢやありません。如何して却却な者で、交際社會でこれを擯斥致すことも嚴しう御座いますので、ウツカリ斯樣な惡婦人と交際して居ると、其者まで擯斥されると云ふ風であります。

▲進物

米國では我國のやうに訪問する毎に品物を遣つたり貰つたりする事は決して御座いません。唯だクリスマスとか、結婚の紀念日とかに贈物をするのです。結婚の紀念は五年目、十年目と云ふ順序で、追々と贈物を鄭重にするので、最初の五年目は紙の贈物即ち紙製の花だの舟だの種々珍らしい物です。次の十年目は木の贈物即ち木製の珍らしい物です。それから二十五年目の銀婚式になると、匙などの銀製品を贈るのですが、銀婚式や金婚式になると、贈物御無用と招待狀に書くのが例になつて居ります。

▲男女の交際と結婚

若い娘は監督者が附いて若い男子と交際致すのですが、彼の男子と彼の婦人とは屹度約束をするのだらうと云ふとは、大抵交際振りで判りますので、よく皆で噂を致すのです。併し婦人が確乎として居ますから、結婚前の過失は滅多にありませんし、餘り人が疑はぬのです、總て男女の間柄に就ては、我國のやうに酷く疑はない樣です。其代り結婚の約束を破られたとなれば、女子の迷惑一通りでなく、他の結婚の口も遠くなつて氣の毒なものです、結婚を申し込まれるのは、

夜會へ屢々出る女子に多いので、昔は善い身分でも今は零落して居ると云ふ様な家の令嬢なぞは、何様も口が遠いのです。米國の縁談は財産との關係が随分あると見えます。



△婦人會の勢力

米國で私の時々出席しました某婦人會は、豪い婦人ばかり寄り集まつて、男女同權を主張し婦人に選擧權を與へよと云ふやうな議論を唱へて居りました。私が此會へ參りましたのは、衛生上の談話を聴く爲めでしたが、月經の時は何様な靴を穿いては悪いなぞと云ふ

細かい注意を善く演べる婦人があつて、大層裨益を得ました。米國の婦人は男子の無理な命令に屈從しませんから、日本人の妻となつては、英國や獨逸の婦人のやうに永續せぬ樣です。併し無論永續する婦人も多いのです。

▲下女

米國の家庭に於て下女を多く使ひませんのは、皆樣が善く御承知ですが、用事の規定が整然として居りまして、應接日にさへ客受の仕度を致して居れば間の日にキマリなく來客のあると云ふ事は無し、縱令極懇意の間柄で來ることがあつても、料理などを出すに及ばず、出した所で御茶ぐらゐが關の山ですから、手數が懸りません。第一、我國の人のやうに不規則に食事を致すこと無く、皆一緒に同時刻に食事が濟みますから、臺所の用事も少う御座います。夜分主人が他出しても、家の者が何時までも待つて居るとは無いので、入口の鍵を各自に持つて出まして、戻れば自分で開けて入りますから、世話はありません。日曜などには家内中出掛けて、空明の家が方々にありますけれども、各自に鍵を持つて居ますから、毫も不都合は無いのです。私共では我國から下女を拉れて參りましたが、彼地の事情を知る爲に米國人の下女をも雇ひました。此下女は却々立派な者で、金時計を所持して居ました。下女で金時計を有つて居るのは不思議の樣ですが、此女なぞは、始終下女を職業として方々へ勤めるので、月給も高く、宅では四十弗を拂つて居ました、我國のやうな主從の關係とは異つて、月給取りだと云ふ强い意氣込あり、夜分と日曜は、主人の用事に關係せぬのが習はしで威張つたもので御座います。其代り實に能く働きまして我國の下女の三層倍も仕事を致し、朝から晩まで休むことは無いくらゐです。さて此善く働き善く休むと云ふ良習慣も、總ての組織が整はなければ出來ない事で、日本へ歸れば、矢張り二三名の下女を雇ふやうになります。

▲内に儉約、外に豪華

交際社會へ出て居る時には、何樣に贅澤な生活向の

婦人かと想はるゝ者でも、家では質素な生活をして居るので、針など持つたとは無いだらうと想はるゝ婦人も、家では始終裁縫を致して居ります。儉約と申しても、食物には充分滋養品を擇びますし、交際には綺羅を飾りますし、何様いふ點が日本の婦人より儉約なのかと申すと、萬事規律が正しくて、臺所に無益の炭火を費さず、時間をも無駄に費しませんから、下女の頭數も省け、食料も少くて濟む次第なのでせう。公使になれる資格の或家では、唯だ娒媽とボーイと二人だけ使つて居りましたが、始終交際に忙しい細君に何様して家事が出來るかと疑はるゝ程でした。併し是れは不思議でないのです、家の掃除は一週間に一度づゝ廻つて來る者に賴み、洗濯は赤子の襁褓まで洗ひに來る支那人に賴んで居りました、支那人は賃金が廉いので、何處でも善く支那人を賴みます。洗濯は一週一回月曜日に致すので、肌着や赤子の衣服は一週間分七枚づゝ有つて居るのです。

今回渡來せるアリス孃は本年二十一歳なり孃にかゝる趣味ある逸事は世人の既に知る處ろなるが茲に一部を摘記せんに孃の美はしき名一たび歐洲に傳へらるゝや獨逸皇帝は其の快艇の命名を彼の女に請ひ彼の女は世界に類ゐ稀なる美くしきカイザル遊船の名主となれりと、父なる大統領は曾てアリス孃を許して曰く「娘は野生かと思はるゝ程に室内を好まず戸外にある事のみを好む婦人なり」云々と孃は馬を御するの術に長ずれば外出は必ず鞍上に於てするかと見れば又能く自轉車を驅る、のみならず銃獵、ロンテニス、ゴルフ、氷滑り等の如きは其の最も能くする妙技にして彼の熟練せる技倆と輕快なる動作とは常に斯道の專門家を驚倒せしむるに足り、現今米國に於ける妙齡の婦人中最も缺點の鮮き淑女の一人なりと、又米國の某雜誌記者は孃の交際につき精密なる統計を作りたり、即ち今度漫遊前十五ヶ月の統計によれば、晩餐會に出席せしこと四百〇三回、舞踏會に臨みしと三百餘回、假裝會に出しこと三百五十餘回、茶話會に出しと六百八十回、人を訪問せしと千七百餘回、花嫁付の女役を勤めしこと六回、握手せしこと三萬二千回以上に及びたりと。

廣寒殿裏の舞姫

西洋諸國中尤も社交に重きを置くは米國に若くはなし、特に米國は男女の交際に至つては尤も自由放任の習慣にして殆んど何等の制限もなきが如く、世界各國人の等しく驚異する處ろなり、米國の靑年男女は相互に手を把りて郊外を緩歩し、或は共に輕車を驅り、或は肥馬に鞭うち、又種々なる集會に同行するは夙に人の知る處ろなり、而のみならず女子は幼老の別なく勝手に男子と書面を交はし、又自由に互に訪問し、第三者を介する事なくして男子を其室内に招じて欵待するなど極めて放膽的なり、されど習慣の然らしむる處ろにや、又各自智德の發達せし故にや、決して間違のありし例を聞かざるなり、勿論米國に於ても東海岸地方の都會に於ては斯る事を正當なる行爲とは思はざるがごとし近來紐育地方にては少しく英國流となりて夜間は勿論晝間にても少しく身分ある家の女子は決して單獨に行くことなく特に舞踏會に臨む時の如きは必らず陪從者を伴ふの正規に準ずるに至れりとか、米國の社會學者にして某大學の教授たるミツセス、スミス女史は米國西海岸地方の女子が近來あまりに活潑に過ぎて、男子を凌ぐの風あるより大に之を攻擊し、米國女子は將來少しく東洋諸國の婦女子の如く優婉、謙遜の態度を學ぶべしといへりしとか。

开は兎もあれ、米國婦女子の社交上に橫行濶歩するの狀は恰も東洋諸國の藝妓の如き有樣なり、即ち人を娛ましめ、人を喜ばせ、人の機嫌を取る事の巧妙なる、又諸種の音樂をよくし、舞踏に堪能にして、遊戲に熟達せる恰も日本藝妓の粹を集めたるがごとしとの評あり、交際場裏の女王と呼ばれ、花形と稱へらるゝ令孃若しくは夫人は女俳優と殊なる處なきがごとし、彼等は其粧飾に數時間を費やし、研きあげたる花の顏は、月をも欺き、粧ひ成せる霓の衣は天人の天下りしかと疑がはる、豐頰紅を點じて嬌靨百媚を生じ、一笑すれば國を傾くるの態あり、素白淡紅、燦々として珠玉をちりばめ、羽衣長裳、觸らば散らんの風情あり、この美人にして而かも嬌舌は鶯の如きあり、麗々朗々たる妙音を彈じ、翩々躚々として踏舞の場に登るに至つては眞に是れ、廣寒殿上の美姫なり。

（米國交際社會の婦人が歩行する時は常にスカーツ（長裳）を揭げ持ち、又常に唱歌を口吟みつゝあるが如き日本藝妓に類する處多し）

むかしばなし

交際料理

寛政老人

昔時の諸侯方が御交際の折設けられた御料理は、今日から見ると頗る異つたものでありました。まづ順序として御乗出しのお料理を申上ませう。

御乗出といふのは諸侯の御家督の事で、諸家共に是れが一番の大禮としてありました。何と申しても大名が家督をするといふ事はお家の本領が安堵した譯でありますから、至極御芽出度い事で、其儀式は其れ〴〵家柄に相應して随分華奢にしたもので、随つて御料理も中々鄭重なものでありました。

斯る次第であるから御料理方は十日前に献立書を作ッて差出すと、それを御乗出になる御座敷から御客方へ廻し、此の内に御禁食の品がござれば差替を致しますと申入れるのである、別段そういふ品はないといふ事になれば、(當日招請する客は、同席にて隣二人向ふ側三軒といふ席順なり。)それで、御料理が定まるのである、若し又當日になッて、献立書にある魚がないといふ事になれば又取替へねばならない、斯うしていよいよ料理が定まれば當日の御客様は大抵朝の四ッ時御乗込みといふ事になる、朝の四つといへば丁度今の午前十時頃で御揃ひの刻限に少しも間違はなくキチンと來られる、決して今日のやうに遅刻してお客様の顔が揃はぬなどゝいふ様な事はない、寧ろ西洋風の時間厲行でありました。

扨て當日の御客様は麻上下着用で、まづ主人公との式の盃事が濟めば、直さま本膳が出る、夫が丁度四ッ半時即ち今の十一時頃であらう、いづれ二十五菜とか何とかいふ立派な献立です、口取は硯蓋、肴は鉢へ盛つて出し、御賴みによッて坐つた表坊主がそれを御小皿に取ッて差しあげる、いく度でも御代りをするのであるから、十人の御客をする時には二十人前も三十人前も御肴の用意がしてある、中々今日などゝは違ッたものである。

此時主人公のもてなしとして御自身臺引を取ッて御

客へ出すのが禮でありますヽ臺引といふのは御存じの通り別に盛つた蒲鉾の樣なもので、それを一ツづゝお平の蓋へ取ッて出すのです、そして御飯が濟み、これから御湯といふ時は御中酒といふものが出る、これは中皿肴で二品ばかり取り揃へ、御酒も三獻ぐらひで仕舞ふのである、御湯はそれが濟んでから重役が風味をして侑め、全く御飯が濟んだ後ち、本膳を引き濃茶菓子に濃茶、其次に薄茶菓子に、薄茶が出て一段落がつく、此時御客は𧘕𧘔を脫いで服紗袴になッて御庭を散步するのである。

それから又別席に席畫がある、これは狩野とか住吉とかいふ、上繪師が參ッて揮毫するので、此時は椀菓子に銘酒が出る、それを飲りながら畫を御覽になるといふ趣向で、それが濟んで出るのが、服紗料理といふものであります。

服紗料理とは即ち略式の料理といふ意である、今日市中の料理屋でやる料理に聊か其俤が見える、けれども料理店の料理は其の實茶會席と服紗との間の子であるから、料理人の方では半會席と名づけてある、まづその料理の珍しそうなもの二つ三つ申しあげると、刺身と洗ひである、刺身は隨分古いもので、打身、膾煎、などゝいふのは、其祖先らしく、隨分祭典などにも用ゐてをりますが、洗ひの方は德川時代から行はれたもので切方は今の料理屋のやる樣に厚くはなく、極くうすく、切ッて冷水で洗ふのであるから、ちりちりとよく縮れて誠に體裁がよろしい。

又鯉の生づくりは今あまりやるものがない樣であるが、これは鯉の活きたのを取ッて鱗の所を薄く剝がし其下の肉を腹へさはらぬ樣にそつと卸ろしてそれを洗ひにし、再び鯉の上に盛つて前に剝がした鱗の皮で蓋ふて生きた儘の形にして出すのである、元々腹にさわりがないから鯉は活きたまゝで口をパク〳〵やつたり尾を動かしたりする處が御馳走です、けれど強く尾ではたかれては肉を飛ばし、皿を碎く恐れがあるから前以て尾の所へブツリと一刀を加へて置くので中々面白い趣向の料理で、まア是等が日本料理の珍でありませ

う。

次には大平ですが、それも今では繪で見る位なもので、とても實地にやる家はない、中へ入れる品は鳥や魚の肉で、芹、蒟蒻、慈姑のやうなものをあしらひ、それを木の皿へ取り分けてすゝめるのである、尤も大平の方は今日の御方に合點が行くけれども鍋燒に至つては殆ど御存じの方はあるまいと思はれる、その鍋燒と申すのは銅の小判形のもので長さは二尺ばかりもあり、黒塗の箱へのせて出すので、中へ入るものは大平と似たものである、これは重に大名方の好まれたもので、幾たびでもお代りをして上げる、鯛麺なども此類である。

さて服紗を召上つて仕舞ふと、蕎麥とか、汁粉とかいふものを出すのである。そして御歸りが夕七ッ時今の四時頃ですが尤も御持ち歸りのお土產は御燒物丈ですが、其御料理の立派な事、それは中々大したものでありました。

右の料理獻立は大名といつても寧ろ五六萬石の小大名の格式である、若し夫れ三四十萬石國持大名の大諸侯といふ格になると一層立派なもので、お臺所の餘り品で以て一ッ膳の御客賄ひが出來る位である。そこで其の費用を調べて見ると當時の金で御一人前十兩であるから、今の相場に積ッて見ると一寸四五拾圓の料理となる、實に非常な入費であるが、併し今日外務大臣の夜會とか、何とかいふ事になると大勢の客を招いて矢張一人前十圓以上になる。若し一歩海外へ乘り出して倫敦、新約克の西洋の交際社會で人並の御馳走をしやうといふ日になると一人前百圓以上かゝるのであるから、左程驚ろくにも當らぬ事であるけれども、德川幕府の昔しに當ッて斯る盛饌の獻立が出來てあつたと聞くと、一寸耳新らしく感せられるのである。

○むかしは、現今と料理の式が違ひ口取の如きは硯蓋に盛りて二十人前位を盛つて置く、又肴も其の通り、客が食へば更に其品を取足て置く總て潤澤の方なり。

○土產として持ち歸る品は菓子と燒物にて燒物は奉書紙に包み差し出せば先箱に入れて持歸るなり。

古代英國貴族の生活

中世の頃英國貴族の生活の如何なりしかの一斑は、其朝餐の食卓日記に依つて大要を知る事を得即ち左に彼等毎朝太陽と共に床を離れ面を洗ひたる後、服裝を整へて神に祈禱し畢れば、侍從は白き手拭と共に大きな形の菓子と葡萄酒を運び來り、嚴かなる句調にて『閣下は今直に朝餐を調めらるべし、早朝に食事をなし給ふは身體の健康に缺くべからざることにて候』と。

かくの如き慣行的の儀式に朝餐を了るものとす、此時代には凡て質素を尊び、食物、酒類共に淡白なるを擇び、食卓の上に列せらるゝ御馳走は成るべく贅澤を避け、料理の品數も二三皿に過ぎず、其品質を記したるものを見るに、誠に質素粗末なるものにて、今日下等勞働者の食と撰ぶ處ろなきがごとし。

『わが主公は毎朝七時に食卓に向はれ、其料理の品目は麥酒と葡萄酒一クワート、鹽肴の二斤、六尾の赤鯡と四尾の白鯡、炙たる牛肉と羊肉の皿とよりなる』と。

往昔貴族の食卓に登りたる朝飯の御馳走の主なるものは、牛肉、猪肉、鯡、靑魚類なりしことは右の記錄にて識ることを得、此時代の貴族は今日とは異なりて、讀むに書簡なく、新聞なく、獵服に長靴を穿ちて野獸の追蹤に其日を送り、今日の農夫の食事の多く、麥酒を暴飮し、麵麭や獸肉の塊を不作法に快よく喰ひ盡くし、再び馬に跨がりて森林を驅け廻り、今日の如く香氣ある珈琲の美味を知らず、茶の如きも未だ支那より輸入せられず、されば茶の初めて英國に輸入せられて、ヲツクフオルドに於ける初めて催されたる喫茶珈琲の例は、今も尙ほ珍しき紀念として殘るなり、右の如き中世紀の野蠻なる習慣は、近世に至りて漸次に改善せられ、粗野にして武士的の食卓の獻立は、今は組織的に、衞生的に、文明的の料理を用ふるに至れり、戰國時代加藤淸正の食事の掟を思ひ合せてよき對照をなせり。

交際術



交際秘訣

水原翠香

女は言を慎で多くすべからずと女大學に敎たれど今は然らず、言を撰みて克饒舌、話上手なるをよしとす、此饒舌に付て大に心得あり、決して知人の品行上の事をいふべからず、又人事ならずとも當り障りになる事は愼でいふべからず、是言を撰む也、只願に言を少くし必用の外をいはぬ方は、無言なる事彼常陸宮の姫君然と默てさへ居ればよきなれば、誰にても易き業なれど、言を撰びて克饒舌は頗る修業を要す、平日心掛て老若男女それ〴〵の相手相應に、談話すべき話の材料を多く胸中に貯へ置かざれば、其塲に臨で言浮かばず、ツイよしなき人の影言をいひ度くなりて、其が爲に平地に風波を發し、紛紜の末親密なりし中も、相疾視するに及ぶ、故に女子は言寡かれと敎たるなれど、今は寡默にては立ゆかれぬ世と成たるを奈何せん女子なりとて年に一兩度は旅行をもし、世間廣く何事にも注意して見聞すれば、談話の材料次第に得らるべし、當り障りなきは諸國の風景及び風俗、方言等も興あるべく、花、紅葉の品評、讀書家ならば歴史の話、俗人には演劇、特に喜劇は罪なくて興あり、女兒には學校の話、音樂の事、老人ならば宗敎の信心話、何でも角でも、よしや聞はつり成とも、捨つる事なく、貯

へおけば相手のいふ處に調子を合せて、請け答へ出來る也、但しよくも知らぬ事を知り顔にいふべからず、意外の恥をかく事あり、要は唯相手を倦しめず、面白をかしく折々諧謔をも交へて、人を笑はせる能辯あるを話上手とす（卑猥なる言は必ずいふ勿れ人格をおとす）あの人が來れば座が賑やかに成て面白しといはるゝ事、交際術の一也。

お喋舌にも心得あり、自己獨り得意に成て喋々する勿れ、口に喋舌も心は常に八方へ配りて、人の氣息を窺ふに怠らず、一人にても厭はし氣なる色を見ば、早く止めて他事に轉ずべし。

▲人望を得る心得

人愛相をよくして誰にでも寄附よく、物のいひ易き様にし、初對面の人にも一見舊知の如く、誰彼の分隔なく城府を設けず、快く話すべし、衣體の惡き人、以前よかりし人の零落したるなど、殊更に愛相よく應接すべし、此方には何とも思はざるも、侮ると思ひ僻むる事多き物なれば也、我身に勢力ありともツンと澄し込むべからず、人の物いひ掛るにろくに返辭も爲ざる如きは殊の外他の憎みを惹くもの也。

▲老人を侮り笑ふべからず

年老ては眼も耳も疎くなりて自然見誤り、聞違する事多し、若き女子は箸の轉ぶも可笑くて笑易き者也、笑ふやあながち侮辱にても何でも無けれど、扮笑はるる老人の身に取ては決して快き物に非ず、乃公とて昔は如斯者に非ざりし、今笑ふ人等も年寄てみよ必又笑はるべしと、口へ出していはずとも心中には然思ふが常情なり、其時之を笑はずして撫恤册く人あれば、扮々殊勝人哉と涙を溢して怡ぶも又老人の情也、此様の事より大に人望を得るなれば、たとへ可笑さかりの妙齢女兒なりとも、常より心得て決して老人の事は笑ふものに非ず、進みて撫恤べし、是人望を得るの一ッ也、他人すら猶斯の如し況んや自己が老父母舅姑をや笑ひ嘲ると、孝行に册くとは我身の損德いはずとも明かなり。

又老人のみならず不具者をも笑ふべからず、不具者を笑ひし爲に禍を惹出し、身を亡したる例ある事なり、

女兒はとかくに笑ひ易き者なれど笑ふ間敷事を笑へば禍となる事必あれば、愼むべく恐るべき事也。

▲人と交るには其先方の心意氣を悟り知るの才なかるべからず

人心は面の如し親子兄弟たりとも悉く別々にて、等しからず、況や他人をや、自己の思ふ心を以て他を忖度すれば十の物は八九迄も違ふべし、先其人の身上の奈何を參考せざれば他よりみて必如斯なるべしと思ふ事、存外に違ふ事あり、世故に熟すれば大概は其顔色、口氣、容態にても其心術は洞察せらるゝもの也



社交界の一日（1）

察し得て然して我方の差障りとならざる限りは、先方の意に背かぬ様に附合おくべし、無益は猶忍ぶべきも有害と認たらば早く遠ざかるにしかず。

▲人を信じ過すべからず

人は生物也、生物は動く、活動するにつけて心も渝る事あるを免れず、されば始より深く信せざれば時有てかはるも人情の習ひ、是非なしと思ひて止むべし、甚信じて此人こそはと思ひ詰ては渝りたる時大に腹の立もの也、始は餘りに信せざりし人の年月を經て次第に信せらるゝやうに成行くは誠に頼母敷き人也。

▲お世辭はいはぬ貌していふが秘傳

其人に向ひて諂辭を献ずるよりは時に反對の言をいふが却て異のお世辭也、たとへば爰に容貌自慢の人あらむに、貴姉は實におうつくしいと稱譽むよりは、此命とり奴と背の一ッも叩けば其人アラ酷よとはいへど譽られたるよりも一層嬉しく感ずるもの也、憎らしいとは可愛さより出る言なるを悟らば、諸事此法を以て人と交際すべし、餘り空々しきお世辭は諂諛になりて却て嫌氣のつくもの也。

▲交際家は常に注意して家内を取亂さずよく整理しおくべし

客來りて俄にそこら取片付襖障子を〆返しなど爲は見ぐるし、初對面の人にも城府を設けず多年の知人も同樣に奥底なく快く應接べし。

▲我に物いひかくる人ある時の心得

心には然も思はずとも興有る樣にきゝて請こたへする事交際術の一ッ也。

又何事にもあれ、人より談し掛る事ある時、其事とても出來ざるは知れて有ども、其場は先づ一應篤ト勘考の上或は宿に申聞まして等、程よく事を延して後日にいかやう共謝絶の仕方あるべし、即座にポンと反拒るは宜からず、然れども又餘りに無益の事なるに人を釣りおくも心なき業なれば、時宜に依りては多分叶間敷由をいひて思ひ止るべく、勸告すべし、夫にても猶聴かざるは先方の愚にて請方のわろきに非ず。

▲交際社會には身分相應の美を飾るべし

婦人として身を飾らぬは萬國共になき事也、奈何なる國にても流義こそ違へ、それ〴〵の裝飾は必ある也、身分不相應の奢侈こそあしからめ、いかに權なきがよきとて身省愼を怠り、自墮落なる姿にて客に應接する如きは、婦人として有間敷事、又公衆の中へ出るには有名の貴婦人等が麁服なるは其謙德を稱する人も有べけれど、一般普通の人にして餘り麁服なれば人輕蔑して見もかへらず損也、されば力の及ぶ限り立派に裝飾して行くをよしとす。

▲他家を訪問する心得

先玄關に至り取次に名刺を差出し、來意を告ぐべし貴顯の人は多くは口實を設けて面會を謝絶するもの也是非逢たしと思はゞ一度は押かへす共執拗云ふべからず、執拗ければ益々厭はるゝものなれば速に歸りて出直すを可とす、三度も四度も運びて取次も氣の毒と思ふ程になれば其内には面會せらるゝに至るべし。

凡他家を訪問するには必其訪問爲べき理由なかるべからず、出先にて偶然知人となり此方よりも伺ふべし、是非御來車被下度御待申等いひ合たりとも眞實なりや、當座のお世辭なりやも知らずして猥りに訪問すべからず、來よといはるゝ事度重り先方よりも訪問せられたるに猶ゆかざるは失敬なれば折を見計らひて行べき也。

▲他家を訪問しては長居すべからず

普通の挨拶をなし用事をいひ終りたらは世間咄の請答へ一つ二つして宜程に歸るべし、殊に來客多き家にては次の客の俟居るを思ひて、サッサと埒を明けて歸るべき也、國を隔てたる遠方は一夜或は兩三日都合に依て一週間も滯在する事も有べしと雖も成べく長居にならぬを上策とす、兄弟姉妹と雖一旦他家に分れたる者同居すれば不滿の事互ひに發るもの也、況や他人をやいかに魂合の親友たりとも其人一人こそあれ他の家族は心同じき者のみに非ねば、長居は必苦情の元なり、遠いは花の香にて珍しきこそ人は歡待せらるゝ者なれ、さればたとひ近隣にても用もなきに餘り毎日のやうに行けは倦るゝものと知るべし。

▲御馳走はいやでも受くべし

他家にて菓子にても何にても出されたる物を其時一寸とお辭儀したる耳にて見向もせず歸る人あり、主人方にて折角出したる物を其儘にも置かれず、態々紙に包でお邪魔でも等いひて出さねばならず、さりとては入らざる手數を掛甚心なき事、是禮儀を知らぬ人のよくする事にて、或は遠慮の積りかも知らねど、實は失敬也、總じて客に出す物は主人が、客を饗應の爲なれば客たる者は其志を厚く受るを禮儀とす、然るを

見向もせで打捨置くは此様な物は不適といはぬ斗にて主人を恥辱に當る故に失敬也、とは申也、作法を知らぬ人の爲に申さん菓子ならば鉢に盛て出すは我一人の爲に非ず、（相客なき時は其中の幾分をとれといふ也）紙にのせて出すは數の多少に拘らず一人前にて包で持歸れといふ事也、されば鉢なる時主人より一つお摘みあれ抔いはれたらば、先其鉢の儘兩手に採て押頂きて我前に置、懐中紙を出し折て其上へ箸有るは必箸にて箸なき時は指にて大なる物は一つ小なるは二つ三つ（二色あらば二三色あらば三）取て紙上に乗せ、扨箸を向ふへむけ直してさし出す、次客あれは次へ廻すべし、喰とくはぬは我随意也喰ふには紙の端を向ふよりかぶせて紙の中にて割る（粉のこぼれぬためなり）喰はずば包て袂に入蒸菓子餡物は主人方注意して必楊枝を添ふ（黒もじを本式とす昔は爪楊枝にても）主人方不注意にて楊枝を出さず客も又懐中楊枝用意なき時は紙をさきて細紙捻を製へ菓子の下より上へ掛て引違へて〆切れば見苦しからず切るゝ也、斯して宜程に切て喰ふべし扨て楊枝にても紙捻にても皆紙に包みて袂に入る（もししみ付く恐あらば厠へたちて捨べき也）我遣ひたる楊枝其儘置べからず、其外櫻柏などの葉も同様煙艸盆中などに入る事甚無禮也皆紙に包で袂に入るを宜とす、又庭先へ何にても捨唾を吐事甚失敬也物知らぬ人のよくする事なれば筆の序に記しおく、何に不拘捨る物は紙を用ふべし其爲に持つ懐中紙なりと知るべし。

▲お茶も同様

茶は始一つは不好とも必呑べき也、又呑まじと思はゞ茶碗を俯にして茶托上に置べし、主人方にては俯てあらば呑まぬとみて又羞めぬを可とす、仰てあれば幾度にても羞むべき也、茶碗俯たるに猶羞むるは主方作法を知らぬ也喉の渇かぬ時又茶を好まぬ人茶多くて困る時灰吹へあくるは可、庭などへ捨るは失敬也、灰吹もなく爲方なくば、口を付けず置て、主人に折角なれど頂かれぬ由を斷り、茶托の儘押頂きて差置べし斯すれば不呑とも失敬にならず挨拶もせず捨おくが失敬なり。

▲煙艸は如何に

婦人は呑まぬを可とすれど、呑つけたる人は止難きに酒程の難も發らぬ物なれば、性來好まば用るも苦しからねど、呑に付て心得あり決して不作法なるべからず、先第一に煙を人に吹掛ぬ様にする事次に莨盆あらば火鉢の火に吸付べからず若火入に火なくば火鉢の火を取火入に移して吸付べし、客火鉢には得て火箸なき事あり、さる時にはお火箸拜借と乞ふべし、又火鉢のみにて莨盆を出さゞれは火鉢にて呑もよけれど煙管をはたくに縁を叩くべからす必手を縁に乗せて掌上にてはたき、吸空は火の傍によせて灰を懸けおく可也、卷莨ならば歸るに臨て吸空を不殘紙に包みよく捻り、袂に入べし、火鉢に林立のまゝ捨置べからず、又人前にて煙管のヤニをほぢくる事勿れ其惡臭甚厭ふべく、若莨嫌ひの人あらは迷惑するを思ふべし、宅にて注意して掃除し詰りたる煙管は人中へ持行く間敷也、是條々莨呑の心得とす。



社交界の一日(2)

▲交際社會の大達者

一先見の識ある者。

二廣く世間の事情に通じ學識あれば十二分なり世故馴たる人。

三物に動せぬ度胸のよき者。

四臨機應變の智ある者。

五敏捷にして押の強き者。

六頭腦は冷にして口實の甘き者。

七談話の有興者。

是等を兼備したるは交際社會の大王なるべし二つ三つにても此資格を有せざれは交際社會に立がたし、之に反して、

お先眞暗獨悦する者。

自己の仲間の事より外知らず思はぬ者。

他に脅されては恂々しいらぬ杞憂する人。

頓智の活かぬ者。

他に壓制られて我に理は有ながら辨解し能はぬ者

他に同情を寄するは可なるも度を超て熱狂する者

正直一途にして他の言を信じ煽動に乘易きもの。

口重くして談話の材料に乏しき人。

是等の人にして交際場裏に出れば必失敗す殷鑑遠からず處か、目前にあり、恐るべき哉、豈男子ばかりの事ならむや、婦人界も又同じ、世が文明に進めば進む程交際の角逐も烈しく成り行、笑の中に刄を隱して互の心に隙を覗ひ、他の脫落を捉らんと爲る者多ければ、暫時も油斷はなりがたし、正直一方愼み深きのみにては、何事も人後に押除られ、お心よしと輕蔑せられて、他の花々敷を一隅より指を啣て羨むより外なかるべし、事と場合に依ては噓僞も方便也、内心の苦きをも少しも顏色に顯さず平然として談笑し、機に臨み變に應じて利益を計らざるべからず、其態度言語の奈何に依る世間の評判あしきにも拘はらず、敵手をしてまさか世上の評の如くにてはあの態度は出來ぬ筈、あの口氣にてはまんざらうそでなしと沒却せし人氣をも呼返す事あるもの也、然るを始より家の事のみに氣を惹れて愁色面に現れ言溢りなどすれば、關係なき者迄何故にやと目を附けて、忽ち其内兜を見透され、憑入られて、まとまるべき話も反返され、出來る筈の事も爲能はずなりて、詰りは大切の夫に迄恥をかゝせるに至る。細君夫人の外交の巧拙、與て大なり、嗚呼度胸なる哉、於轉婆なる哉。

言語と動作

小川直子

折角の御望みですから、女子の交際に就て、思ひ付いた一つ二つを申上げて見ませう。

（一）物言ひ

女子の交際に於て何が一番大事かと申せば、言語と起居動作の二つで御在ます、言語は實に自分の心持を他人に傳へると云ふ大切な役目を致すもので、之に依つて交際が出來ますのですから、言語の用法は最も謹まねばなりませぬ。

けれども女子と申すものは、困つたもので、言語を謹めと言へば、言ふべき事を言はで默つて居るし、又たハキ／＼物を言へと申せば、言はでもよき事をペラペラ饒舌つて、疎相かしい言ひ損ひをすると云ふ始末で、何うも困つた譯です、斯樣に出娑婆つて言ひ過ぎたり、又たつゝましくして何も言はなかつたりする樣では、其が爲め人附合を惡くして、處世上に大きな損が御在ます、其故言ふべき事は腹藏なく話すが宜いし言はでもの事は一寸も口に出さぬが宜いので、能く其場合と事の性質を考へて話すことが肝要で御在ます。

又た同じ意志を表すにしても、物言ひの巧拙に由て、善くも惡くも聞えるもので、少しの言ひ損ひの爲めに人の感情を害して、己の意志までも誤解せられるといふ樣な事は、世馴れぬ若い方なぞには能くあることですから、人と交際する場合には、物言ひに氣を付けて辭令を巧にする必要が御在ます。

いつぞや、華族女學校長の細川先生のお話に、學校へ來る女先生方の內では、三輪田さん（眞佐子刀自）が一番物言ひが巧いと仰有つてゞしたが、成程彼の方はたしなみの深い方で御在んなさいますから、疎相な事は仰有らず、物事をコウ丸く上手にお言ひ廻しなさいます、例へば人に注意を促すやうな場合でも、露骨には仰有らず、婉曲な言葉で、遠廻しに其となく其の人の心に這入るやうに仰有るから、少しも角が立たず

聽人も腹を立てずに成程と合點が行くので御在ます、併し是は三輪田さんにして初めて出來ることで、其他の人には仲々六ケ敷いことで、御在ますが、一つは平生の心掛でもあり、努めて出來ないことでもありますまい故、婦人は誰しも斯うありたいと思ひます。

是も矢張物言ひに就て細川さんのお話で御在ましたが、或る阿母さんと息子さんと親子二人暮しの御家で、此頃嫁さんを迎へた所、里開きの日に媒介人が來て、「御様子は如何ですか」と阿母さんに訊ねた、すると阿母さんは大きな聲で「善うて善うてホンマに仲か善う御在ます」と答へたので、媒介人は祝詞を述べて立歸つたが、之を聞いた息子さんは、何う思つたか、プイと家を飛出して了つたので、阿母さんは大層心配をされ、私の所へ相談に來た、ソコで私は「其は貴女の言ひ様が餘り業山であつたから、乾度仲が善過ぎて見ともなく思つて居なさるとでも、誤解されたに違ひない、然う云ふ塲合には、何しろ未だ來て間合の無いことですから、よくは分りませぬが、私の見る所では夫婦仲も至極善ささうに思ひますと斯う仰有るべきです、と申されたさうですが、此の一事に見ても物言ひに注意することの大事であることが分ります。

(二) 起居動作

言語に次いで、婦人の交際に必要なは、起居動作の美しくあることです、即ち態度がよく、身の科が綺麗で、而して取廻しが美しく、所謂坐作進退其の節に合ふのは、婦人の交際上に缺く可からざる唯一の資格だと思ひます、容貌風采の美は交際には格別重きを爲しませぬが、起居振舞の美は是非必要であります、婦人にして擧動が美であると、其の人の氣品を高くし、又た心情を奥床しくし、對者をして花に向ふの感あらしむるものですから、私は婦人方に此の美を備へられんことを望むので御在ます。

昔し、後徳大寺の左大臣が福原の新都より平安の都に上つて、二代の妃を訪れ奉つた時、折しも秋の夜の月清く、妃には恰かも琵琶を弾じて居られましたが、

左大臣の來るを見るや、彈奏を止めて、靜かに撥を置き玉ひし其の御樣子の美しさと言つたら、其の頃他に比ぶる者も無かつたので、左大臣には甚く感嘆したと云ふことです、かゝる已むごとなき御方を御引合に出すは誠に恐多い事ですが、此位にマア態度の美しさは人の感動を誘くものですから、我我下々の交際に於てもまた此の立居振舞を美しくするといふ身だしなみがあつて欲しいと存じます。

然らば何に依つて此の立居振舞を美しくするかと申せば、勿論容を修める上からは禮法を習ふのも必要でありますが、其よりも先づ學問に依つて心を治めるのが肝要で御在ます、內正しければ外自ら治まる道理で心さへ正しく美しければ、自然態度や取廻しは奇麗にも、しとやかにも成るもので御在ます。

社交界の一日（３）



其の證據には教育のある者と、無い者と比べて見ますに、何處となく其の容貌からして異ふやうに思はれます、即ち少しでも教育を受けた者は、何となく顏が引締つて見え、一種の品位が眉宇の間に備はるやうに見受られます、殊に顏の中でも眼は心の鏡とも申す位で、心の形の映る所で御在ますから、教育の有ると無いとは、先づ第一に此の眼に

映るので、其から身體にも及ぼすのでせうから、起居振舞にも違ひがあるべき筈です、之に依つて見ても學問は必要なもので御在ます。

曾て或る女學校の教師が、多年の經驗上よりして、同じく禮法を教ゆるに技藝科の生徒よりも學科を主とする本科の生徒の方が、遙かに覺えが善いと申したことがありましたが、是は成程さうに違ひありませぬ、何故かと申すに一方は技藝が専門で手先の教育ばかり受けて居るに引代へ、一方學科を主とする方は學問で心を養つてありますから、其の應用で自ら工夫し自ら悟ることが出來ます故、飲込も早い譯で、之に付ても學問の難有いことが分ります、併し然ふは申すものゝ、今の女學生達には何うも應用の才が無て不可ませぬ、例へば學校で禮法を習ふにしても、教師の前で給仕の稽古する時は、規則通り、摺足で疊障りも優しく歩きますが、作法教室を出ると、直くチヨコ〳〵走りの勝手な歩き方に成て、まるで態度が違つて了ひますが、是では何にもなりませぬ、又は家庭に於ても其の通りで、之を應用する術を知らないのは、誠に困つたものです、けれど思ふに是等は未だ修業が足りない所爲でも御在ませう。

作法は交際上の容儀を教へる學科ですから、之を習ひ覺えて、日常の居家處世に實行し、而して我體を之に熟練するやうに仕込まなければなりませぬ、昔時は殊に此の作法の稽古には重きを置いたものでして、行儀作法を十分に仕込んだ上でなければ、嫁にはやれぬと言ふ風でしたから、學問は出來ないでも、起居動作をよくする婦人が割合に多う御在ました、別して御殿女中なぞになると、其は實に取廻しの立派なもので、よくマアあんなに綺麗に科せるものだと感心する位でした。

私は今の若い婦人方に向つて昔の風を其の儘眞似よと申すものではありませぬが、交際社會に出でゝ恥かしからぬ立居振舞と態度丈は備へて戴きたいものだと思ひます。

(三)まこと

ソレカラ多くの方と交際する中には、附合善い人もあり、又た恐ろしく附合悪い人もありますが、私の經驗によると、附合悪い者に限つて胸に戸を閉る癖が御在ます、何かに付け遠慮する所があつたり、隠す所があつたり、又たは言葉を飾つて見たり、顔色を伴つて見たりする様な人は、何うも交際が爲悪くていけませぬ、斯う云ふ人は胸に戸を閉てゝ、滅多に心の底を打明けぬ所から所謂氣心が知れず、外目にはマルデ濛霧か又は秘密の雲に包まれてでも居るやうに見えますので、此方も浮とは話も出來ず、遂には睨競をするやうな工合に成つて、誠に附合悪いもので御在ます。



社交界の一日(4)

ソレモ頼朝の様に人物が大きくて、喜怒哀樂色に出さぬならよけれど、是は然うではなく、心が狹隘である爲めに、いやに人前を憚つたり、つゝましくしたりするのですから、面白く御在ませぬ、こんな風では人に容れられもせねば、又た人を容れる事も出來ませぬから、非常に損な流儀だと思ひます、

之に反し心の捌くい、青竹を割つたやうにサツパリとした人に向つては、此方も遠慮なく話が出來また打明けた相談も出來るといふもので、大層附合善いので御座ます、是といふも一方は心の誠を蔽ふに引代へ、一方は心の誠を現はすからで御座ます、既に此の通り誠を披瀝した方が、人の氣受もよく、また信用も受けらるゝものとしたならば、誠を以て人に接する方が、交際の道に協つて居ることだと思ひます、

むかし、宗の太宗は宮殿の造作を玄關より奥殿まで一目に見通せるやうにして、朕の心も亦た此の通りであると仰有つたさうですが、天下の政機を握る天子の御身でさへ然うですもの、況んや私共私人の交際に於ては、敢て權謀を行ふの必要もなく、秘密を用ゐる必要も御座ません、唯だ〳〵まことの一筋を以て人に交はつてさへ行けば、人も吾を愛し、吾も人を愛することが出來て、何程幸福であるか知れませぬ。

前に一寸交際と言語の事を申しましたが、心の誠はよく言語の足らざるを補ふのみならず、言語には迚も言ひ切れぬ程の心持を痛切に傳へる場合が御座ます。

私の所夫が歿つた時でしたが、藩中の高木の奥さんが來て、喋々と悔を述べて歸つた跡へ、出入の町人の宮丸屋長次郎と云ふ者が、悔に來た所、是は又た「實に御愁傷の事で何とも申上やうが御座ませぬ」と許りで、疊に打俯し泣いて了つたので御座ます、其の時里の兄（河島久和とて、和漢の學に達し、前田藩中秀才の聞え高かりし人）が、私に向つて「誠といふものは此の通り、口には何も言はいでも能く心持を傳へるものだ、長次郎の悔は千萬言の弔辭にも優さる」と申しましたが、私も成程と思ひ、誰の悔よりも此の男の悔を一番嬉しく思つた位でした。

之に見ても誠は尊ぶべきもので、交際の要も詰り此の一語に歸するものだらうと思ひます。

（四）　ラクに交際する

私は人樣との交際を別段苦しいと思つたことは御座ませぬ、人によると交際を非常に苦にする者もありま

すが、私は極くラクに交際する方です、其といふが詰り、誠のまゝ、言ひ替へれば自分の價値を有の儘出して置くといふ主義ですから、彼此と面倒な交際術を弄せでも濟むと言つたやうな譯で、何人に向つても、此の通りの調子で押して行くので御座ます。

自分の價値を出して置くと許では、少少分り兼ねますが、之に註を入れゝば自分の身に備つた丈の價値を其の儘人の前に露出して置くことで、敢て其以上に飾らうとも思はず、又た其以下に卑下しやうとも思ひませんから至極氣樂なものです。斯ういふ風ですから、どなたの所へ遊びに參つても、矢張り家に居ると同じ心持て、少しも窮屈を感ずるとか、氣兼をするとかいふことは御座ませぬ、從つて先方も私には親しみ易いと見え、迷惑がつたり、氣を置いたするやうなことがありませんから、面白い愉快な交際が出來るので御在ます。


社交界の一日（5）

けれど若し自分の價値を僞るやうなことでも在つて御覽なさい、屹度それが爲めに種々雜多の面倒を生ずるに違ひありませぬ、例へば若し自分の價値よりも高く見せうとならば、いろ／＼身の飾も入りませうし、虚榮を衒ふ必要も起りませうし、

心にもない虚言を吐く必要もありませう、又た若し低く見せうとすれば、有つても無いと言はねばなりますまいし、知つて居ても知らぬ振をせねばなるまいし、時によつては己の權式を下げてまでも謙遜する場合も御在ませうから、何方にしましても交際上の累ひで御在ます、ソレニ假し高う見せようと計つても、よくしたもので人は價値丈にしか踏まないものですから、寧ろ最初より飾らず偽らず價値丈の物を正直に見せて居た方が心安くて宜しいでは御在ませぬか。

ソレカラ女といふものは他家へ嫁して一家の主婦と成ると、茲に初めて婦人としての眞の交際が始まり又た其の必要に迫るのですから、餘程心せねばなりませぬが、さりとて交際の爲めに家庭を忘れてはなりせまぬ。私の交際に關する話もマア此位のものですが、終に臨んで若い御方の爲めに曾て私が處世の所感に就て詠んだ歌を、御目にかけるとしませう。

目の前にある極樂を外にして
今迄何に迷ひけるらん。
世をうしと思ふも己が心にて
足ること知れは樂しかりける。（寺人筆記）

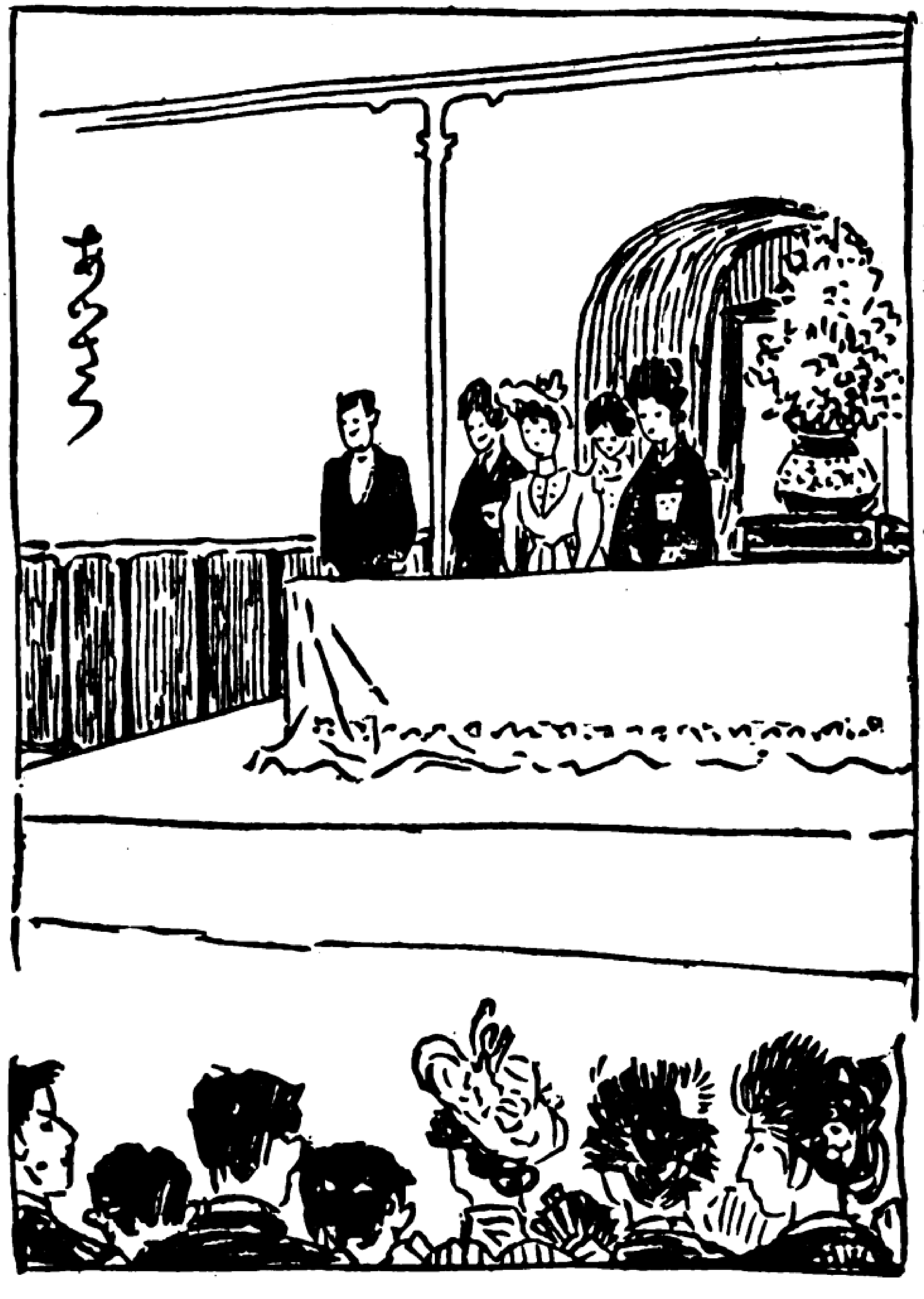
八方美人術

社會の一寵兒

西洋は學理の進んだ國であると同時に又感情の進歩した處ろである、それ故彼の地で文明人と言はれて居るほどのものは極めて常識に富んで居る、何事を成すにも皆常識から割り出して行くのである。單に冷やかな學問上の理屈から割り出したならば世の中の事は極めて殺風景であらう、又無味乾燥なものであらう。されど之れと同時に西洋人は感情を尊び、感情を大切にする國人であるから世上百般の事決して冷酷な學問づくめでは遣らない、彼の國人は學理を骨にして、其上を包むのに優美なる感情の衣を以てするから、萬事が美はしく圓滿に運び、萬事が温かに見へ、又趣味深く思はれるのである。是れ然しながら西洋人社交上の秘

訣で元來常識を尊ぶ結果と言はなければならぬ。

「交際」といへば廣く交はるの意、世間を廣く渡るの意、萬事如才なく人と相和して行く意にて世の中に立つて極めて必要なる人間の務めでなくてはならぬ。それを以前には單に「附き合ひ」と稱して、當座の御つき合ひの意味に取り何とはなしに氣は進まぬながら據なくするといふ意に取られて居つたのであるが、それは日本が鎖國的、階級的、割據的であつた樣樣の世の習慣や、制裁の爲めに自然に廣く交はるべき



社交界の一日（6）

「交際の道」を塞いで居た結果であつて、決して人間本來の希望ではなかつたのである。

さて其の人に交はるにはどうしたらばよいかといふに、一口にいへば、只「人の感情を尊ぶ」といふ事に歸する、他人が自分へ交はりを求むるには自分の感情を尊んで呉れるのであるから、自分も又他人の感情を尊ばねばならぬ、然るに從來の日本では御附合ひと言へば心にもない御追從を言つたり、本意ならぬ金儀を遣ふて御馳走する事に解釋し、あれも御附合、これも御附合と言つて、自分の心に好まぬ事を厭々なが

らする事になつて居たこれは實に飛んでもない間違であると言はねばならぬ。

○人の感情を尊ぶといふのは、主として常識的でなくてはいかない、むかし去るお茶屋に世辭のよい女主人があつた、或る日の事寒い〳〵吹雪の降りすさぶ中を雲助が襦袢一枚でお客を舁いてやつて來た、其のお客が奥へ通つた跡で雲助が寒さに顫へて居るのを見兼ねて其の女主人が「冷たいでせう、内へ這入つて火にお煖りなさい」と言つた。雲助はそれを聞いて、流石は客商賣するほどの女である、我等が姿を見て「寒い」とは言はず「冷たい」と言つた處ろは中々の物であると感心したといふ事がある、不斷山賊に等しい生活を爲して居る雲助すらも人の言語の意味を解釋して、寒と冷との遣ひ分けが如何に彼等の感情を厚遇したかといふ事を合點したのである。

○寒からうといへば雲助に對して甚だ失禮である。即ち體面を傷つける事になる何となれば彼等は元來衣物がないものであるから、是に反して冷たからうといへば、決して彼等の體面には觸らないのである、客あしらいに馴れた女主人はよくこの間の意味を了解して居るのである。

○交際上の言葉は萬事この調子で行かねばならぬ。人の貧しきを見て「御氣の毒」といふのはよろしくない、若し人の慘憺たる有様に同情を表したならば、なるべく其の場所に關係のない言葉を採つて慰めねばならぬ、是れ決して心にもなき御世辭ではない、交際上手はすべて此の邊の呼吸が肝要である。

○交際上の言葉に「勿れ」が三つある、即ち鋭く勿れ、鄙しく勿れ、急ぐ勿れ、此の反對に又「可し」が三つある、即ち優美なるべし、婉曲なるべし、悠揚なるべし。

○交際上の言語は議論でなく又爭論でない、故に物の道理を露骨に痛快に恰も刃物で物を斬るやうではいかない、針で刺すやうではいかない。鋭くいへば自然何人かに手疵を負はす事になるから交際上の禁物は歯に衣きせぬ言語と御承知願いたい。

○同時に又鄙しい言語は直ちに其人の人品を損ずるものである。聞く人も又不快に感ずるものである。「同じく良人を呼ぶ奥様の言語に、「宿」が、といふのあり、「宅」がといふのあり、「内」がといふのあり、或は「主人」がといふのあり、今一々其の尊卑雅俗を吟味しないけれども、之を聞く人の心には自然にそれ〴〵其の人の人品を價値するのである。

○交際の要訣は、場合を知る事である、人を見る事である、隨つて交際的の言葉は場合に相應し、人物に相應じなければならぬ、謹直家の前で滑稽諧謔はいけない、同時に捌けた人の前であまり眞面目でも困る、萬事調子をよくするといふ事は交際家の取るべき方針である。



社交界の一日（7）

○交際家は人の缺點は言はぬものである、若し忠告すべき事があるとすれば極めて婉曲にやるものである。人には何か一つの長所がある、其の長所を發見して讃め、然る後に徐々に其の缺點を忠告し、其人をして、おもむろに反省せしむるものである。

○交際家は決して一方に偏してはならぬ若し人の惡を言ふの必要あらば、まづ其の善事を十分に賞揚し、而して後ち、言を轉じて、「彼の人にして彼の事ある、誠に惜し

むべし云々」位にして人をして自然に、成程と首づかしむる樣にせねばならぬ。

○若し人と談話する時は、決して一つの事柄を長く話す勿れ、程を見て話頭を轉じ、局面の展開に務むべきものである。

○決して自己のみ話して相手をして口を開くの餘地なからしむるはよろしからず、如何に相手が無口なるも、折を見て先方に口を開かす樣に仕向くるものである。

○決して自己の苦痛を語る勿れ、若し苦痛を語るべき必要あれば、半ば滑稽に落して、串戯らしくまぎらはすべし、相手が聰明なる人ならば串戯の裡にも必らず當方の眞意を酌み取るものである。

○人は如何なる場合にありても自己を捨てざるものである、是に於てか交際の術を要するのである又人は如何なる人物でも自惚の心は存在するものである、是に於てか大に乘ずべき必要を見るのである故に人と相逢ふ時は必らず相手に七分の氣を持せて事を就すべし、ゆめ〳〵自分本位を振舞ふべからず、交際の妙は畢竟他人を本位として始めて成就すべきものである。

○西洋の諺に、處女は欺かれ易く、寡婦はよく明智の男を掌中に弄ぶといふ事がある、處女は元來自分本位を捨てないものであるから、自然に相手の爲めに陥れられる、之に反して寡婦は久しく敵手本意の呼吸を呑込んで居るから、往々にして聰明の人をも掌中に弄するに至るものである。

○交際の秘訣といふも其七分は口前即ち言語に依るものであるが、其の言語も、一人と一人相對の時は左程困難でもないが、三人、五人、五人が七人と多勢の間を切ッて廻らうとするには容易でない、時として甲の人に好意を表しても乙の人に惡感情を抱かせる場合が少くない、人心の異なる各々其面のごとしとかや同志、同氣相求むる友の間に於ても事柄に依つては互に意見を異にするものである、是れを程よく調節する事は交際上尤も困難な事である、故に多數會合の席上に於ける交際術は難中の難事である、是れを無難に切り拔けるのは餘程の腕前と言はなければならぬ。

○多人數相手の交際術、即ち社交塲裡の談話はすべて多數を本位として萬事に行屆かなければならぬ。

○多勢集りの會話は極めて多方面に亘らねばならぬ、隨ッて個人的の題目は成可く除けるのが必要である。

○多數集ッて會談する時は、列席者全部を喜ばすやう趣味ある談話を試みねばならぬ、言ふ事が差し障りありとて唯沈默して割據するは會話塲裏の禁物である。

○よしや我が說に理があると信じても、決して其れを事々しく主張する勿れ、又非凡の卓見ある如く、又傑出の才能あるかの如く他人の談話を打消して獨り得意に喋々するは見憎くきものである。



社交界の一日(8)

○交際塲裏の人となるには獨斷の風を避ねばならぬ、十分に正理と信ずる事でも、まづ一步を人に讓りて謙遜の句調を用ひ、言葉を穩當にして徐々に人の首肯するやう適切なる例證を出すがよい、如何なる塲合に於ても怒氣を顯はしてはいかぬ。

○既に絕へたる談緒を再び起して、同じ話柄を繰り返すは厭ふべし、是れ會談中の大禁物。

○會話の一部分に偏し、又は談緒の止まッた時は、一般に普及するやう、普通の話題を提出して再び會話を蘇生せしむるの工風

が肝要である。

○會話の妙手は臨機應變の作用を自然に會得するものである。タトヘば話が理屈にばかり偏よる時は、一寸滑稽を交へて、聽者の頤を解き、又長々しき談話に退屈した時は一寸それに因んだ奇談を持ち出して一坐を歡ばすの工風を出すものである。

○一度話した事を再び繰り返すは倦厭を催さしむるものである。但し一度話した事でも其の正反對の事柄を提出するは却て人心を新たにするもので、これは中々の會話者である。

○若し昔話を話さうとするには、まづ聞手の中に初耳であるか、二度目であるかを一寸確かめねばはらぬ、陳腐の談話に耳を貸すは實に耐え難いものである、珍らしくもない昔話を欠伸を押へて聽くつらさよ、談話者はよろしく警戒せよ、唯一人の退屈がやがて滿坐の人々に傳染するものなるぞ。

○交際の要は場合を知るにあり、貧しき人を訪問するに美服するはよろしからず、斯くあれば、先方は痛み入つて大いに赤面し、有難迷惑の度合中々に大なるものである。

○又人を訪問するには平常よりは少しく立勝りた服裝をし、又立勝りたる言語を用ひよ、元來人は現在の地位境遇よりは多少高き所ろを望むものであれば、其の希望に應じて度合を測らねばならぬ。

○又以前目下の人でも現在相應の地位に在る人ならば其の地位に應じて挨拶せよ、決して以前の事を思ッて馴れ〳〵しくはせざるものぞ殊に多勢の集會にては猶更なり、むかし馴染とおもひ粗末の言葉を向けられては人の中で迷惑を感ずることあり、交際家と言はるゝ程のものは表面と裏面との意味をよく了解したものである。

○世帯の事を言ふものは鄙しきものなり問はるれば、要領不得に答へよ、世帯向の事を問ふは失禮の甚だしきものなり、但し學問上の參考として問ふは此の限りにあらずと知るべし。

敬意と親切

新泉抄譯

▲其一

總て我が目上の人に對して交際するには、叮嚀に腰を屈め、上座を讓り、萬事にわたりて、相當の敬意を表することは云ふまでも無く、一寸談話を交ふるにも我が發言に先立ちて、先づ目上の人の談話に耳を傾けざる可からず、而して後に徐ろに話すをよしとす。斯やうにすれば、長者に對して禮を失せぬのみならず、又た彼等に滿足を與へるの効ある。これに反して、目上の人にそれ相當の敬意を表せず、例へば心なきにせよその上席を汚し、挨拶を粗畧にし一寸談話を交ふるにも物知り顏して、向ふの談話を中途に奪ひ、イヤそれは斯樣〳〵然々の物なりなど恣まゝに大聲あげて言ふて見られよ、目上の人は必ず氣持を惡しくして、その無禮を心窃かに憤るのみならず、與へんと思ふ便宜も斯の如き人に對しては、與ふるを欲せざるべし。これ一些事にして實は然らず、人は斯かる些細の事よりして、人に拾はれもすれば、また捨てられもするものなり。心すべき事にこそ。

▲其二

總て高貴の人、資產家、又我れより生活の程度高き人に交はるにはよく、注意せざる可からず。此等の人々と平素交際を結ぶに於いては、萬事に卑しからざる所を見習ふの得はあれども、一方にはまた云ふ可からざる弊害も自然と生じ來たるものなり。弊害とは何んぞや。平素彼等に交はる限りは、勢ひ奢侈の風に染むこと是なり。もし此等の人に深く交はる限りは、我れまたその奢侈に倣はざれば何となく肩身狹きが故に、先づ日常の生活よりして驕奢の風を學び、家にはさまでの必要も無きに奴婢などを使ふて見、美服を纏ひ、美食を擇び、出づればわづか五步か十步の所に往くにも、車に乘りて外見を張るといふが如き奢侈がましき習慣をば、おのづと養ふに至る。それも豐なる身の上ならば兎に角も、さなくば負債忽ちこれより生じ、その

爲終には身を滅じ家を亡ふに到る、人々心爲たまふべし。

▲其　三

我れ彼に對して、尊敬の意を表せんとならば、時々其人の邸を親しく訪問す可し。然れども餘りに屢々訪問するは、却つて禮を失するの嫌ひあり。謹しむ可しまた訪問するには、食事の時を避けて、午后に於いて爲すべし。よしや此方は已に食後なりとするも、向ふに於いてその刻限なる時は、その由をば告ぐるとも、向ふは何んと無く氣の濟まぬ心地して、いろ／＼心を苦しむるものなり。これ人に對して我が僅なる不注意より迷惑をかくると云ふものなり。況んや未だ食事時に食事をせずして丁度その刻限に訪ひ行くが如きは、我れより期して先方に迷惑をかけに行くも同樣にして沙汰の限りと謂ふべきなり。また我が身屢々斯くの如き事をして、向ふに迷惑と散財とをかくる時は、我れまた他日同樣の迷惑と散財とを蒙ることを覺悟せざる可からず。もし我が身にしてその報酬をば爲し能はざる場合には、忽ちその人の輕蔑を買ふものと知るべし。またそれに張合はんとすれば、我が身分不相當なる出費を要し、その度毎に我が懷中をば痛めざる可からずこは獨り我が長上の人に對してのみ然るにあらず、同輩の人との交際に於いても、世間往々彼我の間にこの弊害あるを見る。謹しむべき事にこそ。

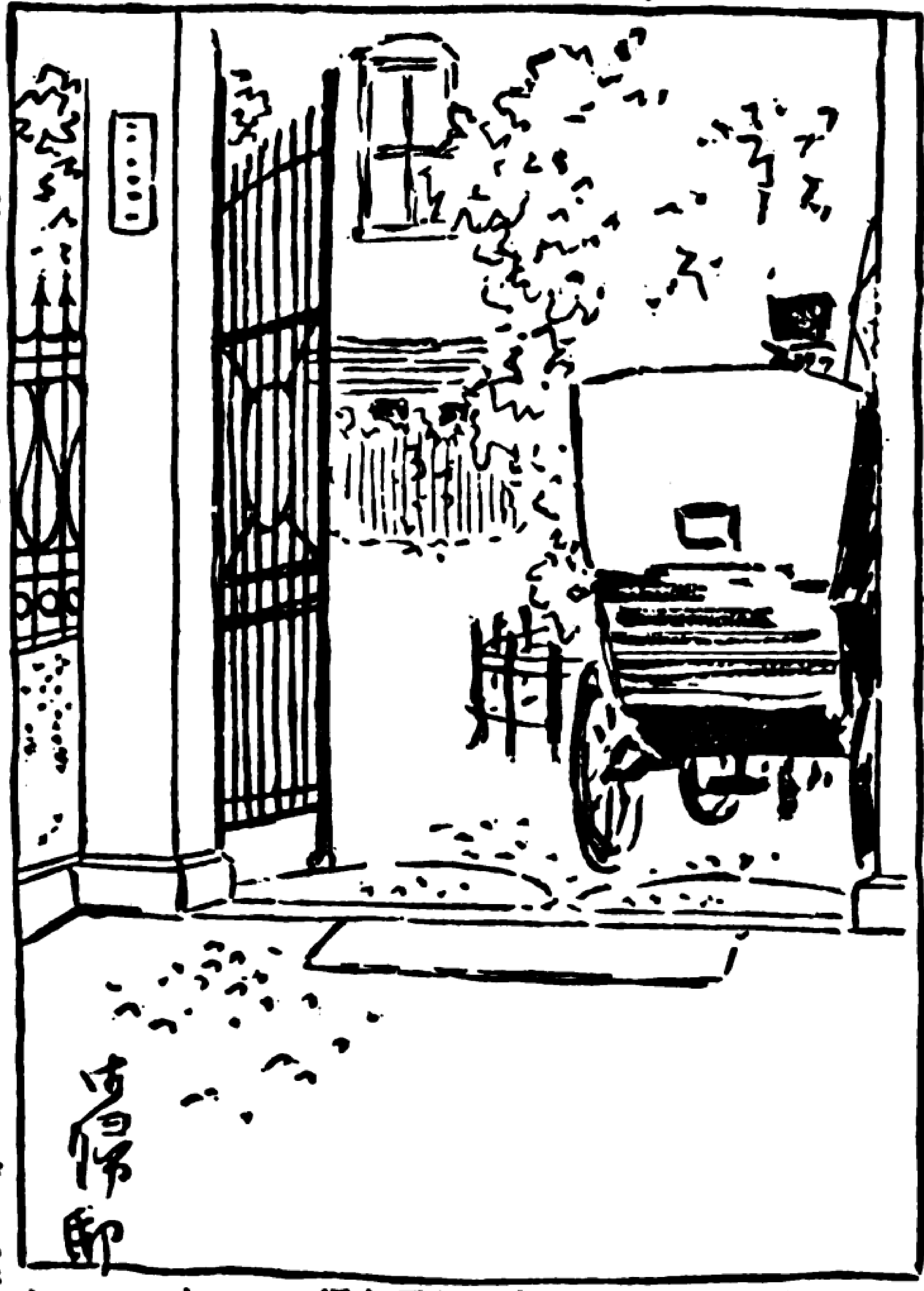
▲其　四

我れより目上の人と交際するに當りては、自宅へ招きての饗應を憚かるを宜しとす。何んとなれば其等の人の常食とする所の物は、却つて我が家の御馳走よりも概して美味たるものなればなり。試みに我れより目下の者の家に恭しく招待せられたりと假定せられよ。我れその宴に赴きて、勿體らしくその家人が薦める所の食物にして、我が家の常食よりも不味ならんか、何んだ馬鹿々々しいといふ冷笑の心起り、若しまた先方にして、おもひ切つて金をかけ、その身分不相當なる美味美食を調へて饗應せんか、我れはその厚意をば感謝することの代りに、餘りに贅澤なりと、却つて向ふ

の奢侈なることを冷笑するの心おのづと起るに至らんされば人々心せでやは、また招きを受けざる限りは、決して他人の家に於いて食事を共にすべからず。何んとなれば、招待無きにその家に到りて食事を共にする時は、我れはその家に在合せの御馳走を以て滿足せざる可からざるも、招待によりてその家に到る時は、我れは立派なる食卓に向ひ得るの權利あればなり。

▲其五

我に於て、十分に返禮の出來ぬ限りは、決して高貴なる人――同輩に對しても亦然り――より如何なる親切をも受く可からず。世には「旨い物食て油斷をするな」といふことあるが、こは誠によく云ひ得たる語なり。漫に他の力に依る時は、我が身は何時かその人の奴隷たる境遇に陥るに至るべし。また高貴なる人の尋常ならざる親切は、猥りに受けざる方安全なり何んとなれば高貴の人より仕向けらるゝ尋常ならぬ親切は、得て他日我が身をして、その親切に幾倍する好意を盡くさしめんとするの前提なりしことを發見せしむるものなればなり。その場に至りてこれを悟るは既に遅し此時若し先方の要求を郤くるが如きことあれば爲めに大いなる失望を與へて、多年の交誼を破るのみ



社交界の一日(1)

ならず、終には仇敵の如く見做さるゝ場合にも立到ること無しとせず。人々注意爲給ふ可し。

▲其　六

我れより身分の高貴なる人に對しては、よしや我が心に於いては敬意と好意とを表する丈に止まるとするも、餘り屢々贈物をば爲す可からず。何んとなれば、よしや我が心に於いては、たゞその人に對して敬意と好意とを表するまでに止まるとするも、我が身分の卑き悲しさには、先方にて或ひは我が好意を好意として取らざることあり。彼れが我れに向つて斯くまで屢々物を贈るは、何等かの野心ありて、我が地位と信用とを利用せんとする下心にはあらざる無きかなど、意外の邊に氣を廻して、却つて我れを危みおそれ、また侮蔑と、爲めに遠ざけらるゝ場合無しとせざればなり。若し斯くの如き場合に至らば、これぞ世にいふ「親切が仇」に爲るといふものにして、世にこれ以上の迷惑と損失は無かるべし。故に若し我れより高貴なる人に向ひて、贈物の必要ある時は、可成く高價なるものを避けて、寧ろ趣味ある書籍、繪畫など云ふ向きの、價ひ些少にても久しきに堪へ、日常先方の目に觸れて、永く我が交誼の紀念たるべき物品を進呈するを以て策の得たるものなりとす、人々心爲給ふ可し。

▲其　七

總て我が身より卑しき人に對しては、決して爭論す可からず。何んとなれば彼等を捕へて爭論しても、勝ちてさまでの利益は無くして、負くれば世上の侮蔑を受くること極めて大なり。また我が威權の强きに乘じて、彼等を猥りに叱責するが如きことある可からず。少しばかりの過失ありとも、彼はもと我より低き地位に身を置きて滿足するものなれば、常に憫みの情を加へて、温言以てこれを諭し、善きに〳〵と導くべし、斯くすれば、彼等も我が德に厚く懷きて、決して厚意に背くが如き事無からん。これ彼等を遇する萬全の道なりと心得可し。

▲其　八

また我れより下賤きものに交はるに當り、餘りに親

密ならんとすれば、人は極めて恩に馴れ易きものなれば、辱なしとは思はずに、却つて此方を輕く視るの心をば起さしむ。さればとてまた餘りに嚴しく待遇へば忽ち此方を怨むに至らん。こゝを善く辨へ居りて、寛和、嚴酷よくその中庸を取り、親切ならんことを旨として、寛和に過ぎず、嚴酷に失せぬやうに交り行くこと緊要なり。また卑しき非人乞食などに對しても、身分ある人は、決して決して罵詈輕侮の言語を用ひ給ふ可からず、もし過ちて斯くの如き擧に出づる時は、悔ゆとも甲斐無き事ある可し。若し又た奥さまにして、下婢などに向ひ、一



社交界の一日(10)

時の怒りに乘じて、罵詈輕侮の言語を放ち、彼等をして怒らしめ、反對に若し彼等の口よりして、罵詈輕侮の言語を受取り給はゞ、實にこの上の恥辱は無からん。また然る奥さまは、決して賢女にはおはしまさぬこと明かなり。搆て心し給ふ可し。

要するに、交際法の要訣は、一ッに親切に在り、誠實に在りと知り給ふ可し。若しこの二ッを欠く時は、如何に巧みに人の心を攬らんとするも、それは匂ひ無き花の如きものにして、決して巧みなる交際法とは謂ふ可からず。ゆめゆめ箇中の消息を誤り解し給ふこと勿れ。(終)

讀書と交際

巖谷小波

▲人間が木の股からも生まれず、また石の間からも出ず、已に兩親と云ふ、同じ人間二個の間から出るとすれば、所詮人間は孤立の出來ぬもの。苟も此世に產聲を揚げた以上、社交的動物たるの運命を持つて居る事は、到底爭ふ可らざる眞理であらう。

▲己が兩親あつて、やがて兄弟あり。兄弟あつてやがて他人あり。かくて社會が複雜になれば、やがて社交も複雜となる。然るにこの社交を嫌つて、獨り引込主義を取らうとした所で、行者か仙人にても成らぬ限りは、とつても叶はぬ事である。

▲已に社交は人生の約束と、かう事が極まつた以上は、それに長じて愉快に世を渡るのと、それに拙くて面白からぬ日を暮すのと、何方が果して幸福であらう。

▲昔の聖人達が、安心立命の法を說き、仁義博愛の道を講じたのも、煎じ詰めれば、畢竟社交の法を說き、處生の道を講じたに過ぎない。思へば大切な事なのである。

▲大切と云へば、人として食を爲す、是抑も大切な事だ。が、人は「パンのみにて生きる事能はず」で、肉體の肥料の外に、また精神の肥料を要する、於是乎、敎育と云ふ必要が起つて、書籍と云ふ食物が出來、讀書と云ふ食事が起つた。

▲人間太古の時代には、食ふ斗りで事は足りたものだ。即ち肉體の肥料斗りで、氣樂に世が渡れたものである。然るに人智が開け、社會が進むにつれて、勢ひ精神の肥料を要する事に成つた。讀書の道の開かれたのが、即ちその證據である。

▲が、その社會がます〳〵開け、人智がいよ〳〵進むにつれて、勢ひ讀書斗りでは足りなく成る。其塲合、これを補ふに何を以てするか。余を以て云はしむれば、旅行と交際！　この二者こそ、彼の讀書と等しく、文明的人類に取ては、最も滋養ある肥料と信ずるのだ。

▲百聞は一見に如かずと云ふ。旅行の人に與ふる利益は、實に今更云ふまでも無い。殊に茲には別問題であるから、今は只交際に就てのみ、聊か卑見を陳べる事としやう。

▲抑も交際とは、自分以外の人に對して、感情を交換し、智識を融通する事である。然し余は之を目して、一種の讀書と云ふを憚らぬ。

▲人の心はその面の如し。十人十色とはよく云つたものだが、之を書物に譬へて見ると、面白いほど一々當てはまる――例へば無暗に理窟ばかり云つて、少しも趣味を解せぬ人、これは法律書の如きものか。

▲言ふ事が正直で、行ふ事も規帳面な、經書の樣な人もあれば、また口前が上手で、人情に通じて、面白をかしく人をあやなす、小説の樣な人もある。

▲風流韻事には長けて居るが、世間には一向疎いと云ふ、詩集の如き人もあれば、世間の事は何でも知つて居ながら、別に何等の見識も無い、字書の樣な人も居る。

▲歴史の如き、古い事をよく知つた者もあれば、また地理書の樣に、何所の國でもよく見て居る人もある、更に比喩を別に取つても、人と書物とはよく似て居るので。

▲文章斗り飾り立てゝ、內容の一向下らぬ書物は、之を輕薄な才子に比すべく、文字は稍ゝ難解でも、趣意に敬服すべき點のあるは、之を眞率な學者と見てよからう。

▲本にどうしても解らぬ本のある如く、人に何うしても氣の知れぬ人あり。書物に冗漫な書き方のあるのは、人間に愚念の入つた性質のあるに等しい。

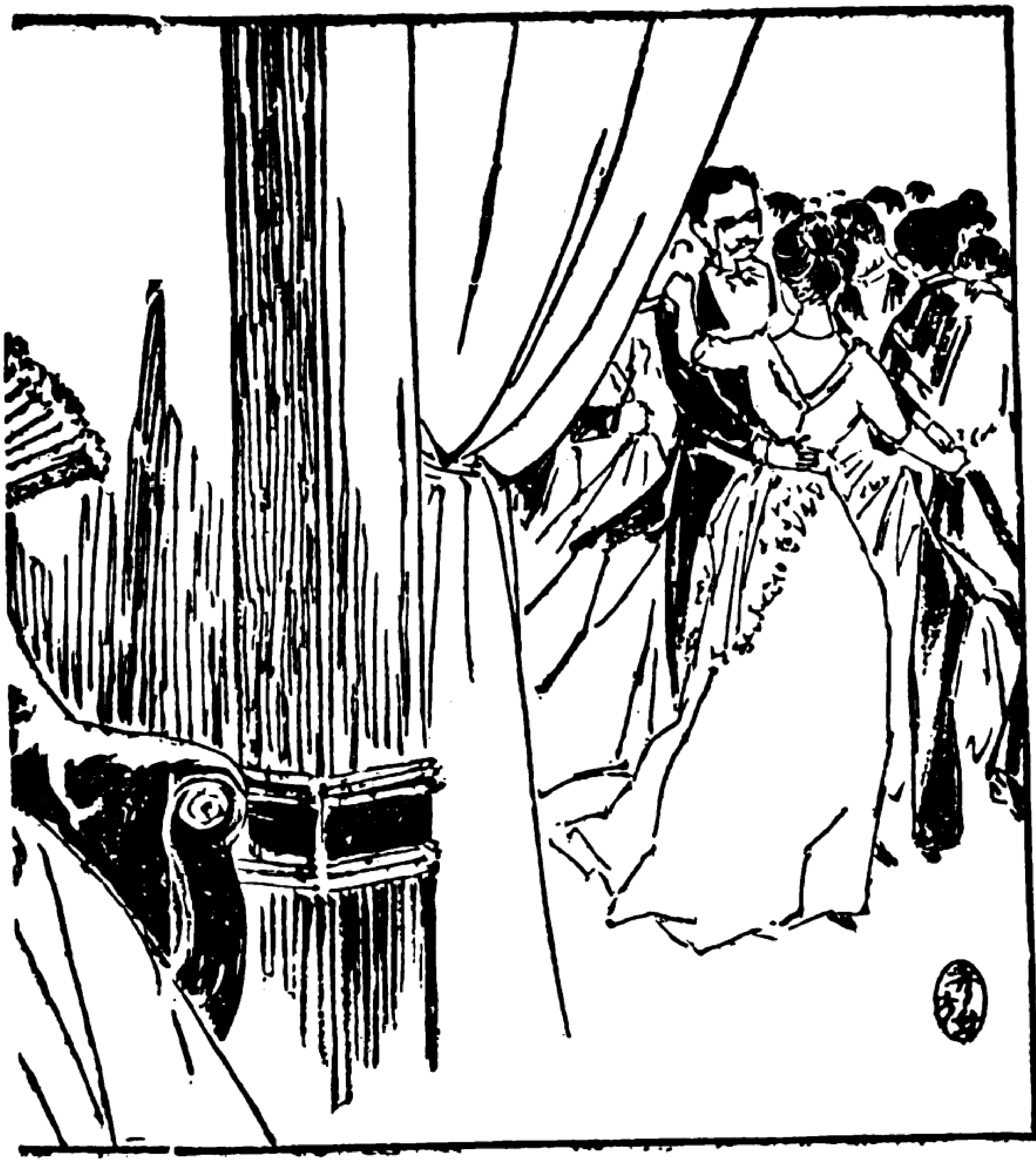
▲約らぬ本を讀んで、無駄に時間を費やすのは、下らぬ人と交際つて、餘計な暇を潰す樣なもの。之に反して、幾度讀んでも飽きない書物は、何遍會つても厭に成らない、氣の合ふ友達の如きものだ。

▲風俗を壞亂するか、治安に妨害のある書物は、忽ち發賣を禁止されたが、世間に害毒を流したり、他人に迷惑を及ぼす人間は大方牢屋へ入れられてしまふ。

▲面白くは無いけれども、讀めば大いに益のある本、此等は師とも見るべく、また畏友とも比すべきもので悪いとは知りながら、面白いのに未練があつて、つい讀み度く成る書物の如きは、畢竟恐るべき悪友であらう。

▲約らぬと思ふ本も忠實に讀んで居る中には、多少の利益を得るものだ。其の通り、氣の合はぬと思へる人にも、辛抱して交際つて居ると、早晩身の爲めに成る事もある。

▲本もあまり讀み過ぎると、つい時間を費やす斗りで、其割に役にも立たないものだ。交際もその通り、あまり手廣くやり過ぎると、手間と費用のかゝる斗りで、却つて迷惑の掛るものだ。



▲「悉く書を信ずれば書無きに如かず」と云ふ。悉く人を信ずるなら、寧ろ人と交際はぬが優しだ。書を讀むのに、その眞意を解するのが、最も大切である如く、人と交際するも、その眞情を解せぬ樣では、何の役にも立たぬのである。

▲讀初めが約らぬと云つて二三枚で卷を置うて、そのまゝ有益の書を讀まずにしまうのは

初對面の時打ち解けないと云つて、折角の善い人と、遂に懇意にならずにしまうと同じく、共に他日の後悔を招く。

▲自分の讀んで執心した本は、また人にも讀ませ度くなる、我が喜んで交際する者は、また他にも紹介したい、是は人情の然らしめる所で、共に惡い事では無い

▲名斗り聞いて居た時は、大層良い本と思つて居て、讀んでから失望する書物のあるのは、丁度世間の評判を聞いて、豪いと思つて居た人に、會つたらその眞價が知れて、忽ち愛想の盡るのと、全く趣を同じくして居る。



▲廣告で見れば、どんな本でも良書である如く、傳記を讀むと、大底の人が皆豪く成つて居る、否、その廣告は大方本屋か著者の手に成り、その傳記は、槪して材料が本人から出て居る。

▲本の序文を書く者は人の紹介をすると同じだ。然るに、序文の多くが無責任である如く紹介の多くも無責任であるから、決して油斷の成らぬもので、本に校閲あり、人に保證あるのも、矢張り五十步百步に過ぎない。

▲人はその讀む書物に依つて、その性行の窺はれるものだが、その交際する友に依て、その人物も判じられる。

▲世の虚飾家の多くは、讀めぬ書物を振りまはして、その博學を衒ふ如く、まだ面識も無い人を、さも懇意らしく吹聽する。

▲飛々にしか讀まぬものを、さも熟讀した樣に、頻りに引用したがる連中は、時々しか會はぬ人を、兄弟同樣に觸れ立てると同じく、畢竟自家に箔が付けたい斗りその心情や憫笑に堪へずだ。

▲さうかと思ふと、製本の體裁に依つて、何となく讀み度い氣の出る本と、どうも手に取る氣のしない書物がある。是は面相や服裝で、人に虫の好くと好かぬがある如く、皮相の見も甚だしい。

▲しかもある點までは、書物に體裁、印刷の美を裝ふ必要ある如く、人にも風采、服裝に、醜からぬを要するのは、勢の免がれざる所である。

▲更に具體的に比喩を取ると、書物に紙虫の食ふ事ある如く、人間にも虫の付くと云ふ事があり。本に落丁、端本の出來る如く、人にも落丁端本がある。現に本屋仲間では、ちと智恵の足らぬ者を捕へて、あれは落丁だと云つて居る位だ。

▲世に藏書家と云ふものがある。その多くは、只書物を多く持つて居る丈で、必しもそれを通讀しては居ない。彼の交際家と云ふものも、全く此類に過ぎないので。廣く人を知つて居る丈で、眞に深く交際つて居る人は、其實幾人ある事やら。

▲わが藏書目錄の中に、珍本のあるを誇るのは、自家の金蘭簿の中に、名士の名のあるのを得意がるに等しく。彼は一年に一度、虫干の時に一寸見る位なもの。是も同じく一年に一度、年始の際にお目に掛るに過ぎまい。

▲書肆と云ふものがあつて、盛んに書物を出版するのは、學校と云ふものがあつて、頻りに人才を養成すると、全く同一の觀があるが、同じ書肆から出た書物に賣れると賣れないがある如く、同じ學校を出た人才に

遇と不遇との別がある。

▲よく賣れる物、必しも良書で無い如く、早く出世する人、亦必しも人傑で無い。但し良書にして賣れぬ者人傑にして世に出ぬ者は、他日眞の讀者、眞の知己の出づるに當つて、一時に評判される事もあるのだ。

▲腹の痛い時、法律書を讀んだ所で、一向何の役にも立たない。人間とても其通りだ、その人相應の用に當らねば、少しも手腕を伸ばす事が出來ない。それをよく考へずに、これは役に立たぬ書物、これは用の足りぬ人間と、一概に斥けるのは酷な話だ。

▲昔感心して讀んだ本も、後には見るのも厭になる事がある。友達でもその通りで、十年前の親友が、今では他人に成る事もあるのだ。それはその本、其の友が悪いのでは無く、つまり自分が進歩して居るからだ。(時には退歩の事もあらうが)

▲要するに、人間と讀書とは、頗る似た點が多い如く、人と交際すると云ふ事は、恰も書物を讀むが如きもので、之に依つてわが精神の上に、少からぬ裨益を得る事は、余の信じて疑はぬ所である。

▲さりながら、只書を讀むにも、目で讀むと心で讀むとがある通り、人と交際ふにも、口で交際ふのと、心で交際ふのとある、否、眞の讀書は心で讀なのだ。眞の交際は心で交際ふのだ。

▲また食物を食べるのにも、口で食ふのと、胃で食ふのとある。口で食ふとは、只口先で味ふ斗り。胃で食ふとは、それを眞に消化する事だ。消化しない食物が、何で身體の滋養に成らう。

▲所でこの消化と云ふ事が、讀書の上にも交友の上にも、又最も大切な事だ、書物を消化するとは、その眞意を十分に解して、その眞否を批判する事であるが、人物を消化すると云ふ事も、その人物の眞價を解して善惡長短を觀察するにあるのだ。

▲先にも云ふ通り、「悉く書を信ずれば書無きに如かず」で、凡そ書に記してある事は、一から十まで眞理とも限らぬ。人とてもその通り、長所もあれば短所もあり、美質もあれば惡癖もある。

▲さればその美質や惡癖、長所や短所をよく知りて、それと交際するならば、決して過失は無いのであるが只頭からその人を信じて、うか〳〵之に親しむと、飛んだ鼻を明かされるものだ。

▲已に其批判の眼を以て見れば、讀書の趣味が一層深くなるが、又觀察の覺悟で交際ふと、交際ほど世に面白い事は無い。而もその批判や觀察が、やがて、自身を大に益するので、所謂消化作用とは、此點を云ふに他ならぬのだ。

▲所詮交際と云ふ事は。世態人情を研究するの、活きた教育學に相違無いので、此點から推して行くと、自分以外の人間は、貴賤、長幼、男女の別無く、悉く教科書と見て可なりだ。

▲が、その教科書なるものは、學校の教科書とは異つて居る。云はゞ獨修の參考書に近い。已に然りとするならば、之を咀嚼し、消化するの能力は自身に豫め備へねば成らぬ。

▲さて、咀嚼、消化の能力は、何に依つて養はれるかと云ふに、彼の書物を讀む者の、多く讀めば多く讀む程、讀書眼の進歩する如く、多くの人物と交際て、多くの人物を觀察する中に、自然と養ひ得られるのである。

▲眞の博識は、眞の讀書家に在る如く、眞の通人は、眞の交際家の中に存する。多くの書を讀むのは、無論自己の智識を高める爲めだが、多くの人と交るのは、畢竟自己の見識を進めるの道だ。

▲但し、徒らに多きを貪つて、書を讀むにも、人と交るにも、只皮相のみに止まるか、若くは機械的を出ぬ樣では、何等の德も無い斗りか、寧ろ害を招く事がある。

▲要は眞に書を讀み、眞に人と交るにあるのだ、斯て眞の讀書眼を備へ、眞の交際法に長けてこそ精神は圓滿に發達して、人生は趣味あり、社會は愉快な者と成る。

▲終に臨んで、余は今一度繰り返へして云ふ。交際は一種の讀書である。讀書は一種の食事である、交際をせずして人智の發達を望むは、猶食事せずして人身の成育を待つが如く、誰か其迂を笑はずに居やう。(完)



社交界の双璧

△　△　△

鍋島侯爵夫人

昔しは三十五萬石の大諸侯、今は聖上の御覺へ芽出度き帝室の式部長として時めき給ふ舊の肥前藩主鍋島侯爵の令夫人である、名望といひ、地位といひ、富といひ、交際社會に立つものに是非なくて叶はぬこの資格は夫人の御家に備はつた人爵の德、それに加へて、學問、經歷、才智、辯舌、愛嬌、人望、これ等の資格は夫人の天稟、この人爵の德と天稟の能と相竢つて現代の交際社會に燦然たる花を咲かすもの是れ實に鍋島侯爵夫人の御身の上にあらずや、婦人は舊公卿華族の(廣橋伯爵家)家に人となりて此の大家に嫁し、結婚後間もなくして良人に伴はれ伊太利の公使夫人として遙々羅馬の都に赴かれしは、後來夫人が交際社會の花として立てらるゝ聲譽の始めにぞある。

流石に夫人は伊太利の交際社會に花を咲かせし程ありて、其應接振りは如才なく、言葉は多からねど、又少なからず、多人數の席などにては萬遍なく誰れ彼れとなく言葉を交はして親しみ睦まるゝは中々に大諸侯の奥方としては勿體なきばかり、擧止優美にして應接に巧みなる確かに貴夫人中の大立物とやいはん、以前

は此の夫人と毛利公爵夫人を並べて貴婦人中の名望家となせしが毛利夫人は良人薨去以來隱居の御身分となられ、交際社會に立ち交はらるゝ事自然と足遠くなりて以來は專ら此夫人の御世話振に待つ事多しとかや。

夫人は流石に社交界の名物なり、公共の事は勿論、何にても依賴さるれば快よく承引たまひ、厭な素振を見せぬ方なれば公私の事に依賴する者常に絕へず、爲めに中々忙がはしく、さどれ、成可くは依賴者の滿足するやう、心を盡さるゝは流石なり。

夫人は極めて多藝の方にて和歌、音曲、繪畫の一と通りに通じたまひ、殊更管絃には堪能にして、笙と箏とに長じ、先年芝離宮にて雅樂の御催ふしありし節皇后陛下の御物たる樂器を手にして吹奏されしとか、又舞踏は御手のものにて、天長節の夜會の折など各國公使の夫人令孃等をして屢々羨艶の念に堪へざらしむるものありとか、兎に角夫人は萬藝に通せる交際家といふべし。

此の如き社交的婦人にして猶裁縫糸針の丹青深かしと言はゞ誰れしも信せざるべきが、夫人は實によく是れを婦人日常の務めとして又何よりの樂しみとして針持ちたまふこそつゝましき御心掛とや言はん、夫人は暇あれば和歌を詠ずるか針仕事するかの二つなりとて令息、姬方の着物は殘らず自分で縫ひ又折々は帽子なども拵らへたまふと。

夫人は其位地名望よりすれば貴婦人中の貴婦人なれども、其の平生は極めて質素にして、又よく平民的なり、紹介さへあれば如何なる人にも曾て面會を謝絕せられし事なし、面會の折は夏向などセル地の單衣くらいにて應接間へ出て決して人を待たす事なし、又其の子女の敎育に就ては深く心を留められ、先夫人の出と、夫人の出と併せて十二人あり、邸内に一家屋を設け、そこに敎師を雇ひ置きて寢食を共にせしめ、朝は香の物と汁に限り、晚食のみ魚をつけるなど、決して奢りがましき事なく、又令息の通學にも大風雨の外は人力車にて學校の送り迎などせし事なし、又過日一愛息を日比谷中學校の福井敎諭の宅に預けられしに同家にて

は大名の若様とて特別なる取扱はせず、矢張他の書生同様に取扱ふを、家扶などあまりの事とて夫人に申せば、夫人は一旦教育の爲めに預けしからは、取扱ひは藤井氏の一存にあり、書生扱ひとて決して厭ふ所にあらずと申されしよし。

鳩山春子夫人

交際社會には立物といふのと、世話役といふのと兩方あつて、どちらも缺ぐべからざる必要人物であります、立物といふのは名望、地位、或は爵位などがあつて、まづ第一流の家柄たるべく、何々會長、何々總裁といふ様な地位に持つて來て何人も不足を言はぬ様な人格のある人である。けれども世話役といふのは、德望や、地位は第二流でもよい、如何にも不斷の交際廣く、立ち廻つて何事にも融通の利く、萬般取捌きの早い器量人、一と口にいへば世話燒きといふ様な人である、斯る人は會務の實際に當つて事務の總轄をし、會長を助けて種々なる會務を辨ずる人、交際社會に於て是非斯る人がなくてはならぬ、毛利、鍋島の公侯夫人が前者の代表者であれば、鳩山夫人、松前夫人、山脇夫人の如きは後者の代表者である。年齡も若く、新智識もあり、勉强家で、そして、如何なる方面にも融通の利く人でなければならぬ。

現今の交際社會で鳩山夫人ほど學問あり、見聞あり、又交友の間の廣い方は澤山ありません、良人和夫博士は、現今法律家中の元老とも言はるゝ方であるが、法律家とか辯護士とか言ふ職業は日本では左程高く見られない、寧ろ唯學者といふ方が大いに名望がある様に思はれる、併し鳩山氏は博士とか、代議士とか大學長法律家とかいふ肩書よりも遙かに偉大で又遙かに立勝つて居る様に見へるのは畢竟其の經歷に價あるからである、鳩山氏は一度び憲政黨内閣で外務大臣に擬せられたのを春子夫人が内閣の前途を洞察して辭退せしめたといふ事である、眞僞は知らねど、鳩山氏の名望は既に大臣以上である事は爭ふべからざるものである。時勢一轉春子夫人の交際社會に第一流家として目さる

ゝの日又遠きにあらず。

乍去世間は單に交際家としての鳩山夫人を知るのみで、交際家以外の鳩山夫人を知らざるを憾む、鳩山夫人は交際的夫人であると同時に又立派な家庭の主婦である、見よ鳩山夫人には六人の令息、令嬢がある、而して夫人は是等の子寶を完全に育てあげんとて朝夕一方ならぬ骨折をされるのである。鳩山夫人は人間最上の快樂は家庭にあり、婦人最大の責任は家の務にありてふ格言を信じられて居るの人で、又實際その通りを希望されて居る、故に夫人は小供達の成長した曉若し好成績を見ざるに於ては是れ主婦たる者の責である、幸いに望む處ろの人物とならんか、是れ婦人畢生の事業を成功せしめたもので、何等の榮譽も何等の功業も之に代はるべきものはないとして常に自から語り居られる、それ故子供の事は一切萬事身に引受けて少しも良人に心を勞せしめず、食物には最も注意して十歳までは、酒煙草は勿論の事、茶、コーヒー、辛子の如き興奮的刺激的の物は一切嚴禁して與へられません、夫人の生地は信州松本、嚴君は同地の藩士渡邊某と呼び、縣の大參事を勤められた方で、漢學に通じ極めて嚴格な家庭であつたから、夫人も幼少の折から祖母の薫陶を受け十歳の頃早く既に四書五經の素讀を受けられたほどである、間もなく上京して日本女學校の元祖たる竹橋女學校に入り、こゝで三年間ほど英學を學び、やがて卒業といふ頃、即ち明治七年に女子師範學校といふものが創立された、自然竹橋女學校は廢校となつたこれが即ち今の高等女子師範學校の前身です、夫人は竹橋女學校よりこの女子師範の方へ轉じて明治十四年同校第三期の卒業生として始めて社會へ出られたのである、序に同校初期以來の卒業生で知名の方を調べて見ると

△相馬陸子(子爵夫人)、佐方鎭子、小具貞子(愛住女學校長)(以上十二年卒業)△竹澤里子(共立女學校長)、有賀長子(有賀博士夫人)、武田錦子(以上十三年)△喜多見佐喜子、鳩山春子(鳩山博士夫人)、古市幸子(工學博士夫人)(以上十四年)△谷田部順(谷田部博士夫人)、後閑菊野(華族女學校教授)、三増とも子(在朝鮮領事夫人)(以上十七年)△塚本はま子、安井てつ子(暹羅招聘中)(以上廿三年)△井口あぐり子(女子高師教授)渥美千代子(以上廿五年)

高等女子師範が女秀才を社會に出した事實はまづこれで大凡を察する事が出來やう。

夫人は鳩山氏へ嫁がれて以來專ら內助に務められ良人は一體磊落で物に拘はらぬといふ氣質であるから、家計萬般は勿論法律事務所の會計の如きも一々目を通し、訴訟用の手紙の往復までも自身筆を執つて辨せられた位であつたとか。



夫人の手蹟はあまり立派ではないが、文章は中々達者で、議論文など筋の立て方、黒人も及ばぬほどであ

る、遊藝には格別趣好はないやうであるが、音樂はお好きでもあり、又御上手でもある。

夫人の理想は前にも述べし如く家庭を圓滿にするといふにありて交際社會に立入つて公共の事に務めるのは其の餘暇を利用してすべき事と常々言はれて居るのみならず、實際又其主義を執られて居るのである、世間往々鳩山夫人を以て内を外にするハイカラ交際家と思ふのは大なる誤りである、偶々斯く見えるのは、夫人の天性義氣に富み、公共の事には隨分骨身を挫いて奔走されるからの事である。

夫人は天性愛嬌に富むと共に又大に義俠心に富み、人の依頼は成可く承諾して其人に滿足を與へる事に務められる、夫人の如きは實に當今の交際 社 會に缺くべからざる花役者である。

凡て常識の乏しい人は折角學問しても、物事に迂遠で、今日の世に何の仕事もできずに、大切な生涯を誤解、邪推の中に過ごすやうなことがある。だから常識に富だ、俗に善わかつた人を造ることは、必要です。特に交際場裏に立ち、他の長所を認め、之を容るゝ雅致に豐かなのは、常識の發達したお方に限ります。剛毅、自信などゝ申すやうな德は、勿論結構ですけれども、客席で席を列しながら、先方から挨拶しないのに、こちから口を開くは、何だか不見識だと思ふやうな頑固連が少くありません。

當代名流の面影

大山侯爵夫人

夫人は滿洲軍總指揮官として威名赫々たる大山大將閣下の令夫人である、夫人は實に海外留學生の魁で、津田梅子、瓜生繁子の諸孃と共に米國に留學せしめられ、在學中も成績は殊に見事で、屢々米人に舌を捲かせたが、後ち彼の地の大學を優等を以て卒業するに及んで、其の大學にては異邦人にて斯かる優等生を出したるを名譽とし、夫人の肖像を講堂に掲げたといふ位である、何しろ十歲の時からの留學であるから、學卒へて歸朝した當分は、まるで日本語を忘れて了ひ、英語で遣付られたので、人々は非常に珍らしがつて大持てに持て條約改正の爲めに夫人を歐米に派して到る所に演說せしめ、日本の文明に見て條約改正の急務なるを絕叫せしめたらば妙だらうなどゝ主張せし者も在つた位で、夫人の才名は朝野の人士間に喧しいもので在つた、然るに其後大山 巖 將軍と華燭の典を擧げ

て以來は、處女時代の潑剌はなくなつたが、其の代り上流の交際社會に立つて、文明的の新手腕を揮はるゝ所から、評判は益々高いのである。殊に日露開戰以來は、篤志看護婦人會員として、澁谷の赤十字社及び豫備病院に勤められて、軍國の事に盡力して居らるゝ其の働き振は實に目覺しいもので、敬服の外はない、又た宅に在らるゝ時は、絶えず外國の雜誌などを見玉ひ、時には日本の上流婦人界の景況を書いて送らるゝ樣の事もある相です。

夫人は至極捌けた方で、或人が此頃伺つたら、「世間の人は私共が病院で繃帶を洗つたり、御飯の持運びをしたり致しまするのを、大層變に思ひなさる樣ですが、私は宅に居りましても隨分勝手へ出て世話女房を氣取ることがあるんで御在ますからチ……ソレニ病院が面白いもんですから、ツイ時間が後れまして、遲くでもなりますると娘が心配して迎ひに來て與ます」と仰有つた相ですが、之に依て見ても夫人の平生のまめ〳〵しく入らッしやること、而して看護事務には別して御熱心のことが分ります。

青木子爵夫人

前外務大臣青木周藏氏の令夫人獨逸小貴族の姫君である、名はエリサベタ、良人が明治の初年獨逸公使館へ在勤中、交情相睦みて遂に伉儷の典を擧しなりと。其時夫人は二十三歲、數ふれば早三十年の昔しとはなりたり。されど子爵夫人とし公使夫人として久しく獨逸にあり、又歸朝以來も多年良人と西洋流の生活をしつゝけられし故にや、日常萬事が西洋風なれば、結婚後三十年を經るも中々に日本化されず、宛然たる獨逸の老婦人なり、語は勿論、朝夕の食事、其外すべて洋風なれば、箸の持樣さへも極めて無器用なりとされど婦人が交際家として良人を助け。多年社交界にありて名聲嘖々たるは矢張世界の富强たる獨逸貴族の出なればなり、其交際範圍は多く外國人にして日本人の間には割合に少く、語は英佛二國に通じ、殊に佛語に熟達し、交際季節には一週一度接見日を定め、各國公使

婦人の訪問を受け、又答禮に行く等殆んど閑暇なき様なり。

夫人は嗜好とて別段の事はなけれど唯美術を鑑賞するの眼識高く、日本に歸りて以來佛像、佛畫を愛翫し、時には京坂地方を漫遊して名ある寺院へ詣で、佛具を拜觀して樂まるゝといふ。

奥村五百子女史

日本に於ける第一の婦人團體として、會員四十萬に登り、赤十字社に次げる大なる會として知られてゐる愛國婦人會の抑々の初めは、此の奥村五百子女史によりて首唱され、又た現に經營されつゝある事は、諸君の疾うに御承知の事であらうから、今更餘計な事は申上ぐまい、けれどなほ詳しい事を御存知ない方もあらうから、大體をお話しするとしやう。

先づ愛國婦人會にお在の時の女史の扮裝を見るに、長はスラリと高いのに、髪は切下げとやらで、綸子の白兵兒帯やうの物をグル〳〵と腰に捲かれ、その上にセルの前垂を掛けてゐなさる所を一寸拜見した許では、何處の田舎婆さんかと、マア申上たい位の者で、此の方が愛國婦人會を脊負つて立てゐる奥村女史とは何うしても受取れぬ程である。

『私が奥村であります』

といふ挨拶もなされば、

『私が奥村の婆々であります』

と快濶に挨拶することもある。

『癈兵院を拵へるなんて柄にない、……。此の婆々駄目だと言ふたら、何うしても駄目だのに、……知事が何んて言はうが、書記官が何んて言はうが……』

萬事此の調子で、擧措もすべて此の意氣込であるから、愛國婦人會も今日の盛大を致したのである、一體女史は何處の産で、どういふ經歴のある方かと申すに、素と九州は肥前唐津の光徳寺と云ふ、東本願寺の末寺に產れ、幼少の頃より極く勝氣の、才はじけた質で在つたが、今より恰かも三十餘年前の事、國内は勤王派と佐幕派とに岐れて、天下亂麻と亂れた折、女史は

未だ僅に十七歳といふ當の年頃で、今で言へば廂髪の式部盛りで在つたが、朱鞘の大小を帯し、深編笠に義經袴といふ凛々しい扮裝で、供をも連れず唯だ單身、長州の宍戸侯へ使者に行かれた由、其後鯉淵彦九郎といふ人の所に嫁し家事を司る身と成られたが、西南戰爭の折には、良人と共に薩軍に加はることに成つた、然るに此の時實の兄君の官軍に在るを聞かれて、甚く之を憎み玉ひ、如何にもして之を暗殺せんと企てし如きは、男子も及ばぬ勇氣で、婦人には珍らしい氣象であつた、近年に成ては朝鮮の亡命客金玉均及び朴泳孝の徒を庇つたとかで、一時は女政客とまで謠はれた位、日清戰役後は朝鮮に渡つて實業敎育に盡力あり、又た彼の明治三十三年北淸事變の際には東本願寺の導師大谷瑩相師に随行して、北京城内大應府に開かれた戰死者の追弔法會に臨まれ、そこに於て痛く戰死者の忠靈に同情を寄せたが本原で、歸朝後貴顯紳士の間を說き廻り、遂に今の愛國婦人會を興すに至つたので、其の今日の盛大あるは一に女史の熱心と勇氣の結果に外ならぬのである、要するに女史は交際家といふべき側ではなくて、寧ろ事業家の方であらう、兎に角一代の女傑たる價値は失はぬのである。

三輪田眞佐子女史

女流學者の耆宿として、將た又た德望ある老婦人として、婦人界に重きをなして居る所の三輪田眞佐子先生は、誠におだやかな、禮儀正しい、而して嚴格な方である、近年は御自分で女學校をお有ちですから、一向交際場裡へは出られぬが、然し方々の婦人會から出る會の主意書とか云ふものは、殆どすべて此の先生の手に成るものだとかいふことを聞いて居ます。

先生は何時でも切下げ髪の極く質素な扮裝で、黑の袴を着けられ、他の女敎師方と一緒に机を並べてお在なさるあたりから、御見受致しても、日頃の御氣象の程があらはれ、何となく嚴格で犯し難き御樣子が見えるのです、ソレに先生の應待振は、古風だと惡く言ふ人もありますが、洵に丁寧なもので、談話の調子など

も優しく、女らしく、殊に婉曲な丸い言ひ廻しは、一寸當世婦人の眞似難き所で、流石は造詣が深く入らッしやるからだと、お目に懸る度毎敬慕の念を禁じ得ぬのであります。

ミセス、コーツ

今、明治母の會の長をしてお在でのコーツ夫人は、元と麻布鳥居坂の東洋英和女學校に教鞭を執つて居られた方である、其の頃は未だ獨身でミス、コーツと謂はれたので在つたが、其の後一身上の都合から歸國せられ、間も無く良縁ありて結婚し玉ひ、ツイ近頃また〱日本へ來られた所、以前御自分が可愛がつて教育せられた令孃方は、何れも身分ある紳士方の夫人と成つて、早や子供さへ設け玉ひ、御自分も亦たミセスと成つて、再び日本へ渡來し、茲に更めて在りし昔を偲ぶ身と成られしに就ては、子弟の恩愛忘れ難く、殊に己も今は子供有る身であるから、舊情を暖むる手段として、育兒法の研究や、家庭の實驗談を話し合つたなら、嘸ぞかし面白くもあり利益にもならうとの思立から、自ら發起者と成つて、明治母の會なるものを建てられたさうです、扨て交際に就て夫人の語らるゝやう、

「どうも日本の御婦人方は、遠慮勝でいけませんよ、私などはお馴染の深い方でも、初對面の方でも一切構ひませんで、ドシ〱御話し致します、……この方は厭な方だと思ひましても、折角お入來下すつた御厚意を思へば、御機嫌よくお歸し申すのが、一家の主婦の務めであらうと思ひますから子、ソレニ外來のお客様を快く上手に待遇すといふことは、何う致しましても、旦那様よりか奧様のお腕に在るのですから、貴女方は交際を上手に遊ばさねばなりませぬ、御客様を上手に取扱へない位の人は、旦那樣の御機嫌を伺ふことも出來ますまい、と宅へお入來の奧様方に向つて能く申すので御在ます」

恁んな調子であるから、夫人は何處の誰が訪ねて來ても、快く御會ひになり、厨房が拜見したいと言へば悦んで案内なさるし、又た御願ひ致せば西洋洗濯の方

法まで話して下さいます相です、故に夫人を知る者は皆な珍らしい方だと言つて讃めぬはない、おすまひは小石川上富坂の上で、コーツ様と尋ねれば直ぐに分かります、因に申添へますが、女學世界第五卷第十二號に小兒の摸範服と題して、男女十二名の小供の寫眞が掲載しあるが、其の摸範服なるものは、全く此のコーツ夫人の主宰して居らるゝ母の會の裁縫部に於て縫ひ上げた物で、左側から二人めの可愛らしいお子さんは、實に夫人の愛孃であるのです。

矢島楫子女史

女史は女子學院長として、日本婦人矯風會頭として、又た明治の婦人社會に一異彩を放つ所の女性として、其の名の世に知らるゝの人である、女史は今年六十九歳の老年で頭には白髮を交ゆると雖も、矍鑠として腰も曲らず、元氣も衰へず、壯者を凌ぐの勢を以て、身邊に集まる公私の事務を處理し行かるゝ辣腕は、慥かに尋常の婦人の眞似て眞似られぬ豪い所で、敬服に堪へぬ次第である、女史の交際振は極めて公平で、何人に對しても容易に胸懷を開いて、物優しく語るといふ風であるから、一度其の温容に接する時は、何となく景慕の情を發するのである、けれども女史は要件を語るに言葉少なで、お世辭に乏しい所から、初對面の人なぞには附が惡いやうだ、其故或る記者の如きは女史の應待振を評して、

矢島楫子女史は來客を二組も三組も應接間に通して扨て貴君は、貴孃は、と一二三と片方から用向を聞いていきなさる風で、褒めて言へば極くきまりの良い遣り方ですが、貶して申せば御醫者様が一人々々患者を診察室に迎へると同じ様な態です。

と惡く言ひますけれど、是は未だ其の眞人物を知らぬからで、よくお附合して見れば、識見も高く、品位も高く、又た同情のある方といふことが分ります、

女史は平生言葉少なであるが、決して談話に富まぬのではない、一度矯風會其他の集會に出でゝ、意見を吐露する段になれば、豐富なる思想は秩序正しき雄辯

となつて現はれ、殊に其の沈着いた態度といひ、ふくらかに重みある言葉といひ、聽者をして自然と心を他に散さず靜に耳を傾けしむるに至るといふ、而も其の語る所は實際的で、凡て事實の上に所感を寄するといふ風であるから、誰にも分りよく、男女を問はず一樣に利益と興味を感ずるといふことである。

女史は實に斯の如く異彩ある人なるが、特に吾人の敬服する點は、既に古稀の高齡に達する身にも拘らず、進歩的思想を有つて居らるゝことで、後進者を指導する遣方も、他とは大に趣を異にしてゐるのである。

秋元子爵夫人

夫人は子爵秋元興朝氏の令夫人で、是まで餘り交際社會には出られなかつたが、近頃創設の神田婦人會の會頭に推されてからは、餘程御忙しい樣子である、夫人は談話好で、殊に女子教育に對しては仲々確固とした意見を持つて居らるゝさうな、夫人の交際振に就ては、曾て某婦人記者の言へることあり、曰く、

華族樣方は兎角玄關の敷居が高くて、何うも御訪ねしにくいものですが、此方樣ばかりは洵にチヨクで御氣が輕いから、伺ひ善いので御座ます、但だ此方樣にお目に懸ると、お話を承はりますよりは、寧ろ此方からお話し申上げるやうな場合の多いには少々困ります、例へば甲の婦人會は何うの、乙の音樂會は何うのと、此方で知つて居さうな事をお質問になります故、御訪ね申します折には、前以てお話し申上げて材料をウンと用意して置いて、夫れから一應御都合の程を伺ひ、扨て時間を定めて御面會を願ふやうにして居りますが、お辭申上る時には何時も〳〵玄關先まで丁寧に御見送り下さいますには實に痛み入ります、と。

中山幸子刀自

此の方は所謂交際場裏の名花などゝ持囃される方ではないが、丁度實業界に於ける澁澤男爵のやうに、交際界に於ては元老株で、何れの婦人會にも干繫せられ、而して其の會に重要な人物として立てられ、隨分と活

働きもすれば、又た助力も與へる、寄附もする、意見も吐くといふ風で、謂はゞ女の腕利者と云ふのでありませう。

刀自は是はと見込の附くとなら、百でも二百でもお金はドン〳〵出す方であるが、反對にイケナイとなると、誰彼の容赦なく、頭からけなして了ふ、其故愛國婦人會の評議員會の席上で、佐藤樣(陸軍少將夫人)や奥村さんに劍突を御見舞ひ申す婦人は、此の中山のお婆さん許のやうに噂されてゐる、扨て其の交際振はと云ふに、至極サッパリとした方で、貴婦人だからとて、町の女房だからとて、敢て分け隔てをなさらず、一樣に應待なさるには感心致すのである。

古市幸子夫人

京釜鐵道總裁工學博士古市公威氏の夫人である、餘り交際社會には顏を出さぬ方であるが、其れでも本鄕區内には大した勢力を有つて居て、現に慰問婦人會の本鄕支部幹事と愛國婦人會の評議員とを兼ねて居られる、一寸夫人の談話振を寫すと、

「私なぞは一向口不調法でござんすから、評議員など勤めて居りましても、ホンの名ばかりで御在ます……小供が十一人もありますので、仲々宅の方が忙しう御在ます故、會なども這入るには二十近くも入會つて居りますけれど、謂はゞ名義ばかりで唯だ會費だけ出して濟まして居るといふ樣な、洵に不義理な次第で……。」

ト、こんな調子であるから、大層お付合が仕易いとは夫人を知るものゝ一樣に言ふ所である。總じて奥樣方には、御交際の度が重るにつれて、初手から見ると挨拶振なども少々づゝ異つて參るといふ風があるが、此の方に限つては微塵も這麼ことなく、始から終まで前後一貫、同じ調子で押通されます、又た交際に拔目のない婦人といふものは兎角こせつく癖のあるものですが、夫人に限つては極く鷹揚で、而して又た氣が輕い、一寸例へて見れば、談話の中途に書物とか其の他の物で是非とも來客に見せたいものゝある折は、大抵

の奥樣ならお手をお拍になるとか、左もなくば呼鈴をお鳴らしになるのが普通であるが、夫人は斯かる場合に一寸失禮致しますと仰有つて、二度でも三度でも自分より座を立ち、決して女中を煩はすやうなことを爲ないといふ風である。

　夫人は何方かと云ふと遠慮勝の控目の方で、從つて交際社會に出勤するを好み玉はぬ質であるが、併し時折は瓢輕な言を言つて、來客を笑はせる事に得手て居らるゝが、こゝらは確かに夫人の交際上手な所であらう。

高木鐐子夫人

目下狀師社會に盛名ある法學博士高木豊三氏の細君である、同家に出入する某記者は夫人の口眞似をして曰く、

『私は近頃は外國婦人の外は一切御目に懸らぬことに致してあるので御在ますけれど、△△樣の奥樣から態て電話で御紹介が御在ましたので、……併しマアようこそ御入來下さいましたと云ふのが最初の調子で、少々勿體振つた應待の仕方ではあるが、附合つて見れば、ナーニ案外如才ないよ』と。

　夫人は一向交際社會へは顏を出されぬけれど、唯だ愛國婦人會の評議員會には、何時も缺かさず出席なさる程の熱心家であるとか、加之に談話に長けて居られて、會員中中山幸子さんに次いでの辯者であると承つては、流石に良人の御仕込の程も偲ばれて、一入床しさを增すのである。

原禮子夫人

金港堂主原亮三郎氏の細君であるが、よく良人を助けて、交際社會に活動する手腕は見上げたものである、女史の交際振は『ようこそ、御入來下さいました、恁んな隅つ處に住んで居りますので、突然御來車下さいますお方には、折々失禮致しますので、……幸ひ今日は宅に居りましたので、御目に懸れます、どうぞ御悠り遊して』と、ノベツ幕なしに話柄を續け、而して能

く客の意を迎へる事に長じて居られる相だ、殊に談話のうまいことは女史に逢た人の悉く稱する所である。芝の青松寺に正法婦人會と云ふ貴婦人連の佛教講話會があるが、此寺の方丈の言はるゝに、流石は金港堂の奥方丈あつて、能く金を使はるゝ様子、會のある度毎に、二三圓づゝはづんで『方丈様是でお煎餅でも……』なかと仰有るお如才なさ、今時の婦人には珍らしく感心な方だ、と、兎に角目下の交際社會に在ては有名な婦人である。

淸藤秋子夫人

淸藤秋子夫人の東洋婦人會に於ける關係は丁度奥村五百子女史の愛國婦人會に於ける干繫と同じである、夫人は實に東洋婦人會の首唱者で、會の爲めには一身を獻げて御盡力になり、又た全力を擧げて東西に奔走せられ、且つ目下は會の擴張の爲めに淸國に赴いてお在の由、其の御熱心は敬服の外ありません。斯う云ふ方であるから、平生の交際に於ても、服裝の如きは頓と御構ひなく、不斷衣の儘で客に應接するといふ風で、ソレニ至つて氣の輕い方であるから、取次の女中の間に合はぬ時なぞは、夫人親ら玄關先へ走り出て、客を迎へ、直ぐ其の足で應接間へ御案内なさる故、初めての御客などは、此の方が淸藤様とも心得ませんで、ツイ失禮申すやうなことが間々ある相です、ソレデ居てお談話は中々如才なく、男女の客に對して、愛想よく御もてなしになる手腕は、流石に老練なもの、事を成す婦人は何處か違つたものだとは夫人を知る人の言。

野中千代子夫人

夫人は前中央氣象臺技師野中到氏の夫人で、筑前藩の御抱へ能役者寶生某氏の令孃である、野中氏の父君は前控訴院の判事で維新の際には勤王家として福岡藩の志士であつた。千代子夫人は先年良人到氏を助けて富士山上に寒中越年されたほどの女丈夫で、物質的風潮の盛んな明治年間に敎育を受けた婦人としては一出

色である、到底彼の似而非西洋崇拜のハイカラ婦人とは日を同ふして談るべき人ではない、千代子夫人は實に古代日本婦人の粹なるもので、裡に貞烈、温淑、謙遜、優婉の美德を蓄へ而かも毅然として動かすべからざる志のある人である、氣慨があつてそして親切で、婦人に罕なる義俠家である、斯の如く夫人は國粹保存家であるから、あまり華でやかな交際社會などには出られない、寧ろ婦人の務は完全に家を修むるにあるものとの趣旨を身に體して、よく良人を助け、舅姑に仕へ、子女を敎育し、裁縫、料理より朝夕の洒掃に至るまで、自ら其の勞に服し、敢て下婢の手を藉らず、萬般の家務を一身に引受けて經營さるゝ其の心掛の麗はしくして忠實なる事到底彼の蝦茶式部輩の夢だも及ばぬ處ろである、夫人年歯既に四十に達せんとす而も容貌若々しくして三十未滿の人と思はれる、其平生は粗衣粗服、一見して田舍農家の婦と誤らるゝ位、而かも一たび、膝を接して談ずるや、諄々として談緒盡きず話の趣味に富み、又見聞廣く、經驗淺からず、學問は和漢に亘つて造詣する處ろ深し、文章は和文をよくし手蹟又頗る美はし、富士山越年の記及び、軍艦初瀨拜觀記など男子も及ばぬ達文なり、新女大學を撰みて某新聞に投ずるや、一時婦人社會に傳唱されたり、婦女通信の一記者夫人を評していふ。

夫人は交際社會の人としては兎もあれ、家庭の主宰者としては現代の日本に完全無缺の人と申してよろしい夫人來客を迎ふるや、常に微笑を湛へて萬事客のいふがまゝに聽き更に今時の婦人方のやうに出娑婆つたところがない、敷島の大和心をたづねたまふ婦人とは斯るお方を申すにやと思はれるほどなり、夫人は男まさりの女丈夫一天張で奧村女史も三舍を避くる剛の者かと思ひしに聞くとは反對にて實に柔さしく實に案外なりしのみならず夫人は又文藝の上に素養淺からず、歌も詠み、文もすら〳〵として書は尤も得意とや、故落合直文氏の手になりしと傳へらるゝ彼の「高峯の雪」と申す著書は矢張夫人の手になりしよし。

夫人が家政の事に關して注意深きは左の談話によりて知らるべし。

一家の繁榮すると否とは全く妻の心得如何にあると私は思ひます、而して其最も重なるものが三つあると思ひます、それは何かといふと第一に辛棒第二に氣輕く立働らいて身惜みをせぬ事、第三浪費を省く事、即ち是れであります、いふまでもなく家庭に風波を生ずる源は一は家内の人々の考の行違に基き一は金錢の不自由に基くものと思ひます、永年一緒に暮す内には時として考への行違もあるは已むを得ざる事で一體結婚といふものは最初妻が全く他人許りの内に一人丈け混り込むのです、是迄は全く別の家庭に居て、其風習に敎へ付けられたる者が、突然全く新奇なる家庭に混入するのだから其模樣は實に妙なものであります、然し此等は暫くすれば、互に氣心も知れ、其家風も會得せらるゝけれども、世の一般の有樣を見渡すに、其妻と舅姑との間柄は中々に產みの親子の樣には行かない樣であります、其上若い者と老年の者とは、其思想も自然に相違して、其情操も違つて居り、殊に過渡時代なる今日では、益相違が甚しいから、考の行違の偶にあるは誠に已むを得ざる譯だと思ひます、所で此考の行違つた時に、妻が一言にても不平を言ひ出せば無論のこと、然なくも其夫一人丈けにでも洩す樣のことがあれば一家の平和は何時となく破れて、何處となく陰鬱の氣が家に充つる樣になるのであります、それは誰もかも心の内に不平を抱いてゐて、之を公然と發表するといふ譯にも行かぬからであらうと思ひますされば、此のやうな禍毒を增さしめず、成るべくは始より斯る事を生せしめざるは、實に妻が平生の心得一つにあることで、此點よりすれば家庭を平和になすと否とは、實に妻の一身に懸つて居るものと思ひます。されば妻たる者は先づ我は此一家に於て、經驗よりするも智識よりするも一番下にあるもの、我心で無理なことを人が言ふと思ふは恐ろしきこと、勿體なき譯と思ひ、唯我心を以て我心を責む

ることが最も必要なことゝ思ひます、是れが即ち辛棒といふものでせう、辛棒とは唯他人を怨む心を外に發表せぬ樣勉むると謂ふではなく、心を以て心を攻むるを謂ふので、言ひ換ゆれば己に克つ事を謂ふのであります、斯くすればよし一旦不注意の際に不平の心が生じても、其不平を洩す筈なく、又心にて忽ち之を攻むるから、何時迄も腹ふくるゝ心地のすべき筈なく、そこで自身も自然に快活を失はず隨つて一家は平和繁榮を來す事と思ひます。

次に金錢の不自由は苦しきものに相違ありませんが妻の本職は主人より與へられたる金錢を、巧みに遣ふ事と勞力を惜まず立働く事にありますから、妻たる者は金錢を遣ふに就て重要なる心得が、即ち氣輕に立働くと浪費を省くにあると思ひます、氣輕に切〳〵と働きて長上の人が其心持を惡くする筈なく、又下女を使ふ家庭ならば下女も心持を惡くせず、自然に能く働くやうに爲り、自身は唯座り込んで一も二もなく下女計りを追ひ使へば、決して下女も快く思はぬ、浪費に關しては贅澤は言ふも更なり、日々の微細なることも不注意なれば不要の消費を眼に付かぬ間に多くするものですから、之を注意するは實に必要だと思ひます、斯くして一家の財政を圓滑にすれば、和氣の一家に盈つべきは確であるに相違ありません、然し浪費を省くは決して吝嗇なれといふではない、正當にして必要なる費用は、如何に多額なるも躊躇するなく出さねばならぬのであります、要するに凡て必要なる費用は皆綺麗に消費すべきもので平時浪費を省くは言はゞ只此の如き際に備ふるためと信じます。

以て知るべし女史が家庭に對する妻としての覺悟の確乎として信念の深きを。

佐藤靜子夫人

夫人は順天堂病院長で醫學博士で、陸軍々醫總監で日本刀圭家中の巨擘として有名な佐藤進先生の令夫人です、又夫人の父君は蘭醫家の泰斗として維新前後

雷名天下に轟き渡つた大博士佐藤尙中先生です、夫人は實に斯る大家に生れて、そして斯る大國手に配されたのである、むかし佐藤尙中先生の家塾に十數名の書生が居ましたがその中に一人蓬頭亂髮、敝衣、破袴、言語粗暴、居動猥籍酒を被つては人を打ち、罵り殆んど塾中の持てあまし者があつた、然るに此者いつしか大先生の愛嬢に想ひを懸け、心密かに戀ひ慕ふて居ましたが、大先生は蓬頭亂髮の平生を克く看られて此奴前途大に望みある奴と思ひ養子にして我衣鉢を嗣がせんかとまで思ひ居られしに、令嬢は案の定この亂暴を嫌ふて別に塾中の謹直家として衆中に人望ある一書生に想ひを懸けて居た、そこで大先生も一人娘の事故遂に此の謹直家に約婚を許し玉ひて程なく伉儷を結ばしめられたのである、即ち今の佐藤博士である事、是に至つて亂暴書生焉んぞ默視せん、大に憤慨して曰く、我れも男子なり、そめ〳〵他に戀を奪はれて成るものか、他日雷名を揚げて以て今回の屈辱を雪がざれば男子の一分立つまじと、それより塾を出で、一意專心勉强して遂に一大家を成せり、一大家とは何人ぞ全國數千の醫學生を養成して日本開業醫の淵叢と言はれた濟生學舍主人長谷川泰先生である、佐藤夫人の妙齡中には斯る奇談があつたのである。夫人は實に才貌兼備の人で、且つ事業を經營するの技倆に富んで居らるゝ事は近く女子美術學校を創始された事蹟に就ても是れを徵する事が出來る、夫人は又實に交際家として、有數の品である、而して其交際振りは外面華美やかでなくて其實華奢者も及ばぬ技倆があるとの評判、夫人をよく知る人の話に、夫人は一度應接間に通したお客を容易に歸さない、それは談話の趣味に富んで居られて、教育、衛生、美術、經濟、遊藝、何に限らず、一と通りの意見は乾度述べられる、又よく世間萬般の事に通達せられて男子も及ばぬほどの智見を開かれる、夫人の面會日は木曜日と定めてあるが、初面識の人には紹介狀がなければ御面會にはなりません、夫人の談話は快活といふ方ではないが、お話し振は巧みな方であります、又よく親切に人の御世話もなされる方ですが、

近來は家事向の御用多き上に學校の方の御用務も多く旁々御老年の事故交際社會に繁く出られない樣であります。

栗塚龍子夫人

衆議院議員辯護士栗塚省吾氏の令夫人である、本所區内第一の名望家、又交際家として何事も栗塚夫人が一人で背負つて立たれるといふ程此の區内での婦人肝煎役である、熱心で勉强で、又精力非凡で、婦人社會の奔走家としては彼の鳩山春子夫人と好一對である、鳩山博士選擧運動中は春子夫人自ら事務所に出張して運動部員を指揮督勵されるが、栗塚夫人も又良人の選擧運動に奔走し、いつも髯むしやの運動員をして後に瞠若たらしむる事がある、夫人を訪問せる一記者の曰く

「私は、毎度新聞で惡口を言はれる栗塚龍子です」とこれが夫人に會つた初對面の挨拶でした、大抵な者はこれで荒膽を挫がれて仕舞ひます、されど一度か二度、三度となり段々交際して見ると極く氣の捌けたよい方で、「應接の間は二階ですけれど此房が涼しくてようございますから」と氣輕く別室に案内してるて、來訪せる他客に紹介し此方は是れ〳〵の方、此婦人は斯く〳〵と一口丁寧に紹介され、「別に遠慮するやうな御方ではありません」などと極めて快活です、又或日などは奥樣は只今髮を結ふて居られますがとの下女の挨拶ありし時、案内されて入れば、今日は此所で御話いたしませう、失禮ですが私は此まゝ」と夫人の應對振は大抵斯のやうです。

婦人は愛國婦人會、慰問婦人會の本所主任で近頃は同區授產會の創立に就いて熱心に盡力されるそうです。

跡見玉枝女史

南畫の妙手として野口小蘋、奥原晴翠、武村耕靄諸女史と並び稱へられる巾幗丹靑家である、昨年夏セント、ルイ博覽會見物を兼て米國漫遊を企てしは婦人美

術家中傑罕なる抱負といふべし、漫遊中彼國の美術界の情況に就て大に見る處ろあり、歸來考案工風して一大畫を描き宮內省に獻じ、皇后陛下の御感に與りたりと傳へらる、女史元より美術家なり決して交際社會の人にあらず、されど多藝にして上流社會に交際多く名ある貴婦人中にて女史の門下たるもの尠からずといふ。女史を訪問せる一婦人記者の評に

「私の洋行中英語が出來ませんで、スペチ通辯に依賴しました慾うお婆あさんに成つてからは橫文字を學ぶ勇氣もございませんので」これは米國博覽會より歸朝されし當時土產話を聞かんとて伺ひし折の挨拶なりし、女史は熟面でも初對面でも少しも應對に異つた事なく、誰人に面會される時も袴を穿たずして逢はれし事なし、是れ其の丹精家たる所以もあるべけれども、婦人が人に面會するに着流しは失禮とせらる故ならん、女史の談話は巧妙といふにはあらねど、話趣に豐富にして、而かも觀察極めて奇警其米國漫遊中或る美術學校を參看し、人體寫生中妙齡女子が一心不亂に裸體の摸寫に務めつゝありしを見て一度びは驚きしも美術家の眼中よろしく斯くあるべしと大に嘆賞し、以て自己の識見を高められしと。

毛髮の黑く艶あるは美容の大半を占むるものなり、

毛髮の發育を盛んにし且つ其質を柔靭にして美はしからしめんとせば之が攝生法を講せざるべからずその要件は第一身躰の健康に注意すべきは勿論常に發生部の皮膚を淸潔にするを要す、左れば每週に必ず一回は毛髮を洗滌し、且つ旦暮に梳り其表面に香油を塗布して滑澤滋潤ならしむべきなり、又頭髮は理髮上の習慣に依りて損害を蒙るものなれば、髷は常に取替へて結ふに若かず、此點に就きては從來の髷の毛髮を固く結ぶものよりも、結び方の比較的緩やかなる束髮を優れりとす、故に儀式禮典等の場合は格別として、常は成るべく束髮にするが可からん、香油は性質の寬和にして粗惡なるものを、使用するとあらんか、毛髮は爲めに枯瘦脫落するに至るや必せり、毛髮を養ふに最も適せる油はアルニカ油及び椿の油とし其他植物性の油を精製したる香油にして善良なるものあり。

簪光扇影

枕袴子

▲公爵夫人岩倉久子

日本に於ける最も太なる婦人團體、會員四十萬餘を有する愛國婦人會に會長として、嘖々の盛名ある岩倉公爵夫人久子は澤伯爵(爲量)家の令嬢で、文久三年十一月京都に於て生れ、夙に才學兼備の聞え高く、殊に人を統御するの術に長けたは貴婦人には珍らしい程である。同會の役員殊に評議員會と云へば、會員が百餘名と有つて、其が皆當代著名の女流揃ひで、毎月の例會に隨分と喧しい議論が起るか、夫れを能く統御して快刀亂麻を斷つが如く、一瀉千里の勢を以て議事を進行させ、會務をして些の遲滯なく處理して行かれる手腕に至つては、到底凡庸政治家などの企て及ぶ所でない、辯舌は明快で、何事にも熱心で、上流の交際社會には必須缺くべからざる有用の人となつて居られる、併し數年前病の爲めに健康を害なはれたので餘り交際社會へ顔を出されぬやうにして居られたが、推されて愛國婦人會の會長となり、尋て日露の戰ひ始まるや勉めて社會に出て働らいて居られる、また先頃は同會の評議員三輪田眞佐子、東郷鐵子(東郷大將夫人)、税所榮子(税所少將夫人)の方々を隨へて東北各縣の支部を巡視せられ、戰後の經營に就て熱心に運動して居られる、日本婦人の模範たり且つは國家に對する婦人の一大勢力たる愛國婦人會は、實に會長その人を得たりと云ふべしである。

▲公爵世嗣夫人九條惠子

公爵世嗣九條道實氏の夫人惠子は東本願寺の令嬢で、明治九年十二月に生れ玉ふ。跡見女學校の卒業生で、書を能くし和歌に堪能の聞へがある、夫れに纏る挿話で、曾て東西兩京の美人を某所で撰拔した時に夫人は其の第一位に當撰せられた程で、實に才色双美とは夫人の如きを云ふのであらう。又た性質は至極平民的な、淡泊な質であつて、翠帳紅閨に人と爲られた方とは思はれぬ位、實に文明式の貴婦人で、將來の交際社會に女王たるべき人はこの夫人を措いて他にはあるまいと思はれる、目下は愛國婦人會の監事をして居られるが、辯舌が爽かで、議論は簡潔で要を得て居て、評議員中の女傑連をして、まアお若いのにと感服せしむること數次である。

▲侯爵夫人山内禎子

舊土佐藩主侯爵山内豐景氏の夫人禎子は、東伏見宮家から降嫁せられた方であるが、金枝玉葉の御生れとは思へぬほどに平民的の方で、お供も連れず、お一人で時々お邸の附近を散歩して居られるのを見受けることがある、諸種の婦人團體からヤレ會長の總理のと賴んで來るが、夫人は私のやうな若いものがと云つて、唯だ愛國婦人會の評議員になつて居られるばかり、他は總て辭退して居られるといふ風である、ソシテ人に接するに城壁を設けず、愉快に談話を交換せられ、亦た他を率ゆるの才にも富んで居られるので、近き將來にこの夫人が大活動をせらるゝ時の來るは慥かである、お年は二十五。

▲侯爵夫人鍋島榮子

侯爵鍋島直大氏の夫人榮子は廣橋胤保の女で、安政二年の出生、曾て直大氏が公使をして居られたので、夫人も共に巴里や維納に長く居られた

丈けあつて、佛蘭西語は甚だ巧みである、夫れに佛蘭西の都とよりは世界の都たる巴里に而も公使の夫人として居られたので、交際の術に長けて居られるとは貴族中其の右に出づるものはあるまいと思はれる、目下は特志看護婦會の會長と愛國婦人會の理事となして居られるが、特に特志看護婦會の會長としては、全力を注がれ、男子も及ばぬ活動をして居られるので、愛國婦人會の岩倉夫人と、相對して現代に於ける二種の大なる婦人團體の首領と成て居られる所は、政治界に於ける當年の伊藤侯と大隈伯との觀がある、今回の戰役に際してこの二ッの會が國家に盡した功績は實に偉大なるものであると同時に、吾が國民は長くこの兩夫人を記憶して忘れてはならぬと思ふ、また夫人が令息や令孃達を教育されるに貴族的奢侈の風を避けて專ら平民的に教育されつゝあることは、近頃その令息を某中學教師の許へ書生同樣に扱つて貰ひたいと云つて預けられたのを見ても知れる、實に上流に於ける活動的婦人の好典型である。



松平男爵夫人

▲侯爵夫人黑田淸子

舊福岡藩主侯爵黑田長成氏の夫人は公爵島津忠義の女、明治四年三月を以て生れ、交際場裡へは近頃顔を出される樣になつたのであるが、愛國婦人會の評議員もして居らるれば、東洋婦人會の役員もして居られて、ますく交際社會に向つて力を盡くさうとして居られる、殊にその東洋婦人會の如きは、最も夫人の盡力せらるゝものゝ一つで、時々自邸を同會の會場に貸して集會を催される、夫人の如き名門の方が婦人界の爲めに斡旋せらるやうになつて來たのは、實に欣ばしい現象と云はねばならぬ。

▲侯爵夫人池田亨子

舊鳥取藩主侯爵池田仲博氏の夫人亨子は先代輝知の三女で、明治十七年六月の生れ、華族女學校の出身であるが、少しも貴族風の高振つた所なく、至極平民的な方である、目下は愛國婦人會の評議員をして居られるが、今春靖國神社大祭の節同會の遺家族接待係中一番の働き人は夫人であつたと云ふ評判である、總ての事に非常に熱心で而して快活な質であるから、將來の交際社會には夫人の力を藉ることが頗る多いだらうと思はれる。

▲伯爵夫人板垣絹子

板垣伯爵夫人絹子は子爵福岡孝悌君の養女で、安政六年五月の生れ、非常に快活な方で伯爵夫人としては稀らしい平民的、良人が社會改良に就て力を盡して居られるので、夫人も同じく社會改良の事に盡力して居られる、現在は出獄人の幼兒を保護して之を養育する事に專ら力を盡されて居る、斯かる事業が賢德の聞へ高き夫人の如き人の手に依つて、好果を結ぶのは誠に喜ばしき事である。

▲子爵夫人伊東美津子

海軍大將子爵伊東祐亨氏の夫人美津子は鹿兒嶋藩士加藤平八の女安政元年の出生、佛敎信者で至極柔和な方であるが、良人が海軍大將で居られる所から、義勇艦隊の建設などに就ては熱心に力を盡され、亦た愛國婦人會の評議員としても、斡旋する所少からぬのである。

▲子爵夫人岡部抵子

子爵岡部長職氏の夫人抵子は故侯爵加州藩主前田利嗣公の叔母に當



廣岡淺子女史

り、慶應二年四月の生れであるが、貴婦人社會には稀らしい活動的の方で、愛國婦人會の評議員として率先地方遊說に出られたのは夫人が抑々の嚆矢で、靜岡、和歌山、奈良の三縣下の如きは殆ど夫人の遊說に依つて幾萬と云ふ多數の會員を得たと云ふことである、當今高等の教育を受けて米國風の活氣ある婦人は多いが、偖て演壇に登つて數千の聽衆の前で演說をしやうと云ふ勇氣のあるものは少ない、其中に於て夫人の如き人あるのは、既に異例であるに、夫人は更らに進んで良人と共に韓國に移住して彼地の農政を革新し、荒蕪の地を開墾せんとの目的を以て、今春彼地に航して實地の調査をして來られたとのことであるが、實に感ずべき次第である。

▲男爵夫人田村貞子

男爵田村不顯氏の夫人貞子は故佐野常民伯の令孃で、明治十五年の生れ、華族女學校の卒業生で、非常に快活な質で才氣縱橫、頗る勝氣な方である、上流の交際社會に於て才色兼備の若い夫人を求むれば、この夫人と九條夫人と山內夫人とが正に三幅對である、この三夫人が更らに進んで轡を駢べて婦人界の爲めに奔走せられたなら、其の功果に實に大なるものがあるであらうと思は

れるのである。

▲男爵夫人松平須磨子

男爵松平正直氏の夫人須磨子は東京府士族小笠原幹の女で、嘉永三年二月の生れ、頗る温順な方であるが、曾て良人が地方官をして居られたので、夫人も地方の事情に就いては明るいものである、夫れ故地方の婦人を指導して活社會へ引き出さうとするには、何うしても夫人の力を籍りればならぬ、目下は愛國婦人會並に特志看護婦會の役員をして居られるが、特に地方婦人界に於ける夫人の勢力は大したものである、また夫人は音樂の嗜好に富んで居られて、音樂會と云へば何れの會へ行つて見ても夫人の顔の見へぬことはない。といふ位だ。



柳谷千代子夫人

▲廣岡浅子

大坂商業界の大達物たる女史は明治の三女傑と呼ばるゝ程の人で、其の閲歴や性行は既に人の知つて居る所であるから、こゝに管々しく陳べる必要はないが、日本女子大學校の今日あるに至つたのは、實に女史の熱心なる援助があつたからである、大隈伯を始め知名の士を說き附けて、この事を助けしめたのも、三井家から數萬坪の敷地を寄附させたのも皆な女史の力である、女史は經濟家であると共にまた教育家である、吾邦の婦人は宜して女史を模範として活動して貰ひたいのである。

▲有島幸子夫人

日本銀行理事有島武氏の夫人で、盛岡藩士山内七五郎の女である、明治七年齡二十一の時、舍弟某が青雲の望みあるに任せ、母堂と三人で上京したのであるが、當時夫人の家は餘り豐かではなかつた所から、弟某は新聞社の校正係に雇はれ、夫人は手内職をして生計を立てながら、餘暇を以て弟にも勉强させ、また自らも勉强して居られたが、十年の五月當時大藏屬であつた有馬氏に嫁いでから は全力を擧げて良人を扶け遂に今日あるに至らしめた、夫人が半生の歴史は實に小說にでもありさうな戀しい事や喜ばしいことで飾られてある、夫れは夫人の自著「母のおもかげ」と云ふのを讀むで見ると分かる、夫人は大切な修學時代を殆んど生計の爲めに迫はれて居たのであるが、書も達者なれば文章も巧みで中にも、和歌は最も長ずる所である、夫人は佛教信者で令女教會に關係して居られるが、其外愛國婦人會

の評議員を始めとして、いろ〳〵の婦人會に關係して熱心に働らいて居られる、夫人の如きは慥かに立志傳中に加へらるべき人であるから、今日の苦學生と稱する女學生等は親しく夫人に接して行路の指導を仰ぐがよからうと思ふ、されば夫人は喜んで是れを迎へらるゝであらう。

▲柳谷千代子夫人

農商務省特許局長柳谷謙太郎氏の夫人で、諸種の婦人會に關係しなか〳〵交際の廣い方であるが、其の最も長ずる所は雜事を整理するの手腕で、何所の會でも雜かしい事が起ると夫人を煩はすことに成つて居る、夫れから夫人は社會の總ての問題に就いて意見を有つて居られるにより、男子も及ばぬ見識家として貴婦人社會に評判が高いのである。

▲山脇房子夫人

行政裁判所評定官山脇玄氏の夫人で、現に女子高等實修學校の校長であるが、帝國婦人會其他いろ〳〵の會に關係して居られる、而して口にも言へば筆にも書いて能く社會に活動して居られる、夫人が今日この地位を得られて女學生等に理想の人とせらるゝまでに至つた經歷は、また一個の立志小説である、夫人の先の良人と云ふのは海軍々人で畝傍艦に乗組んで居られたが、不幸にして同艦が沈沒の災厄に逢つたと共に、良人も亦た行衛不明となられた、こゝに於て若き未亡人は寄る邊なぎさの捨小舟、悲嘆の涙は沖の石の乾くまとてもなかつたのである、併し此時までの夫人は普通の婦人で、今日の盛名をなさうとは思はれなかつたが、いよ〳〵良人は最早この世に亡き人と極つたので、夫人は蹶起して身を或る西洋婦人の許に寄せた、さうして此時からして大いに學を修め知識を磨いて社會の爲めに盡くさうと云ふ志しを起した、實にその間に於ける夫人の勤勉は非常なものであつたが、其の功は空しからずして貴婦人社會に交際も出來るやうになり、また目下氷人の導くあつて今の山脇氏に再嫁し、こゝにいよ〳〵社會の表に立つて働らかれる人となつた、夫人の長所とする所は家政の整理にあるので、上流社會では紊れかゝつた家政は常に夫人の意見を叩いて整理して居ると云ふとである、夫人は斯くの如く才識に富み且つ快活の質であつて、如何なる事に處しても決して面倒だとか困つたと云ふやうな色を人に見せたことがない、假令ば甲の人からこの慈善券を五百枚引受けて貰ひたいと云へば宜しいと云つて引受け、亦た乙の會から持つて行つても宜しいと云



長岡少將夫人

つて快く引受けるので、そんなに澤山引受けてお困りでせうと人が問ふと、ナニ熱心と云ふ事を忘れさへしなければ千枚でも二千枚でも始末は附くものですと云ふやうな調子で、人がまだ二十枚か三十枚しか賣り切らないうちに、夫人は疾くに賣上げて仕舞ふ、是れは一に夫人の所謂熱心の然らしむる所には相違ないが、また以て如何に夫人が交際社會に重く知られて居るかと云ふことが知れる、夫人の後には毛利公の母堂を始め、有爵の立派な方が澤山に附いて居られるから、今後の發展は更に目覺しきものあるであらう。

▲長岡少將夫人

參謀次長陸軍少將長岡外史の夫人で、大阪の豪商廣瀬宰平氏の女で、曾て令孃時代に在ては浪華第一の美貌家として緣談は雨の降る如くであつたが、父君が容易に手放なされぬと云ふ話を、當時獨逸から歸り立ての長岡氏が聞いて、直接に出掛けて緣談を申込まれた、所が早速承諾されて華燭の典を擧げ、多くの希望者をして驚愕せしめたと云ふ話が今に傳へられて居る、夫人は頗る美貌家で、さうして談話の術に長けて居られる、されば一度び夫人と對話したものは、其の淡々として飾り氣なく、愉快に話されたことが胸の底深くに潜むで居て、何時までも懐はしいやうな氣がすると云つて居る、實に交際に長けた、至極平民的な方である。

▲鄭濱子夫人

天津領事鄭永昌氏の夫人で、彼の北清事件の際各國公使北京籠城の時から著るしく其の名を知られた方である、北京籠城當時に於ける夫人の活動は今こゝに改めて云ふまでもなく、今日では女學校の敎科書にも詳しく載つて居るから恐らく夫人の名を知らぬものは一人もあるまい、政府からは其の功勞を賞して勳六等寶冠章を授けられた、夫人がこの名譽を荷ふに至りし元はと云ふと、夫人は幼稚い時分であつたが佐賀の亂に逢はれたことがある、其の頃祖母君が女子と雖も變に處しては男子同格の働らきをせねばならぬ、決して周章たりしてはならぬと懇々敎へ諭


濱尾夫人

されたのを、子供こゝろにも深く感銘して今に至たるも一日として忘れたことがないと常に話して居られるが、其の祖母君の訓戒があつた爲めに夫人は斯かる大功績を樹て大名譽を博されたのである、是れに依つて見ても幼時の敎育の忽せにすべきものでないことが知れる、夫人は流石

に外交官の妻たる丈けあつて談話の術にも長けて居らるれば、人に接して暴慾を起させぬ、頗る快活な氣風を供へて居られる、

▲濱尾作子夫人

前文部大臣濱尾新氏の夫人で、夙に知られた賢夫人である、婦人衛生會の副長、愛國婦人會の評議員其他各種の婦人會に關係して居られるが、頗る活動的の方で、關係して居られる會の集會には、滅多に缺席をせられたことがない、而して夫人は謹嚴なる態度、侵すべからざる威風を備へて居られる。

▲中山幸子刀自

刀自は有名な理財家で、亦た昨今は交際社會にも重視せられて居る一人である、亡夫は嘗て縣知事で、刀自も地方の事情などに就いては頗る明るい、また刀自は良人に逝かれて以來、刻苦經營して今日では數萬の富を積みて誠に氣樂なお隱居樣となられたのである、否なその富その年齢から云へば富豪の御隱居樣であるが、刀自はなかなか世に云ふ御隱居樣のやうな不生産的な人にはなつて居られぬ氣質で、絶へず活動して居られる、故に婦人會と名の附くもので刀自の入會して居られぬものは殆んどないと云つてもよい、さうして何の會に對しても相當の力と金とを與へて居られる、是れを或る部分では刀自が名聞の爲め財産のあるに任かせて勢力發展をせられるのだと云つて非難もし、攻撃もするが、夫れは刀自の眞意を知らぬものゝ言で、刀自は左程の野心ある人ではない、其の證據には常に熱心と云ふことを放れて金錢を空費したと云ふ例がない、また刀自は駄辯を弄すると云つて惡しざまに云ひなす人があるが、夫れは駄辯ではない、熱心のあまり說き出だしたことは意志の徹底するまで違ると云ふので、疑ずるに克己心が強いのである、亦た刀自は先見の明があつて、何事でも他の婦人よりは一歩進んで居る、書も達者なれば和歌も絶へず詠むで居られる丈刀自の如きは兎角の世評がある丈け夫れ丈け女丈夫として尊敬すべき人である、目下は愛國婦人會の評議員として非常の力を同會の爲めに注がれて居る、其の外には婦人育兒會にも少なからぬ力を盡されて居る、また刀自は出征兵士に絶へず新聞や書籍を寄贈して恤兵に勉めて居られるので戰地からの禮狀が毎日數十通屆かぬことはないと云ふ、以て刀自爲人の一般を窺ふに足るであらう。



中山幸子刀自

▲嘉納須磨子夫人

高等師範學校長嘉納治五郎氏の夫人須磨子は、華族女學校の出身で、非常に快活な方である、華族女學校は僅かに第一回の卒業生で、今でも同校の爲めには何にかと力を盡くして居られる、我邦の活人畫の濫觴は華族女學校であるが、その活人畫を最初にせられたのは夫人を始め同窓の方々である、また婦人の富士登山者としても野中到氏の夫人を除いては、夫人が先づ第一に推される、文章もなか〳〵巧みに書かれて、その富士登山の時の紀行文は「富士の道芝」と題して出版されてある、斯様に夫人は何事でも他の婦人よりは卒先して實行される方である、若い女學生達の、この氣風を習はれんことを祈る。



嘉納須磨子夫人

▲松浦けい子孃

此頃某家で軍神と云ふ琴曲を聽された事があるが、申すまでも無く廣瀬中佐の壯烈を詠じた趣味深きもので、手は斯道の大家萩岡氏の附けたもので、中々面白く出來てゐる、一體誰の作かと尋れた所意外にも松浦伯の姫君の作歌だと云はれたので實に驚いた、孃が國文作歌に堪能で

武夫のそのいさをしたかきならす
ことのしらべのたかくもあるかな

あることとは、嘗て華族女學校時代から承って居たのであるが、これ程迄とは思はなかった、兎角大諸侯の姫君などゝ云ふものはお怜悧だの御秀才だのと申しても、それは多くは舊臣や家扶家從等が慾目や追従が九分と云ふのが普通であるのに、此方などは全くそれとは趣を異にして、假令華族と云ふ肩書を捨てゝ赤裸々として士民の子女に伍せしめても水平以上の人たることは孃を知るものゝ等しく認むる所である、作歌は尤もその得意とせらるゝ所、手跡は千蔭を學び玉ひ、なほ英文學の嗜みも深く現に英國婦人某氏は家庭教師として姫に御指南申すと云ふかゝる風なれば性質も活潑で、昔流の大名風などは寧ろ嫌ひ玉ふ方なり、而も決斷力に富み敢爲の氣象を有せらるゝことは容貌の上に自ら現れてゐる、それに伯爵家の嫡女と云ふのであるから、伯の御鍾愛は他の同胞に越えて殊に深しと云ふ、

とつくにの花

(1) 故英國女皇ヴヰクトーリアはツイゾ下々の者へ荒き言葉を掛けたる等のことなし、左れども其召使ひ共は御家内の什器か時計の廻る樣にキチン〳〵と運ばざれば、陛下が直に其原因を知り給ふことを承知せり、陛下は彼等を呼ぶに苗字を云はず、名前を以てするを常とし給へり、是れ彼等をして陛下を畏れて申上げることも申上げぬなどのことなからしめんとの聖慮なりとぞ、又陛下は常に新參の者の姓名を問ひ給ひて、御家内の召使ひは山の如くあるにも拘らず、決して之を忘れ給ひたることなし、陛下は深切なる御主人にして、召使ひの者の中に誰とて之を愛し慕はぬ者とてはなく、誠や英國女皇ヴヰクトーリアは先づ人の手本となる可き一家の主婦にして、又聖德の君主たるものと云ふ可し、何やらの英國の雜誌に陛下が紡車を廻し居る所の畫を揭げたることあり、陛下が質朴にして奧ゆかしき御有樣を寫し出して盡せり、英國臣民の深く女皇を愛慕せしも亦宜ならずや英國女皇ヴヰクトーリアは綺羅を飾るが故に貴きに非ず雲の上の高きに居りて猶ほ賤が伏家に紡ろ老媼の辛苦を察し給ふが故に貴きなりと。眞に然り、英國女皇の如きは尋常平民の家婦としても亦た良妻賢母の資格あるものと謂ふ可し。

(2) 西班牙の皇女方に御守役の婦人三人あり、即ち西班牙の禮儀を敎え參らするはデ、ヌラソール伯爵夫人、英吉利の作法を受持つはエッタ一、ヒユーギス令孃、墺地利の式法を心得るはポーラ夫人にして右の三名は各々年給五千弗、居宅は王家より給し玉ふと云ふ。歐洲皇室の家庭敎師を重んずること、實に花々しきものなり。

(3) 先年女權擴張の旗頭デヴアルセール夫人が世にも名高きラカデミー、フロンセーズ(佛國學林)會員の候補に打て出でたる勢を見て全巴里は大悅び面白い所作が始まツたと笑ひ囃せりデヴアルセール夫人は何思ひけん、出入りの仕立屋に男の衣服を誂へ、頻に右學林の會員等へ投票し吳れる樣にと懇願の爲め奔走し居れりとぞ。

(4) 今はむかし墺國皇后が所有し給ふ幾多の寶玉の價は四百萬グルデンより五百萬グルデンなりし(一グルデンは凡そ三十六仙)右の中には故皇太子ルードルの降誕の後に帝より皇后へ贈り給ひし光彩燦爛たる眞珠の御首輪あり、其價三十萬グルデンなり、或る維納の新聞紙の報ずる所に據れば、歐洲諸國帝室の中にて所有の寶玉の價に就き墺國皇后に匹敵する者は露西亞の皇后あるのみ、墺國皇后には屢々其寶玉を御姬君達へ分ち與へらるゝと雖も、尙ほ歐洲第一の金高の寶玉を所持し居らるゝとかや、右の所有の寶玉は何時にても好ませ給ふとき、勝手に之を着けさせらる、然れども墺國皇室が其昔瑞西のハツプスボルヒに居し時より傳へたる寶玉は、皇室に屬し居るが故に皇后の之を飾り給ふ時には其度每に其趣を番人の帳面に記すなりとぞ。

英國貴婦人の交際

小羊生

世界中尤も常識に富んで居る國人は英人である。又世界中最も實利を重んずる國人は英人である、彼等は常識に富んだ上に實利を重んずる、それ故彼の國人が爲す處ろは、常に秩序あり、經綸あり、着々として世界上に地歩を占めて行くのである、其の結果として彼等の生活は極めて趣味あり、極めて希望あり、又極めて安樂なものである。

英人は又よく經濟の心に富んで居る、彼等は少數の勞力を費やして、巨額の利益を得るの方法を考へ、又少數の時間を費して多くの仕事を爲すの設備に就て深く注意をする其れ故彼等の生活は極めて豊かである。要するに彼等が世に處するの方法は無益な事に勞費しないといふ聖哲の格言を實行するものである。

常識に富み、實利を重んじ、兼ねて經濟思想に明らかなる結果として生活上に比類なき成功者である處ろの英人は、よく文明といふものゝ眞相を解して、人間生活の樂趣を深く味はふ處ろの國人として他國人の摸範となつて居るのである。

吾人は今此の理由を事實の上に就て説明すれば、彼等が社交上に於て極めて秩序を重んずるの人種であることを發見するであらう、彼等英國人は必らずしも皇室の尊榮を絶體的に神聖視するものではない、けれども彼等が、皇室と社交上榮耀の中心として是れを尊崇するのは、主として彼等の處世上に好都合であるからである、彼等は日本人が其の皇室に對して絶體無限の崇敬、愛慕の念を懷くが如き宗敎心を以て尊崇するのではなく、只社交上榮耀の機關として崇め奉るのである。けれども旣に社交上の機關としてある以上は、王室を名譽の源泉とし、又國體の修飾とし、又國民瞻仰の府となして、是れに對して飽くまでも敬ひ尊ぶのは英國人の美德である。

英國に於て王室が社交上榮耀の中心である以上は、

王室と血統上密接の關係ある無しに關はらず、王室より貴爵を授けられたる處ろの貴族は、又是れ王室の光の幾部分を負ふて居る衆星として社交上優等の地位を占めて居るのである。

英人は一面實利的人種なるに拘はらず又一面に於ては極めて名爵を尊ぶ人種である。彼等は歴史的で隨つて懐舊に厚い人種である、其れ故彼等は門閥を尊び、舊家を尊び、閲歴を尊び、由緒を尊ぶ人種である。彼等は或點に於ては日本人と同じく金剛山で關東百萬の敵を防いだ名家の裔を尊重し、賤ケ嶽七本槍の勇將の家柄を敬仰するの人種である、此の點に於ては米國人とは全く反對で、エリザベス朝に於ける文豪の手紙といへば斷翰零墨にも數萬圓を投じて愛翫珍惜し、アルフレッド大王時代に何某の使用した槍の折をも絶代の重寶として珍藏するなど極めて懐舊的の人種である。斯くの如き次第であるから彼の國に於ては米國の如く單に富豪、金滿家だからとて社交上の榮耀を獨占する事は出來ない、即ち彼國に於ける上等社會といへば、數代連綿たる貴族、乃至は現在官職の高き搢紳、若しくは舊格門閥のある財産家等であつて、米國流の俄か富限の如きは社交上、それとなく擯斥せらるゝ風である。そこでまづ是等社交上優越の地位にある婦人社會の交際上の有樣を記して見ると。

英國貴族の社交

單に表面より見たならば英國上流社會の婦人の境遇ほど幸福多き人はなからうと思はれる、彼等はまづ數世紀以前よりの習慣として最も女權の貴むべきを認識され、一夫一婦の制度は其の常識ある良人に依つて保たれ、日常其の良人より敬愛さるゝこと言ふまでもなく、且つ其の從僕等より尊敬さるゝ程度は其の主公の上にも出づる位である。彼等は其主公幷に其の長上の制抑を受くる事なくして行く處ろに行き、欲する處ろの物を求め、其の齎らす處ろの十分の嫁資を以て一身の權利を保護し、且つ其の望む處ろの事柄に投ずる事を得べく、以て美麗なる時服を作るべく、以て燦爛たる寶玉を飾るべし、其人若し眞に社交的婦人であり、

甚に活動的婦人でありしならば、其の所持する處ろの財產を以て、慈善事業に、學術研究に、探險事業に、其他社會有用の事に財を拋つて保護し、奬勵し、以て芳名を宇內に輝やかす事をも得るのである、スタンレイの亞弗利加探險は實に一貴族夫人の巾着錢を以て其費用の大半を幇けたのである、又ナンセンの北極探險も實に或る貴婦人の纖手に依つて奬勵されたものである、其他英國の公共事業慈善事業が、世界各國の模範となつて居るのも主として彼れ貴婦人社會が大に奮勵した處ろの結果である。

併し權威のある處ろは軈て苦痛の宿る處ろである、英國貴婦人が社交上に勢力あればあるほど又大に心配あり、責任のある處ろで中々中流以下の婦人の如く、氣樂に、又無責任なる譯には行かない、タトエば今英國の何處に不時の災厄が起つて住民の多くが悲慘の境遇に在るといふ事を知りたらば、彼等は何事は扨置いてもまづ、これを救助するの緊急手段を講せなければならぬ、早速婦人會を催ふして醫藥萬般の準備をさせる、醫員を出張せしめる、醵金をして食糧を運搬せしめる、それから申合せて慰問に出掛けなければならぬ。若し此の際緣故ある貴婦人が、冷淡で居たならば社會の攻



擧は實に甚だしいもので新聞紙の如きは其の平素の擧動を一々嚴しく筆誅せずには置かない、斯る次第であるから彼等は常に社會上百般の出來事に日夜注意して、或は貧民を救助し、或は災厄を慰問し、又は種々なる公益を謀らねばならぬ。のみならず、其の人民に對する交際上のお世辭の撒き方、應答のしかた等は皆貴婦人の責任であつて、若し是等に對して貴婦人として不穩當な行爲があれば、翌日直ちに新聞紙の攻撃を受けねばならぬ、實に英國貴婦人は社交上特別の榮耀を持つだけに、又其の任務も大抵なものではない。のみならず、彼等は又其の家事に就ても大に注意をせねばならぬ、タトエば一家の歳入、歳出の大要、衣食住の事柄、子女の教育等に亘りて、日々方針を定めて、是れを指揮せねばならぬ、或は何の會、何の團體等より出金出席を促がさるゝ事甚だ頻繁で、若し是等の事に冷淡であれば社會の攻撃甚だしく、去りとて家事を抛擲する譯にも行かねば、兩者を兼ねて程よく心を配らねばならぬ。

交際的貴婦人の日課

さて是等の婦人が日課の有樣如何と見るにまづ上流階級にある人は夏季と冬季は概ね避暑避寒の爲め、温暖、清涼の土地に旅行するを常として、田舍の領地や城砦等に閑居するのである、故に都府に住居するは概ね春と秋との交際季節であるが各所の夜會、園遊會などに招かるゝのは多く此の間で、又自からも他を招くのであるから、隨て朝寢夜更の習慣が多い、故に朝は大抵午前九時が離牀の時で、目が覺めると、寢室の呼鈴を鳴らして侍婢を呼び、紅茶か咖啡に麵包の薄片二三片或はビスケット樣の輕い物を持來らせ、寢室でそれを喫してそれから裝飾に取りかゝるのであるが、髮は大概下婢に結はせる習慣になつて居る、衣裳を着けて了ふと、食堂に出でゝ家内一同と會食する、それから一二時間は書齋に籠つて書簡を認めたり、新聞紙を讀んだり、してよき程に時間を經過し、午後一時頃より各種の學校や、育兒院、養育院、慈惠病院等を見廻り、又種々の會に臨席し、或は交友を訪問するの

である、次で歸邸すれば親戚朋友を招きて夜食の會を催し、會食了れば談話を爲し、音樂を奏し、舞踏を演ずるなど種々賑はしき餘興を催ふす事がある、夜食には勿論主人夫婦は禮服に改め、子女も又公然交際を始むる年齢に達せば衣裳を更めて父母と列席し、食を共にするのである、又た年長じて宗教に熱心な夫人などは家庭教師に聖書の講義をさせて子女に傍聽させる事がある、又或は天氣晴朗の日には兒童を伴ひて此所の公園、彼所の植物園、又博物館などへ赴きて、苟めにも兒童教育の一端となるものあれば、時間を利用して子女の智德の發達を圖る事に注意を怠らないのであるそれに就て先年泰西各國を漫遊し久しく英國にありて上流社會の事情に詳しき下田女史の見聞錄中某伯爵夫人の日課として記されたるもの極めて詳細にして英國上流婦人交際上の有樣を見るに足るべきものあれば左に其文を摘記せん。



余が曾て倫敦に滯在せし頃屢々來往せし某伯爵夫人の家は英京倫敦中最も繁華なる一市街の中央なりき勿論夫人の夫は樞要の地位にある人にて且つ、其資產は、極めて豐かなるよしなれば其交際時期即ち府中に住まへる程の、多忙繁劇、他よりしてこれを見れば、人生果たして富貴なる人が、幸か、貧賤なる者が幸かを疑はしむるが如き感を起したる事もあり。其夫人が、やゝ閑暇の折は、午前二時間許りが、程にて、（每夜、就寢は、深更に及ぶを以て、朝飯終るは大抵

午前十時頃なり)それさへ、各種の案内、招待狀諾否の指揮より、其自ら返事すべき書簡、及び、これより遣ろものゝ認ため方、或ひは、家事整理に就きて、侍女、從僕、料理人等より、伺ひ出づろことの、所置返答、及び、子女が敎育上一切に關することまで、自ら一々點撿し終り、晝食終れば、兼て約束の集會、其他に至るか、然らざれば、在宅して訪問客を受け、或ひは他を訪問し、夜食及び、食後も亦た往きて會し、來たろを待たざる折は少なし。而して、一日、余は、「母親會」(これは、是等階級の人の、子女家庭敎育の事に就きて、研究討論する爲に、設けられたる會なり)の支部を、某所に置くとかの事にて、廿三四名の貴婦人が、會合されたる日に、居あはせたりしが、其日しも、夫の方にも、何にかあらん所用ありと見えて、七八名の來客ありし樣なりき。されど、夫人は別にこれを意と爲す容子も無く、熱心に其會の事にて辯論討議し、大凡、午後二時より始まりて、同六時迄に及びたる時、小僮は輕く戶を敲きて、此會場に入り來たり、暫らく入口の所に立ちて、主婦が談話のと斷るゝを待ち居たり。(此間、殆ど七八分間漸やくにして少しの暇を見、怖る〱、其側らに步み寄り、耳元に何事をかさゝやきて、其旨を伺ふに似たり。夫人が聲は小僮よりも、少し高かりしかば、はつれ〱洩れ聞えぬ。「よし……最早我等が會は終りを告げんとす。夜食迄止め玉ふとも、差し支へ無しと申せ」とやうにありき。小僮の去りし後尙ほ、二三十分間許りありて、此夫人達は、退散したりき。余は兩三日滯在の約束なりしかば、一人殘り止まりて、其良人が友達二三の紳士と會食せり。其食卓に於ての談話も、良人は妻に向ひて、「御身が熱心なる會は段々盛大に赴くとや、いと愛たし。支部の事は極まりたりや」と問ひたろに、夫人答へて、「漸々の事にて某所に設立することに定まりぬ。實に豫想外と申程の、好結果故、此度の大會には、某侯爵夫人の宅にて、賑やかなる、園遊會を催す積りなり」と云ひたろに、良人重ねて「其れならば、余も少し張りこみて、寄附金せずばなるまじ」などあるに、夫人、「何卒、充分の御奮發を請ふ」とて、更に、隣席の某博士に向ひ、「是非、君が一席の演說を希ふ。且つ、必ず、その園遊會に臨まれたし」と云へば彼れは、「悅びて諾す」と答へつ。良人は、また戲れて、「御身は余には寄附金のみを促して、饗應の席には洩れよとや。情け無し」など打ち笑ひ興ずるさまなど、夫妻はげに恰かも朋友なるが如き感あるなり。

又、某夫人とて、最も豪富の聞え高き人ありき。其在京中は、やはり非常に交際頻繁なりしも、前者に比して、齡も遙かに高く、(六十二三が程なり)身體も少しく虛弱なるよしにて、其對客の際は、大抵、妙齡なる二人の女子、これが介添へとし、相ひ助けて、過勞せしめざりき。故に各學校、病院等にも、過半は此兩女、母夫人の名代として、交る〱臨まるとか聞きぬ。然れども來訪の客は必ず自からこれを受け、其家政整理上、及び其女子達が、弟妹敎育

の事に就きても、其重なる事は、なほ、老夫人が直接に見もし聞きもして、其指揮决断は、更に、他の手に任することと無かりき。但し、各所より來たる所の、數通の書簡もまた、大抵この兩女が、母の仰する儘に、代筆する事にて、其認むる程、斯かる時には、斯やうの詞を遣ふがよし、斯くの如き人には、云々の事は書かぬものぞなど、能く叮嚀に教訓せらるゝを見たり。(すべて、彼の國の教育は專ら實地に就きて、なさんと勉むる事多し。なほ後に云ふべし)

又、余は一日某皇女の第宅に詣でし(午前九時過より、午後六時迄)事あり。皇女は、夙く人を失はれたる後は、專ら、慈善、及び、女子職業の事に就き、熱心に補助救護の道を講ぜらるゝの外は、殊に質素なる御生計なりと傳へ聞きつるが、げに、余が、其居室に參りし時は、毛絲して何やらん編みて在しぬ。(勿論女子職工學校の事にて同伴の夫人が、旨、受給はる事ありし序に、親しく、其事どもに就きての、意見なども伺ひ、且つ、其が日常のありさまも親しく見參らせたしと、うち〳〵に希ひ置きたるなれば、殊更に常住の居室に導かれしなりき)スコッチの毛織衣、極めて儉素淡白なる裝飾のまゝにて、余が恭しく一禮したるを見、自ら立ちて握手し、側らの長椅子を指ざして余に凭らしめられ、皇女も同じ所に腰うちかけて、さま〴〵の物語りどもせられたる後、諸工女等が手に成りたる、各種の物品を陳列せし一室に誘引し、叮嚀なる說明等を施されて復た、もとの室に歸り入りぬるは、既に午餐の頃なりき。晝食も極めて、質素なる事にて、それ終りて、養花室に入りいろいろの花卉など一見する程に、其女子職業學校の事にて、貴夫人四五名參會せられ、此談話、即ち會議やうの事終りて、茶菓を賜はり、さて後に暇申して罷出にけり。其手輕き事、誠に驚くに堪へたりしが、其れより數月を經て、女皇陛下に謁見の時、此皇女も御側らに參列せられしを見參らせたれば、更に、異人のやうに威儀嚴かに在して、同じ御方とも覺えざりき。すべて、彼國にては、表向きと內輪との區別甚



しく、公けなると私しなるとは、殆ど、別人、別格の心地する事ぞ多かりける。

以上は英國上流社會の貴婦人が都府に在住して居る間の交際の摸樣であるが、英國の貴族は猶日本の舊大名のやうなもので、春秋二季の交際季節が終ると地方の領地に行つて生活する事になる、地方の領地には昔ながらの城砦が儼然として今も猶存在し、森の古木の鬱然たるところ、丘陵に據つて構へられた石壁の苔蒸して、青草の離々たるところ、岡陵に沿ふ森林牧場の逶迤として牛羊の鳴號するところ、壕の水深ふして大魚小魚の游泳するところ、昔しながらの面影をのこして、幽邃閑雅、其の境直ちに詩となり、畫となるの個所である、英國の貴族は概ね其の領地の眺望の佳きところ、古色蒼然たる處ろに家屋を建築して冬と夏との二季を此處に過すのである而して領地にある貴婦人は交際季節の繁忙なりし疲勞を此の地に靜養するの意味であれば其の日課の如きも閑散適意であるけれども時には領内にある小作人や、勞働者などを慰問して、業務の有樣を見、また休業日などには時々邸内に園遊會などを催ふして其の工女や農婦等を招きて自らこれを勞らひ、又慈善的の會を組織し、細民中の不幸なるものに物品の恩與をするなど、閑暇なるべき靜養中にも隨分忙はしき事はありと、下田女史の見聞錄中に猶此の事を記していへり。

余が在英中、女皇陛下の親戚に當れる某夫人が田舍の館に十日間ばかり滯在したる事あり。館は倫敦より汽車の道、大凡、一時間半許りの里程を隔てたる所にして、停車場は、其所より五六町の距離にありき。車を下りて、一二町が間は、小さき市街なり。市を離るれば、左手には深き森、右手は渺茫たる牧場にて、折から、夏の眞中に近き頃なるが、此國のならはしとて、袷せの衣肌心地よき程にぞある。夫人の子息は、余等が迎ひとして、早く爰に在り。用意の馬車に、余と外になほ二人の女子とは、乘り移りて、此廣らかなる野路を轢らし行くに、途中に合ひあふ農夫等の、皆、帽を脫ぎて、叮嚀に辭儀するを見たり。彼れは、何種の人ぞと側らなる女友に問へば、此町はづれより此方は、總べて、當館の領地なれば、この今見たるは、みな、そが中に住まへる小作人どもなるべしと云へり。日は、やう〳〵西に傾きて、晩禱、鐘を爭ふ頃、馬車は最と大きやかなる門に入りて、又行くこと一二町許り、車寄せより横に折れて、庭園の入口に止まれり。其時子息なる人は

先づ、車を下だりて、余等を助け下ろし、「今日は、母が、職工女等を（此領地内に、廣大なる毛布織場あり）招ぎて、園遊會を催したるが、今、大抵、退散したり。立食場等甚だ狼藉として、尾勞ながら、これも亦た、客人が爲の笑ひ種、田舍風の無雜作なゝを見玉はんも、或ひは、一興なるべきか。苦しからずば、案内し申さん」とあるに、余は、深く悅び諾し、引かれて其園内に入れば、蓊鬱として綠滴たらんとする、各種の巨樹大木のもとに、此所彼所、椅子、小卓、等を並べて、其立食に供したりと覺しき、酒肉の殘物、なほうづたかきを見たりき。老夫人は、青き蔓を纏はせたる中門の邊りに出でゝ、立ち迎へられ、その良人、及び、他の子女等にも、紹介せられたる後、垣根の邊りに並み立ちたりし、五六人の老工女どもを招ぎて、「こは、東洋の果て、日本といふ所より、ふりはへて、渡り在したる珍客ぞかし。滯在あらん程に、汝等が工場にも、案内し參らすべし」と云ひて、更に、余に對し、「彼等は、我々が所有の



工場に、年久しく傭はれて、能く、忠實に能く勤勉に、勞き居る工婦長等にて候ふなり。御目を賜はり候ひなんや」とあるに、余は、深く滿足せる旨を答へて、其職業のさまを問ひ聞きなどする程、茶の用意宜しき由、給事の報じたれば、夫人はそこを立ちて、とある、小亭の籐椅子に、我等を着しめ、茶菓の饗應終りたる頃、老主人は、花園に導き參らせんとて余及び他の婦人達を誘引せらる。主婦は、足部に微疾ありとかにて、辭して家に歸へり入られぬ。主人は、余をして、其腕によらしめ、子息達はまた、諸共なる人を引かる。主人は、齡六十四五歲許りが程と見えて、白髮、長く肩にかゝれり。なほ甚だ强健なる容子なれども、さりとて、老たる人に、餘りに廣き芝生を、あちこちと、助け引かるゝが心苦しさに、

屢々辭して、舘の内に入りたる時は、早う、燈火の光り最とまばゆき頃なりけり。さて、我が臥戸にと定められたるは、二階にして、南に向へる最も美麗なる寢室にて、間ひの戸を開けば、さゝやかなる書齋なり。臥床の邊りには、裝飾の具、書齋には、書簡を認むべき料より、面白き文學、品よき小說等の書物、書畫帖やうの物まで、一切具足して、其注意至れり、盡せりとも云ふべし。侍婢が持て來たる、溫湯に顏洗ひ、口漱ぎ、夜食の衣服に着更へて、と許り打ちくつろぐ程、食堂の鈴も聞えたれば、やをら、階段を下だり行くに、小僮は、この階下に待ち居り、余等を引きて、客室に誘ひぬ。さて、更に、老主人に助けられて、食堂には導かれき。(食事の事は省きて言はず)食事終れば、再び客室に歸り、令孃が得意のチルガン(孃は最も音樂に巧みなり)同伴者の一人なる、某婦人が唱歌など、喝采の内に聲を納めて、それより、主客打ち交りて、交るゝゝ、奏樂、歌謠に興闌はなりけり。一人、此內に在りて、己れのみ、爪くはへ居たりしもをかしかりき。午後十一時頃、寢に就きて、其翌朝の朝飯終りしは、午前九時半頃なりけん。此所には、其時、佛國の女史一人、伊國の一人(伊、佛語の敎師として)止宿し居りて、語學を授け、なほ、音樂師は、一週に二回づゝ、倫敦より通ひ來て、年少の子女に、音樂を敎授せり。是等、老夫人、及び、孃等は、每日、何事を爲すかと見るに、この滯在中、家族一同にて、午前より出かけしは、日曜日の寺參りより、日曜學校へ廻りたると、領地內のある森に、(風景佳絕の所)に辨當して遊びたると、工場を巡覽せし日との三日間のみにして、自餘は、ある親戚、朋友などの宅に行き、又は、それ等を招ぎ、其養花園、果實の室、牧場、菜園等を見歩きたるは、大抵、みな、午後二時過よりなりき。されば、朝飯後、主婦は、大方、此年少の女子をして、數十通の書狀に返事、又は、これより遣るのをも認めさせ、(是等上流の女子は、大抵少なくも、一二外國語を學ばざる者無ければ、孃等は、佛語、又は、獨語などを以て、外國よりの返書をも認め居たり)又、家務の重なる事どもを聞き、或ひは、自らも書簡を物し、時としては、末男末女が語學稽古室に臨みなどし、午後一時よりの食事終り、二時過よりは、園中を散步し、他の茶話に會しなどせられたりしが、夫人は、先きに云へるが如き、恙ありとて、近傍へは、わが人力車やうの物に乘り、僕をして、徐々と引き行かしむるに、常に、大方、其子女の中一人は、必ず徒步、これに隨行し、且つ、扶け、且つ、談らひつゝ、伴なへるさまの、最と殊勝にも覺えたりしが、それにも勝りて、怪しき迄思はれつるは、良人さへに、其れに從ひて、左も大切らしく、いたはり、慰めて、さし步みたるを見し事なりけり。世の幸ひ人とは、是等の夫人をや云ふべき。又此夫人は、殊に熱心なる宗敎家にして、日曜の夜は、三十餘人の婢僕を集へて、自ら聖書を說き聞かされたりき。而して、これが、其良人に、子女に對する事どもより、起ち居ふるまひ、物の云ひざま、品形ちまで、さすがに、最と、溫雅靜肅にして、其あらゆる人々より、尊敬を受くるも、敢て倨傲の氣色無く、老いてなほ、物恥かしげに、打ち沈まりたるさまかたち、萎みてもなほ、餘香床しき薔薇花の、昔の盛り忍ばるゝ、いと懷かしき人柄にぞありける。

以て英國上流貴婦人社會の狀況の一斑を知るに足るべし。

濠太剌利亞の社交婦人

せいけう

濠國の婦人は、一體、新思想に富んで居て、新事業を經營する精力を持てゐるけれども其の精力たるや一時的で永續せず、最終には、折角企てた新事業も、他人の手に落ち、犬骨折つて鷹に奪らるゝ譏を免れぬのである、尤も、表面は、飽迄も自國の海岸に勝利の聲を聲くことを期して居る心掛は、感心すべきことである。

この國の婦人は、總じて、米國婦人の自主、自由主義を渴望して、英國婦人の外觀と習例を崇拜して居る傾きがある、で其の結果は種々な異つた海外の習例を國內に媒介して、爲めに意外の反響を來し延いては山丘でも、平地でも此の弊風に吹き拂はれて、遂には幽魂の如く消滅して了はせぬかと虞はる情態にある國であるのだ、一寸、此の國の婦人の氣風を譬へて見ると短い上衣を着て、滑つて缺けたので、今度は長い上衣を丈長く裁て直したいといふ考案を起すといふ風であるから、謂はゞ移り氣の、飽きつぽい質なのである。

さうかと思ふと濠國の婦人は自負、自信の精神を蓄えて居つて、細微の點に至るまで能く注意する習慣を持つて居る、この習慣を作出したるは、國民が長く世界を歷訪した結果であらう。

又た此國に於ては妙齡の婦人が、短袴の後部に襞襀を取つて居る、これは、年增風を擬ねて、戀愛的に媚を呈せんとする風である、又平生の品行は極く端嚴であるけれど、時とすると遊戲的に艷書を作つて、讀んだり、書たりして居るといふ風で、甚だ早熟て居る。

ソレカラ濠國婦人は一體、愛嬌もあり、身長高く格好も良いが、生憎品位に乏しい、足は小さきもあり手は隨分、美しくもある、化粧の仕方は、巴理婦人の外面と、英國婦人の着實なる點とを擬ねて居て、身形は粧ひ過るもあり、飾りに、粗末過るもあるけれど、少しも、是といふ趣味がない、物の釣合だとか調和だとかいふことはまるで知らず美術思想に欠けてゐるの

が癖である、唯だ無暗に流行物好きで、綺麗擬る癖がある、殊に澳國人の意を用ふるは衣服である、之れには、金錢を費すを厭はない。

でこの國の人は、何でも平等主義を奉ずる所から衣服の體裁も齊一で、外形が同一になつて居るを良しとして、流行物を追ふを快しとする、下等社會の者に在ても、祭日に方つては外貌を飾つて威勢好く、景氣を附けて練出すが、歸つて室内に居るときを見ると、足袋も、履も穿ず、襤衣を纏つて居る、デ、市街に出れば、格安の羽毛や、手套を需いで居るので、これを購求て虚飾の料に供するといふ風である、又この國で親族知友の無いものは、社會より排斥を受ける所から無暗に交際を擴げたがるといふ風である。

又婦人は名譽心が強いが、する事は緩漫の方である一體に婦人は怜悧であるけれど、智慮が淺いから、高等な教育を成し遂げるは出來難く、且つ覺束ない、又たピヤノを奏するのは巧みであるが、これは、社會に虚榮を衒ふ爲めに過ぎないので、深く音樂を研究しやうなぞといふ者はないのである、また、婦人は技術にかけては、天性器用で、而して知覺力が機敏だが、白いものを黒いといふ癖がある、一寸しても、奉公人の語末を取つてから、感情を迎へるといふ手段は特色といつてよい。

それから、惡行を爲せば、重罰を受けるといふ信念がない、又我子に對しても唯だ母に服從すべきものとなし、尊敬すべき義務があるといふ感念は持つて居ない、其代り喜怒哀樂の感情は餘程激しい方である。又た人を待遇することは、懇切で、動もすれば極度に同情を表することがある、故に今日初めて會した他國人でも、明日は親密な間柄となる、で敢て朋友を撰擇せず、すべて、中庸を守つて、事を行つて居る。

發音に就て言へば、總じて鼻音に訛轉る癖と、唇頭に觸れる嫌ひがある、これは彼等と應接するに方つて屢々聞くところであるが、外國人には甚だ耳障である、彼等は又た晴れの場所に於ても、禮儀に乏しい、男、女に拘はらず、骰子でも投げるやうな動作で一か八か

目次第で極めるといふ按排式である、從つて交際上の修養とか、習練とかいふことは、極めて少數の家庭に行はれて居るのみである、要するに一般の習慣は隨分奢侈はすれど、又た極めて放縱なる平民的作法に安んじて居るといふ風である。

歐米婦人 嗜好と粧飾

ＳＴ生

凡そ人の嗜好は各々其の容貌や、性質の異なるやうに、千種萬別の別ちがある、又其の事柄により物に隨ひてさま〲に別れるもので、就中婦人が衣服の上に關する嗜好に至つては、複雜の上にも又多趣味なものである。

△一體婦人の嗜好上には自然と其の品位と性情とを表はすものであるが、わけても衣服の如きは最も其の性質をよく顯はすもので、人を見ればまづその服裝を見よと言ふ諺のある如く、苟も年頃の婦人自分で服裝を撰擇するの自由ある妙齡婦人に至つては我れ語らねど知らず〲の間に服裝の上に自分の性質を言ひ顯はすものである。

△そして其の嗜好に至つてはタトエば若い婦人が華美な色を好み、年老が質實なのを好むやうなもので、この若華、老質は嗜好上自然の通用嗜好といつてよいのである。

△しかし、其の華美な中にも、紫色を喜ぶのがあれば赤色を好むのもあり、又藤色、小豆色を好むのがある又其の品質、縞柄によつて各自獨特の嗜好を持つて居るのがある、これは寧ろ偏有性の嗜好といつてよろしい。

△又其外に流行の勢力を以て嗜好を變化せしめるものがある、これは何かの機會を利用して人心に一種の魔力を與へ、社會一般の好奇心に投じてこれを誘ひ、以て社會の歡迎を博するものである、この流行の勢力に至つては滔々たる婦人悉くこれに倣はんと欲し、貧富上下の差別なく一意時流に後れざらんことを期するの

である。

△この如く流行といふものは其の社會に於ける時代の趣味相を代表したもので、隨つて流行物の品位が劣等なれば、其社會當時の嗜好の下等なるを表白したものである、タトエば日本の現代に元祿風俗の流行を見るやうなものである。一時の流行とは言ひながら、戰勝國、又世界的の日本現時の流行物としては如何にも恥入つた次第である。同じ流行をさせるならば、寧ろ神代的の規模宏大なる（大和民族の大雄飛せる時代の氣象を顯はせる）流行をした方が遙かに氣品高尙で大いに日本現時の流行界を支配したものであらうに、鎖國的で婬靡的なる元祿を摸するとは何事であらう。併し、

△世間といふものは存外、平凡で、存外盲目的で且つ存外俗氣紛々たるものである、如何なる大豪傑でもこの俗氣俗物の勢力には勝てないから、僅かにこれを指導して以て當代の嗜好好尙を作るの外はないのである

△さて盲目千人の社會は一般に嗜好の低卑なものである、決してこれを導いて高尙優美の域に達せしむる事は難いのである。

△それ故流行といふものは實際其の品質上第二流第三流以下のものが多いのである。決して第一流の趣味好尙が社會一般の流行となる事はないのである。

△それから又個人の嗜好といふものは千態萬狀であれば、一時世間の趨勢につれて流行物の前に走り行くけれども直ちに又飽きて再び新らしい流行を追ふて行くのである。故に流行といふものは決して一つ所ろに靜止するものではない。

△されば流行は恰も蜉蝣の如きもので、現に佛京パリの如きは日々に嗜好が變化して滿都の士女は殆んど流行を追ふに寧日なしといふ有樣である。

△英京倫敦や紐育では、巴里ほどに流行が激しくはないけれども、これを他の伯林や、莫斯科に比べては流行の變遷決して緩漫なものではない。

△英國の風俗中に多少剛健な分子を含んで居るとすればそれは英國がアングロサキソン民族の性質を現代に

持續してよく其の國人の性質を説明するが如く、國の風俗は必らず其の國に於ける民性を代表して居る。

△佛國婦人の姿態は妖艶華麗を本色とする、米國婦人の姿態は瀟洒活達を本色とする、英國婦人は米、佛のいづれにも異りて貞良雅淑の姿態を以て其の本色とする。これ實に世界の通論である、如何なる觀察者も三國の婦人の姿態に就ては必らずこの如く品評を下すのである。而してこの姿態は畢竟其の服裝として顯はれ、其の粧飾として顯はれ、以て萬人の眼中に映せしめるのである。



△斯の如く華美好きは派手な性質を持ち、質實好きは地味な性質を持つて居る、して見れば人はよろしく其の嗜好を高尚にせねばならぬものである。彼の娼婦等の好尚たる濃艶を通り過ぎで、俗惡なる嗜好は甚だ鄙しむべきものであるから、苟しくも高尚なる婦人を以て任ずるならば少しは美術的趣味を養ひ、且つ其の眼識を高めるべく素養をせねばならぬ。

△婦人が美術的の趣味を養ふは、單に服裝に關してのみならず、處世百般の上に就て必要である。歐米の交際社會に於ける婦人が天然の美を研き出すには主として此の美術的趣味と鑑識の力によるものである。即ち彼等が其の衣裳を撰

ぶや、まづ己れの年齢や容貌や、身の長けや、肉體の肥瘠やによつてその配合を考へ撰ぶのである。そして其の衣服が綠色なれば其帽が、赤色とか、其の帽が黃色なれば其の服が紫色とか、すべて其の配合を吟味して調和を謀るのである。

△美的嗜好の養成は單にそれのみならず言語に、會話に音調に、擧動に、挨拶振にすべて其の塲合に應じ、時宜に應じて調子よく、且つ高尙優美を心掛くる也。

△歐米交際社會の婦人の衣服、擧動言語が既にこの如くなれば、室內の飾り、客の取扱ひ並びに平素の心掛け、造次顚沛悉く皆美術的の趣味に叶ひ、以て審美的の風尙を發揮する事を得るのである。

衣服と品位

社交に於て粗末なる服裝は粗末なる待遇を受け家庭の裡にありて清潔なる服裝は善良なる家庭を表彰するなり勿論其人の事情に由り境遇により美麗にして價貴き衣服を着くる事を得ざることはあらんなれども清新にして而かも品位ある衣裳は左程に金錢をかけずとも作らるゝものにて四期共に廉くして而かも品好き衣裳を着ることを得るなり或人嘗つて謂へることあり我が妻は毎日我家を訪問する貴女に對して其衣裳見劣りせらる然れども其服裝質素にして而かも閑雅に其楚々たる容姿は他に比すべきにもらずと然り價貴き衣裳のみ品よき衣裳にはあらず意匠と工夫によりては粗服も美衣に優ること屢々なりされば其人の服裝を見て其人の品位も識らるゝなり特に婦女子の品位を判定するには其服裝の打扮にて大底は推量らるゝものなり假ひ其衣裳に巨金を費やし善美を極むるも其衣裳を着て直に品よく見ゆるものにあらず其品位高からざる婦女子は美服を纏へば纏ふ程愈々野卑に見ゆるなり此れ實に衣裳と人との關係の秘密の存する處にて其妙機に通ずる婦女子は社交界の女王として誇るに至るべし衣裳をして身體に釣合はしむるには一定の規則はなけれども調和と適合との二者の妙機に通ぜざれば必ず其容姿は野卑に見ゆるなり此妙機に通ずるは一種の天才にして容易の事にあらざれども何人にても心して注意すれば野卑の風態を避け不恰好の容貌を避くることを得るものなり。

評言

惡まれ口

武田藍涯

日本の婦人は交際場裏には零である。皆無であると言はゞ。定めしお腹を立てられて。爾靑盲漢世間を知らざるも程こそあれ。抑も我を何とか思ふ。遠からん者は豫て音にも聞つらん。近からん者は既に眼にも見たる筈。爾若し東京の新聞一葉を讀み居らば。我が常に交際社會の女王と崇められ。宴會場裏の花と唄はるゝを知らざる道理なし。我は夙く華族女學校を卒へ。英語を解し。佛語も亦門口の挨拶位に差支へなし。歌道の心得もあれば。「ピアノ」「バイオリン」若くは琴の嗜みもある。其他女一切の道に掛けて心得ざること無し。然るに何ぞや。臆面もなく。憚る氣色も無く。氣の利きたる婦人は日本に無しとは、實に呆れ切つたる雜言過言。兎ても容赦なり難しと。息巻き玉ふ方もあるべし。イヤモーそう承れば御尤。お氣に障らば眞平御免。爾見よ、今、交際社會に時めき玉ふ御婦人には、畏けれども第一には此頃歐洲の社交場裏よりお歸りに成つた有栖川宮御夫婦、其他華族では鍋島侯爵夫人、大山元帥夫人。其から選擧場裏に名も高き鳩山春子の君の如き方々在すにあらずや、と仰有るかも知れねど、併し是等の方々あるが故に、日本婦人の總てを社會的婦人なりとは申されぬ。貴族平民を問はず、總ての階級に於ける婦人が各々天與の才能を發揮して社交的に活動する樣にならなければ、未だ以て日本婦人を交際に上手な者とは言へませぬ。併し幸ひなは戰爭以來、婦人の團體が澤山出來たことで、隨て婦人の働きが廣く且つ深くなつて來たのだから、此の機を外さず、社會に出て何か公共的の事

をして世に貢献する所が無ければならない。又愈々日露の間に和睦が調つて。是等の團體は良し解散しても婦人の交際は猶依然頻繁に且つ親密にするが宜しからうと思ふ。

さて婦人は女同志での交際は勿論の事。男子と打雜りての交際もせねばならず、故に公會の席へも可成出なさい、イヤ屹度出るやうになさい。又人をも招待なさい。招待狀の表面には必ず何々夫人の名も列記する樣に成らねばならぬ。そう無くては我が日本は融和したる美しき社會とはいはれぬ。大概の宴會が男計りの集りであるから。酒あり肴なかるべからず。既に肴あり亦美人無かるべからずで。必ず醜業婦を招く慣例と成つて居る。是等を相手に猥褻な事を語り。不潔な歌を怒鳴り。酒 酣 となれば喧鬧亂舞。丸で熊公八公のどたばた騷ぎと異なる點が無い。女と酒何の因緣あつて斯くも環聯して離れぬのであらうか。私は甞て紅葉館 樓 上に於て堂々たる紳士が亂醉の餘り破鐘の如き聲を振り立て。角力甚句を唄ふを聞たことがある。何たる野鄙何たる殺風景ぞや。其品好く始つて體よく終る所で紅葉踊りが止めである。之も初めて見たる駈出しの木强漢には眼も眩むべけれども。度々見たる江戸ッ子には隨分溜つた者にあらず。日本一の紅葉館の宴會で先づざつと斯ナ者。其餘は推して知るべきである。其から二次會三次會の醜體は汚はしくて言ふを欲せず。之では如何にも下品では無いか。愉みは勞力に伴ふ報酬の如き者で。決して惡ろしとは云はぬが。併し愉は極むべからず。淡きを以て最上とす。何と清く、品よく、高尙に樂む工夫は無かろうか。

其はあるとも。別に仔細は無い。貴夫人令孃を交際社會に立たしむることである。此貴女達が社交的勢力となる時は、宴會の清まる時である。西洋等では日本の樣に男子のみを招く宴會は無い。男子も十人なれば女子も十人といふ割合にする。夫を招く位なら必ず其妻をも招く。女の話相手が無くてしよげかへつて居る紳士等の無い樣にしてある。而して又其招かれた婦人の中には必ず「ピアノ」の名人あり。「ヴハイオリン」を能くす

る者ある。「オルガン」を彈く人あり。又男子は「ベース」女子は「サップラノ」を歌ひ高低淸濁合せて之に和するので、實に旨い者だ。又中には滑稽話を爲して人の頤を解く者あり。室内遊戯を爲して樂むあり。面白き「ゲーム」にて輸贏を決するもあり。和氣藹々として眞に愉快である。靜かで賑かな會合である。又た無邪氣なる保養である。其内容如何にも男女同等である。寧ろ女子は大切にされ尊敬されるから。猶一段の味があるのである。之なれば別に藝妓を招いて他日物議を惹起すの危險に觸れるにも當るまい。妻君に伴はれて行き妻君に連られて歸るのであるから。最も安全なことである。

然るに我邦の婦人はどうであるか。如何にも卑屈で、遠慮勝で。引込思



案の方である。物三人と云ふ人中へ出るとモー顏を赤くし。若い女子の如きは誰も見て居らぬのに自分獨りで氣まり惡がつてむづ〳〵して居る。其樣子は餘程妙な者である西洋の婦人は貴女紳士の多く居る中へ悠然として入り來り。男子が急ぎ立て席を讓れば輕く謝辭を述べて席に就く。他客に對しても皆樣今晩はなどと云はず。歸る時も其主人公にのみそつと會釋して人知れず席を離れるから。何時歸つたか誰も氣が附かぬ。之が主人へも相客へもの禮儀である。皆さんお先きへ御免を蒙るなど〻大きな聲を不意に出して、他人の遊興を妨げ他人の歸りを促す樣な半間なことは爲ない。所が、日本婦人の多くは一度座敷の入口に御輿を据へたら。幾ら何と云ふても動かばこそ。今は

主人も溜り兼ね。其所では往來の邪魔になりますからと。きめつけられて漸くむじ／＼動き出す。其から座敷に入るや。一人々々に七面倒ナ挨拶。暑さ寒さの見舞から。平生無沙汰の詫言から。何から何まで細大不洩。頭を筆規の如く振回はして述べ立てるのである。歸る時も靜かにすればよいのに。皆さんお先きへ失禮おほゝなど〻下らぬ所に愛嬌を溢し却て他人の感情を害するいけ好かない俗物もあるのである。斯様な人物は人を甘く見たら其こそ大變。のべつ幕無しに癡言を饒舌り立て〻他人を困らせるが。堂々たる紳士淑女の前へ出たら沈默啞の如くで。一通りの挨拶さへも出來ぬ。誠に厄介な代物でムる。

西洋の婦人は概してぐづ／＼した者は少い。寧ろ活潑過ぎるかも知れぬが。宴席にても能く喰ひ能く談ず。而かも可成趣味ある事を語る。日本の婦人は少く喰べて多く語らず。能く／＼先天的口不調法に生れた者と見える。未だ日本婦人には牛乳は臭い。牛肉は親の代から戴だことが無い。旨い物は鰻と天麩羅の外は無い。汽車や電車に乘ると眼が回ると云ふ時代者さへある。イヤ其が少くないのは困るでないか。其に歷史を知らず。地理に暗く。美術の觀念に乏しく。社會的知識が尠い。地理といへば東京市内の或る部分か。若くは江の島鎌倉遠くて箱根位がやつとのこと。責めて京、大阪、奈良、伊勢參宮位はして居なければならない。だから世間を歩いた人の前へ出たら往生。只々へい／＼云ふて法螺も眞と承るより外は無い。嘆かはしいことの限りである。美術と云ふても御自分の用ゐる髪の物か。衣服の模様か。襦袢の半襟か位の物は畵幅を見ても誠にお奇麗ですと讃め。古器物を觀せられても之はお立派と稱し。其他如何なる珍器を見ても。只々結構、上等、綺麗等の俗的讃辭の外は何をも言ふ能はざるのである。少し通人で芝居の批評位試みるのがあるが。藝の話よりも俳優の醜美を喋々するのである。又社會的知識に至つては甚だ乏しい者で。常の新聞の見方がをかしい。重なる所は三面であつて。二面の如きは措て問はざる風である。其だから權助の首縊りや。お蕓の駈落ち。女郎の情死

等は能く眼を着けて讀めども、内閣大臣の顔觸れさへも知らぬ者あり。況んや其主義其施政の方針等は一向無茶苦茶で分らず。陸海の戰報を得て一喜一憂するは男子と異る所無けれども。抑も此日露衝突の起因。我邦と清韓との關係。世界に對する我國權の發揚。世界列國の態度までも考へて居る婦人は少ない。其他政治界の事。商工業の事。若くは農業。其上には我邦貿易の現況。輸出入の有様も知つて聊か損も無いに。不關焉と濟し込んで居る。偖又歴史のことも世界は兎も角も我邦丈けの事實は、其の大要を知らずばなるまい。神代は邈たり浩々として知るべからず。少くも神武帝以來。國家發展の由來。政權の移動。治亂興亡の跡。例へば藤原氏は如何に巾を利かせて誰が威張つたか。誰の時何をして大味噌を附けたか。又平氏はどう云ふ工合で全盛を極め。どの位まで增長したか。何が惡ろくてアノ様な瓦解破滅を招いだか。其から後の源氏、北條、足利、織田、豐臣、德川の流れの末に至るまで。其のあらましは御承知あつて然るべく。文學宗教美術にも各々歴史のあるもの。外國より渡來せるものあり。我邦特有の物あり。或は外國に始りて我邦に成りたるもあり。而して又其文學、宗教、美術が如何に進歩發達せしか。苟も是等の事譯を胸に藏めざれば、外國人は兎もあれ人中に出て話も出來ぬが。人の話も充分には判らぬのである。我邦婦人殊に奥様と稱せらるゝ者の中。此種の事の判つた婦人果して幾人あるか。



概して我邦の婦人は。幼少の時より箱入娘として兩親の膝下に甘く育てられたから。社交的知識が乏しい。男女七歳ならざるに旣に席を同くせざるの古訓を過重に守るの弊風尙ほ遺るが故に。兩親も男の中へは出すを好まず。之では求めて娘を變物とするのである。世の廢れ物を製造するのである。此頃或る雜誌に男女交際の必要と云ふことがあつたが。胡蝶花に戯れ、麋鹿野に狂ふ。人間異性相慕ふ固と之れ人情の常。男女交際は自然の物であつて必要などは疾くに通り過ぎたる話である。其男女交際が自由で無いから。遂に酒あり美人なかるべからずとおいでるのである。余と相識の英人某の三男當時齢僅かに五歳なる者の或る家の門前に立ち居るを見たれば。余之に「お前は何をするのであるか」と問へば彼は「私は愛人を待つて居るのです」と答へた。其愛人とは誰ぞ。彼より一ッ年少き少女なり。余は此の小僧の氣の利きたるに感心して。驚いた。トテモ日本の腕白には押しても出ぬ口上である。我邦も早く斯樣な風にならざるべからずと思つた。今より十數年までは我邦の男女の兒童が偶々打連れて遊び居ると。他の頑太郎奴が。「男と女と豆煎り」などのませかへし文句を云ふて之を冷かす。冷かされて直ちに解散する。西洋と比べて實に大きな違ひである。今では飛騨の山中にでも行けば格別。他には無ささうなことである。

只其計りでは無い。我邦の婦人は學問知識に乏しいから。何だか他人が恐ろしく。無闇にえらく思はれ。馬の眼のやうに何でも相手が大きく映るから。其所で稠人廣座の中に出でると。下向きになつて屏息して居る。口も利かねば笑ひもせず。丸で息の通ふ人形同然。之では中々交際裏場の花とは云へぬ。よし花と云へても造花である。斯んなことでは仕方が無い。余は思ふに我邦婦人其自身のためにも。男子の爲めにも。社會風敎の爲めにも。もつと活潑に。もつと無遠慮に。寧ろおてんばと云はれても。今一層遣り氣になつて交際場裏に立現はれてもらひたい。尤も余が茲に云ふおてんばは。無學文盲下等極まつたあばずれ女を云ふにあらずして。

清き家庭に養はれたる教育ある上品の者即ち活動的婦人を言ふのである。其形振りの如きは日本風最も可なり。敢て姿勢に添はざる洋服を無理薬袋無しに着用するの必要も無し。西洋にも勿論善き所澤山あるべしだが。日本の粋は棄るべからず。其盛装して立出でたる所は優にやさしく。何所となく奥ゆかしく掬すべきの風情。滴るばかりの愛嬌あり。天津乙女も斯くやと見紛ふ程の佳人もある。只其擧止餘り音無し過ぎて。意氣地無しに見ゆるの嫌ひあり。西洋婦人の跳返りたる出過ぎたる様な者と對照する時は薄か奇異の感なき能はず。之を我邦の婦人が猥りに眞似る時は。其の特色を失ひ。のみならず飛んだ間違を醸し。赤耻をかくことがある。中庸を得るは其れ難い哉。



之れは昔時の話であるが。佛蘭西の交際社會にたつた三人と稱はれた。名高き三人の婦人が打連立ちて西班牙に遊び。先づ最初其國第一流の政治家某を訪問した。其政治家は佛國からの珍客殊に名ある婦人のことだから。最も鄭重に取扱ひ。猶此三人を主客とし。其地名流の紳士淑女を招いて晩餐會を催した。三婦人の得意思ふべしだ。此の三人は今日を晴と數寄を凝らしたる最新流行の衣裳を着飾り。定刻五分前にぞ着きにける。今日こそ日頃鍛へ上げたる腕前の程を見せくれんずと。群がる人々の中に割込んで。佛語、西語取混せて自由自在に饒舌り立てたり。取分け其中の一人は遖れなる能辯家にて。玉を弄するが如き妙なる音聲を以て。喋々喃々相手嫌はず話し續けた。

イザ食事となると。此能辯家なる婦人は主人の案内に連れられて。食卓の第一位に祀り上げられた。大牢の具を備へたとは是等をこそ云ふのだらう。山海の珍味佳肴は山なす程であつた。不思議や此能辯家には取分け大いなる皿に而かも二倍の食物を盛つてありければ。辯者心中自惚れて思ふやう。此主人公は我等三人殊に我身の交際的技倆に面食ひ煙に卷かれ。周章て二倍の馳走を出せしならん。ウフ此田舍政治家がと。紅舌ベロリと出したかどうかは知ず。去るにてもチト可笑しき筋なればと。最と鷹揚に主人に向ひて其所以理由を問へば。主人は微笑を漏しながら。イヤ何別に仔細も候はず。只々御身の口の一際勝れて他より大きやかなるがために候と遣つ附けられて。



流石の辯者も一言の返す言葉も出でず。滿座の中で赤耻をかゝせられたりと云ふ。だから活潑が好いと云ふて。他人に惡しと思はれてもならず。と云ふて因循姑息で人見知り計りしても困る。能く宴會などで見る奴だが。場慣れない初陣の婦人が。質に取られたお釋迦か。貰はれたての女兒の如く。茫然として手持無沙汰で居るのがあるが。其容貌其才能其知識が人を引くだけに備はつて居ないのである。決して强顏ない薄情の人ばかりで打遣つて置くのではない。之はまだ修業鍛煉が足らぬのであつて。其辛い情ない悲しい場合を通り拔けて初めて一人前の交際家となれるのである。

只今では日本婦人は上下押なべて多少交際上手になつて來た。「ゼロ」「ナッシング」の失言は今茲に取消してもよいが。我が所謂空とは馬無きにあらず。良馬無きなりの筆法で。文字の如く皆無と言たのではない。だがまだ／＼迚も豪者は出でぬ。夫の後に附て僅に辛抱する位のことが上出來である。其所で交際社會へ出るには幾らか其資格が備はらざるべからず。第一多方面的婦人でなければならぬ。然らざれば談話の題旨が乏しくて。他人に退屈させ、自分も亦面白くあるまい。遊藝の心得も無ければ他人の音樂を聞分けることも出來ぬ。人に接する時は努めて愛嬌を振撒け。而れ共凛として冒すべからざるの威容を保て。首を前へ出し脊中を凸くする樣の姿勢では兎ても合はぬ。汽車の煙突の如く直立して歩め。歩む時は眼を目八分にせよ。女に接したる時は可成内端にせよ。男子に對しては心持活潑にせよ。之は交際上の掛引である。談話は巧みに活きて飛ぶが如くにせよ。其と同時に他人の談話に耳を傾けよ。話上手は又聽上手ならざるべからず。獨りで話て仕舞ふは獨りで喰べて仕舞ふと同じ理窟で。他人の厭嫌を來すは請合である。博識なりとて餘り述べたてるとおちやッぴーと云はれ。知つたが爲めに却て人に笑はれることとあり。口を利て喝采もされず。沈默却て稱めらるゝこともある。千變萬化の人間を相手とすることは實に難かしいことであるから。能く人間を學び。能く人の心を讀み。能く人の容貌を研究し。世の中の酸と甘いとを嚙み分け。凡ての事常識を以て所置すれば。社交的失敗は蓋し無かるべし。余は斯の如くして。日本婦人の社交的位置が高まらんことを望むのである。

世間交際難

我儘女

自分が物心の付いたのは五ッ六ッの頃で、其頃私は田舍に居たから、近處隣はみな百姓家で、靑洟垂らし

た汚い子供ばかりであつた、夫れでも私も矢張社會的動物の一人で有つたから、家にばかり引込んで居るのは誠に嫌で、母の目を潜つては其汚い子と一所に遊んだ、其友達といふのは越後から來た水呑百姓の子で今から思へば夫は〳〵汚い髪は赤いもぢや〳〵として、櫛つた事は無い樣で有つた、着物は私達がもう單衣を着て居るのにまだ厚い縞目も分らない樣な綿の出たのを着て居た樣に覺えて居る、如斯な子でも私には無二の友達で、毎日〳〵石積みをしたり。砂糖屋をしたり、時には肥料取りの車の上に乘つたりして、之れより面白い事は無いと思つて居た。夫でも時には喧嘩もした、三人寄ればきつと一人は仲間はづれにされて、怒つたり泣いたり、もう一所に遊ばないなど〻云つて、仇の樣に思つてしまふが、又暫時經つと何時の間にか一所になつて遊んで居る、ほんとに此時分程罪の無いものは無い、而して私は此子供達から虱を移されて、母に大變叱られた事が有つた、此頃の私の交際と云ふものは、實に如斯で、此二人の外には何も無かつた。やがて學校に行く樣になつた、斯うなると今迄無二の友で有たお德さんと、おみよさんとはもう嫌になつて、何だか如彼子と遊ぶのは恥しい樣になつて、もう其家の前通るのも嫌になつた、而して初めの内は學校に行つても何だか恥しくて、隅の方にばかり隱れて居たが、終に隣の人と話を始め、夫れからそれと仕舞には誰にでも話し、誰とでも遊ぶ樣になつた、此時の一番仲好は三浦のおたかさんと云ふのと、渡邊の操さんと云ふのと此の二人で二人は私の家の前を通つて學校に行くので、仲がよくなつてからは何時も誘つてもらつた、夫れで此三人は學校は勿論、家に歸つてからも始終一所に、彼方の家に行つたり、此方につれて來たり、時には御飯を食べるのも日が暮れるのも知らずに遊び暮した、其内には遊びに行つてお菓子を貰つたり、時には御飯迄も一所に食べる事も有つた、母は氣を付けて家に出來た果物を籠に入れて持つて行けとて、私は重いのを我慢してさげて行つた事も有つた。

斯くて此時代は今から思へば誠に夢の樣で、隣の家には誰が居たか、仲好の友達の家の次の間は如何なつて居たかもよく覺えて居ない、此頃の交際と云ふものは誠に狹いもので、小學校時代は濟してくる、田舍には女學校が無いから東京迄出て來た、今迄は井の蛙で自分の外は何も解らなかつたが、さて此處に來て見れば恰で天地が異う、今迄見た事も無ければ聞いた事もない、母の知り合ひの人とか云ふ家に預けられた、何方を見ても知らない人ばかりで、初めて其處に寢た夜はほんとに心細かつた、而して夫れからはもう今迄の樣に我

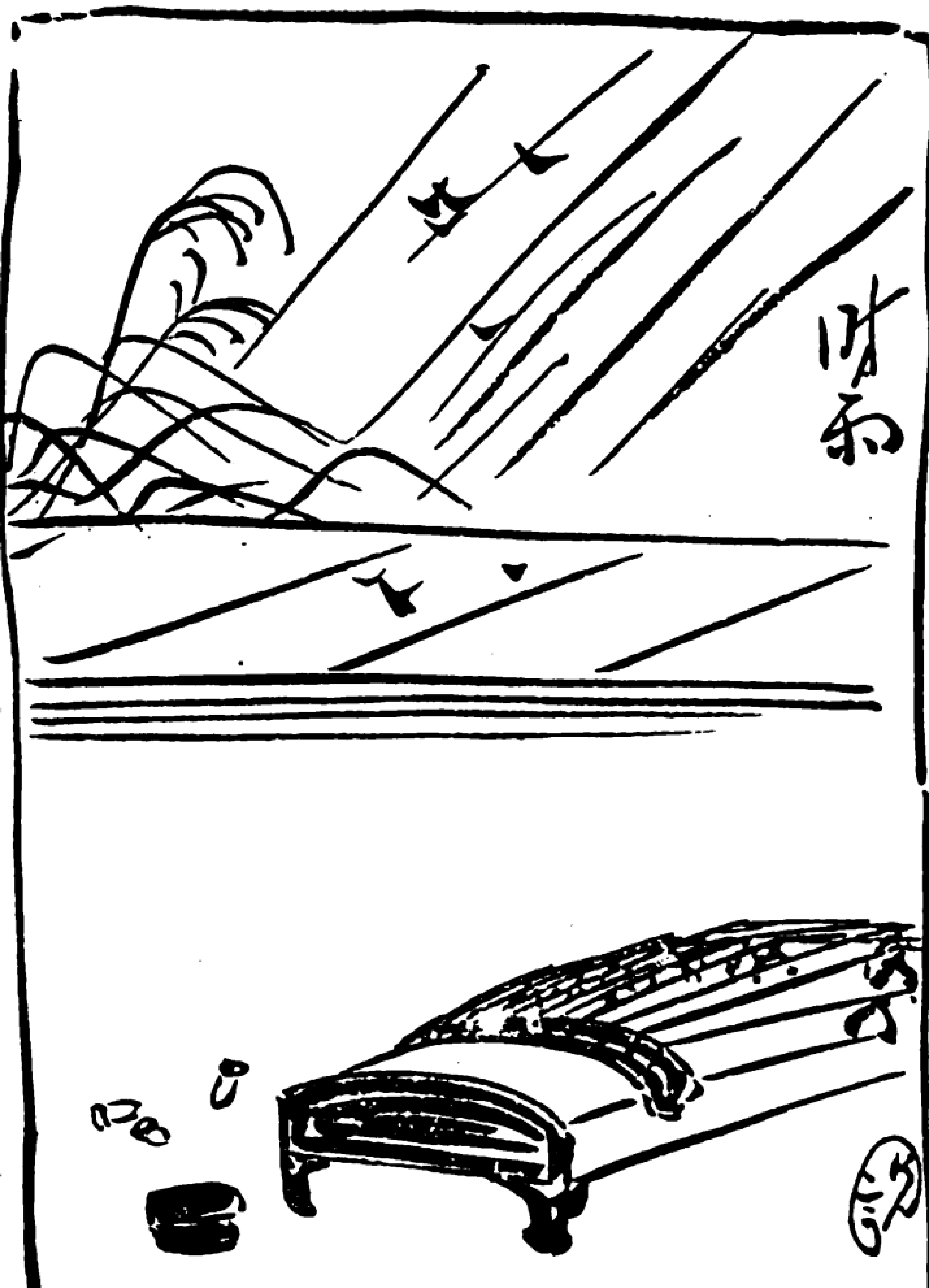


儘を云ふ事は出來ない、其處の人は他人にしては誠に心切だと云ふ事で有つたが私の大事な母程何も彼も心切では無かつた、其家には丁度私より一ッ年下の娘が有つて、毎日一所に學校に行つたが自分の家で無い以上は、種々と自分の氣に入らない事もある、あゝして欲しい斯うして欲しいと云ふ事が澤山有ても、一々夫れを云ふ事は出來ない、皆我慢して不自由な思ひを耐へて居ねばならない、中々人一人預つて下さると云ふことは大抵の事ではないから、よく何事も氣を付けて皆樣の云ふ事を聞き、厄介をかけてはなりませぬと時々私の祖母が來ては聞か

される、而して來る毎に下女に迄何か手土産を持つて來てやる、私は如彼事をしなくてもよさそうなものと思つたが、今考へて見れば矢張私の居る爲に、少しでも世話して貰ひたい心遣ひで有つた、今迄少しも人との交際など〻云ふ事を知らなかつた私は突然知らない人の中に出されて、如何していゝかわからない、只だ氣兼ねばかりして其の日を窮屈に暮して居た、扨學校に行つては如何かと云ふと、此處は名に負ふ女學校だけに、前の樣な漠然としたものではない、人は其面の異ふ樣に其心が皆異つて居る、まして女子は口が多い、都の人は田舍から山出しの自分に比べると年は大抵同じで有るけれど、大變、利口で、才がある、私の樣にぼんやりして居るものは、一人もない、其間に交はつて行く、自分は誠に苦勞で有つた、自分は如然氣でない事でも、人は彼是と云ふ、自分の好かない友達でも一樣に笑顏を以て表面だけは隔てのない樣にして行かなければならない、此時に私は感じました、實に友達との交際は自分を欺いても只圓滿を保つて行く樣に勤めなければならないものである、自分の好かない事も好いた樣な顏をし、行き度くない處にも皆が行けば矢張り面白そうにして行かねばならない、如斯な位なら寧ろ一人で居た方がましかも知れないと思ひました、田舍者の朴訥な心には、輕薄な形式的な朋友間の交際が誠に厭はしく感じられた、友達の中には實に交際の上手な人がある、學問は夫れ程でないが、お世辭がよくて誰を見てもにこ〳〵として話しかける、只に同級の人にばかりでない上級の人にもどん〳〵と知合ひを拵へて所謂交際家の名を取る人がある、如斯人は其心の內は如何で有うか、矢張彼の顏の通り、常ににこ〳〵と好意を持つて居るだろうか、私は常に疑つて居た、師弟の交際も中々面倒なもの 正月にはお禮に行かなければならない、暑中になれば暑中見舞に行かなければならない、夫れも親がちやんと氣をつけて與れるならいゝが、私は只一人で何も彼も考へて行かなければならない。

やがて此間も三年で私は或る寄宿舍に入つた、此處に來て私は猶更交際の容易で無い事が分つた、今迄の樣

ではなく、朝も夕も、寢る時も一所に居るのであるから、一層複雜で氣兼が多い、自分の勝手にならない、而して上に、舍監と云ふ者が有つて、此人へも亦相當のお世辭を云はなければならない、斯う大勢が集まつて居ると、如何しても或る一部分は己れを犧牲に供しなければならない、餘り仲もよくない友が室に來る、今自分は之だけの事をしてしまふと、一生懸命になつて居ても邪魔な顔は出來ない、心にも無い事云つて貴重な時間を費さなければならない、友達が多く集まつて會をする、其會費が五十錢だ、自分には余り有益でもなく



而して窮屈でおまけに幹事にでも當ろうものなら、一日中働いて何の得る處が有るか、實に馬鹿氣た會と思つても、嫌な顔して引込んで居れば、彼の人は無責任だとか、何とか云ふ、自分は運動するより此事をしたいと思つても友達から强いられゝば、夫れでも嫌と云ふ事は出來ない、少し位身體の工合が惡くたつて誰れに訴へると云ふ事も出來ない、而かも誰か同室の者でも病氣すれば、夜も寢ないで看病しなければならない、夏休みに歸省する、歸りには何か土産を持つて來なければならない、夫れも多人數だから中々大變だ、何も持つて歸らなければならない

と云ふ事は無いが、皆が然うすれば自分だけしない譯にも行かない、クリスマスが來れば不經濟と思ふ贈物もしなければならない、之れ程、自分は注意し、氣乘ねをして居るつもりでも、まだ足りない、之れにお世辭と云ふものが無ければ矢張不可ない、若し夫れを云はなかつたならば、彼の人はたかぶつて居るの、眞面目くさつて居るの、すまして居るのと種々の事を云はれる、夫れ位な事言はれてもいゝ樣なものゝ、又時に取つては困る事もある、舍監などゝ云ふものは存外に（人にも依るだろうけれど）人の言葉に左右せらるゝもので（否然う思ふのかも知れないが）友達の間に惡い評が立てば自然に其受けが宜しくない、併し此宿舍生活の內に自分はやつと、人は如何に交際して行かねばならないものかと云ふ事が少し分つて來た、而して此處に居る事又三年で、此度はほんとの社會に出る樣になつた、交際は益々複雜になつて來る、而して私はある學校に奉職すると共に、教師仲間の交際と云ふものが始まつた、各々其出た學校の異なると共に、其主義も異うわけだ、高等師範を出たものと女子大學を出たものとは如何しても意見が異う、文部の檢定を終へたものも亦異う、互に心の內では相反目する、互に其學校での主權者となろうと暗に競爭する其爲には校長への御機嫌伺ひも怠らずせねばならない、實に子女を教育する身に有う事か、併し其學校に長く居樣とするには、勢不當な事、無益な事でも止を得ずしなければならない、新しく赴任したものは猶更みじめで、先輩となれば學力が無くとも無暗に權式ばる、（然んな人ばかりではあるまいが）殊に年でも若ければ相當の資格を持つて居ても、粗末な取扱ひをされる、而して何か事のある時にはだしに使はれる田舍などは猶更で、行つた初めに校長の家を初めとして、教師の家を夫れ〳〵訪ねなければならない、新しい希望を以て勇んで行つても、實に皆豫想外なのに驚く併し之れは猶自分が社會と云ふものに馴れないからで、社會と云ふものは、夫程眞面目なものではない怪しからぬと思ふ樣な事も公然と行はれて居るのだ、而して夫れを少しでも非難し樣ものなら、やれ世間見ずだの、

交際の法を知らないのと、云つて排斥せられる、教師などゝ云へば大變立派に聞えるが、立派な人は極く僅かで、皆利己主義な割合に品性の低いものである事が分る。併しまだ之等は何と云つても教育のある人達で、或る點は己れと同じ趣味を有するものであるから結構です。

基督教界の婦人交際家

柴みどり

基督教の婦人！　彼等は世間より一種變りたる目を以て見られて居ましたが、近來は漸く是等の域を脱しつゝあります。今彼等の中の交際的婦人を評論するに當り、彼等は如何なる經驗を嘗めて來たか、又た如何にして交際社會の一方の勢力となつたか、而して彼等は世に何を貢獻したかと云ふとの徑路を陳述する必要があります。

▲四大變化　基督教新派の始めて渡來したのは文久年間であるが、これは殆ど種子の如きものであつて、殆ど有るか無きかでありましたが次第々々に勢力を得、明治の初年になつて其信徒も加はり、彼の中村敬宇氏の如きは天道溯源を譯述して大に傳道上に便宜を與へました。斯く光輝を現はす樣になりました頃、婦人中にも洗禮を受くるものが出て來たのです。板垣退助伯等の政客が最初之を利用する目的に入れたらしいが、遂に眞面目なる信徒も出來た、故に片岡健吉氏なども其一人です。續て基督新派宣教隆盛の原因となつた三大青年團は、急足の進歩を與へました、其三大青年團とは左の如きものです。

一、熊本洋學校（教師ゼンス氏）　これは又た熊本バンドと稱された一派で小崎、宮川、海老名、横井など、同志社第一回卒業の連中二三十名で、即ち組合派の主腦です。

二、ブラオン塾（教師ブラオン氏）　これは横濱にあつたので、彼の本多、井深、押川などの諸氏が出た英學塾です、勢力は今の日本基督派美衛派に及んで居ります。

三、札幌農學校（教師クラーク氏）　内村、大島、新渡戸などの諸氏の出身校で、大部分は教派に關係ない獨立教會及び其幾分は組合派に勢力を及ぼしました。

以上の諸氏が直接に間接に傳道界に盡す樣になつてから、基督教の勢力俄然增加して來た。而して一面には反對、迫害が起て來て、婦人信徒などは隨分ひどい目に逢ふた。これ其一變化です。

次で明治十四五年頃となつて歐化主義が上下に稱道され、一も西洋二も西洋、西洋風でなければ夜があけぬと云ふ始末、漢學塾は門前雀羅を張り、婦人洋服店は目の廻はる程いそがしく、彼の鹿鳴館裏夜每に舞踏が盛にやられたのも此時代で、隨て基督教は非常な勢で傳播され何れの教會も來會者を以て滿たした、此當時多くの婦人連中も入つたが、現今の交際塲裡に多少名を得て居る婦人は、此時代に信徒となつた者が多い、これ其二變化です。

續て俄然として保守的反動が、一角より起り來り、破邪顯正演說が僧侶或は同臭味の人々によりてせらるゝ樣になりまして、基督教は干潮時の如く時に漸々勢力を減じ、常に滿員を告げた教會堂が、恰も曉天の星の樣になつて、脫教者も多かつたのです、實は一種のマラリヤ熱の樣なものであつたから、これは自然の結果であつたのです。これが其三變化。

斯く波瀾の一進一退した結果、始めて眞面目になり今日の狀態に立ち至りました、これが其四變化です。此の如く四度の變化に逢ふても初志を變ぜず、又其間に信徒となつた婦人は如何にして、

▲社會に勢力を得たか、又た何を社會に貢獻したか、詳細に調べたならは種々あるであらうが、其最も著しいものは婦人矯風會や婦人白票俱樂部の如きそれであらう。此矯風會の設立は明治十九年十二月六日であつて「上帝の佑助に依り和洋一切の酒類及び喫烟を禁じ社會風般の弊風を矯正し、德義を增進せんが爲め適當の方を盡す」云々の目的で、創立者は今の會長矢島刀自、故佐々城豐壽、海老名彈正氏夫人みや子外二十名岩本善治、大儀元一郞などの諸氏が其補助でした。佐々城豐壽氏は當時中々のやり手で、現に明治九年中村敬字氏と共に女子師範學校で演說をなし世を驚かしめた婦人でした。此會が起つてから議會の初期以來氣魂よく一夫一婦の請願、醜業婦外航に關する請願を持出した、彼の條約改正の時白票俱樂部が、大膽にも英國女皇陛下に書を捧けて青木周藏氏に叱られた事、其他政治上に家政上に將た婦人問題に盡した、其間缺點も少くはなからうが、我國の文明に貢獻し、また婦人社會の地の鹽となつたことは永遠に記臆すべき事であらうと思ふ。同會も創立はや二十年の事でありますから潮田千勢子などの如き、有數の働人ばすでに逝き、生みの母となつた佐々城豐壽氏の如きも、北海に退隱し、世間の事に關係しなくなつてから間もなくこれまた異鄕の客となり、會の擴張に盡力した横井玉子も亦た鬼籍に入りました。

以上は基督教婦人が經來りし、大要ですが、今現に事業界に立ち、交際塲に入りて名を爲して居るのは誰々であらう、余の知れる所を以てすれば、左記の人々は即ちそれであると思はれる。

矢島楫子（日基）　本多貞子（美以）　山脇房子（聖公）　小崎千代子（組合）　大山捨松（組合）
津田梅子（聖公）　戸板關子（日基）　渡邊辰子（日基）　林歌子（日基）

などであつて、元良米子（元良博士夫人）、海老名美屋子（彈正氏夫人）、井深花子（梶之助氏夫人）、塚本はま子（道遠氏夫人）、淺井柞子其他六七の婦

人の如きも其中にあるが、其等は今は當年の活動を見得ざる人、或は稍ほ一方に名をなして居る人々であります。

次に將來活動社會の人たるべく思はるゝ、比較的年若き婦人は、随分ありますが、今其一二を記せば、羽仁元子(日基)、ガンドレット博士(組合)、三谷民子(日基)、横倉秀子(日基)、鵜飼妙子(美以)、外四五氏でありまするか。今是等の人々に就て余が知れるまた聞いた所を少しく記して見ませう。

矢島楫子刀自

刀自は日本婦人矯風會の會頭また基督教學校(クリスチャンスクール)中の有數なる女子學院の院長で、教界の婦人界に於ける殆ど總指揮官に等しい名望ある一軍團の長と云ふ位地の婦人です。刀自は熊本の出身で德富老夫人、故熊本女學校長竹崎順子など其姉妹でありますか、早く夏人に死別れし以來、身を女子教育界に投じ女子學院の前身たる櫻井女學校時代からして、是が長となり、矯風※會の如き多少の斷續はありますが、二十有餘年來事實上の會頭として斡旋し、今猶ほこの二大權の權柄を持して活動せられて居る、或は云ふ刀自は夏き意味に於ての四大居なりと、余は其然るや否やを知らず、唯だ其外交的手腕と老て益健なる一點に於て或は然らんと思ひます。刀自嘗て同會の大阪大會に於て總裁に選擧されましたが、其後の會合に於て此名稱を辭した折の演說の大要は左の如くであつたのです。

……大會に於て新例を開き余に與ふるに總裁の名を以てせられました、當時余はイスラエルの爲に大將の外にモーセなる所禱者の必要であつた樣に、矯風會の爲め會頭以外に所禱者を要する爲め斯樣になつたのであらうと思ふてお受致しましたが、爾來十數日此事に就て熟考するに如何にしても安ずる能はざるものあります、元來會頭は會の頭でありますから、其上に何物をも要しません、若しありとすれば盧無僧の天蓋と同樣邪魔物に過ぎず云々。



とかくして刀自は巧に之を辭した。また刀自が衛生課の課長として報告をなすべく壇に立ち、満場として微笑を洩らしつゝ、

報告すべき書附もありません、また多くの材料もありませんか、私の顔を御覽下さればそれでよい、私は七十歳近いですが斯く健康で顔にも紅を呈して居ります……私の報告は御聞きなさらないで御覽下さい。

との冒頭を置いた。また或る新聞記者が刀自に會して一夫一婦請願の事を尋ねると、刀自は、

アヽよく御尋ね下さいました、まだ御記臆下さいましたか……。

と眞に心より喜ぶ者の如くであつたと云ふことです、又た演説の折などは「何から先へ」など云ふ一と風變つた演題を掲げて演ぜざる先に、來會者を呑んだ、まあ斯様な風でありますから、以て其手腕の如何許り老練して居るかと云ふとを推察せらるゝでせう。

女子教育者としての刀自は、所謂「將に將たる」的の人であつて、教鞭を執て講堂に立つの人ではありません、古英雄で申さば關羽、張飛でなくつて玄德であります。外國教師と日本教師の間を圓滿にし、押へざるが如くにして押へ注意せざるが如くにして注意し、知らざるが如く裝へとよく人物の如何を察し、常に適當な處置を採り、一校を統轄して行く。生徒に對しても此主義であつて、常に身を以て導かんと力めつゝあるものゝ如くです。刀自嘗て訪者に對し、

我校は世の所謂良妻賢母を養成するを以て目的とせぬ要は學德兼れ備り、眞の意味に於てのレデーを養成するにある。

と云ふたとか、されど刀自の未生を導くや洒掃炊爨を力めてなさしむると聞けば、前様の教育をなし事實に於て良妻賢母を造るにあるらしい、此邊は刀自のえらい所であつて、漫に世にこびず、超然として校風を起し女子教育界一方の明星となつて居る一理由であらう。刀自が邪曲に反對し生花點茶などを度外視する點などは卓見です。

扨てまた刀自は自ら需めて人に交際せぬ方の人である様に思はるゝ、されば交際社會に刀自を見るとの少ないのも此理由である、さりながら人は刀自に交際を需むる、需むれば如何な人と雖ども喜んで會ひ且つよく語る、是等の點から見ても刀自は慥に婦人中の巨人である。而して刀自は樂しみ世の所謂道樂と云ふものは殆ど聞かぬ、されど刀自は能書であつてまた和歌をよくせらるゝ、時に「院の樺子」なる署名をなしてものさるゝこともありとか。

「書狀は人の性質の寫眞なり」と世に云ふが、若し此事を眞なりとせば、刀自は常識の人又た謙遜な人であらう、文の至れる、用字の謙遜なる、實に其性格を文字の上にあらはして居る、されど「先生」なる文字を用ひなくともよき人に迄使用し、或は「大夫人」などの敬語を用ゆるとありとかにて、刀自の爲に惜んで居る人もありと傳へらるゝ、されど余は未だ之を知らぬ。

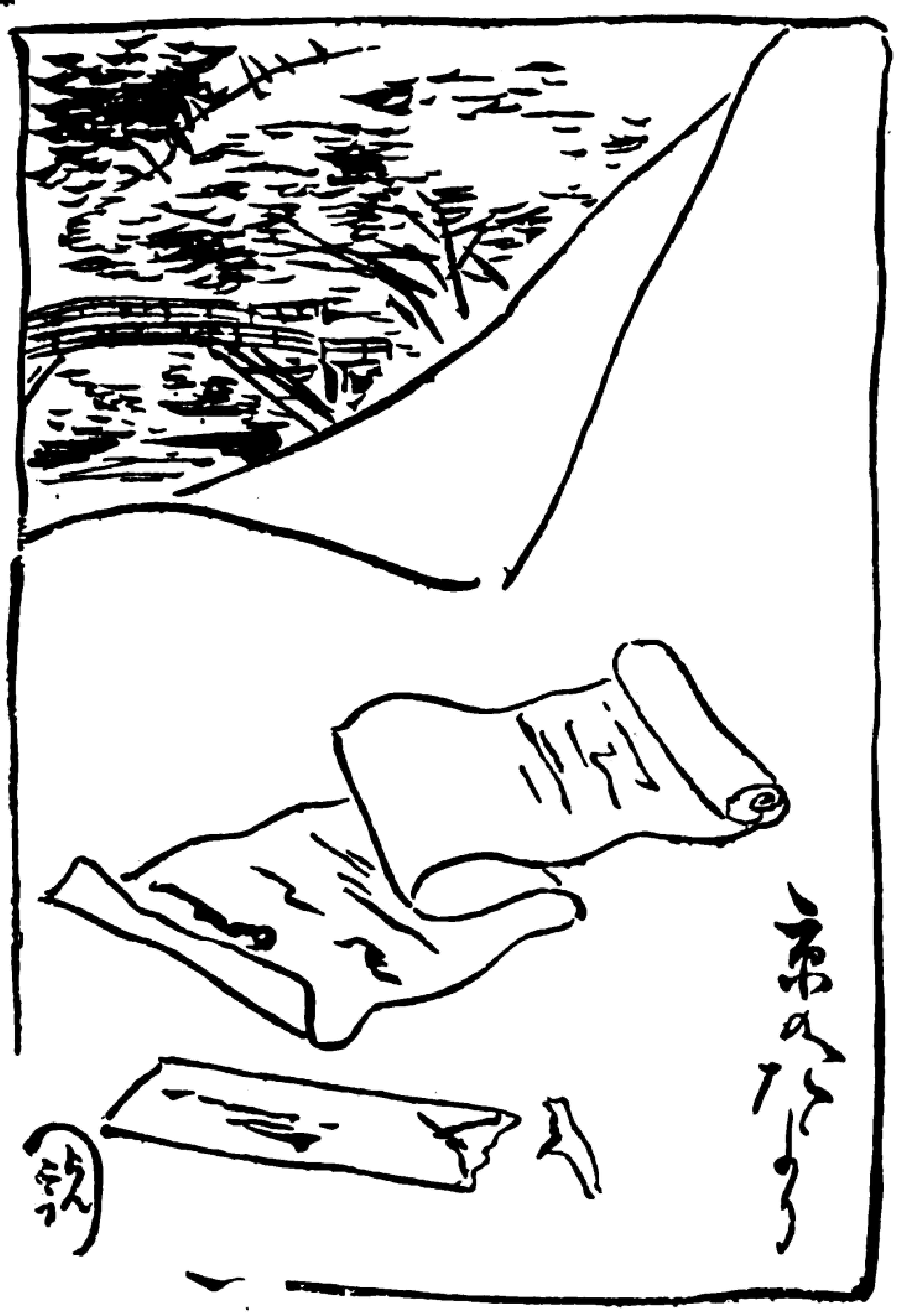
若し人ありて女子學院の裏門より入り、號鐘一打刺を通じて刀自に面會を需めるなら、時に應接間に通さるゝが「失禮ながらこれへ」と云はれて其居室に入るならば一種異様に感ずる事がある、此の室は二つになつて居つて、その一室は刀自の寢室及び裝束室ですが、廣い方は板の間に毛氈を敷きつめた所に[illegible]を敷き、普通の机あり、一方にはソーファーあり、七分洋風三分和風に裝飾され、刀自々身は和洋折衷の服裝で迎へ

らるゝ、是等の事たまく以て刀自の如何なる思想を有して居らるゝかを察し得らるゝであらう。

刀自に就て記すべき事まだ澤山ありますが、あまり長くなりますから、先づこゝ等に止めます。

本多夫人貞子

婦風會を始めとし四五の集會に於て、質素にして飾る所なく、併も多く言はずしてよく働く一婦人を見出すでありませう、これは青山學院の總理にして美以派教の主腦たりまた日本の基督教界一方の重鎭とし、教外者よりも少からぬ敬意を拂はれて居る本多庸一君の夫人貞子其人であります。夫人は東京婦人矯風會及び東京美以婦人傳道會の會長であつて、極めて謙遜な婦人です。生れは弘前地方でありますから、*



*婦は東北的ではありますが、演說も談話も實がある樣に思はるゝ、良人庸一君は日常多忙に身を處せられ且つ内地を旅行し又た再三外航（目下重き使命を帶びて米國にあり）せられて家事は殆ど夫人に托し去られねばならぬ有樣であるのですが、夫人は此間に處してよく家庭を理し且つ數人の子女を一手に引受けて教育されて居るのでありますから外部に向て手を出す樣なことは到底不可能の事の樣に思はるゝが、夫人は意外に多く社會の爲に盡して居らるゝのは敬服に堪へぬ、夫人嘗て「婦人新報」紙上に一論文を掲げ、其中に論じて曰く、

或は子女の教育に深き注意を與へんとせば、外事に向つて少しの働きも執るを得ずと思はるゝ人もあるべけれど、これは大なる誤にして、若し終日終夜子女の傍を離るゝとなく注意するも、活ける模範を與ふるを能はざらば、百萬言の教訓も死すると等しく、益を與ふと少からん云々。

と以て夫人の所期を推察し得らるゝではありませんか、又た夫人の公共的の業に盡さるゝ所以をも知り得らるゝではありませんか、而してまた

今回の開戰當時、婦人の働きに就て說をなして曰く、

我等婦人は戰時に於て女性は無用の長物なりとの觀念を打破し、婦人の眞價値を表彰する覺悟なかるべからず、其方法の如きは各自の境遇に依り適當なる働きは必ず與へらるべく隨て又た喜んで其働きを取らざるべからず云々。と。知るべし夫人の他人は兎もあれ角もあれ、自己は自己の與へられたる天職を信じ、忠實に斡旋して倦まざるとを。

先年眞人の地方巡回中、不幸にして火を失し一家烏有に歸したるとありました。抑も斯る不時の出來事はよく人の本性を現はすものですか、當時夫人は果して如何なる態度を執りましたか、聞くが如くんば夫人は、先づ身の危險を忘れて子女の安全を計り而して後に他事に及び爲に擬一發に瀕したりしも、更に狼狽する所なく徐かに變に應じたりとか、唯だ此一事以てしても夫人の人物の如何を察し得らるゝではありませんか。

夫人は同情の人ですが、あまり外面に表はれぬ、されど慈善的の集會でもあると、私かに涙を拭ひつゝ何れとなく立働いて居るを見るとのとである、彼の婦人慈善會の會長として熱心に盡して居らるゝのも此心からであります。

夫人はまた折々「婦人新報」上に於て意見を發表し、或は訪者を快く引見して談話し更に城壁を置かぬ、而してまた强て交際社會の人とならうと云ふ風もなく、謂はゞ夫人はこれを以て普通のとゝとして居るらしい。家庭内部の整理其他に關するとに就ては多くを知らぬが、兎に角右の眞人留守勝の家庭を理し多くの子女を敎育し、左手社會公共の爲めに盡して居らるゝは、地位の然らしむる所もあらうか、亦た感ずべきではありますまいか。今回其長子か大學を卒業し且つ結婚されました、されば夫人の交際場裏に盡す更に大なるを覺るでありませう。

小崎夫人千代子

夫人は日本組合敎會々長、靈南坂敎會牧師及び東京傳道學校長の重任を帶び、日本の基督敎界の長老を以て目せらるゝ小崎弘道氏の夫人でありますが、生れは東京で生家岩村家はお旗本の一人で、斯く夫人は純粹の江戶つ子であるが故に活動的方面に於ては大に注意すべきものがあります。或人は申しました、若し夫人をして護外公使の夫人たらしめば、僅かに一等國に公使たる人の夫人であつたであらうと。

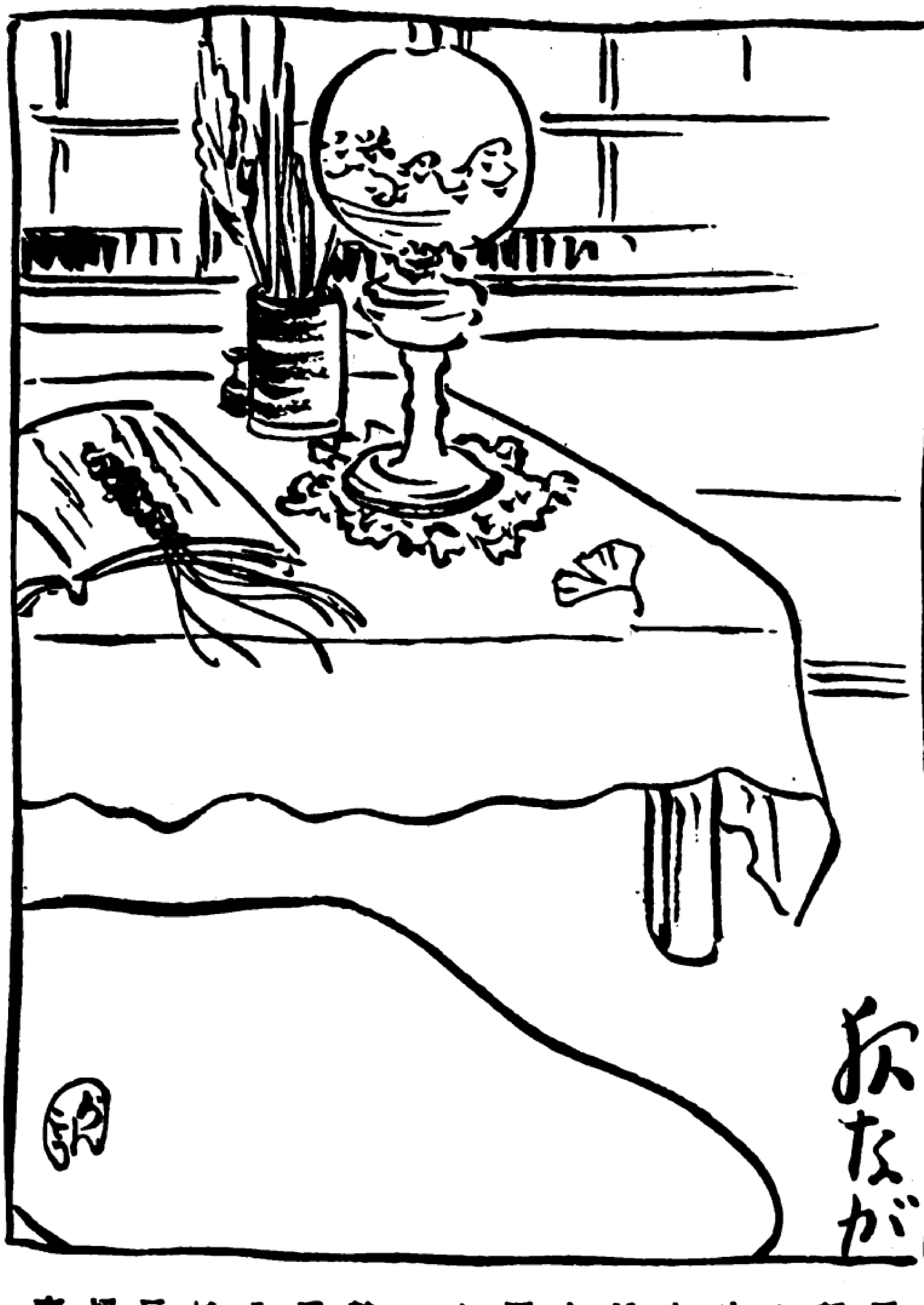
扨夫人は幼少にして信徒となり(受洗後はや廿五六年を經ぬと)且つ創立當時の青山女學院に入り、第一回卒業生の一人であるとか。

眞人弘道氏は熊本洋學校の出身、同志社第一回の卒業で、校を出づるや直に直接傳道に身を投しられました。そして飄然日本基督敎の根據とも云ふべき東京に至り、第一に組合派に筆を入れられました。其結果として最初より外國人には一切關係のない獨立の敎會を二つ迄起した、現今我國の敎會中有數である靈南坂、番町の二敎會が即ちそれであります。次で故新島先生沒後の同志社を引受け社長兼校長の重任を帶ばれ、艱難爲に白を交へたと迄言はるゝ程其經營に苦心し、東京傳道の最初より陰に陽に之が大なる補助者となつたのは即ち夫人であつて、弘道君の成功の一半は夫人にあると迄稱へらるゝ程であります。眞人弘道君の傳道界にあるや、夫人は恰ど天性と謂つべき美聲を以て敎會樂をなし、また常に東西に奔走して訪問をなし、上下各種の社會に多くの知己をつくし、敎會に於ては音樂の外に日曜學校、聖書講義を初めとし婦人會に青年

女子の團體に、得意の敏腕を揮はれました。而してまた夫人の演說は言語明晰なるが上によし千人の聽衆があらうとも更に臆する所なく、其意見を發表された、嘗て時事新報社企ての慈善旅行の主任として大阪に行かれた事がありますが、其折一千有餘人の男女の來會者の前に立つて演說した事があるそうですが、其後時事新報の記者は人に語りて「夫人は實に有髯男子も及び難き雄辯家である、基督教には驚くべき婦人がある」と云ふたとか。

また京都の同志社にあるや、夫人は直接に教壇に立つたともなく、またあまり拘はらなかつたが、當時數百の學生は殆ど其謳歌者であつたと云ふとです、其然る所以は何であるかと云ふに、夫人は深く青年學生を愛撫し、どの生徒でも平等に待遇し、且つ陰に骨折つてやりまた失意の者を勵ましたためであると。

夫人の現今の社會的方面の働きは、重に矯風會の爲めの様であるが、一方に於ては婦人矯風會の幹部にありて會計※



※上の事務を統括し、また同會の機關なる「婦人新報」を主幹して居らるゝと云ふとであります。さりながら天性交際的なる夫人は、之のみに安じて居らぬ、出來得る丈の餘力を各方面に注いで一意國家社會の爲に何事をかなして居る。

外部の事業の爲にかく熱心に盡して居らるゝとであれば家庭は或はおろそかではなかろうかと思はれるが、事實は之と正反對であつて、家政の一切より三四人の子供の教育上迄一切引受け、良人をして何事をも顧みる所なからしめ、併も整然として一糸紊れぬと云ふ有様であるとは常に同家に出入する人々の等しく語る所であります。聞くが如くんば長子は中學に一女は高等女學校にあると云ふとであるが、孰れも成績頁好で他生の範たるものなりとの評判です、これ實に夫人のゑらい所ではありますまいか。

夫人の働きは啻に内地のみではない、二三年前には耳人と共に布哇に航して島々に其地の婦人を勵まし、得意の英音を以て耳人の傳道を助け、今は現に北米の太平洋沿岸を巡回して、多數の移住民の爲に力を致しつゝありと。

斯く夫人の交際社會に勢力を得、また世を益して居るに拘はらず、日本婦人教育會とか婦人衛生會とか乃至愛國婦人會の如き大團體には顔を出したとは殆とない、是一面から見れば一種の不思議である、世間は是等の會の會員を目して交際家となし、此外に交際社會の婦人がないと思ふて居るのに。處がこゝが夫人の意見のある所である、余一日夫人を訪れ問ふに何故に此種の社會に出入せられざるかを以てしました、すると夫人は、

私には私相應の勤めがあります、あれ等の團體はまたそれ相應の方々がなして居られます、私の天與の働き場處は彼にあらずして是であると信じて居ます。否な私の如き者はなくともよろしいので……要するに私のなすべき方面は、出來得る丈多く基督敎的の事業で、己れも亦た之を爲さんと力めて居るのです云々、

と、以て夫人の立場の孰れにあるかを察せらるゝではありませんか。

斯様に活動的にして快活なる夫人でありますから、情に於て飲くる所ありはせんかと思ふものもあるでありませう。所が江戸つ子的の氣性を示して居る夫人であるから、一方に於て非常に强きと同時に、涙もろい所があります。金絲雀（かなりや）の一羽の死んだのさへ、惜んで丁寧に庭の隅に葬ると云ふ工合であります、况んや人の死、或は困窮を見ては、默する事の出來ないと云ふ有樣である事は夫人を知れる者のよく語る所です。而してまた夫人は世話好きであつて、常に種々人の周旋をなして居る、殊に結婚に就て骨折られた、現今世に時めいて居る人々で夫人の斡旋になつた夫妻は隨分多いのです。

要するに夫人は基督敎界の婦人中活動的にして、且つ力ある交際家中の尤物であります。

山脇夫人房子

夫人に就ては、世間多く知つて居りますから、事新しく紹介するの必要はありますまい、余の見る所を以てすれば、夫人の執れる方面は前記小崎夫人と正反對である樣に思はるゝ、見よ、夫人は愛國婦人會に婦人衛生會に將た敎育會、精力の中ば以上を注いで居らるゝを。世に夫人を以てクリスチヤンなるとを知らぬ者多いのもこれが爲めであらう、新派基督敎にして最も舊派に近い聖公會、併もハイチヨルチより夫人の如き交際的夫人を出したとは實に珍とすべきである。夫人は是等の働きを以てしてさへも充分であるに一方には高等女子實修學校を創立し、多くの品格ありまた實用的の女子養成に盡瘁して居らるゝは實に敬服に堪へぬ所です。

此の如き夫人の家庭は如何であらう、余の聞見せる所を以てすれば、夫人の家庭は常に整頓し優に他の儀範たるものがあります。ア、此の如くにして始めて社會的の事業はなさるべきであります。

前申せし如く世は夫人に就てよく知つて居りますから余は多くを云ひますまい、唯だ曾て余の友人に語られたと云ふ談話の一二節を記すに止めませう、曰く、

○由來國家の事業は唯だ男子のみによりてなさるべきものではありませぬ、必ず婦人の手を要するのです、……つまり國家の盛衰も其國婦人の勢力が大に關係あるので……

○近來公共の事業に婦人が進んで當らざるべからざるを勸むれば、一部の婦人は、余には爾等の如く氣樂にあらず、如何でかゝる事をなし得んやと、之れ一應道理な處もありますが、斯樣な言葉をなす者の日常を見るに、物見遊山に一日を送り、或は衣服や裝飾具の爲に、金錢を費すを何とも思ふて居ない樣です、あれでは決して理由にはなりません。

○世には公共の事業に骨折る爲めに、家庭の理まらざるものありと云ふことですが、是等の人は寧ろ暫く公的事業を止めて、一家の整理に盡す方がよろしいと思ひます、一家を整理する能はざるものは、公共事業もよく行きませぬ、それに後進者をも誤りますから……兎に角一家を整頓し、かくて後公共事業に手をつくるのが順序であると思ひます、そこが主婦の日常の心得の大切な處で……。

と以て夫人の今日を察し得らるゝではありませんか。

以上の四女史に就ての私見の梗槪は斯くの如くでありますが、之を、▲基督敎徒と云ふ立場から觀察しますと、其特長は左の如くであると思はれる。

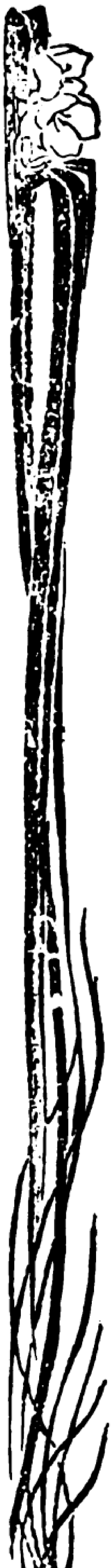
矢島刀自は「婦風」てふ一方面を主として、社會に對しまた傳道界に貢獻せんとして居る、或意味に於て刀自は戰爭に關係ある文官の如きものであります。

山脇夫人は基督敎界の飛將軍或は戰時の外交官であります。夫人はどこ迄も信徒たる品格を持し、併も其働く所は直接傳道界に殆ど關係がないされど間接の貢獻は少くはありますまい。

小崎夫人に至りては、之と正反對で、十中八九迄全く傳道的です、世は夫人を目してムーラーに對するサンチー的の婦人だと云ふたのは當つて居ります、牧師の夫人とさへ云へば引込思案の人多き世に、斯る婦人のあるは同敎の爲に慶する次第です。

本多夫人は主婦的交際家です、隨分大なる働きをなして居るに拘はらず、あまり多く世に知れぬ、これその主婦的なる所で、戰時で云へば夫人は參謀官であらうか。

敎外に於ける其勢力、其位地世間自ら定評あり、更に余の蛇足を要しますまい。



新進の婦人交際家

（長崎夫人絶子の事）

みちしば

『日東帝國の事與みし易し、されど外相は實に容易ならざる人物なり、彼は外面無能緩漫を装へども、其の胸中に蓄ふる縱横の策は、殆ど端倪すべからざるものあるが故に余の術數も遂に施すを得ざらしむ』とは明治の初年我國に駐在して外交的怪腕を揮ふた英國公使パークス氏の歎聲でありました。抑も此外相とは誰であるか、維新前の留學生松木弘庵即ち後の外務卿寺島宗則伯其人で御座いまして是より俤を記さんとする長崎省吾氏夫人絶子の父君で御座います。伯は鹿兒嶋出水郷の生れであつて松木弘庵時代は父祖以來醫を以て業として居られたのでありますが、沖に黒船が見え初めて以來物情騒然、鼎の涌くが如くになつた當時、伯は斷然開國説を主張し五代友厚等の志士と共に努力致されました、爲に一部の尊王攘夷家の憤る所となり、幾度か生命も危殆に瀕しました爲め、暫く信州に潜み其間熱心に英語蘭語の研究をされたそうです、次で時勢幾度か變遷し後出でゝ國家重要の位地に立ち文部、外務等の大臣となり、樞密院副議長となり、國家に多大の貢獻をなされたことは世の夙に知れる所でありませう、長崎夫人の生れられたのは明治の初で、王政維れ新なる時でありました、處は築地今の海軍省用地でした、夫人及び誠一郎、豊次郎の二君と共に此處に於て幼時の教育を受けられました、當時未だ小學校なるものなく、寺小屋主義のものも次第に衰へて來た時でしたから、全く家庭に於て教育されたそうです。今之を略記するに先ち、家庭教育の一斑を記さねばなりません、さて伯が嘗て洋學塾の塾頭となり、鋭意其勤を盡されましたが、家

庭教育も其方法に關しく極めて嚴格であつたのです、教育は教師を招いてされましたが、一旦教師に托した以上は更に干渉することなく、教師を信じ、之に委托されました、若し兒女の惰容あるか、教師の言を聽かざるが如き事がありますと、伯は大なる樫の棒を捧へ廊下を鳴らしつゝ其室に入り來り、嚴に教誡しました、されど伯の懲戒法は決して打擲をするが如きことはありませんが、時に一桶の水を提へ來らしめ、突如頭上より注ぎました。之を見し者は飾れる室、着せる衣服其爲に汚さるゝを以てせしに、伯は、

如何に高價な物品でも、子の教育の重大に比することは出來ぬ、子供等さへ立派な人間になつてくれれば、斯樣なものは何に惜からう

と言はれて更に顧みる所がなかつたとか、伯の如きは「これ白かねも黄金も珠もなにせんにまされる寳子にしかめやも」中の人ではありますまいか。

又た或時は愛子を書齋に入れ外より錠を下ろして默考を命じ、心より悔悟するに及んで室を出でしめたと云ふことです、伯はかく嚴格でありましたけれども、一旦過を改むるや大に之を賞し之を愛し、且つ奬勵し寛嚴宜しきを得たことは當時伯に親近せる者の等しく語る所であります。伯は既に此の如くでありましたが、伯の夫人即ち母堂元子はまた尋常一樣の凡婦人ではありません、右手伯を助けて內顧の憂なからしめ、左手三子を勵して養育し、更に缺くる所ありませんでした、左の一事の如き最もよく其面目を現はしたもので、以て子女を自ら導く的の教育をせられたことが推されませう。

精力の許す限り立ち働くべきは人間の義務で、また皇室の藩屛として衆の上に立つものゝ天職なりとなし、老來猶ほ手足を休めず、雇人等を使役するに當りても「往け」と云はずして「來れ」と示し、精勤者を賞すると共に、よく是等の一身の上の事まで骨折つてやられたそうです、伯逝きて十有四五年、長子誠一郎氏外航して久しく歸らず、次子關西にあれば、近來まで十有餘年邸內たゞ母堂のみであつた、けれども家道益々榮え一

糸紊るゝが如きことがなかつた。斯る父母あり、三子皆有爲の人となれる亦た宜なる哉ではありますまいか。さて今の長崎夫人は如何に幼時教育をされたかと云ふに、前述の如く學校と云ふものがない時代でしたから、敎育は父母と家庭敎師とでせられ習字の師は佐瀬得所で、漢學數學等は邸に居る人々之に當り、英學は英人某（其名を逸せり）で十二三歳の頃から熱心に學ばれたそうです、此英人は何か勤めを以て來朝した者ですが、不遇にして其職を得ず、知らぬ他國に困難して居つたのを、伯は氣の毒がりて之を世話し後職を得しめたので、英人も知遇に感じ精力を盡して敎授したと云ふことで夫人の今日ある素因となつたのはこれでせう。夫人の當時を知つて居る人の言によれば、夫人は眞に柔しい人であつたが、子供ながらも毅然として犯すべからざる風あり、學問も進歩中々に速かであつたと云ふことです。

今でも、父兄が顯榮の地位にあるとか、名門でもあると其子弟は兎角虎の威を借りて高く止まり何かにつけてぶるゝ樣ですが、夫人の幼時は左樣の風が少しもありません、或時のこと、齒の治療を爲さんが爲めに、書生につれられて、醫師の許に赴きました、其折伯夫人は「若し時分時となつたならば、何れかにて晝飯せしめよ」と命せられました、一介の書生主人の娘を預りて如何すべきかを知らなかつたのみならず、東京の樣子が充分わからない爲めに大に困じましたが、不圖目についたのは京橋側の松田でした。依て取敢へず其處に入りますと來て居る客種は中等或はそれ以下に多い「これは」と思ひましたが、令孃は更に氣にせず靜かに食事をなしたと云ふことです。かくて長じて十七八歳となつた頃、長崎家に嫁せられました、これ迄の素養あるに加へて、人の妻となつても講學を廢せず、家政を見る餘暇に書籍と親まれたそうです、夫人の得意は一にして盡きぬが、中でも洋風の禮式に精通して居らるゝ、仄かに承る所によれば、名門貴族の結婚式を始めとし其種の儀式のある毎に大抵夫人の指揮を仰ぐとか、聞くが如くんば夫人は洋服の着方、室内の装飾より食堂の内部に至る迄缺けなく世話せられるそうです、斯く精しい人でありますから今回ルーズベルト孃の來遊に際し誠一郎君の夫人と共に即ち義姉妹が接伴役として大なる責任を盡されたのでありませう。

夫人齢漸く三十有餘、今後の交際社會に活動せらるゝ更に見るべきであらうと思ひます。

食卓上の作法

1 食卓に就く時自己の體と食卓との距離を適當にすべし又着坐の時向合ひたる人の足に觸るゝまで自己の足を突出し又は椅子にもたれ食卓に寄かゝり及び座席を立つ等は心なき業なり。

2 給仕の者に對して粗暴の言語を吐くべからず、去とて又手數をかけることなどを一々謝すべからず。

3 食事はあまり急ぎてなす可からず。

4 食物を口一杯に頰張るは忌むべき事なり、食物を喫するには大口開くべからず。

5 食事中に口または喉を鳴すべからず、又食物を口に含みながら談話すべからず。

6 自己の食卓はなるべく清潔に保ち决して之を汚すべからず。

7 砂糖漬及其他の漬物類幷に菓物を食卓外に持去る可らず。

8 肉類はすべてナイフを以て之をきるべく又骨を摘みて食ふべからず。

9 パンは手を持ッてちぎり兩面へバタを塗りて食すべし。

10 食事中齒を摑り或は口中に指を入れて齒に挿りたる物など取るべからず。

11 飲食の席へは下稽粹のまゝ又は亂髮汚手などにて臨むべからず。

12 主人のすゝめを待たずして食物の撰擇をなすべからず。

13 卓掛にて手又に顏を拭ふべからず、必ず膝掛を用ゆべし。

14 腫物又は其他の事由ありて外見を厭ふ場合にあらざれば卓に向ふ時必らず手套を取外すべし。

15 食物を配るには皿にあふるゝまでに盛立て又は人の欲せざる薬味を强ゆべからず。

16 他人の飲食する世話を爲す時は食料野菜等に肉醬をふりかくる事なく必らず皿の一隅に澍し置くを要す。

17 オムレツ又は魚類の如き柔かなるものには肉叉を用ひ、肉刀を用ふべからず。

18 自己の爲に供せられたる食物は求めらるゝにあらざれば之を他人に移すべからず。

19 不潔の物即ち髮の毛又は小蟲などが食物中に附き居るを認めたらば密かに之を取りて决して人に知らしむべからず。

20 肉附の骨をしやぶり又は皿中何一つ殘りなく食ひ盡すは下品のものなり。

21 食品の代りを望む時は肉刀又はパンの上に置き皿に載せて出す可からず。

22 菓物の核及び骨などを口中より直ちに皿器へ吐出すべからず、まづ口より肉叉にうけて後に皿の一隅におくべきなり。

23 嗜好に任せて人の注目するをも憚らず一種の食物をほしいまゝにすべからず。

24 牛酪、乾酪、甘味の菓子其他似寄の物を多分に食するは尤も嫌ふべきことなり。

25 飲食中は消化に害ある談話をなすべからず、又席話は靜粛を要とす、决して感激を起さしむること勿れ、又身振を以て談話に代へ又は肉叉肉刀を食卓に排列して談話の補助となすべからず。

26 食卓上に自分の嗜まざる品ありとも之を他人に語り又は顏に顯はす等の事あるべからず。



婦人の社交衣

四季折々に綺羅を飾ることは婦人の交際にとつて最も必要の事なり、仍つて社交場裏に出動する夫人淑女の爲めに、相應しかるべき晴衣を撰ぶこと左の如し。

▲冬の衣裳

△紋付物　は縮緬を第一とし、次いで紋羽二重、絹縮なども用ゆべし、色は令孃なれば淡高貴色、小豆色、小町鼠、花葡萄などよかるべく、又た若奧樣には、栗梅鼠、胡蝶鼠、都鼠、錆納戸などふさはしかるべし、而して模樣には四君子、養老、蓬萊など上品なるを撰ぶがよし、されど令孃に着せ參らすには、籬に菊を白揚りに花を大きくし、其を更に白、黃、淡紅などにて顯はし、處々花の心に刺繡を施したるもの最も高尙優雅なり、又たゆはひ重衣とて、裾へ流しを出し、重扇を染出し、其の中へ若沖の草花を顯はすなども、面白かる可し。

又た一般の夫人方にありては模樣に光琳風の吉野龍田を撰び、龍田の水を白揚になし、紅葉と櫻とに淡彩を施し、之を江戸褄に染出し玉はゞ、頗る妙なり。

尙ほ贅澤なる注文を言へば、金泥の霞に吳竹を白揚りと極く淡き柳茶にて出したるもの、或は白揚りの水仙二本位を江戸褄に染出し、白茶にて其の花を繡にしたるもの、其他數あり。

△着物　令孃には紋織の華やかな物か、さもなくば絣入の縞物、竪縞のお召、山繭入の縞お召、若くは絹縮など、よく似合ふなるべし、

又た中年の夫人には東華織、淸綾織など澁味ありて可し、之に次では吉野入の壁糸織、米澤琉球、ふし糸、銘仙なども宜しかろべし。

△下着　令孃にありては華やかな友禪、更紗などを用ひ、奧樣方にありては對服を用ひ玉ふが通例なるが、若し對服を用ゐざる場合は、濃き臙脂色の地へ古代唐草、又は錆利久地へ土耳古風の更紗を置きたる羽二重。若くは縮緬を代用して差支なし。

△裾廻し　妙齡の女子の着衣にありては、縮緬を撰ぶをよしとす、色は令孃には高貴色、小豆色の類、若き奧樣には薄葡萄、小町鼠の類最もうつりよからん。

△長襦袢　年若き令孃は緋、時色等の紋縮緬を用ひ玉ふ可し、或は白地の紋縮緬、紋羽二重などにて仕立て玉ふも可なり、又た縞物、小紋などの下ならば友禪を用ゆるがよし。扠て其の模樣は若き方なれば可成く華美にして品よきものを撰び、稍々年長けたる婦人は可成くあつさりしたる物を撰ぶべし。即ち山繭縮緬、絹縮などへ花形や、唐草風の物をしぼりにして染出せる類のもの可からんか。

△帶　年若き方にて紋付の上へ用ゐ玉ふには繻珍を上乘とす、その

模樣は松竹梅、鶴に龜甲形などよし、地色は主に茶の濃い勝の物、さなくば黒などを撰び玉ふべし、

稍々年上の婦人になれば、繻珍の外に幽谷織、厚板などあり、其の模樣は澁味を帶びたる古代唐草風の物、或は土耳古模樣の如き物など宜しかるべく、其他紋織博多、縞博多など孰れもよし。

△羽織　には黒縮緬が第一等なり、黒以外の物を好む場合には小豆色、小町鼠、薄高貴色などもよかるべし、又た小紋縮緬にては麻の葉、敷松葉、松皮などの小紋殊に流行せり、色合は藍氣の濃きもの、錆納戸など、小紋に對して調和頗るよし、其他縞お召、風通お召、糸織類。

胴裏は黒などの紋付羽織には、緞子類よく調和し、縞物の裏としては羽二重の友禪類か紋羽二重を撰ぶべく、綸子、甲斐絹亦た用ゆ可し。

▲春の衣裳

△紋付　正月着の紋付には矢張縮緬を第一とし、紋羽二重之に次ぐ、色合模樣は可成く淡白なるを撰擇す可し、されど年若き令孃にありては、葡萄色の如き赤味を帶びたる物にても見苦しからず、

又た令夫人方には、無地のお召が上品にてよし、其の色は栗梅、鐵納戸、葡萄などの濃き色を用ゐ、之へ江戸褄、奴褄のいづれかを縫にて置くべし、又た其の模樣は主に初春の景物なる梅、水仙、若竹、椿などを撰定すべく、縫ひ方もまた重々しからぬ芥縫にするが、清楚の趣ありて甚だよし、或は又た山繭入縮緬乃至は鶉縮緬の裾へ、白揚りにて瀟洒なる模樣を染出すか、若くは小紋縮緬の裾へ淡泊なる模樣を置くなども妙なり。

△下着　令孃にあつては時色の紋縮緬など召し玉ふことあるべきも、令夫人にありては黒にて三枚の對服を重ね玉ふが普通なりとす、又た下着を違へんとならば、白の紋羽二重、白羽二重などを撰び玉ふべし、時には淡き銀鼠、薄葡萄もよし、而して其に上着と同じ模樣を附けたるなど質素の趣ありて甚だ見よきものなり。

△帶　は繻珍に限るやうに思へど、唐織、小柳織、紬錦、綾錦、厚板織などの立派なるものあり、色合は茶、焦茶、黒、オリーブなど一般に行はれ、地質も餘り硬きは流行せざれば、可成く軟かきを選ぶ可し、又た模樣は松竹梅、鶴龜の如き在來りのものを用ふるもよく、有職風の新意匠を採りても可なり。

△襦袢　下着に白を用ゆる場合には、白の紋縮緬か白羽二重の二種に限りて着用すべし、若き令孃の三枚の對服の下には、紅、時色の紋縮緬、さもなくば友禪縮緬を用ふるを可とす、尤も友禪の模樣は光琳の草花、或はボカシにて種々の草花を染出したるもの、春季の衣裳として最も華麗なり。

△羽織　黒の紋付羽織の地質には、是又た縮緬か紋羽二重の内を選ぶべし、之に次では小紋縮緬をよしとす、縞物にてはお召縮緬を第一位に推すべく、殊に格子縞最も流行なり、尚ほ紋織お召を用ゆるも

妨げなし。

胴裏には緋縮緬もよけれど、之を外にしては羽二重、紋羽二重、八橋などに華やかなる友禪模樣を置きたるもの、年若き婦人に適す、又た少し年長の者の胴裏には、澁味ある更紗風のものよく似合ふ。

△吾妻コート　(一)は表を黑龜甲形の紋羅紗にし、裏を茶色の甲斐絹にし、襟を道行形に仕立たるもの、(二)は表を濃納戸色の紋羅紗にし、裏には梅鼠の甲斐絹を付け、襟をば被布形に仕立てたる物、共に婦人の外出着として採用するに足る。

△肩掛　は(一)羽衣ショール、(二)獅子付ショール、(三)縮緬絹房付の刺繡入、(四)絹糸交りフランの東鄕ショール、(五)絹房付兩面フランシ。

△花見小袖　春風駘蕩、柳櫻の下をそゞろ歩きの頃に着用すべき所謂花見小袖なるものは、紋付裾模樣の嚴しきよりも、小紋の着附の方ゆるやかにして最も相應せり扨て小紋の形は妙齡の處女にあつては、割菊、吉野龍田、藤の立枠など似合ふべく、年增の婦人にありては小米櫻、敷松葉など恰適なり、縞物にては山繭入お召、敷島お召などを採るもよからん。

又た上品を好まるゝ年若き令孃には紋お召第一等にて、柄行は水仙、柳櫻、さては松笠に竹の模樣など、凡て花模樣のものを撰び玉ふべし、

花見小袖に相應せる帶は、今樣風の上等なれば、綴錦にて、之に唐織の元祿模樣、又は淡茶地の沖路の鶴、或は茶色のヒベ模樣等を撰まば、尚更華やかにして高尚なり。

▲夏の衣裳

△絹物　夏の單衣には中形の派手濶達、浴衣の淡泊淸楚などあれど、其等は夕涼の散步か家居の際に着用すべきものにて、禮儀張つた晴れの席には着て行くべくもあられば、茲には略いて言はず、先づ社交着としては縮緬に第一の指を屈し、扨其次は山繭入の絹縮か縮緬に指を折るなるべし、色合は模樣物、無地物を通じて薄目の紅に藍氣を含める俗に藍大和色と云へるもの、流行するが如し、

その模樣は秋草又は草花に水を白揚りにしたるもの、及び淡泊と素鼠にて色彩りたるもの、年若き婦人の嗜好に投すべし。

△絽　扨て又た絽の裾模樣を用ゐんとならば、地色素鼠、薄松葉、薄松などの淡き色を撰び、模樣には波の絞り染に磯、海邊に日上りの水、紅葉の影日向などの瀟洒なるものを取るべし、尚は令孃の爲には薄葡萄、薄紫紺、鳩羽等の地色に河原撫子、蘆に螢、根こぎの洋蘭などの風雅なる物を選ぶをよしとす。

△帷子　極暑の砌は帷子に若くものなし、帷子地には、紋上布、壁上布、絽上布、練上布、市樂上布、越後上布、縞絽絹縮、縞縮縮緬、小紋染絽、紺絣越後、白絣越後、紺縞越後、白縞越後等あり、いづれも女子の晴衣に適す。

△御召類　なれば紋御召、縞お召、絣御召、養老お召、扶桑お召、山科お召、壁お召等孰れにてもよし、下つては八王子にて出來る旭織、富國織など安物ながら、一寸した外出着には用ゐて耻しからず。

△少女の夏洋服　十四五才の少女に着させる夏服は、地質をモスリンにて、肩と襟とに淺黄のレースを飾り、涎掛にも矢張レースを用ゐたるもの、見るから涼し氣にて大ひによし。

▲秋の衣裳

△羽織　秋立つ風に朝夕の冷かさを覺ゆるにつれ、先づ必要を感ずるは無双羽織なり、從來は大抵絽縮緬にて之を造りしも、今は絽絹縮を用ゆるもの多し、色は通例黑を用ふれど、若き婦人には栗梅、鍋島柿、葡萄等宜しかるべし、又た裏の模樣には白揚りか或は淡彩色にて、柴舟、忍草など顯はしたるが面白からん。

△袷　山繭入の絹縮に白上りの江戶褄模樣を付け、濃素鼠、薄葡萄、利久茶等の色を選ぶをよしとす。又たお召類にあつては紋お召、縞お召、共に用ゆべし、縞物にては亂立、上布縞等當世の時好に適すべし。

△帶　正式の禮服を着けたる時は、大抵繻珍の丸帶を締めるやうになり居れど、袷などには厚板の方適當なり、厚板とはいへ、繻珍よりは輕く、且つ締め心地のよきものなれば、夏時の輕裝には之を用ふる方便利なり、模樣は廣東縞の中に古代裂を挿みたるが如きものは品格もあり、雅致もありて、甚だ可し、厚板に次いでは紬、錦、綾錦等亦た大に賞用するの價値あり。

△襦袢　袷の時の襦袢には單をよしとす、地質は縮緬若くは絽縮緬にて模樣の淡泊なるものを選ぶべし、春季には往々白地の友禪を用ゆれば、秋季には稍々肌寒う感ずるを以て適せず。

色の選び方

顏の色の白い女が黑色がゝつた衣服を着ると一段よく見えるが、炭燒然たるのが白絣を着たらば、餘り目立ち過ぎて何人にも一寸可笑しく思はるゝ風がある。歐米諸國の都會では、かういふ點に注意して、よく其人々に相應すべき色合と縞柄とを擇ぶさうであるが。我邦では、餘り注意が行屆かぬ、丈高き人が横縞を着けたるが似合へば、丈低き人も亦横縞を着ける。細面の女に廂髮が似合ふを見ては丸顏も、それを結ぶべく、到る處に流行するので、隨分東京の流行縞柄、色合などの衣服を競ふて着てゐるものゝ中でも、止せば、よいのにと思はしむるもの少なからぬ、なほ同じ色と色とでも衣服、羽織、帶袴など、それの調和すると、否とでは二段も三段も見榮の上り下りするものである。で、サツトその色合の調和すべきものを擧げて見れば、まづ青と橙色、黃と紫、紅と綠、綠と茜、紫と淡紅、朱と鶸茶、緋と綠青、それから淺黃と玉子色、空色と藁色、茜と鶯茶、玉子色と淡紫、濃紫と山梔、銀鼠と淡紅、紺と金茶、藍鼠と紅がけ鼠、藍と橙色、淡紅と鳩羽鼠などであらう、

雜俎

裏店の交際

さだ子

隣家と云つても東京では左ほど廣く交際をせなくてもよろしい併し場所によつては隨分無教育な人と交はらねばならぬ、此間の交際が最むづかしい、朝夕井戸端に顏を合はす、家の出入に顏を合はして居れば、まづ何事もなく圓滿に交際つて行かれる併し根が他人の寄り合ひで、教育の無いものが多いと來て居るから、一つ調子が狂へば禮義も無ければ義理も無い、今迄持つて居た好意を忽無くして罵るのである。私の隣に戰死者の遺族の者が居る、其家の妻君は誠に温和な人で、未亡人になつてからは毎日會社に出て漸く其日の暮しをして行く、感心な心掛けの人であるが、其姑は近處での厄介者で、皆が腫物に觸る心地で居る、其人は何か隣に物を贈ると夫れを倍にして返禮しなければ機嫌が惡いと云ふので、貰つた處では皆有難迷惑に思つて居る、此物の贈り答り程面倒なものは無い、貰へば返禮をしなければならない、一度ではもう濟まなくなる、之が極く懇意で好意からするならば誠に兩方で氣持が好いが、義理でするのは迷惑だ、お互に然うは思つて居ても云ひ合はして止めると云ふ譯にも行かない倍にして返さなければならないなどは貰はない方が餘程ました、可愛くも無い子だが其お婆さんの前では心にも無いお世辭を子供に迄云はなければ機嫌が惡い、

私の家でも餘り懇意にして居ないが、澤庵の蓋をあけたからとて二本貰つた、さて其返禮には何をし樣か夫れより好いものでなければならないと母が氣をもんで、態々お鮨を拵へて返した。其隣の家の庭の垣根が丁度其家の臺處の前になつて居るので、垣根に古腐つた下駄を懸けるやら、お襁をかけるやら、腰卷を干すと云ふ風に、何の斷りも無く色々のものをかける、初めの内は其家の奥様もだまつて居たが、終にたまりかねて何卒夫れだけは止めて下さいと云つた。處が其お

婆さんは大變に腹を立てゝ、近處に響き渡る様な大きな聲で様々の惡口を云つた、夫れが如何かと云ふと今の今迄互に笑顔を以て話合つて居た連中だ、夫れからと云ふものは物も云はなくなつた、少しでも外の家の子にお菓子を與つたり、可愛がつたりすると、彼方の家では他の子供ばかり可愛がつて、私の家の孫は少しも構はないと垣根の處に行つて聞えよがしに怒鳴る。ほんとに此近處で大將をして居る。

此隣に人相の惡いお雇官吏が居る、夫婦と子供が二人有る、其主人は非常に酒癖の惡い人で、お酒を飲むと必ず怒る、罪もない事にお神さんを叱り飛ばす、果ては腕力沙汰に及ぶので、お神さんは何時も外に逃げ出すと云ふ仕末、近處の人が氣の毒がつても主人が亂暴だから誰も彼も仲裁に入り人が無い、時には井戸端で夜の十二時頃迄お神さんの泣いて居る事も有つた、私の母は非常に氣の毒がつて、お萩を造つてもお餡を拵へても必ず持つて行つてやつた、處が先方も只では置かない、矢張心配して、斯んな事して呉れねばよいと思ふのに、わざ〳〵お菓子を買つて來て、子供に呉れたり、種々家計の不如意の中から無理にも夫れ相當の返禮をするので、眞から好意を以てしたいと思つても矢張り考へてしなければ、先方に却つて迷惑をかける、實に近處の交際程面倒臭いものはない、而して四民平等主義だ、此主義も誠に結構では有るが、時には嫌になつて來る、士族で有うが、平民で有うが、如然事は勿論構はない、同じく五圓の長屋に居れば、たとへ如何な事情でどんな處ろに住んで居様と少しも斟酌はない、車挽のお神さんも其日稼ぎの職人も、皆同等のものだ、幾ら學問が有うが、先生をして居様が、如然事には一向構はないで、手桶さげて水汲みに出れば、車引きのお神さんは其仲間に對するの態度を以て挨拶をする、職人も然うだ、いま〳〵しいと思ふ事が有つても、そんな素振は出來ない、若しも學者振つたり、先生振つたりすれば、忽ち井戸端會議の問題となつて、種々に評をされる、夫れが聞え樣が聞えなからうが、そんな處には少しも區別は無い、斯んな風であるから

時には口惜しいと思つても、此方から腰を低くして、挨拶もせねばならぬ、少し着物でも着替て出れば、日蔭に子守をして冗話に日を暮して居るお神さんや、娘の四五人顔集めてひそ〳〵と影の見えなくなる迄、其人の噂をする、入るにも出るにも實にうるさい、此方から挨拶すれば向ふからもする此方が無愛想にすれば向ふも頭一つ下げぬと云ふ連中が多い、まア無敎育者間の交際はこんなものでせうか。

婦人と談話

一栞庵

古來婦人の多言といふ事は嚴しく誡められて、彼の七去の第六番目にも『多言にて慎なく物いひ過すは親類とも中惡くなり家亂るゝものなれば去るべし』とまで言つてある、成程多言といふ事は慎むべき事であらう、多言とは所謂『餘計な事をいふ』『無駄言をいふ』『愚痴をいふ』『つまらぬ事をいふ』『出過ぎた事をいふ』などの意味で、言つた事が、少しも自分の利益にもならず、却つて他人に惡感を懷かしめ自分の思慮の淺いのを自白するやうなもので『口あいて腸みせるざくろかな』『物言へば唇さむし秋の風』碌な結果をば見ないといふ場合を指したのである。兼好法師も彼の徒然草に於て、『世の人相逢ふ時、須臾も默止する事なし、かならず詞あり、其ことを聞くに、多くは無益の談なり世間の浮說、人の是非、自他のために失多く得少し、これを語る時、互の心に無益なりといふ事を知らず』と言つた通り失多く得少し此一語が多言の註解として最も適切である。

其處で多言が婦人の特に慎まんければならぬものといふ事は分明となつたが、同時に談話と多言とは自ら別である。爾來昔風の敎育で、多言を慎めと、言ひ過ぎた結果、子女をして談話と多言とを混同して女は萬事に默つて居るのが良いとの感念を懷かしむるに至つた、夫れ故日本婦人の談話が、自然に下手になり、俄に交際塲裡へ出しても、唯だモジ〳〵して、面白くも

なんとも無い、木偶人形を相手にして居るやうな氣がする、斯く不完全な教育に依つて談話術が次第に下手になり、話題の選擇や、變化や表情的語調をも等閑に附してしまつて、稀に語る處を聞くと心に何等の印象を殘さぬ、所謂お口誼的になつてしまつた、即ち皆さんは御無事ですかとか今年は昨年より暑いとか寒いとかお見事にお髮が出來ましたとか、坊ちやんが大きくおなりなすつたとか、孃さんはお可愛いとか、大抵型が極つて居る、三度來ても四度來ても、乾度同じ事を繰返して行く。勢ひ斯の如く婦人の談話といふものが無意味になつてしまつたので、相互の交際に何等の趣味を見出す事が出來なくなり、引いて交際は面倒なもの即ちおつとめ的なもの お義理をたす的なものだといふ考へを懷くに至らしめたのである。

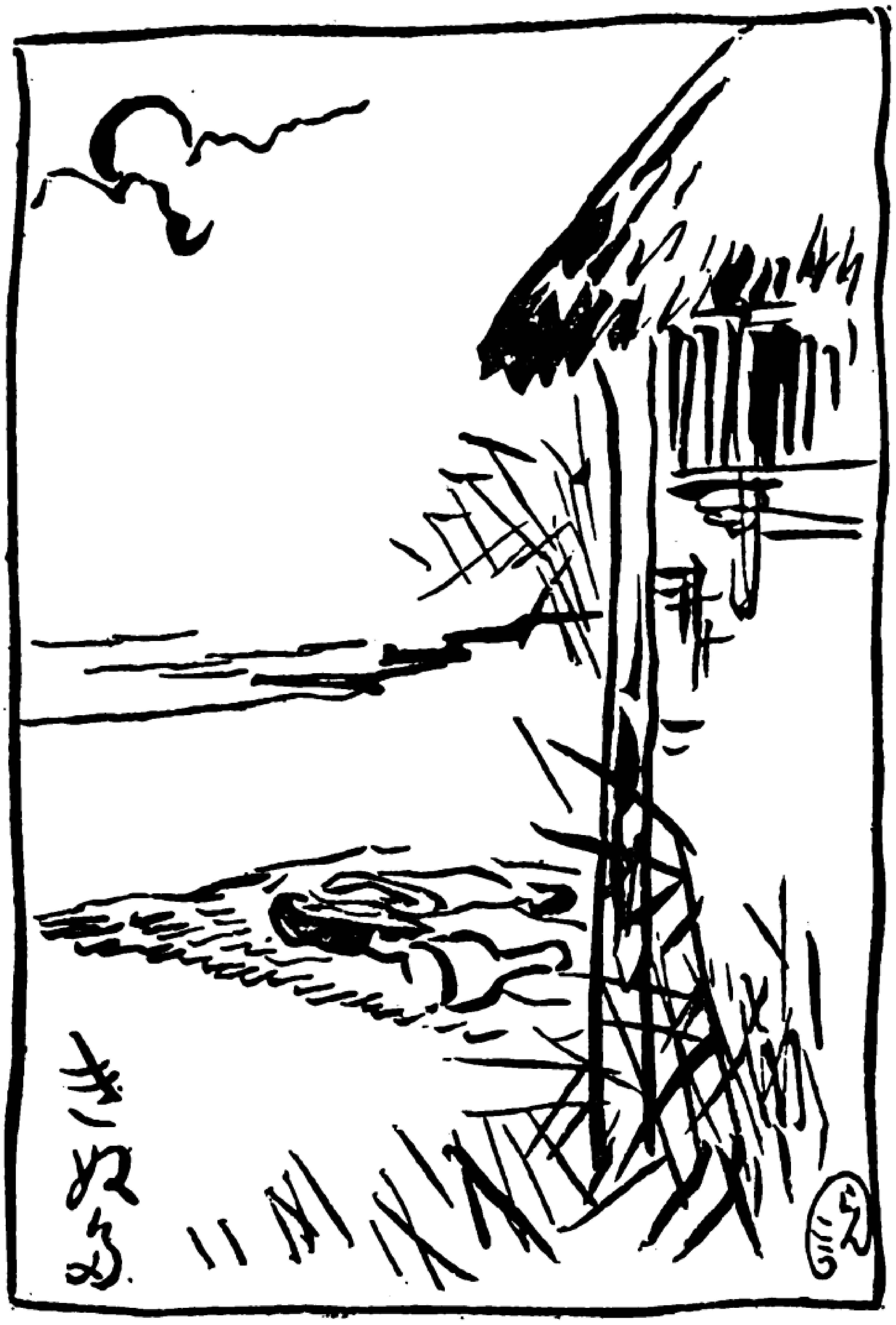
上流社會中流社會の教育が、それであるに反して自然に放任して本など讀んだ事の無い下流社會は、多言を顧ない弊害はあれど談話術は大に發達して、彼の藝娼妓の中には、巧妙なる談話家がある、其無教育なる爲めに話題が如何にも卑陋で、聞くに耐えられぬ事があるが、若し其談話術の妙を助くるに教育、讀書力を加へたならば、それこそ交際場裡のクヰーンとして耻しからぬものも出づるであらう。

中流以上の婦人連が比較的談話が下手である結果は較もすれば家庭の和樂を索然たらしめる、細君が人形のやうに形式的のお歸り遊ばせお寢み遊ばせでやつて居られては隨分男子として有難いものでは無い、時には多言即ち無駄言でもよいから饒舌らせて見たいと思ふ事がある。細君が木偶で面白く無いと自然妾を雇入れる、待合遊びをするやうな馬鹿者が生ずるかも知れない、人間といふものは原來言語動作に依つて、情の交換を樂むものである、特に夫妻の間に於て其必要を認めるのであるのに夫れが出來ぬといふと不幸である時としては夫婦の間に情の交換不充分であつた爲めに相互の意思が融通しないで、破鏡覆水の不幸を見るに至るといふのが隨分ある。

故に多言は愼むべし、されど談話は、婦人の一の藝

術として琴や茶の湯の先に稽古して置くべきものである、默して居るのを上品、人柄だと言つた時代は過ぎ去つて是からは談話を巧妙にして一般智識の吸入、即ち常識を養ふといふ事に勉めねばならぬ、先づ其要件を擧ぐれば

(一)常識を養ふ事
(二)語調に注意する事
(三)話柄の轉化に注意する事
(四)話題を選擇する事
(五)滑稽趣味を養ふ事



語調といふものは餘程其性質に關係するもので、同じ話しでも語調に依つて、聞き人には種々の違つた感情を起させる、時には語調の爲めに、肝腎な話の意味を沒して了ふ事がある、又話しから話へ移る時注意せんければならぬ、此方が聞人である場合には、務めて先方の話しに注意して、一の話柄から他の話柄に甘くウッつて行く事の出來るやうに氣轉をきかす事が大切である。話題を選擇するといふ事も等閑にしてはならぬ、相手の境遇も考へねばならず、又其場所をも注意せねばならぬ。次に談話には滑稽趣味を加へるといふ事が、なか／＼大切で、何でも無い事を相手に

面白く聞かせる、即ち談話に活動を與へるといふ事も皆此滑稽の働きである、故に之れを養つて行かなければならぬ、しかし滑稽趣味と言つた處で、卑陋な駄洒落などは却つて其品位を損ずるものである。

要するに談話の力は、出來ぬ相談をも纏める、怒つた人をも笑はせる、憂ひて居る人をも樂ましめる、されば婦人としては此術の修練に勉めなくてはならないものである。

凶禮の作法

×　×　×

我國にては未だ喪に西洋の禮式を用ゐるものなし、只僅かに葬式に基督敎の式典を用ゐるのみ、然れども追々外人と交際頻繁なるに從ひ其禮法をも一應心得ざるべからざれば左に大要を揭げん。

△通知

死者ある家にありては速かに知人朋友に之を報ずべし、假し平生死者と不和なる人にても知己たりし以上は必らず告げ知らすべし、蓋し死は遺恨、嫌厭、一切を消滅するが人情の常なればなり、死亡の報告は大抵新聞紙上に於てす。

△弔狀

死亡の通知を受けたるものは直ちに訪問して名刺のみを通じ置き面會せざるを可とす、但し親族は此限にあらず、訪問せず名刺を郵便にて送るも差支なし、弔詞は寺院等にて面會の節に讓るべし、又直ちに弔狀を贈るもよろし、而して弔狀は成可く鄭重に愁傷の意を表す可し「一筆啓上草々不一」の義理一偏は不可なり。

△葬式

會葬者の衣服は婦人ならば黑色の毛織又は縮緬の禮服着用、男子は大禮服に純白の頸飾、黑の革手袋を用ゆべし、我國にては帽子又は腕に布帛を纏ひて悼意を表す、又死者の柩を墓所に送るに會葬者は柩に接近すべからず、葬送の行列中にて笑語、高談は甚だ忌むべし必らず靜肅と沈默とを守るべし、又乘車は死者に對す

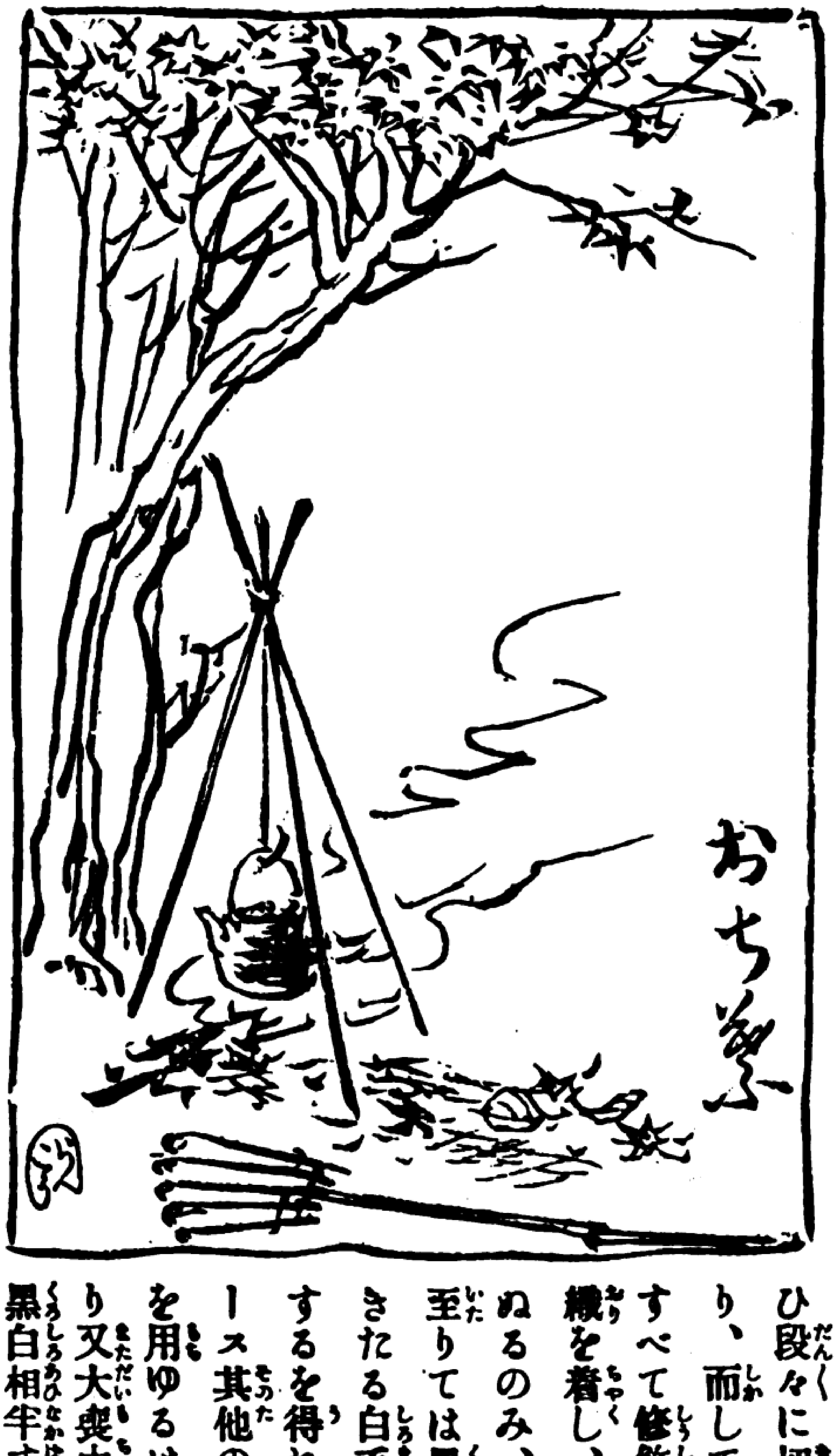
る禮にあらざれば會葬者は柩に從ひて徒歩すべきなり日本の禮法にても葬式に亡夫又は亡妻又は亡兒を野邊送りを爲すを忌むが如く、西洋にても亡夫亡兒に會葬せざれど、近年は此禮式によらざる向となりたりさて葬送の行列には第一番に最近親族の男兒次に他親族、次に知己朋友、次に其他の人なり。

△會葬者の名刺

葬儀終りたる後直ちに死者の家に到り名刺を裏面に折りて通し置くべし若し同日に此義務を行ふ能はざれば翌日直に之を行ふ

△忌　服

亡夫に對する忌は喪期二ヶ年なり、即ち大喪一ヶ年、常喪六ヶ月、半喪六ヶ月、喪中寡婦は黒服の上に長き黒布を蔽ひ、ボンチットにも黒布を纏ひ、家にありてもゆるがせにすべからず、長き黒布は喪期の經過に從ひ段々に切去るなり、而して衣服はすべて修飾なき毛織を着し、髪唯束ぬるのみ、半喪に至りては黒縁を引きたる白毛布を着するを得れどもレース其他の飾り品を用ゆるは不可なり又大喪中と雖も黒白相半する衣服を着するは妨げなし、亡婦に對する夫の喪期は近かし即ち大喪六ヶ月、小喪六ヶ月なり、而して其大喪服は光澤なき黒服帽には黒布をつけ、純白の頸飾を用ゆ、



小喪中には帽に黑布を點ずるのみ通常鼠色の袴及び手袋を用ゆとなり、夏期なれば白ろきチョッキをつけて妨げなし、父母の喪期も一ヶ年即ち大喪六ヶ月、常喪三ヶ月、小喪三ヶ月、但し女子と雖も衣服の上に長き黑布をつけず、祖父の喪は六ヶ月、叔父母の喪は三ヶ月、兄弟姉妹の喪は四ヶ月、從兄弟の喪は六週間、すべて喪中は質素と靜居を旨とし、殊に喪の初期中には舞踏會音樂會夜會等其他の公會に出づべからず、又人を訪問する事も成可く謹むべし、人より訪問せられて單に接待に出づるは妨げなし。

贈物の秘訣

雨之屋 舟人

▲贈物は人に敬意を表する場合若しくは好意を寄する場合に行ふ所の交際上の義務なれば、之を爲すには大に注意を要し、從つて一種の技能を要すること勿論なり。

▲世人の多くは先方に贈るよりも、此方の氣に合つた物を贈ることある爲め、貧困なる親戚に對して役にも立たぬ粧飾品を贈り、有り餘れる富裕者に對して却て實用品を贈るが如き矛盾の仕方少しとせず、交際家は先づ茲に意を用ゐざる可からず。

▲彼の婦人は何を望むならんか、
彼の人には何が可いであらうか、
彼の令孃は平生何ういふ嗜好を有つて居らうか、
何を進げたら可いか知ら、
とは、贈物せんとするに當り、必先づ念頭に起る所の難問題にて、解決には兎角苦しむを常とす。

▲殊に贈者の苦しむ事は、友の常々望める物、必要とする物は既に他より之を贈り、最早其の嗜好に投ずべき物も、必要に應ずべき物も無きに至れる場合なり、兎に角斯く交際多き人は其の家にも金錢にては得難き珍重奇什山を爲す有様なれば、尋常一様の物品にては、其の歡心を買ふに足らず、故に兎やせん角やと適當なる進物の選擇に心を惱ますこと一方ならず。

▲此に於てか倫敦市中には、是等贈者の要求を充たす

可く、特別客の爲にとて、東洋の美術工藝品古陶器を初め其他種々奇形のメタル等を備へ置きて販賣せる雜貨店あり、又た古道具店にて望む所の品を手に入るゝの例も尠しとせず、古き珠玉にて今其品稀少なるより容易に手に入れ難き品を藏するあり、一度流行してスタれ再び流行の兆を呈し來れる時計鎖の如き案外の掘出物をなすこと珍らしからざれば、變つた贈物をなすにも左まで困難を感ずることなく、非常に便利なりと云ふ。

▲茲に貧しき一友ありて貧乏なる生活を營み居るに當り、此の友に贈物せんと思ふに、彼は装飾品、美術品の如き贅澤品を望みて、生活上の必要品に就いては敢て言はずと假定せよ、是れ口と心とは甚しく反對せることといふまでもなければ、其の積りにて贈物を選まざる可からず。



▲若し斯かる人に向つて假りに美しく且つ高價なる花籠を贈れりとせよ彼等は感謝の辭を以て之を受納するも、實は十圓以上の造葡萄、造梨子の美術的價値をば知らで、一年餘も打やらかしに爲て置き、之を賣却するに當つて初めて其の高價なるを知り、驚くが如き事珍しとせず、是れ贈物の道を誤ることにて、折角の苦心も水の泡、笑止千萬と言ふ可し。

▲平素豐かならぬ友に盆暮、年玉抔てはクリスマス等の贈物をせんとならば、先づ遲くも當日の一週間前迄に其の手許に達するやうにし、且つ流用の出來得可き品物を選びて贈るやうになすべし、決して其の當日若しくは間際に至りて送るが如き事ある可らず、贈物は受くる者の都合を計ること肝要の注意なり。

▲若し先方が煙草好きの人物ならんには、假令へば美しき喫煙臺とか、貴金屬製の卷莨箱とか、珠玉入彫刻象眼等の葉卷入とか、マッチ箱とか、隨分高價なる物を贈るもよけれど、さりとて美術上の鑑識もなき人に斯る物を贈るは馬鹿氣た事なり、其よりも中實の煙草を贈りたる方遙かに賢し。

▲何か、始終、先方の眼に止つて居るべき物を贈らんとならば、手帖、墨壺、寫眞挾、等を選ぶがよく、又た先方の重寶を旨とせんには、ハンカチとか、手袋とか靴足袋とかいふ物を選む可し、兎に角先方の兼て所望せる必要品にして、實價よりも高價に見ゆる物を贈るが、贈物を爲すの要訣なり。

▲故に先方が日頃欲して未だ得ざる品とか、得るには難からざるも高價にして其の身分にては容易に身に着け難き品とか、或は又た永く其の喜びと滿足とを持續し得べき物とかを選みて贈るは、贈物の目的に副ひたる最良の方法なり。

▲日本人の贈物を爲すを見るに其品物極めて單純にして、趣味意匠の見るべきもの鮮し。特に盆暮の砂糖袋、彼岸の團子、五月の柏餅、祭禮の赤飯、暑中見舞の安團扇等に至つては千篇一律家に依りては砂糖はまだしも、團子赤飯の如き殆んと其處置に困り、人を賴みて食せしめ、又は之れを芥箱に葬るの不經濟を來し、時には多食の結果恐るべき疾病を釀し、醫藥の厄介となる事も珍しからずとす。誤れるの甚しきものと云ふ可し。

▲是れ日本の贈物の主義が根本より誤り居りて、如何にして受くる者を喜ばしめ滿足せしめんかとの注意疎かにして、只進物は浮世の義理、義理だに足せばよし先方の迷惑となるも、爲めに病氣を惹起すもソンナと

は顧慮する處に非ずとなすが如き惡傾向あるに基くものなれば此傾向は飽迄も矯正せざる可らず、要するに贈物は世間の義理なると共に、如何に有益に其義理を足すべきかに就て、大に講究せん事を望まざるを得ず。

お菓子の話

笑翁



或る西洋の學者は世界各國を旅行して其國の文明の程度を測量するには、第一に其國に需用される菓子を見るのが一番早解りであると言た。成程菓子と云ものは其地の生活程度の高い低いを直ちに表示したものである、御覽なさい、野蠻國に於ては、天然物を専ら食するので、食物として別に菓子といふものはない、けれども少し進んで未開國になると多少菓子に類似したものが作られてゐる、タトヱば生活程度の極めて低い朝鮮の内地へ這入ると蜂蜜や飴で味をつけた粗末な豆おこしの様なものが二三種あつて、彼等國民の間食の糧となつて居るのである。然るに日本、西洋の如き文明國になると菓子も中々高尚に成て、西洋では食後の嗜好物、日本では専御茶受に使用されてゐる其菓子の種類は數十百種に上り或者は植物の液を以て作れ或者は菓物の蜜を以て作られ或者は穀物を土臺とし、或者は植物を土臺とし、

其の形も或は花の形を模し、木の葉に擬へ、動物の體に作るなど意匠を凝らし、美觀を添へ、濃厚淡泊様々の味をつけて人の食味を飽かしむる樣に作られてある。殊に今日では和洋兩方の菓子が出來て需用者は二樣の食味を吟味するやうになり人々の舌の能力が日一日と緻密になつて參つたのである。

この異常なる文明の進歩に就けても僅か三四十年のむかしを追懷して當時江戸時代の菓子の流行はどんなものであつたかを見ると徐ろに隔世の感がある。

一口にいふと江戸時代の菓子は今日の如く多種類でなく、概して有名なものは五六種類に過ぎなかつた、簡單にいへば、まづ羊羹、饅頭、最中、岩おこし、煎餅、牛皮、甘納豆、松風の數種に過ぎなかつた。そこでまづその頃、江戸の町々で、如何なる菓子屋があつて、何種の菓子を作つたかを一寸古老の口碑によつて記して見ると。

當時本郷三丁目岡野屋のあつた處に、鹽田理齋といふのがあつた、これは今の藤村のやうな善い菓子を拵らへる家で、随分繁昌したものである。且つ贅澤菓子屋といふ評判で、當時神田筋違(今の萬代橋附近)の甘林堂と比べられたものである。重に牛皮の腰高饅頭を賣つてゐた、中々名高い物で大名方の奥向へも這入りましたが維新後間もなく閉店しました。さて現今繁昌の藤村屋は嘉永年間の頃から、ぼつ〳〵賣出した店で、其頃も今日と同樣、極く奥床しく拵らへた見世つきであつた。

一體江戸時代に於て菓子の極々頂上と言ふのは寛政時代であつたらう。其頃菓子に限らず市中一般の食物がすべて贅澤の頂上となつた處が當時執權白川樂翁公が例の儉約令でそれを潰して仕舞つた、それが文化文政頃になつて再び舊に歸つて來て天保となると又々贅澤に流れ、弘化、嘉永頃になつて藤村で店を出す頃は猩々餅といふものを出した、其猩々餅といふのは夏の土用中でも百日間は請合といふので當時汽車や汽船の無かつた頃遠國などへの土産として極適當したものである、丁度當今戰地への送り物として同店の羊羹な

どが百日間請合の不變味品として需用されるやうなものであつた。そして其の猩々餅といふのは中は紅餡で、それを紅牛皮で包んで其上に又紅沙唐を塗けたものでまづ烏羽玉の赤いのであつた。

彼是五六十年以前の事であるが、當今では職人なども碌々知らない事だそうなで其頃の値段が一匁であつた。それから牛込の方に行くと赤城下に加賀屋伴常といふのがあつた、其店の有平卷の煎餅が至極名代なもので、大層賣れた、丁度今の岡野の最中のやうなもので、百に五十本、中も甘いが側も中々宜しい品、此邊で有名な菓子屋が、小石川白山下の近江屋、市ヶ谷佐内阪の桔梗屋、四谷坂町の菊屋などであつた。



赤坂では山の手一番の菓子屋が萬文、麻布では飯倉の阿波屋。

麹町では二本加賀の掾、此處では煎餅が名代の品、又同所に鈴木兵庫助といふのがあつて菊一の朝顔煎餅といふものを賣つて居た、これは龜甲煎餅を一寸摘んだやうな煎餅で名高い物であつた、そして昔は羊羹は煉羊羹でなく蒸羊羹であつた、煉羊羹と云のは近年の事である。大久保主水が幕府の御用菓子屋で羊羹を納めるのであつたが、矢張り蒸羊羹で

あつた。
そして昔は今と違つて中々注文物が大きかつたから手廣く平生からやつて居なくてはさアと言つても間に合はない、十萬石から五六萬石までの大名から配り物でも言ひ附かると大變なもので一軒で七十車も引出したといふ事である、こんな事は迚も今日では見る事も出來ないのです、上流社會の交際家で一流とも言はるゝ家柄でも、祝儀不祝儀の配り物は二三十臺も出れば頂上です。それですから當時、或る諸侯から朝五千人前の薄皮の注文を受けた處が、晝頃に又赤飯の注文を七八俵も受けた、それから夕方に又大きな大名から注文が來たといふ、實に容易ならぬ事で、店の番頭がそう／＼は引受けても實際運びがつくまいからと少し考へて居たが、しかしそれを斷はつたらば家名に障るから兎も角も引受け、やがて其晩に人を八方に出して職人を集め、とう／＼間に合せたといふ事である、それに昔し山王と神田の祭禮といふものは大層なもので何しろ御用祭といふのであるから諸大名は申すに及ばず町家まで赤飯を誂へますから、何萬軒といつて數へ切れない程であるがそれを間に合せる、それも江戸中の人が食べるばかりでなく田舍から出て來て見物するものが多いからこれが一盃づゝ食べるとしても大變なものであつた、今では華族から注文があつた處が、昔しの百分の一の注文もあるまい。

それから芝に這入ると芝口の蟹屋といふのも極く古い店で、上等菓子ではなかつたが、兎に角手廣く賣るといふ店であつた、又神田に參ると筋違の甘林堂、この菓子屋は江戸一の贅澤菓子を拵らへる家で、本郷の鹽田と頸引であつた、此店の名代は例の腰高饅頭見たやうな牛皮饅頭で烏羽玉のぼろ／＼の着かないやうなもので手輕なもので、價は一分五厘ザット十五文である。

下谷へ廻ると上野の金澤といふ店、是れは淺草並木の鯉屋、麹町の二本などゝ同格で風流氣は少しもない菓子であるから、誂へ物なら幾らでも受込むといふ家、又並木の鯉屋といふのは金龍山餅といふのが古くから

名代であつた。

菓子の異同音

▲東京の甘納豆は京阪地方にてはあまり製せず、京阪の金時又は小倉餡といふものや〻甘納豆に似たり、

▲東京の蓬萊豆、京阪にては源氏豆といふ、又或地方にては源氏豆を十團子といふ、

▲京阪地方にて菓子屋より多く茶箱といふを出す、四五十錢位のものなり、これは細長き箱を三段に仕切り上の棚には羊羹或は餅菓子を入れ中の棚には種々色うつくしき菊菓子を盛りたる皿を入れ傍に薄茶を入れたる棗と茶匕を置き下に樂燒の薄茶々碗など入れたるものなり、來客の時など一寸氣取りたるものなり、

▲京阪の地方にて懷中善哉といふものあり、其格好最中に似たり、湯を注げば速成の汁粉となる、

▲京阪の人、餅菓子といふことをいはず、鶯餅も、蕎麥饅頭も、しぐれも、鶴の巣籠も、共に併せ、呼んで一様に蒸菓子といふ、

▲羊羹に、煉羊羹と蒸羊羹との二種あり、煉羊羹は普通の羊羹にして、蒸羊羹は、米の粉を交へ煉りたる羊羹なり、故に其色少しく薄く味はひて亦不味なり、京阪の人これをウイロと云ふ、されどウイロと蒸羊羹とは其實別なり。羊羹の中に小豆の粒形のま〻に殘れるものあり、東京にもあり京阪にもあり、然して兩地いづれもこれを田舍羊羹といふ。猶此外に丁稚羊羹といふものあり、其品質惡しく、よき人の前に出すべきものにあらず、

▲東京の鹿の子餅、京阪の人は小倉饅頭と云ふ、牛皮饅頭、これを千歳餅といひ、鹽釜を白雪糖と云ひ、開化饅頭を南京饅頭といふ、粟の水飴をギヤウセンといひ、あんころ餅を砂糖餅といひ、大福をおやきといふ、

▲せんざいとは赤豆のあんを溶せる汁に米の餅を入れたるものにして、汁粉とは同じく赤豆の中へ米の粉にもあれ、小麥粉にもあれすべて粉にて造りたるもの即ち一種の團子を入れたるもの、これ京阪に於ける汁

粉とせんざいとの區別なり。又東京の汁粉屋に於て雜煮と普通に云ひなすもの、京阪の地に於てはスマシといふ、又京阪のきみ團子とは、東京のもろこし團子なり、

▲鹽煎餅といふもの、京阪の地方には殆どなし、かき餅は到る處に多く鬻ぎて、鹽煎餅の如く用ひらる、小料理屋にて通しものにかきもち又はあられを出す處さへあり、

西洋の果物

領地が廣まり交通が開けるにつれ、色々珍しいものが入つて來て、人々の嗜好の領分も廣つて行く、此頃道を歩くと都會到る所の八百屋の店先きに、黃色いアケビのやうなバナナといふ果實が吊つてある、あれは臺灣、新嘉坡、錫蘭、瓜哇などいふ熱い地方の芭蕉の(甘蕉といふ)木になる果實で、木の心の處から枝が出て、其先きに房になつて着く、一房に五十、六十、百もなり、始めは綠いが、熟すと黃色になり、皮を剝いて食べると、一種の香氣があつて、甘くて何ともいへぬ上品な味がある、熱帶地方の土人はあれを常食にして居るものもあり、あれから酒燒酎を釀して飮む者もある、此芭蕉原は印度であるが、今は我琉球、小笠原島などでも作つて居る、澱粉を多く含んで居るから、食料には適當した物である、鳳梨といふ果實は、蘭の樣な草の實で、矢張熱帶地方の產物である、果實に甘味と酸味があり、よい香氣があり、液汁氣が多くて、非常に美味ものです。

龍眼肉や、棗や、水蜜桃や、茘枝などは支那の名果である。蜜柑もよい、我國產でも、これから出る北海道靑森縣等の西洋林檎はもはや名物になつて居る、歐米で果實の名所は第一が伊太利の南、夫から佛蘭西の南、米國ではフロリダ州が第一に推される事になつてゐる。

進物の菜(一)

近頃は西洋料理の大流行で女學校出の令夫人などは家庭で西洋料理を作り洋食に舌つゞみを鼓らされるそうですから食料品の進物は輕便で且つ當世向かと思はれます、が食料品と云つても範圍の廣いもので乾肉、鑵詰、菓子、酒類などありますから大略の處ろを左に申ませう。

△西洋菓子　ビスケットも最初は砂糖の多く入つた濃厚なものを賞味しましたが近頃は淡泊なものが流行する樣になりました、其れにはミルク入、曹達入などがあります、直段は何れも一鑵(二斤入)八十錢位です、これは牛乳を飮む時に一寸火にあぶつて牛乳の中に入れ或はチースを付けて喰ひますが普通のビスケットからくらべると餘程淡泊として病人や小供の食料品には誠によろしう厶います。其外チョコレート入サンドウッチ(小鑵六七十錢)フェテー(二斤入一圓)アルウト(二斤入一圓十錢)など何れもビスケットのかはりもので進物にはよろしう厶います。それからケーキ類ではマシマロー、ガムドロップス(伊太利産のガムの樹より絞り取りたる汁を入れたるもの)バナナケーキ(芭蕉の實の入りたるもの)ヘイナップルマシマロー(鳳梨の入りたるもの)など珍らしいものがありまたキアンデー類にも新奇なものがあります、此等の菓子は果物の肉又は汁を加へて製造したものでビスケットやドロップスと違ひ日本の葛餅の樣に一種のねばり氣があつて柔かく(夏向には乾燥を加へて少しく固くなる)味も佳良で其れ〲果物の香氣を持つて居りますがこれは西洋菓子の特色です、直段は舶來品からくらべると何れも半額位でキャンデーは一箱九十錢より一圓七十錢迄、ケーキ類は綺麗な耳附きのボール箱に詰め一箱五六十錢から出來るさうですから進物には體裁がよくて格好です。

△洋食品　ハム(豚の燻肉)などは如何でせう、これは近頃日本で製造されますが其中で鎌倉ハムが一等です、東京ではハムの切賣りをして居りますが京阪では需用が少いので食料店では一本(股の分)でなければ賣りません、少さなのは一本七八斤で直段は二圓七八十錢です、舶來になると英國製一ポンド八十錢、米國製一ポンド五十錢ですが日本人の口に合ふのは鎌倉ハムの樣な赤味の多のがよろしい、ハムを切つて一寸湯を通して酢を掛けるとお刺身の代用品になります、夫からソーセーヂ(豚の腸詰)は近頃ボツ〲用ゐられますが和製はありません、舶來品の直段は一鑵八十錢から一圓四五十錢位です。

訪問

訪問の心得

人を訪問するには時間、職業、其他の諸點より注意すべき個條少からず左に其要點を掲げん。

△時間　西洋の禮式法には日出より日沒までの間を「モーニング」と稱へ、日沒以後を「イブニング」と稱ふ、而して日中の訪問は正午十二時前、及び午後五時過になすを忌むの慣例あり、但し被訪者の職業によりては此定めの外に猶忌むべき時のありと知るべし。

△夜中　夜中の訪問時限は必らず午後九時より遲かるべからず、假令止むを得ざる事故ありて、九時後に訪問するも十時後まで長坐すべからず夜間の訪問は通常一時間を以て例とし親交の間は之より幾分長坐するも差支なしと雖も通常の交際にあつては勉て長坐を避くべし。

△名刺　何等の訪問をなすにも名刺は常に携ふべし、名刺は門口にて取次の婢僕に與へて主人に通ぜしむ、其家内もし二人以上の婦人ある時は名刺の一隅を折返して出すべし、之れ訪問の一家一同にかゝる意を表するものなり。

訪問に際して忌むべき個條

▲先方の案内雜沓する時は一時見合せ數日を過ぎて後訪問すべし。

▲零落したる人を訪問するに富裕を誇り衣服裝飾の美をなす可からず。

▲先方の意を量らず猥りに他人を伴ひ訪問すべからず。

▲主人の來るを待つ間室内を逍遙し或は圖畫などを見廻るべからず。

▲去らんとして一旦席を立ち乍ら特別の用事もなきに復席すべからず。

▲戸を叩き案内を乞はず勸めを待たずして濫りに室内に入るべからず。

▲窓戸を開閉し或は居室の整頓を亂すべからず。

▲自分の時計を取り出して時刻を計ることを示すべからず。

▲正式の訪問を爲す時手袋を取り脫すべからず。

▲對話の盡くるにも拘らず長坐すべからず。

▲勸めを待たずして濫りに病人の室に入るべからず。

▲雨天には正式の訪問を爲すべからず。

▲傘杖及帽子等を振りまわすべからず。

▲人の前に坐をしめ背を向くるは失禮なり。

▲親密にもあらざる家に小兒又は犬などを伴ふべからず、又しげしく室内を見廻すべからず。

▲食事の刻限まで長坐すべからず。



進物の栞(二)

△鑵詰類　先づ魚の鑵詰では佛蘭西製のサーデン(鰯の油漬)などは上等の料理に用ゐられるもので洋食通の賞味するものです、日本では近頃名古屋の水産講習所で製造して居りますが味は舶來品と變りませんが、尚ほ持越すといけなくなるさうです、直段は和製も舶來も殆んど同樣で一鑵二十錢から三十五錢位迄です其他は日本製で鮪、松茸、イタヤ貝、海膽などの鑵詰もあります。

△西洋酒　洋酒ではまづ葡萄酒ですが上等は佛蘭西エンナウエル會社製造のシャトー、ラフヒット(一本八圓)などありますが一寸した御遣ひ物には少し直段が張りますが一本二圓二三十錢の所ではシャート、ラクランサ(二圓二十五錢)、同じく一圓五六十錢の所ではシャート、フロース(一圓五十錢)などが能く賣れるさうですソ、ト直段が下つた所で日本人に飲用せられ評判のよいのはメドック(一本六十五錢)シンハンデル(一本五十錢)などです、ブランデーは一本八圓位より一圓位迄ウヰスキーは一本二圓四五十錢より一圓位までであります近頃流行するポケット入平瓶のウヰスキーは一本五十五錢で贈先に依つては手輕でさうして面白い進物になります、東京の洋酒店では葡萄酒ブランデーなどの進物用のため奇麗な裝飾箱、竹籠などを準備して客の注文に依り二本なり三本なり箱又は籠入りにして贈るのでまことに體裁がよろしうムいます。

△西洋菓物　日本製のものは信州で盛に製造されますが桃は舶來品に劣らぬものが出來ますが、其他のものはまだ舶來品に及びませぬ、米國製の鑵詰では桃、杏、梨、林檎など一鑵四五十錢位で佛蘭西製の苺の瓶詰は上流社會に賞味せられ一本八十錢より一圓五十錢位まであります、又た果物の乾肉ではパイナップル(一鑵三十二錢)龍眼肉(一斤三十五錢)乾葡萄(一斤三十五錢)など何れも進物になります。

△飲料品　歐米から來る食料品の中で絶へず新奇なもの〻發明せらる〻は飲料で菓子類は初めの人にこそ珍らしけれ西洋通の眼より見れば珍らしいものがないさうですが飲料品となると日々に新なものを輸入して來るさうです此內で近頃米國から輸入されたポスタム、シリヤムと云ふのは穀物から作り珈琲、茶、チヨコレートなどの代用品ですが朝餐の時などに用ゐるに珈琲茶の樣な刺激性を持たないので彼地では病人や衞生家などに歡迎せられ好く賣るさうですが、日本では外國人の外あまり用ゐません直段は一鑵六十五錢で追々日本人にも歡迎される樣になりませう。



伯爵邸の園遊會

花明女史

（一）

丁度木曜日の宵でした、今書齋へ入つたばかりの夫が私を呼びますので、急いで其の側へ參りますと、夫は机の上の郵便物を撿めながら、

「令夫人！」と、妙に微笑みながら呼びかけるのでせう、夫の口から「令夫人」などゝ呼ばれるのは、素より待ち設けない事ですから、私は驚いて挨拶に困つて居ります、

と「令夫人御同伴とあるよ！」と、夫は私の方へ向きなほつて、更に斯う言ひました、

「何がですの？然う突然に仰有つちや私には何の事だか些も譯が分りませんわ、」

「然うか、ぢや行りなほさう、……令夫人！」

「令夫人つて？」

「令夫人と言ふのは、外でも無い、今私の前に居る明さんのことさ！」

「あら、私の事！」

私は斯う言つて思はず眞紅になつてしまひました、私たち二人が、妻よ夫と呼ばれるやうになつたのは、やつと今から二週間前で、一昨日新婚旅行から歸つたばかりなのですもの、

「何も令夫人と言はれたからツて、然う耻かしがる事はないさ、」

と、夫は私の眞紅になつたのを、さも愉快らしさうに見て、やがて其の令夫人御同伴云々といふ話をしました。

それは此の次の次の日曜日に〇〇伯爵邸で園遊會が催されるので、私たち二人が招かれたのです、そしてそれは、伯爵の令息夫妻が此間歐米漫遊から歸られたので、其の歸朝祝ひの爲めに催される園遊會でした、

「私も參らなければなら無いでせうか、」

一代に名望の高い此の伯爵邸の園遊會ですから、定めて晴れがましい事であらうと、社交といふことに就いてはまだ幼稚園時代の私、殊には新婚早々の萬事に耻かしいのが先に立つ私のことですから、斯う聞いただけで、もう何となく恐ろしいやうな氣がしたのです、

「無論です！」

快活な夫は、氣の弱い妻をからかふ氣か、俄に眞面目を粧つて、明白と重みのある、さながら斧を打ちおろすやうな返辭です、

「でも、私……まだ……」

「何が、でも私まださ」

「何だか然ういふ場所へ出ますのは晴れがましくつて……」

「明さんは、嬰兒ですか、娘ですか、若くば奥樣ですか？」

「…………」

「明さんは、二週間前に如何なる式をしたか考えて御覧！」

「…………！」

「そんな卑怯なことでは、奥樣たる資格はないぢや無いか、」

何といふ皮肉な説法でせう、でも夫から、奥樣たる資格が無いぢやないかと言はれて、私は急に悲しくなつてもう眼が潤んで來るやうな氣がします、

「默つて私に隨いてくればいゝよ、然う氣の弱い令夫人ぢや困るぢや無いか、奮發！奮發！」

夫はまた微笑の人となつて、其の口癖の奮發！奮發！といふ言葉さへ聞えましたので、私も其の言葉に乘り、

「はい、」と頷きますと、夫は仰々しく、

「行くといふ事になつたかね？」

「はあ、參ります、」

私も明白應へましたので、夫は大層喜んで、それから伯爵一家の人々のこと、庭園の事、園遊會のこと、餘興のことなぞ、色々と懇切に話しました、斯うなれば、また待ち遠しいやうな氣もしますので、其の日を指に折つては、幾度か夫に笑はれるのでした、

夫は、またそれに就いて日本婦人の社交といふ問題に不熱心で不親切で、當然なすべき其の職分を盡さず、當然現すべき其の光を自ら蔽はんとするのは、甚だ殘念であると言つて、種々の議論を聽かしました、約めて言へば社交上の婦人の地位といふものは、決して輕いものでは無い、社會の進み、平和、幸福に對して甚だ重

要なもので、少數な親族の應酬や、應接室の應對や、故舊の音問ぐらゐで、一家の主婦として其の社交上の職分を盡したものとは言へぬ、東京の交際社會なるものは、まだ組織をさへなさず、たとへて言へば半開の有樣であるが、併し此の間華族會館で婦人祝捷會が開かれたといふ事であれば、今に東京の交際社會も次第に組織が立ち秩序ができるやうになることであらう、そして、願くば凡ての流行は、善美な此の東京の交際社會に源を發するといふ事にしたい、それにしては、婦人が狹い圈内に閉ぢこもつて、偶々廣い處へ出れば人に醉つて口も利けないといふ風では、到底問題にならぬ、近い例が此の程來遊せられたアリス、ルーズベルト孃である、彼の方が新橋停車場へ着いて、朝野の貴紳淑女、さては構外の群衆から歡迎せられた時の樣子は何うであつたか、始終快活な、にこやかな、威があつて親みの餘りある、ものに臆しない態度で、さも愉快げに微笑み、手を振りつゝ潮の如き歡呼を受取つた樣子は、實に天晴れなものであつた、あれが若し我在來の日本婦人であつたらば何うであらう、兎に角も社交界に出る婦人は、よし身分や地位は違つても、あゝいふ考と態度をもつて貰ひたい、とまあ言ふ說でした。私も夫から斯う敎へられて、心弱い胸を改めやうと力めましたが。さてなか〱思ふやうには參りません、夫に申せばまた笑はれるばかりですから、何も言ひませんかつたが、園遊會へ參るといふ考の七分通りは、頭のもの、衣類の心配でした、彼是して居るうちに、何時の間にか園遊會の當日になり、午前十時迄にいよ〱○○伯爵邸へ行かなければならない事となつて了ひました、

(二)

宅を出る時、精細に時間を計つて參りましたので、伯爵邸の門前で車を下りますと、丁度十時でした、衣紋をなほしながら夫の後から隨いて參りは參りましたが、幾日かゝつて學びました臆しないといふ胸の修養は、



門前の混雜で既に散々になつて、門に大國旗が交叉されて居たと見たばかり、其の外には眼が働かないで、
「好い天氣で何より好都合だ。」と、振り向いての夫の言葉に對して、
「然うですね。」と應へたのが關の山でした。園遊會入口とあるのは、お玄關から遙右になつて居る庭の御門、中では、もう笑ひ興ずる聲が彼方此方に聞えます。入口には白薔薇の印をつけた接待の方が幾人か居て、二人に紅薔薇の印を渡し、園遊會の次第、餘興などの事を印刷した紙を與れました。そして彼の白薔薇をつけた接待員の一人は、
「何うぞ此方へ。」と案内をします。美しく敷いた小砂利に音を立てゝ、枝ぶり見事な樹々の間をくゞりつゝ案内に隨いて參りますと、やがて雅やかにつくつた茅葺の一棟にと導かれました。屋根も柱なぞも新らしいのを見れば、これは此の園遊會の爲めに特にできた一棟でせう。中には所々に圓テーブルがあつて、それを圍んで多くの椅子が備へてありましたが、大半は既に來客をもつて滿たされて居ます。私は騷ぐ胸を抑へて、廣びやかな、善美を盡した庭園の景色を眺め〳〵、豫ねて聞いては居ながらも今更のやうに驚かれ、「まあ何といふ立派なお庭だらう。」と、感歎しながら、唯だもう操り人形のやうになつて夫の後に隨いて居ましたが、茲へ入ると同時に、夫はもう懇意な人々に取りまかれて、頻りと挨拶に忙しく、其の度に、御令閨、令夫人といふ聲が聞えて、私にも挨拶がありますので、私は一生懸命になつて之に應じました。定めて私の顏は眞紅になつて居たでせう。其のうちに、私たちの媒介をして下さつた芳山夫人は、此方へ居有いと私を連れて、多くの夫人たちの集まつて居有る處で、一々私を紹介して下さいましたが、中で、常に我婦人界の導手となつて居られる、洋裝の○○侯爵夫人と、美人の評判の高い◎◎子爵夫人と、交際上手と夫からも話のあつた△△夫人と、獨逸人の▲▲博士夫人のあつた事を記憶して居るばかり、他は唯だ其の姿をおぼろげに覺えて居るのみで、お名前は

少しも耳へは殘らなかつたのでした、暫らくして居るうちに、友だちの口口外務書記官夫人、▽▽夫人、▼▼夫人も見えましたので、やつと平常の自分らしい話ができるやうになりましたが、今來たばかりの▽▽夫人が、

「貴女、次第書にある、子供の畫といふのを御覽なさいましたか、」と、言ひましたので、

「いゝえ、まだ何らも……」と答へて、初めて彼の次第書を見ますと、成程此の一棟の側に餘興の一つとして、「子供の畫」といふのと、「造り物」があつたのでした、「子供の畫」といふのは、伯爵家の親族の七歲より下の子たちが、思ひ〳〵に畫いた色々な畫を集めたもの、「造り物」は料理人や女中が祝意を表する爲めに、殊勝にも造りあげたものでした、直ぐ側ですから、行つて見ますと、まあ「子供の畫」の可愛くて面白いこと、「造り物」は臺所道具で船の港入がつくつてあるので、どんなに良くできてましたか、時にとつて誠に好い思ひつきだと思ひました、

十一時、煙火が三發あがりますと、來客は圓い屋根の他の一棟の下へ集ることになつて居ましたので、夫に隨つて其の一席を占めました、此處で主人伯爵、令息夫妻の挨拶がありましたが、何れも簡單な、角ばらない挨拶で、若夫人は瀟洒な洋裝で、まことに淸らかな姿でした、挨拶がすむと、直く來客の傍へ來て一々に言葉を交して、私も親しく挨拶をしましたが、そのまあ物なれた御樣子、私は熟々感歎しました、

人の數は、三百人以上と見ましたが、婦人は僅に六七十人、此の一棟を出ますと、出口で例の白薔薇をつけた接待員が、失禮ですがといふ言葉を添へて、人々に、紀念につくつたものでせう、オリプ色に菊模樣を出した袱紗に包んだ辨當の折を渡しました、來客は何れも樂しげに笑ひ興じながら、此處を出て廣い庭面へと散ばるのでした、築山の横には、二つの舞臺がつくられ、一つには活人畫、一つには家庭演劇といふ餘興があるのです、活人畫は、伯爵令嬢と其の友達が可愛い催し、家庭演劇は、彼の「子供の畫」の兄様たちが、玄關の書生

さんたちを後見にしての思ひ切つた催といふことでした、私は勝手が分らないから、夫に随いて先づ池の側へと出ました、此處には、言はゞ花見茶屋といふやうなものが幾つもあつて、其處で辨當を食るやうになつて居ます、池は丁度琵琶湖に象つたもので、池の中には竹生島とも見える島さへあり、末の方には瀬田の唐橋、堅田の浮見堂までつくつて、湖邊の景色も寫眞を見るやう、唐崎の松、三井寺、粟津、石山など、私たちは、丁度唐崎の松を前にした彼の花見茶屋のやうな茶屋構へ座を取り、此の晴々とした庭の景色を見ながら、靜に辨當の箸をとる事にしました、夫は箸をとりつゝ、此の庭は以前某藩侯が、廣島の泉邸、岡山の後樂園などの規模を取り、數寄を盡して造つたもので、今は秋も半で花も葉も大方は無いから眺は少いが、彼處は梅林、此方は櫻、それに隣つて躑躅の丘と丁寧に指しての説明、もう萩も散り、秋草の亂れ咲いて居た處も寂れたが、楓は少からぬ數で、中には既に茜色をほのめかしたのもありました、それに永く浦風になじんだものと思はれる老松、何時も變らぬ綠の常盤木の數々、私の身は何うしても何處かの山へ遊びに行つた氣がして、お辨當の味のよい事、夫はまた來客の説明をして、今彼處に居るのは紳商の某、先刻私たちの右に居たのが代議士の某、其處へ可愛い令孃をつれて來るのが某大審院判事の家族と、一々に數へて今日の會は、東京での第一流といふ人を大概網羅して居る、が婦人は彼の通り、夫が連れて來るのを厭がるのか、夫人が一所に來ることを嫌ふのか、兎に角斯う婦人連が少いのは、餘り良いことではあるまいといふ慨歎の言葉がありました、辨當も了ひましたので、庭の店々を見て歩るかうと、やがて此の茶店を出て庭を歩み初めました、丁度其處へ口口外務書記官夫人が來かゝつて、私に◉◉式部官夫人と、××子爵の令孃の二人を紹介されました、二人とも豫ねて口口夫人から話を聞いて居たので、思ひの外臆せず親しい會話を交換して、何うやら少しくもの馴れて來た心地がしました、夫は、側で面白さうに唯だ微笑するばかりでした、

（三）

廣い庭園の彼方此方に設けられた店は、咖啡店、牛乳ホール、鮨店、ピーヤホール、水菓子店、汁粉店、中には「香の物名題お茶漬」といふ札の出て居る店さへありました、それから梅林の裏に、山茶花の綺麗に咲いた細い徑があつて、つき當りに一棟の茶室があり、こゝで抹茶の饗應があるのでした、牛乳ホールや、咖啡ホール、ピーヤホールは何れも洋装の給仕女、鮨店は意氣な江戸風の給仕女、思ひつきは汁粉店で、これには「元祿汁粉」といふ看板で、何か變つた趣向がありさうだから入つて見やうと申しますから、時代に引きめぐらした暖簾を潜つて入りますと、屏風から座蒲團、床几から火鉢まで、すつかり元祿のもので、給仕の女も髷は素より衣類に至るまで元祿の風で、際立つて目につきました、此處は殊に評判がよくつて、お客樣は店中一杯でした、私はすつかり感心しまして、ほんとに好い趣向だことゝ申しましたら、夫は、

「汁粉とあつては、義理にも感服しなければなるまい！」

と、人の惡い返事でした、お茶漬店にも何か特別な趣向があるであらうと、夫は入ることを勸めましたが、それよりは「活人畫」を見に行きませうと、こゝへは入らずして足を「活人畫」の舞臺の方へ向けました、と、遙前の方でさも賑かな笑聲がしますので、眼をあげて其の方を見ますと、七八人のお客が腹を抱えて笑つて居るのです、何だらうと夫は急足で參りますから、私も急いで其の側へ行つて見ますと、これは「畫葉書の關所」といふので、誰れでも此處を通りかゝるものは、男子でも婦人でも必らず畫筆を取つて畫をかくか、歌か俳句を作つて葉書にかき、關所の入口のポストの中へ入れなければ、此の關所は決して通さぬといふ事でした、此の關所を通らなければ「活人畫」や「家庭演劇」のある場所への餘程の迂路を取るより外行くことのできないやうにな

つて居たのです、腹を抱えて笑つて居る人たちは、此の關守に袖をひかへられ、止むを得ず、「子供の畫」中の一つだなどゝ言つて奇態な畫をかき、字足らずの歌や字あまりの俳句をつくつて笑つて居るのでした、次第書には唯だ「畫葉書の關所」と書いてあるばかり、斯ういふ事のあらうとは知らずに、非常な苦みをしたといふ人も多かつたやうで、殊に婦人たちに夫れが多かつたと聞きました、が困つたのは他事ではありません、關所へ近よると夫と二人で其の苦みに遭ふことになりまして、私は何んなに恥かしい思ひをしたか分りませんでしたが、夫は一寸水彩ができますので臆せずに何か「元祿汁粉」の店のやうなものを描きますので、私は密と、

「私のも御一所に……」と頼みますと、富樫といふ衣裝をつけた關守が、

「代筆は通りません、御自筆でなければお通し申すことはできませぬ、」

と申しますので、私は何うしやうかと思ひながら、又しても夫が「奮發！奮發！」といふ口癖を出しましたので、何ういふ字をかいたのやら、自分には一向分らず、思ひ浮かんだ園遊會の和歌をかいて、逃げるやうに走りぬけてしまひました、面白い趣向かは知りませんが、ほんとに邪氣な趣向！

活人畫は、「小督」「月の女神」「小公子」など七つ八つもありましたが、私の見たのは「小督」、誠に見事なできでした、非常な喝采で、小督になつたのは伯爵若夫人の妹、仲國になつたのは、伯爵夫人の姪にあたる※※子爵令嬢といふことでした、

「家庭演劇」は、何れも小波山人のお伽噺を出すので、私の見たのは「浮かれ胡弓」でしたが、白から技まで申分ない成蹟で、一週間や二週間の稽古では、なか／＼斯うは行きますまい、されば喝采の聲は頻りで、主人伯爵も暫らく此處に見て居たやうでしたが、始終こぼれさうな笑顔でした、役をする人が、あの「子供の畫」の兄さんたちだと言ふだけに、觀る者の興味はまた格別です、

段々時間が經ちますので、丁度四時少し過ぎた頃、近頃にない樂しい一日を過ごして、まことに愉快に此の伯爵邸を辭しました、夫は今日の園遊會を頻りと賞めて、園遊會はすべて斯くありたい、家庭的で、趣味があつて、來客をして心から愉快を覺えしめる、殊に親戚の令孃の活人畫、子供の畫、子供の畫の兄さんたちの家庭演劇、婢僕の造り物、何といふ尊い計畫だらう、これ迄方々の園遊會へ招かれたけれども、今月ほど淸和な愉快な園遊會はなかつたと申しました、

「何うだ、園遊會も矢張り窮屈かね、」

斯う問はれて、私は、心から、

「いゝえ、」と急いで應へなければなりませんでした、そして、それに續く言葉は、「何處の園遊會も斯ういふ風なら、私は何時もお伴をいたします！」

（了）

交際季節と菊

紳士の菊作りとしてその名の聞えしは早稻田の大隈伯を初め濱口伯、曾禰男等なるが例年大隈伯は一重大輪咲の珍花を溫室に仕立て高さ六尺より九尺餘にも達し一幹に幾百の花を咲かしめ濱口伯は大輪の實割作りと實生を花壇に仕立て或は野菊の實生を培養し曾禰男は八重大輪變り咲の培養を樂みとせり然て今年は季候の冷かなる上降雨多かりしも發育に左したる影響もなく只だ下葉の枯れたるが多きのみにて氣候本順となれば花には障害尠なかるべし近年市內にて流行するは牡丹咲の八重にして一重の大輪咲は廢れ氣味なり理は花壇植には幹の高さ六尺より九尺位に延び植込みし所は美しけれど鉢植としては大鉢に植ねばならず賣品としては價高きより買人尠なく花の美麗にして小振なる八重咲は小鉢に植ゑて觀賞に便なるより最も流行せり團子坂にても本月廿日頃より開園し入谷の百草園開花園入十等の各園も鉢植の花壇を設くる筈尙ほ團子、津輕伯等は自から培養せざるも年々植木屋より數十鉢の大輪を買入れて觀賞しつゝありと

次號記事豫告　十一月五日發行

毎月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）……金二十錢
四册（三ヶ月分）……前金七十五錢
八册（半ヶ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ヶ年分）……前金二圓八十錢
內（定刊數……十二册／増刊四回……一、四、七、十月價格同一）

郵税　一册　二錢

廣告料

	二十四字詰一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	……	……	割引四十圓
一等	五十四錢	十七圓二十八錢	割引三十三圓
二等	四十四錢	十四圓〇八錢	割引二十七圓
三等	三十七錢	十一圓八十四錢	割引二十三圓

▲等級の位置〆切日等御照會次第御報可致候

註文規畧

●本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
●御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
●郵券代用は一割増にて五厘一錢の切手に限る
●總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅八年十月十五日發行　第五卷第拾四號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　水谷景長
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

宮中顧問官 陸軍少將 佐藤正閣下題字
文學博士 井上哲次郎先生序文

現代大家 武士道叢論

秋山梧庵君編纂

全一册

洋装大判 紙數約四百頁 十一月中旬發行

(一) 日本魂 文學博士 黑川眞賴君
(二) 武士道を論ず 文學博士 井上哲次郎君
(三) 武士道は物部大伴二氏に興る 文學博士 重野安繹君
(四) 武士道 文學博士 細川潤次郎君
(五) 武士道と將來の道德 文學博士 井上哲次郎君
(六) 勅語と武士道 文學博士 松本愛重君
(七) 武士道 文學博士 井上哲次郎君
(八) 武士道論 辯護士 三好退藏君
(九) 武家時代の法律に現はれたる道德主義 文學博士 三上參次君
(一〇) 武士道の批判 文學士 小林一郎君
(一一) 武士道の話 子爵 渡邊國武君
(一二) 時局より見たる武士道 文學博士 井上哲次郎君
(一三) 武士道と今後の教育 法學博士 戸水寛人君
(一四) 大に士氣を振作せよ 陸軍少將 佐藤正君
(一五) 學者の邪說を破す 同 同
(一六) 浮田佐藤兩氏の論爭に就て 文學博士 井上哲次郎君
(一七) 文學博士井上哲次郎君の批評に答ふ 早稻田大學講師 浮田和民君
(一八) 再び浮田氏の辯論に就て 陸軍少將 佐藤正君
(一九) 浮田氏の答辯を讀む 文學博士 井上哲次郎君

(二〇) 時局と歷史教育 文學博士 三上參次君
(二一) 佐藤對浮田論 文學博士 加藤弘之君
(二二) 武士道に就きて 文學士 有馬祐政君
(二三) 武士道の懷古 文學博士 根本通明君
(二四) 日本國に於ける武士道 佛國哲學博士 リギヨル君
(二五) 名譽か義務か 文學士 藤井健次郎君
(二六) 文明史上より見たる日本戰捷の原因 文學博士 井上哲次郎君
(二七) 武士道の將來 文學博士 三上參次君
(二八) 歷史上より見たる旅順の開城 本願寺講師 島地默雷君
(二九) 武士道と佛教との關係に就て 文學博士 南條文雄君
(三〇) 武士道と淘汰說 理學博士 石川千代松君
(三一) 武士道とゼントルマン 大學總長 山川健次郎君
(三二) 武士道論 伯爵 大隈重信君
(三三) 日本魂と其原始に就きて 伯爵 佐々木高行君
(三四) 我祖國本來の主義を忘るゝ勿れ 文學博士 井上哲次郎君
(三五) 西洋のストア主義と日本の武士道 文學士 藤井健次郎君
(三六) ストア哲學と武士道 文學士 吉田賢龍君
(三七) 明治式武士道 文學士 有馬祐政君
(三八) 武士道と商業 法學博士 添田壽一君

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

早稲田大學野球撰手　橋戸信君著



最近野球術

全一册洋裝中判
紙數約二百五十頁
十月下旬發行

口繪寫眞版

（第一高等學校、慶應義塾、學習院、早稲田大學）最近野球撰手▲米國摸範撰手▲野球大競技等珍絕壯絕

（目次）

（インフィールド）內野篇
ピッチング（投手）カーブの種類●カーブに對する注意●キャッチング（捕手）●フワーストベース（一壘）●一壘手に對する諸種の注意●セコンドベース（二壘）●ショートストップ（遊擊篇）●サードベース（三壘）●內野手に對する忠告

（アウトフィールド）外野篇
バッテング（打擊法）●ラインアップ（打擊順）●ベースランニング（走壘法）●マネーヂメント（監督法）●アンパイアリング（審判）

附錄
野球の三德▲米國の野球界

野球は武士的競技なり、膽を練り筋肉を鍛へ腦力を發達せしむる最好遊戲なり、方今到る處、ボール、バットを見ざる無く、野球競技は學生間の一大勢力となれり、唯惜む之れに對する好著述無きを、偶二三書ありと雖ども、多くは簡に失し粗に失し、僅かに初心者を教ふるに足るのみ、記事陳腐にして野球の眞體を知り難し、即ち本書の出づる所以也、著者は有名なる早稲田大學野球撰手SSにしてキャプテンを兼ね、本年春より夏にかけて、遠征隊一行と共に野球の本場所なる米國に渡り奮鬪苦戰數十回、自己の視察經驗に加へて、同國模範撰手の意見學說及び好著述を參酌し、歸來江湖の要求に應じて此著あり、最も斬新なる野球術、最も科學的なる野球術を知らんとする人は本書を讀め、記事頗る流麗壯快加ふるに數十の寫眞版木版は各撰手の秘訣、魔球の秘術を示して余薀なく、實に野球間無比の珍書なり。

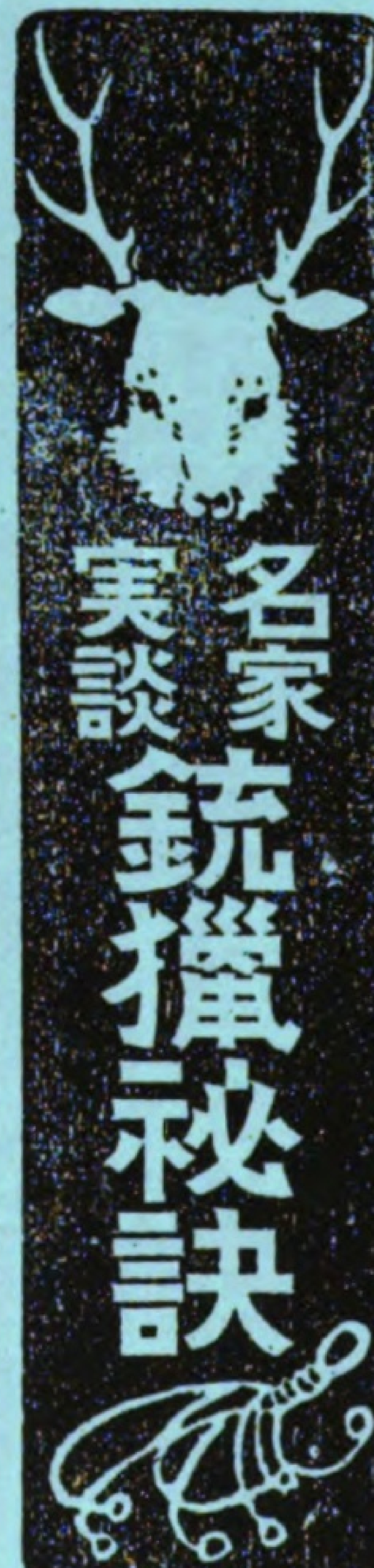
發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の二）

式部長 主獵局長 伯爵戸田氏共君校閲并序獵界諸名家校閲

報知新聞記者 高橋迎月君著

（十月末發行）



全一册

洋装クロース金文字入三六判美本
紙數約二百五十頁
銃獵寫眞數葉挿入

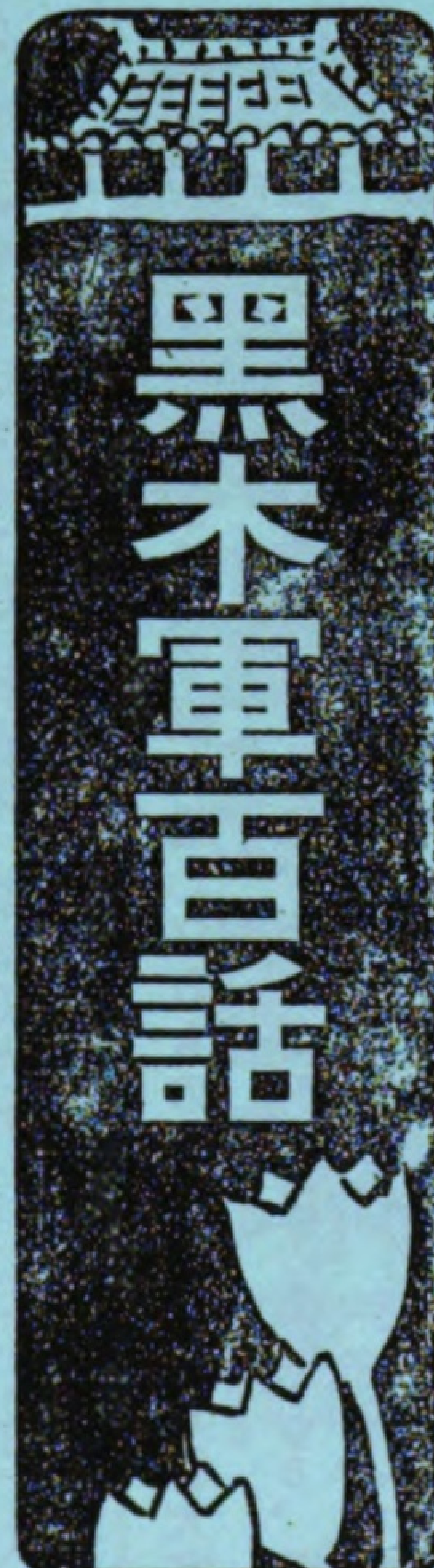
古來我國特有の銃獵に關する書籍の刊行されしもの至つて少なく現に流布しつゝある三四種も皆之れ歐米の著書を飜案して之に自己の意見を附したるものに過ぎず本書は高橋迎月君が戸田主獵局長、伊達男、十文字氏兄弟、相馬子、飯島博士、鍋島外務書記官、伊集院子、後藤臺灣民政長官、伊達主獵官、大村伯、長谷場獵友會々頭、綾井武夫氏、根岸盛太郎氏、渡邊宗七氏等獵界に於ける名士を歷訪し多年研鑽の結果而も大得意とせらるゝ銃獵談を聞きて以て稿を起したるものにして一々其等大家の校訂を經たるもの也、即ち銃口を向くべき鳥獸の性質習慣獵法は勿論、宮內省御獵塲の獵談あり、歐米各國に於ける獵談あり、獵鳥談あり、獵銃談あり、獵犬談あり、射的談あり其總て皆諸名家の多年の實驗なるの故を以て初歩狩獵家の適切なる案内書たると共に練達したる銃獵家に取つても亦他に比すなき好伴侶良參考書たるを失はず今や金風颯々銃獵の期近からむとす希くは我が銃獵家諸氏一本を購ふて多大の利益と經驗とを積まれかし

（後付の三）

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

（後付の四）

陸軍大將　黑木爲楨君書簡
陸軍少將　藤井茂太君序文
黑木軍通譯官　來原慶助君著



全一册洋裝大判
總クロース製美本
紙數約三百頁
近刊

▲口繪——寫眞銅版八頁　コロタイプ一頁挿入

行軍難（道路と天候給養と運搬力）
水路と沿道の架橋
通信機關（其一、郵便其二、電信）
陸戰劈頭の戰死者
豪傑を擊退す
江畔に一大工場を現出す
先づ黔定九里の二島を畧す
敵前架橋（橋長二千百餘米突）
一發巨彈のお見舞（我重砲の威力）
山雲欲來風滿樓（總攻擊の前日）
正々堂々として江を渡る
蛤蟆塘の追擊戰（三面包圍攻擊）
赤裸で先登す
第一軍感狀の嚆矢
敵の敗戰理由（戰術上より觀たる）
敵將の敗戰報告
滿國官憲の報告（露軍潰退に關する）
紀念碑を摺鉢山に建つ

阿總督の告示
黑木軍司令官の告示
沙漠を出てゝ泉地に入る
舌人笑話
彈丸燭き乘馬斃れて臣が事終んぬ
一兵卒敵の將校を生擒す
梨花如雪
不染の股引半染となる
烏合の衆を以て新來氣鋭の敵を挫く
モルヒ子の奏功醫者と見違へらる
輸卒職に殉す
黑木大將の恐いもの
繪はがき美人
新刀の切味
虎口を免る
白馬將軍を逸す
笑て瞑す
兵法の新發明
武運めでたき男
頓智の奪
戰友よりも武器が大切
幽霞の正體見たり枯尾花
夜盲症の剛情

大和心
倭寇擊退の碑
虎穴に入て虎子を獲たり
上官の死骸を負ふて奮闘す
地の利は人の和に若かず
砲兵の花（三幅對）
敵の機先を制す
我致命傷を秘す
一對傳令の模範（死して使命を辱かしめず）
中尉殿の形見
悲壯なる最後
黑英臺の决戰
砲彈如雨轟擊似雷
輜重輸卒敵の砲彈を叱す
敵は退却の妙を得たり
外人の眼に映せる黑木將軍
亡母の命日
本溪湖の石𥳓戰
動かざること山の如し（島村將軍の奇計）
モー少しで日本兵に成れる
軍旗山の響
劍尖相逐ふ（仁平山の大格闘）

中隊長は軍曹
起生回生
彈雨中に日誌を錄す
橋五郞少將
忠實なる從卒
沙河會戰後彼我の情態
狂氣砲兵
露兵にも亦信義あり
狂歌の矢文
渾河の神風
狙擊第十九聯隊殲滅（軍旗鹵獲）
敵將我懷爐灰に膽を潰す
陛下の萬歳を三唱して死す
貴公子の双美
新衣川
敵の咽喉に喰ひついて死す
鴨綠江紀念祭
黑木大將の紀念祭
慰問袋の滑稽
我乘馬と共に上官の危急を救ふ
鬉子狩
戰捷は婦人の力
〔軍歌〕實に勇ましき黑木軍
外十數話

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

留守第一師團長 陸軍中將 矢吹秀一君題辭
陸軍步兵少佐 宍道省三君校閲

夢香 杉本文太郎君著（新刊發賣）

陸軍諸兵種解說

全一册

洋裝大判紙
數約三百頁
正價參拾五錢
郵稅八錢

服役三ヶ年間に於ける步兵、騎兵、砲兵、工兵、輜重兵は將た何をか爲すものぞ本書は啻に是等の諸兵種のみならず砲兵輸卒、同助卒、輜重輸卒に亘りて其服役期限内に教育せらるゝ最新の實科並に學科を網羅し文章平易に而も側訓を附し筆及ばざる所一々圖畫を挿みて細大漏さず確實懇切を極む故に身兵役に關係ある者本書を熟讀せば入營後如何に苦痛を免かるべきかは謂ふ迄もなく既に入營せし者も本書に據らば其進步發達の迅速なるを自得すると共に彼の歸休兵たるの光榮を得んこと實に易々たるのみ況や大陸海軍國たる以て是認せられし我一般國民たる者も亦豈一讀の要なしとせんや

陸軍少將 東條英教君題辭
陸軍步兵少佐 宍道省三君校閲

杉本文太郎君著（既刊）

陸軍解說

全一册

洋裝大判
紙數約二百頁
正價參拾錢
郵稅六錢

我帝國が强敵露亞西に對して干戈を執りしより連戰連捷歷史上殆んど他に類例なき偉効を修め遂に平和の曙光を見んとするに至らしめたる陸海軍は抑も如何に組織せらるゝかは一般に知悉せざるべからざるのみならず而も將來身を軍人に起さんと欲する者は一層の精通を要するは素より謂ふを待たず本書收むる所の要目は陸軍編制、軍隊、官衙、陸軍現役定限年齡、將校の分限、徵兵、服役進級、補充、教育、檢閱、召集、戒嚴及要塞地帶法、賞罰、陸軍々隊符號等を始め特に文部大臣に於て中學校同等以上と認められたる全國の諸學校名に亘りて巨細漏らさず周到着實極めて平易懇篤に說述したり請ふ一本を購ふて其證言ならざるを知り給へ。

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の五）

理學士吉田弟彦君校閲
麻布中學校講師 腹卷助太郎君編纂

實用鑛物及地質

（既成發賣）

全一冊洋裝中判
紙皮金文字入
正價金參拾錢
郵稅八錢

▲口繪＝砂金採取の圖（石版美麗）小峰大羽君筆

本書は廣く鑛物界に關する智識を普及せしめ之が應用の途を廣大ならしむるの主旨にて編纂せり故に源遠難解の學理は成るべく之を省き斯學の最も實用的且つ最も興味ある有用鑛物及其の定性分析並に其產出の狀態に就いて反覆詳述せり尚其內容の大綱を左に示す

要目

緒論
第一編 鑛物學大意
（一）鑛物と岩石
（二）鑛物の分類
第二編 有用鑛物
（一）金屬を獲るに必要なる鑛物
（二）燃料として必要なる鑛物
第三編 地質學大意
（一）岩石學大意
（二）地殼構造の狀態
（三）地史の大意
（四）日本の地質
第四編 鑛床學大意
（一）鑛床
（二）鑛床の分類
（三）鑛床各部の名稱及位置

理學士吉田弟彦君校閲 腹卷助太郎君著 ●學生必携 **鑛物採集鑑定** 全一冊 正價貳拾五錢 郵稅四錢

寺崎留吉君編 ●新撰 **鑛物地質問答** 全一冊 正價四拾錢 郵稅貳錢

理學士佐藤傳藏君著 ●**地質學** 全一冊 正價四拾錢 郵稅八錢

▲特製本 正價五拾錢 郵稅拾錢

（後付の六）

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

（後付の七）

日本遊戲研究會編纂

模範運動會法

附 新式舞踏遊戲

全一冊

洋装中判 紙數約三百頁

十一月中發刊

著者卷頭に識して曰く「是れ壘の上に得たる想像論にあらずして自ら遊戲帽を冠り指揮旗を振りたる實驗談なり」と以て其梗概を知るべし。其內容に至りては先づ運動會の意義と種類とを說き、其敎育的價値を兒童學校社會の三方面より聯合運動會の利害を斷じ演技の種類は之を個人競技、團體競技、舞蹈、行進遊戲、歌舞體操に分ち、力を極めて其撰擇に關する注意を詳說し殊に例を一高の野球に藉りて長所の發揮校戲の必要を論じたるが如き學校職員及會賓等の運動に對する缺點誤解を指摘して其改良を痛論したるが如き皆著者の抱負を觀るに足る。遊戲の方法に至りては合圖審判演技者の心得より演技の準備、走技非走技團體競技舞蹈行進遊戲等の細目に亘り遂に記錄の要件揭示の方法に及ぼし餘興賞品の撰擇等亦敎育的論斷を下せり。運動場に關しては其撰擇上注意すべき要項を擧げ次に區劃の方法設備及會務等の要件を精密に說明したり。

卷末には都下の小學校等に行はるべき舞蹈遊戲のニュースタイルを著者得意の新說明法により舞蹈準備としては手の執り樣歩き樣默禮の仕樣等を始め、對舞方舞の準備演習圓舞獨立演習等數十ケ條を說き、遂にクワドリール、カレドニアン等の對舞方舞スケーチング、タンツライグン等の圓舞合せて十八番を最も簡明に說けり。

女(後付の八)

前山口縣知事法學士武田千代三郎君著

● 理論實驗 競技運動　全一冊 洋布綴　正價壹圓貳拾錢 小包送拾五錢

同

● 心身鍛錬 少年競技運動　全一冊 洋布綴　正價拾八錢 郵稅四錢

適心齋井口義爲翁君著

● 露國征伐 劍舞獨習圖解　全一冊 洋布綴　正價貳拾五錢 郵稅六錢

神刀流劍舞開祖日比野正吉君著

● 劍舞術敎範　全一冊 洋布綴　正價拾八錢 郵稅四錢

發兌元　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

陸軍步兵中佐 岡野敏雄君校閱
陸軍步兵大尉 小山永行君著述



全一册洋裝袖珍
紙數三百餘頁
近日發行

▲石版美麗刷――帝國々旗勳章制服新圖
▲寫眞版――兵營生活 各科敎練 演習十六枚插入

今後我國の軍備は益す大擴張を要すると共に、新入隊兵の著しく增加する事火を睹るよりも明かなり然るに世間此等の新入兵が其入隊以前に於て豫め軍制の梗概、兵營の摸樣其他兵卒に課せらるゝ學科の概畧等を悉知し得べき完全なる入隊案內書の欠乏するは盛世の缺點といふべきなり、著者小山大尉之を遺憾とし奉天の戰役に負傷して後、身補充大隊附にあるを幸ひ日夜鞠躬勉勵して遂に本書を作成せられたり而して本書は全篇を通して問答體を用ひ行文は極めて平易通俗を主とし其難解の文字は之を上欄に摘出して逐一注解を附し本文は都て平假名を施す之を讀む壯丁は何時軍隊に徵せらるゝも決してマゴック樣の頓馬なく他人よりも早く習熟して早く昇進するの便利を得るなり蓋し國民必須の好著といふべし

夢香杉本文太郎君著
●戰鬪圖解
正價參拾錢 郵稅六錢

軍隊は如何にして編制せられ各兵種の性能は如何にして發揮せられ充員召集は如何行軍は如何宿營は如何又戰鬪は如何にして開始せられ攻擊は如何にして擧行せられ追擊は如何防禦は如何戰場に於ける死傷者の處置、戰鬪後の處置其他行李、輜を初め兵器及び彈藥の補充、被服裝具の補充、人馬の補充等戰鬪全般に關する幾多の動作を圖解し就中旅順の如き浦鹽の如き大要塞の組織並に攻擊法を說明網羅するに至りては先人未だ這般の著なし

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女學世界定期増刊 當世交際社會
(毎月一回五日發行)
(明治卅參年拾貳月廿五日 第參種郵便物認可) 第五巻第十四號 (明治三十八年十月十五日發行)

(定價金貳拾錢)

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界(じょがくせかい) 明治期復刻版㊴
明治38年10月(第5巻第13号、第5巻第14号)

2007年12月10日　第1刷発行　　定価(本体20,000円+税)

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14(〒113-0021)
電話　03-3947-8251[営業] 03-3947-8254[編集]
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3292-8 C3321